

租借地大連における日本語新聞の事業活動  
—満洲日日新聞を中心に—

栄 元

博士（学術）

総合研究大学院大学

文化科学研究科

国際日本研究専攻

平成28年度

（2016）

## 凡例

- 1、年の表記は西暦で行った。ただし、必要な場合には元号を併記した。
- 2、「満洲」、「関東州」などは、「」をつけるべきであるが、頻繁に使用するため省略した。  
また、日本統治下で使用され、今日では不適切な呼称である地名、事件名、組織名（「奉天」、「京城」、「満洲事変」など）についても「」を付して記載すべきであるが、史料引用の関係上、歴史的用語として、また読者の便宜上などの点から、原則として「」なしに記述した。
- 3、雑誌記事、新聞記事、論文名には「」、書名、新聞雑誌名には『』を用いた。
- 4、読みやすさに配慮して、引用する日本語文献は新字、新仮名を基本とし、適宜句読点を補い、必要に応じてルビを施した。
- 5、引用文中の省略部分は「(中略)」で示した。
- 6、「■」は判読できない、「-」は数値なし。

## 目次

凡例	
序章	1
1 課題の設定	1
2 これまでの研究	6
3 研究の目的と方法	8
4 本論文の構成	8
第1章 満日小史(1907年-1927年)	10
第1節 初代社長森山守次と『満洲日日新聞』の創刊	10
1.1 納富家と森山家とのつながり	10
1.2 新聞人としての活動	10
1.3 『満日』の創刊	17
1.4 『満日』創刊号	19
第2節 満日社の組織と人事配置	24
第3節 満日社の経営	32
第4節 『遼東新報』との合併	37
第2章 植民地統治経済手段としての「大連彩票」(1905年-1915年)	60
第1節 『満日』に現われる「大連彩票」	61
1.1 「大連彩票」概況	61
1.2 新聞紙面に見られる「大連彩票」の実態	64
第2節 「大連彩票」廃止への途	71
第3節 「大連彩票」に関わる『満日』の立場	73
小結	76
第3章 体育奨励一方策としての「関東州野球大会」(1910-1920年代)	78
第1節 大連野球の始まり	78
第2節 第1回「関東州野球大会」の開催	79
第3節 1920年代大連野球界の黄金時代	82
第4節 大連野球に関わる言説	87
小結	89
第4章 植民地教育政策の一環としての	
「在満児童母国見学団」(1920年-1927年)	91
第1節 「見学団」派遣に至るまでの経緯と1920年代における関東州と満鉄附 属地の交通環境	91
1.1 「見学団」派遣に至るまでの経緯	91
1.2 関東州における交通状況「日本-朝鮮-満洲」交通網の形成	93

## 序章

### 1. 課題の設定

本論文は 1907 年に日本の租借地都市大連で発行され、中国東北地域（満洲<sup>1</sup>）において最大の発行部数を誇った日本語新聞『満洲日日新聞』（以下『満日』と略す）を中心に、1907 年（創刊）から 1927 年（『遼東新報』との合併）までの報道活動・新聞社事業という 2 つの側面から、『満日』及び満洲日日新聞社（以下満日社と略す）が、日本の満洲経営の展開過程において、いかなる機能を果たしたのかのかについて、満日社による各種の事業活動の軌跡を辿りながら、検討したものである。

日清戦争（1894 年-1895 年）後、旅順、大連を含む遼東半島は日本に割譲されたが、独仏露の三国干渉により、一旦中国に返還された。その後、1898 年にロシアが大連、旅順を租借し、自由港として、極東の港ダルニー市の都市・港湾建設を開始した。日露戦争中に日本軍は大連を占領し、1905 年 1 月 27 日、日本軍は遼東守備軍令第 3 号で、2 月 11 日以後「大連」と改称すると発表した<sup>2</sup>。

日本は日露戦争後、ポーツマス条約によって旅順・大連を含む遼東半島地域を関東州租借地として、また中東鉄道南満線の長春以南の経営権をロシアから獲得し、その地を中国大陸東北部への足がかりとして大陸政策を積極的に進めた。

日本政府は、1906 年 6 月 7 日付勅令第 142 号によって「南満洲鉄道株式会社ヲ設立セシメ満洲地方ニ於テ鉄道運輸業ヲ営マシム」と、南満洲鉄道株式会社（以下「満鉄」と略す）」の設立を内外に公表した<sup>3</sup>。同年 11 月 26 日満鉄設立総会が開かれ、翌 27 日日本社を東京において正式に満鉄が設立された<sup>4</sup>。この鉄道に付随する鉄道附属地は南満洲鉄道附属地（以下満鉄附属地と略す）となった。関東州及び満鉄附属地においては満鉄が積極的に市街地整備などを行い、次第に多くの日本人が移住することとなった。

日露戦争前にも満洲には日本人が居留していたことは事実である。1903 年 6 月時点で満洲在住日本人の総数は約 2,500 人であった<sup>5</sup>。それに対して、表 1 に示すように、1906 年には満洲における日本人はその 15 倍の 16,613 人に達した。

表 1 満洲在住者人口表

		1906 年	1910 年	1915 年	1920 年	1925 年	1930 年	1935 年	1940 年
関東州	中国人	360,428	425,599	490,484	592,913	665,989	820,534	955,514	1,183,087

<sup>1</sup> 「満洲」とは、中華人民共和国東北地方をさす日本の俗称である。1905 年、日露戦争に勝利した日本は、日露講和条約（ポーツマス条約）によりロシアから、旅順・大連の租借権及び長春・旅順間の鉄道権益が譲渡された。日本はこれにより翌 1906 年、大連に南満洲鉄道株式会社を設立し、中国東北地方進出の足掛かりを作り、1931 年に満洲事変を起こし、翌年に「満洲国」の建国を宣言、中国東北地方を手中に入れ、それは 1945 年、アジア太平洋戦争終結まで続いた。

<sup>2</sup> 井上謙三郎『大連市史』大連市役所、1936 年、30 頁。（地久館復刻、1989 年）

<sup>3</sup> 「朕南満洲鉄道株式会社ニ関スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム」勅令第 142 号、1906 年 6 月 8 日付『官報』第 6881 号、第 233-234 頁。

<sup>4</sup> 南満洲鉄道株式会社『南満洲鉄道株式会社十年史』原書房復刻、1974 年、28-30 頁参照。

<sup>5</sup> 塚瀬進『満洲の日本人』吉川弘文館、2004 年、10 頁。

	日本人	12,792	36,688	50,253	74,290	91,376	116,052	159,749	202,827
	外国人	-	112	141	179	441	734	1,356	1,698
	合計	373,220	462,399	540,978	667,382	757,806	939,114	1,119,870	1,393,222
附属地	中国人	7,675	31,774	60,225	113,849	180,534	235,016	278,385	-
	日本人	3,821	25,650	34,845	63,624	92,625	99,411	190,508	-
	外国人	-	13	181	378	1,466	1,769	1,088	-
	合計	11,496	58,437	95,251	177,851	274,625	352,096	501,396	-
総人口		384,716	519,836	636,229	845,233	1,032,431	1,291,210	1,621,266	--
関東州及び附属地 日本人総人口		16,613	62,338	85,098	137,914	184,001	215,463	350,257	
以上の地域外にお ける日本人		-	14,407	16,993	24,590	13,826	18,286	144,451	862,245
満洲における日本 人総人口		-	76,745	102,091	162,504	197,827	233,749	494,408	1,065,072

(表注：1930年関東州における総人口のうち、朝鮮人 1,794人、附属地における総人口のうち、朝鮮人 15,900人を含む。1935年関東州における総人口のうち、朝鮮人 3,251人、附属地における総人口のうち、朝鮮人 31,415人を含む。1940年関東州における総人口のうち、朝鮮人 5,710人、附属地における総人口のうち、朝鮮人を含む。)

出典：1906年、1910年、1915年、1920年、1925年は、関東都督府都督官房文書課『関東都督府統計書（第1 明治39年）』（1912年、9-10頁）、同『関東都督府統計書（第5 明治43年）』（1912年、32頁）、同『関東都督府統計書（第10 大正4年）』（1919年、40頁）関東長官官房文書課『関東庁統計書（第15 大正9年）』（1926年、27-28頁）、同『関東庁統計書（第20 大正14年）』（1926年、24-25頁）、1930年のデータは『関東庁統計要覧昭和5年』（関東庁、1935年、18-19頁）、1935年のデータは、『関東局管内現住人口統計昭和10年』（関東局、1939年、2-7頁）、1940年のデータは『関東局管内現住人口統計昭和15年』（関東局、1944年、62-63頁）、その他の地域における日本人のデータは満洲史『満洲開発四十年史』（上巻）（満洲開発四十年史刊行会、1964年、84頁）により筆者作成。

一方、満鉄初代総裁となる後藤新平は、満鉄創立前に児玉源太郎を通して「満洲経営策梗概」を政府に提出しているが、そのなかで、戦後満洲経営の「唯一ノ要訣ハ、陽ニ鉄道経営ノ仮面ヲ装ヒ、陰ニ百般ノ施設ヲ実行スルニアリ」<sup>6</sup>と位置づけていた。しかし、満洲は日本の領土ではなく、あくまでも清国の領土である。そのために、後藤は「満洲ハ其交通機関ノ経路ニ於テ、恰モ是レ東西両洋文明会注ノ地点ニ当レリト。（中略）満洲ニ於ケル文明会注ノ方式ハ、争鬪ニ由ラスシテ宜シク親交ニ由ルヘシ。（中略）満洲ヲシテ、列国民人和緝互営ノ利市タラシメンコト」<sup>7</sup>により、満洲の利源を開発すべきであると認識したうえで、「文事的施設を以て他の侵略に備へ、一旦緩急あれば武断的行動を助くるの便を併せて講じ置く」<sup>8</sup>という文装的武備論を掲げた。

後藤の「文装的武備」理念は満洲事変までの満洲経営政策にほぼ完全に反映されて

<sup>6</sup> 鶴見祐輔『後藤新平（第2巻）植民行政家時代』勁草書房、1965年、810-811頁。

<sup>7</sup> 同上。

<sup>8</sup> 同上、815頁。

いる。この理念に基づき、満鉄は、単に鉄道会社ではなく、鉄道附属地の経営をはじめとして、教育、衛生、新聞、学術など多様な文化事業を行った。このように、満鉄は単なる鉄道会社ではなく、鉄道附属地という名の植民地を統治・拡大する使命を負う植民地機関でもあったといえる<sup>9</sup>。

1907年3月5日付勅令22号によって、同年4月1日に満鉄は本社を大連に移し、同23日に本格的に業務を開始した<sup>10</sup>。満鉄本社が大連に設立されて以来、鉄道の敷設、その他教育や衛生、通信などを整備し、大連は満鉄による満洲経営の基盤となると同時に、近代的な大都市として急速な発展を遂げた。大広場・道路・発電所・上下水道などの都市インフラは1909年までに大体整備され、更に伏見台と名付けた高台には電気の照明がついた遊園地が設けられた。それにもなって、多くの日本人が移住することとなった。

1903年には大連在住日本人の総数はわずか360人<sup>11</sup>であったが、1906年には8,248人、1907年にはその2倍以上の16,688人となった。その後年々増加をつづけ、1920年には50,778人、1930年に96,434人、さらに1941年には189,951人となり、約35年間で大連在住日本人の人口は23倍以上に膨れ上がった(表2参照)。

満洲に住む日本人はほとんど有業者である。その職業構成は、満鉄社員のほか、表3が示したように、関東都督府(のち関東庁、関東局)の官吏とその家族であり、また、農業、商業、工業などの従事者であった。それらの中では、農業、林業、水産業の従事者は極めてわずかであったのに対して、工業及び商業に従事する日本人が最も多かった。

表2 租借地大連市の人口表

	1906年	1907年	1910年	1915年	1920年	1925年	1930年	1935年	1941年
日本人	8,248	16,688	26,001	34,563	50,778	75,486	96,434	134,329	189,951
中国人	10,601	14,582	19,755	42,466	94,832	121,473	183,431	224,998	494,017
その他	23	54	110	155	358	950	1,776	3,475	6,799
総人口	18,872	31,324	45,866	77,184	145,968	197,909	281,641	362,808	688,767

(表注：統計の数値は表3と合わないものもあるが、そのままにした。)

出典：(1) 1906年-1935年のデータは井上謙三郎『大連市史』(大連市役所、1936年、第15-18頁。地久館復刻版、1989年)により筆者作成；(2) 1941年のデータは関東局編『関東局管内現住人口統計 昭和十八年』(関東局、1944年、第6-7頁)により筆者作成。

商業従事者のうち、約5割の人々が大連に集中していた。また、表2に示すように、1906年の時点で在連在住日本人総数8,248人のうち、約41%の3,430人が商業に従事していた。

表3 関東州及び満鉄附属地日本人有業者職業別人口表

<sup>9</sup> 安富歩「満鉄の資金調達と資金投入—<満洲国>期を中心に」『人文学報』第76号、京都大学人文科学研究所、1995年、165頁。

<sup>10</sup> 同上、75頁。

<sup>11</sup> 塚瀬進、前掲書、10頁。

年度別（年）		職業別							人口合計
		官吏	農業	水産業	商業	工業	労働者	雑業	
1906	関東州	1,412	17	204	5,043	1,377	263	4,252	12,792
	附属地	253	1	-	910	161	83	663	3,821
	合計	1,665	18	204	5,953	1,538	346	4,915	16,613
	大連	549	11	118	3,430	781	143	3,092	8,248
1910	関東州	5,008	80	390	6,427	3,655	3,655	14,564	36,688
	附属地	1,249	372	-	4,087	2,492	2,492	14,154	25,650
	合計	6,257	452	390	10,514	6,147	6,147	28,718	62,338
	大連	613	55	340	5,037	2,169	2,169	12,545	27,111
1915		官吏	農業	水産業	商業	工業	労働者	雑業	人口合計
	関東州	6,484	384	403	7,943	9,314	1,154	32,978	50,253
	附属地	1,852	719	4	5,152	9,324	1,791	15,727	34,845
	合計	8,336	1,103	407	13,095	18,638	2,945	48,705	85,098
	大連	2,224	125	240	6,270	7,895	699	21,227	39,561
1920		官吏	農業、林業、水産業	鉱業	商業	工業	交通業	雑業	人口合計
	関東州	6,882	1,441	105	19,041	23,485	11,015	11,736	74,290
	附属地	2,487	1,272	9,498	12,662	13,859	13,973	9,541	63,624
	合計	9,369	2,713	9,603	31,703	37,344	24,988	21,277	137,914
	大連	2,708	1,360	82	17,553	21,644	10,046	9,115	62,994
1925		官吏	農業、林業、水産業	鉱業	商業	工業	交通業	雑業	人口合計
	関東州	21,172	1,632	177	18,804	25,164	14,856	20,036	91,376
	附属地	15,459	1,753	8,490	17,083	20,274	20,661	5,477	92,625
	合計	36,631	3,385	8,667	35,887	45,438	35,517	25,513	184,001
	大連		570	95	18,528	11,923	11,961		52,068

出典：関東都督府『関東都督府統計書（第1 明治39年）』（1912年、13-16頁）、同『関東都督府統計書（第5 明治43年）』（1912年、45-47頁）、同『関東都督府統計書（第10 大正4年）』（1919年、59-66頁）、関東長官官房文書課『関東庁統計書（第15 大正9年）』（1926年、34-39頁）同『関東庁統計書（第20 大正14年）』（1926年、50-55頁）により筆者作成。

このように、在住日本人の増加、経済の発展にともなって、大連における日本語新聞の需要も一段と大きいものとなった。このような背景の下で、1907年11月3日に満鉄初代総裁後藤の発案によって、「満洲ノ開発ニ資スルト同時ニ会社事業ノ機関タ

ラシムル目的ヲ以」<sup>12</sup>て、機関紙『満日』が大連で創刊された。

大連における最初の日本語新聞は、1905年10月25日創刊の末永純一郎の『遼東新報』である。『満日』創刊後、大連の新聞界は『満日』と『遼東新報』によって二分された。その後、1920年5月に、『大連新聞』が創刊され、三紙鼎立の状態となった。しかし、それは長続きせず、『満日』は1927年10月に『遼東新報』を、1935年8月に『大連新聞』を合併することにより、大連さらに中国東北地域新聞界において独占的な地位を築いていった。

『満日』には、大連を中心とした満洲の日本人及び中国人社会の動向に関する記事が多岐にわたって掲載されており、日本国内のメディアでは得ることの出来ない情報も多く含まれている<sup>13</sup>。同紙は1945年まで発行され、長く満洲における世論指導の役割を担った。また、同紙約40年間の発行期間は日本の満洲経営の期間とほぼ一致している。

現在、租借地大連で刊行された定期刊行物の中ではほぼ完全な状態で保存されているのは、『満日』と『大連新聞』だけである。そして、『遼東新報』は大連市図書館に保存されているが、史料修復の理由で閲覧不可とされている。ほかに、当時大連で発行された中国語新聞『泰東日報』（1908年創刊）が、東京大学大学院情報学環・学際情報学府センターに所蔵されているが、欠号が多いため、全体の状況は把握しにくい。この意味で『満日』は、日本の満洲経営、あるいはこの時期の満洲社会の実態を解明する上で、高い史料的価値を持つものである。これらの点から総体的に判断すると、『満日』の記事の再検討の意義はきわめて大きいと思われる。

創刊当初から『満日』は「満洲経営の急先鋒」、「日清両国の（中略）提携相護の啓発」<sup>14</sup>と、「満蒙大陸の文化的開発を中心の目的として東亜全局の精神的並に物質的発達を企図し、助長し、新聞紙としての天職と使命を全ふせんとする」<sup>15</sup>という方針の下で、新聞発行だけでなく、『安重根事件公判速記録』（1910年）、『南満洲写真大観』（1911年）、『沿線写真帖』（1912年）、『満蒙全書』（1927年）などを出版し、「頭彩（1等賞）は何番か」などの彩票（宝くじ）予想投票のほか、「歌かるた競技大会」、「学術講演会」、「日中記者大会」、「飛行機展覧会」、「艦隊便乗見学」、「在満児童母国見学」など、各種の事業にも積極的に取り組んだ<sup>16</sup>。租借地という特殊な環境であるからこそ、これらの事業の持つ影響力は更に大きくなると考えられる。また、これらの文化事業の実態を明らかにすることにより、租借地大連の日本人社会・文化の世相や動向の一側面が究明できるとと思われる。

しかし、この点については、これまで植民地研究史、文化史、メディア史研究においてはさほど注目されてこなかった。

---

<sup>12</sup> 南満洲鉄道株式会社、前掲書、681頁。

<sup>13</sup> 栄元「『満洲日日新聞』の創刊と初代社長森山守次」『Intelligence』第15号、20世紀メディア研究所、2015年、185頁参照。

<sup>14</sup> 満日初代社長の森山守次は創刊号（1907年11月3日）の「発刊之辞」で「（前略）我満洲経営の急先鋒……故に挺身満洲経営の急先鋒たるに於いても（中略）日清両国の（中略）提携相護の啓発に欠く可からざるを認識す、満洲の生命は一に懸つてこの調和に在り……」と述べている。

<sup>15</sup> 「創刊より現在に至る」1921年11月3日付『満日』。

<sup>16</sup> 栄元「租借地都市大連における『満洲日日新聞』の役割に関する一考察 — 「大連彩票」の内容分析から」『総研大文化科学研究』第11号、総合研究大学院大学文化科学研究科、2015年、46-47頁参照。



## 2. これまでの研究

植民地メディア史の分野において、戦前の日本が海外支配地で展開した新聞・ラジオ政策に関する諸課題に関しては、いくばくかの研究蓄積がある。例えば、末木儀太郎「満洲日報論」（日支問題研究会、1932年）、李相哲『満洲における日本人経営新聞の歴史』（凱風社、2000年）、李承機『台湾近代メディア史研究序説—植民地とメディア』（東京大学博士論文、2006年7月授与）、貴志俊彦・川島真・孫安石『戦争・メディア・ラジオ』（勉誠社、2006年）、佐藤勝矢「満洲事変勃発前後の『満洲日報』に関する一考察—国策会社・満鉄の機関紙の論調の変化とその背景」（『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』<10>、日本大学大学院総合社会情報研究科、2010年）、張楓「大連における泰東日報の経営動向と新聞論調」（加瀬和俊『戦間期日本の新聞産業—経営事情と社論を中心に』<東京大学社会科学研究所研究シリーズNo.48>、東京大学社会科学研究所、2011年）、白戸健一郎『満洲電信電話株式会社—そのメディア史的研究』（創元社、2016年）などである。その中で『満日』を取り巻く先駆的な研究としては、末木儀太郎「満洲日報論」と李相哲の『満洲における日本人経営新聞の歴史』が挙げられる。

末木の論文は、満日社の組織や経営の変遷を考察したもので、最初にこの問題を正面から取り上げた研究として評価することができる。ただし、満日社の創刊経緯、経営、事業活動についてあまりふれられていない。

李の研究は1905年に營口で最初の日本語新聞『満洲日報』が創刊されて以来、1945年の敗戦までに満洲で刊行された日本人経営の日刊新聞について、日中両国に保存された史料を駆使することで旧満洲の主要な日本語新聞の変遷、編輯者の顔ぶれ、満鉄の新聞業参入、関東軍による言論統制などについて考察したものである。また満鉄経営の『満日』を中心に、その約40年間の社説を分析し、その論調から日本の大陸政策と世論の動向を読み解いている。これは現在までの『満日』に関わる研究の中で、最も信頼性が高い成果であるといえる。しかしながら、その研究では、考察対象である『満日』について新聞経営における満鉄側の深い関与が指摘されているものの、日本の大陸政策を推進するためにいかなる経営戦略をとったのかという問題についての分析は行われていない。

ほかには、塚瀬進『満洲の日本人』（吉川弘文館、2004年）は、『満日』、各種の「人名録」、各種文献という3つの資料群を材料として、日露戦争後から満洲国建国までの期間の満洲における日本人の活動を検討している。ただし、『満日』に掲載された在満日本人に関するさまざまな記事のうちで、投書や三面記事の事件録に限定されたものであり、『満日』の全体的な状況を把握したものではない。

以上述べたように、先行研究の多くは、『満日』を一次資料として、特定時期の新聞記事内容を分析することによって、新聞報道と世論との関係性を論じている。満日社が日本の大陸政策を推進するために、植民地統治の一つの手段として如何に植民政策を支えていたのか、という点に関する検討は、まだ十分とは言えない。換言すれば、満洲新聞史に関してはまだ本格的な研究はなされていないと言えるであろう。

江口圭一は、「満洲事変と大新聞」で、満洲事変前後の新聞論調の変化について、荒瀬豊と掛川トミ子の研究<sup>17</sup>を例にあげて、「これらの研究が分析対象をほとんど社説ないし論説に限定し、もっぱら社説ないし論説の内容分析を主として行ったが、社

---

<sup>17</sup> 荒瀬豊「日本軍国主義とマス・メディア」『思想』399号、1957年；掛川トミ子「マス・メディアの統制と対米論調」細谷千博・斉藤真・今井清一・蠟山道雄編『日米関係史（4）』、1972年。

説の紙面における比重や、読者の関心度などの条件を無視しないと、事変への新聞の対応や新聞が読者に及ぼした影響を正確に把握しえないではないか」と述べている。そのうえで、「新聞論調の変化と国民の意志・思想の変化はまったく別物で、国民の意識・思想の変化そのものを探求するためには、新聞の紙面言論以外の諸機能、例えば、号外、映画、講演会、展示、各種の慰問運動など、報道機関としての新聞社の本来的機能として、その演じた社会的役割がはるかに大きいのではないか」<sup>18</sup>と指摘した。

江口によれば新聞の報道内容はそのまま世論と同一ではない、新聞はより効果的に世論誘導を行うために、新聞の紙面言論以外の諸機能、たとえば、新聞社が主催する各種の事業活動を行う。そうした社会的な役割に注目すべきであるということである。

江口の示唆を受けながら、近年、メディア・イベントという視角からの研究が進展しつつある。日本における新聞社が主催したイベントを取り上げたものの一つに、津金澤聡廣を代表とする「マス・メディア事業史研究会」の一連の論文集が挙げられる<sup>19</sup>。その中では満洲事変前後における『大阪朝日新聞』、『東京朝日新聞』、『名古屋新聞』が主催した満蒙に関するイベント<sup>20</sup>について論じられているが、いずれも日本国内の新聞社に焦点があてられており、植民地における新聞社が主催したイベントについての言及はほとんどない。

植民地における新聞社が主催したイベントについては、佐藤正晴「日本の植民地の台湾メディア—1930年代初頭の『台湾日日新報』を中心に」（『明治学院論叢』第689号、明治学院大学社会学会、2003年）、南宮吟皓の『日本統治期朝鮮における新聞社主催全朝鮮女子庭球大会（1921-1941）に関する歴史的研究』（筑波大学博士学位論文、2007年授与）が挙げられる。佐藤は、1930年の台湾における『台湾日日新報』による多彩なイベントを取り上げて、マス・メディアと権力とのつながりの様相について論じている<sup>21</sup>。ただし、1930年に限定され、『台湾日日新報』によるイベントの歴史的系譜についての検討はほとんどなされていない。また、南宮は、京城日報社、東亜日報社、毎日新報社が主催した全朝鮮女子庭球大会に焦点をあて、韓国女子体育・韓国近代スポーツ史の視角から、その歴史的意味について論じている。南宮は全朝鮮女子庭球大会に関わる新聞の紙面報道の役割に言及しているが、その発展過程における新聞社が果たした役割についての検討はまだ十分とはいえない。

この意味で、植民地新聞史に関する研究はまだ解明されていない多くの課題を抱えている領域であると考えられる。

<sup>18</sup> 江口圭一「満洲事変と大新聞」『思想』583号岩波書店、1973年1月。99-104頁参照。

<sup>19</sup> 日露戦争前後の20世紀初頭から1930年代までを扱った津金澤聡廣『近代日本のメディア・イベント』同文館、1996年。1931年の満洲事変から1945年の敗戦までを扱った津金澤聡廣・有山輝雄『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社、1998年。津金澤聡廣『戦後日本のメディア・イベント（1945-1960年）』世界思想社、2002年。

<sup>20</sup> 永井良和「大衆文化のなかの〈満洲〉」津金澤聡廣・有山輝雄『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社、1998年、37-52頁。井川充雄「満洲事変後の『名古屋新聞』のイベント」同書、113-127頁。

<sup>21</sup> 佐藤正晴「日本の植民地の台湾メディア—1930年代初頭の『台湾日日新報』を中心に」『明治学院論叢』（第689号）2003年2月、明治学院大学社会学会。第24-25頁。

以上の点から総体的に判断すると、『満日』及び満日社の事業活動をより系統的、より多角的に整理、検討することは、租借地都市大連社会における満日社の機能、さらに日本の植民地統治の一側面を理解するうえで大変重要なものであると考えられる。さらに補足すれば、『満日』に対する再検討は両国の新聞史研究のみならず、植民地研究においてもきわめて重要な意味をもつと言えるであろう。

### 3. 研究の目的と方法

本論文は、『満日』を基軸にし、1907年（創刊）-1927年（『遼東新報』との合併）という時間軸に沿って、『満日』そのものの歴史的展開を検討しながら、以下の課題を究明したい。

(1) 先行研究を踏まえた上で、現地で発行されていた他の新聞、さらにアジア歴史資料センターなどに所蔵される史料を利用して、『満日』発行の経緯・経営・人事・事業活動など基本的なデータを収集し、実証的に租借地大連における『満日』（1907年-1927年）の歴史的系譜を明らかにする。

ここで、本論文で取り扱う研究期間を1907-1927年に設定した理由について説明しておきたい。

第1は、1907年から満洲事変勃発までの時期は満洲の新聞界は満鉄が主導した時代である。この時期の日本人経営の新聞は、ほとんど満鉄の管理下におかれていた、と言える。これに対して1931年の満洲事変、とくに1932年に満洲国の成立にともない、関東軍は満洲における主動的地位を確保するに至った。それにより、満洲の政治、経済の中心も大連から奉天へと移行していった。

第2は、1925年に大連でのラジオ放送の開始にともない、満洲におけるメディア空間も変化しつつあったという点である。1920年代にはラジオ、映画の普及によって、世論操作は新聞・ラジオ、映画など各メディアを通じて連動させながら行われるようになった。

(2) 本論文は満日社が主催した各種事業活動（付録1-3参照）の中から5年以上継続的に行われた「大連彩票」「関東州野球大会」「在満児童母国見学団」「艦隊便乗見学」「歌かるた競技大会」という5つのトピックを選定し、開催の時系列に沿って、報道活動と事業活動という2つの側面を明らかにし、当時の国内外情勢、日本の満洲経営政策の変化にともなって、満日社による報道活動・事業活動の軌跡を明らかにする。そして、これらの事業が如何に大連を中心とした在満日本人の日常生活ないし身体経験の一部となっていたのかについてみていきたい。さらに、これらの事業活動の参加者からの感想文などを考察し、これまで解明されてこなかった在満日本人社会の細部を描くことを試みたい。

以上の点から、本論文で、1907年-1927年の満日社の事業活動を検討することによって、満洲事変以前の満日社の機能を一層明確にすることをめざす。さらに、在満日本人社会の実態を解明することにより、満洲国建国に至るまでの大連を中心とした満洲地域における日本の支配の実態を明らかにすることができると思われる。

### 4. 本論文の構成

第1章においては、満日社の『満日』創刊にいたるまでの経緯、新聞社の経営、人事構成、事業活動の概況を概観し、1907年の創刊から1927年『遼東新報』との合併にいたるまでの満日社の20年史を振り返る。

第2章では、1907年11月から1915年4月までに大連で発行されていた「大連彩票

」の発展経過を『満日』の紙面記事によって再検討する。「大連彩票」の実態を分析することで、それに関わる『満日』の立場を解明し、租借地都市大連社会における『満日』の機能、さらに日本の植民地統治の一側面を理解する機会も提供できると考えられる。

第3章においては、1910-1920年代に満日社が主催した「関東州野球大会」に着目し、その開催に至った背景、開催実態を考察した上で、満洲における野球の受容と展開過程において満日社がいかなる役割を果たしたか、「関東州野球大会」が大連の社会及び大連野球界にいかなる影響を与えたかについて検討する。

第4章においては、1920年から1927年にかけて満日社が継続して主催した「在満児童母国見学団」に焦点をあてて、『満日』の記事と照合しつつ、その実施趣旨、内容及びその成果を概観したうえで、その過程における満日社の役割について検討する。

第5章においては、1921年から1932年にかけての12年間に継続的に組織された、満日社が主催した「艦隊便乗見学」に焦点をあてて、海軍省公文備考、『満日』の記事、『海友』、『大連新聞』、『朝日新聞』などと照合しつつ、「便乗見学」の成立とその展開過程及び便乗者の感想について考察する。そのうえで、1920-1930年代の軍縮時代において、「便乗見学」がいかなる役割を果たしたのか、その過程において満日社がいかなる姿勢や考えに基づいて報道と事業活動を展開したのかについて検討する。

第6章において日本の伝統的文化であるかるたの歴史を振り返り、満日社が主催した「歌かるた競技大会」に着目し、満洲でのかるたの受容とその展開過程において満日社がいかなる役割を果たしたのかについて検討する。

以上のように、本論文は日本の満洲経営及び大連の都市近代化過程において、『満日』がいかなる機能を果たしたのかについて、系統的、多角的に整理、検証していく。

## 第1章 満日小史（1907年-1927年）

### 第1節 初代社長森山守次と『満洲日日新聞』の創刊

#### 1.1 納富家と森山家とのつながり

森山守次（字は吐虹、別号は鵬雲。1875年-1929年）は、日本の画家、工業デザイナー、教育者、明治維新後の工芸教育のパイオニアとも呼ばれる納富介次郎（号は介堂。1844年-1918年）の次男として佐賀県に生まれた<sup>22</sup>。

佐賀は幕末維新期にいわゆる偉人を多く輩出した地であり、出身者は政治家や軍人だけでなく、多分野にわたり活躍した人物が多い。森山の父親・納富もその中の一人であった。

納富介次郎は、佐賀小城藩の皇学家、明治維新後に神道実行教管長となる柴田花守の次男として生まれた。16歳の時に佐賀本藩の義士で儒家の納富六郎左衛門に養われ、その姓を継いだ<sup>23</sup>。1862年、納富が19歳の時、高杉晋作や中牟田倉之助らとともに「千歳丸」で上海に渡って貿易調査を行い、『上海雑記』という見聞録を作成する。また、その後も大阪佐賀藩商会と清の貿易業務で上海を再訪している。さらに、1871年には横浜で貿易業を研究し、そのかわら油絵も学んだ。以来、ウィーン万国博覧会事務局員及び審査官を経て、工業・工芸学校の創立などの教育活動にも力を尽くし、日本の近代工芸デザインの創始者として、有名である。

母の森山静子（1851年-1917年）は、旧幕府長崎の人森山栄之助（のち森山多吉郎、1820年-1871年）の長女であった。森山多吉郎は江戸時代に活躍した日本の通詞であった。ペリーが1854年に来航したことをきっかけとして、彼は和親条約の締結といった外交交渉や、首席通訳として条約文の翻訳を行うなど、交渉の第一線に立つこととなった。次男の守次は森山家を継いで、母方の姓を名乗って森山守次と名付けられた<sup>24</sup>。

兄の納富磐一（1873年-1959年）は、帝国大学工科大学電気工学科を卒業した後、ただちに芝浦製作所に入った。その後、工学及び工業の世界に身を投じた<sup>25</sup>。しかし、森山は、父親の工芸とも兄の工学とも異なり、早くから新聞に関心を持つようになった。

#### 1.2 新聞人としての活動

---

<sup>22</sup> 森山の出身については、『明治新聞雑誌関係者略伝』では佐賀県出身となっているが、『東京帝国大学卒業生氏名録』では長崎県出身者とされている。卒業年次は1899年7月。夏秋亀一と同期で、この年次の卒業生で一番の有名人はジャーナリストの桐生悠々（桐生政次）である。

<sup>23</sup> 三好信浩『佐賀偉人伝 10・納富介次郎』、佐賀県立佐賀城本丸歴史館、2013年、11-13頁。

<sup>24</sup> 江越弘子『幕末の外交官 森山栄之助』弦書房、2008年、165頁。「……介次郎（納富介次郎）・静子（森山静子）夫婦の次男守次が長崎の森山家を継いでいることである。」また、伊東祐毅は『世界年鑑（明治37）』（博文館、1904年6月、付録10頁）には、「法学士夏秋亀一君と法学士森山守次君と小生（万里と号す佐賀の生）と3人は郷里を同ふし」と述べている。ここから見れば、森山は、佐賀県出身であることが確かである。しかし、佐賀の納富家の次男として生まれた森山は長崎の森山家を継いだため、長崎県出身者とも見なされると推測できる。

<sup>25</sup> 三好信浩、前掲書、23頁。

1899年7月、森山は東京帝国大学法科大学政治学科を卒業して、同年10月に米国へ旅立ち<sup>26</sup>、米国滞在中は、博文館から出版された雑誌『太陽』の通信記者となった。また、1902年の2月から3月にかけて台湾へ渡り、台湾全島沿岸視察も行っている。この台湾滞在中、資料調査のため、森山は何回も台湾総督府に立ち寄った<sup>27</sup>。さらに、同年6月から12月の半年間、森山は外務省の視察命令を受け、台湾、厦門、汕頭、香港、澳門、広東、シンガポール、中央アジア、印度、ロシアの各地も視察している<sup>28</sup>。

表 1-1 森山守次著作一覧

掲載メディア	掲載号数	日付	タイトル	署名
東京帝国大学時代				
『中学新誌』	第2巻第9号	1898年8月	(雑録) 「警醒録」	法科大学学生 森山吐虹
博文館時代				
『少年世界』	6 (5)	1900年4月	「米国通信」	森山吐虹
	7 ( (12)	1901年9月	「露西亞風俗」	森山吐虹
	7 (15)	1901年11月	「露西亞通信 雀が丘」	森山鵬雲
	8 (1)	1902年1月	「黒龍江の夜話」	森山守次
『太陽』	第6巻第7号	1900年6月1日	「北米通信」	森山吐虹
	第6巻第10号	1900年6月16日	「桑港に於ける人権蹂躪問題の顛末」	森山吐虹
	第6巻第11号	1900年9月1日	「鵬程双輪行」 (第一信)	森山吐虹
	第6巻第12号	1900年10月1日	「鵬程双輪行」 (第二信)	森山吐虹

<sup>26</sup> 森山吐虹「香港紀行」『太陽』1902年6月5日、第8巻第7号、459頁参照。「(前略)そこでひょっと思い付いたのが米国にトッ走るの策であって五尺の瘦影幸に義と情とにうち満ちて居ると信じて居るからドーカして比立賓の独立運動でもたすけてやりたいと云ふ下心で、わすれもしない32年の10月30日出帆の日本丸に投じて桑港へ一目散に飛び込まうとした。」

<sup>27</sup> 1902年2月9日付『台湾日日新報』、森山吐虹「台湾航遊記」・「台湾周航記」『太陽』1902年6月15日、第8巻第8号、342-382頁。

<sup>28</sup> JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B11091695800 (第2画像目)、森山守次中央亜細亜印度露西亞各地視察報告(B-3-5-7-31)(外務省外交史料館)。

	第7巻第5号	1901年5月5日	「英国女皇陛下の崩御と米国の態度」	森山吐虹
	第7巻第10号	1901年9月5日	「米露貿易の小紛擾」	森山吐虹
	第7巻第12号	1901年(月日不明)	「露国通信」	森山吐虹
	第7巻第14号	1901年12月5日	「露国政府の酒専売」	森山吐虹
	第8巻第2号	1902年2月5日	「露国の真相と満洲問題」	森山守次
	第8巻第2号	1902年2月5日	「政治時評」	森山吐虹
	第8巻第2号	1902年2月5日	「北米双輪紀程」	森山吐虹
	第8巻第3号	1902年3月5日	「日英の同盟」	森山吐虹
	第8巻第3号	1902年3月5日	「北米双輪紀程」(三)	森山吐虹
	第8巻第5号	1902年5月5日	「政治時評」	森山吐虹
	第8巻第7号	1902年6月5日	「台湾経営論」	森山守次
			「政治時評」	森山吐虹
	第8巻第8号 特集・海之日本	1902年6月15日	「海之日本発行之趣旨」	森山守次
			「台湾航遊記」	森山吐虹
			「台湾周航記」	森山吐虹
			「香港紀行」	森山吐虹
			「山田長政」	吐虹生
	第8巻第8号 特集・海之日本	1902年6月15日	「香港論」	森山吐虹
			「印度の族制」	森山吐虹
「印度統治論」			森山守次	
第8巻第10号	1902年8月5日	「印度の族制」	森山吐虹	
第8巻第12号	1902年10月5日	「印度統治論」	森山守次	
第8巻第14号	1902年11月5日	「紅海通信」	森山吐虹	
『週刊新聞太平洋』	第1巻23号	1900年6月4日	「自転車旅行の発程」	特派員法学士 森山吐虹
	第2巻39号	1901年9月30日	「露国の名勝」	特派通信員 在露都森山吐虹
	第2巻42号	1901年10月21日	「漫録」	特派通信員 法学士森山吐虹
	第2巻43号	1901年10月28日	「露国通信」(9月1日)	特派通信員 法学士森山吐虹
	第2巻44号	1901年11月4日	「露都通信」	特派通信員 法学士森山吐虹

第2卷45号	1901年11月11日	「露都通信」	特派通信員 法学士森山吐虹
第2卷48号	1901年12月2日	「露都通信」	法学士森山吐虹
第2卷49号	1901年12月9日	「乱笛譜」一	法学士森山鵬雲
第2卷50号	1901年12月16日	「乱笛譜」二	法学士森山鵬雲
第2卷51号	1901年12月23日	「乱笛譜」三	法学士森山鵬雲
第3卷1号	1902年1月6日	「外遊奇話」一	法学士森山鵬雲
第3卷2号	1902年1月13日	「外遊奇話」二	森山吐虹
第3卷3号	1902年1月20日	「外遊奇話」三	森山吐虹
第3卷4号	1902年1月27日	「外遊奇話」四	森山吐虹
第3卷5号	1902年2月3日	「外遊奇話」六	森山吐虹
第3卷6号	1902年2月10日	「外遊奇話」七	森山吐虹
第3卷7号	1902年2月17日	「外遊奇話」七	森山吐虹
第3卷8号	1902年2月24日	「外遊奇話」八	森山吐虹
第3卷10号	1902年3月10日	「外遊奇話」九	森山吐虹
第3卷11号	1902年3月17日	「文芸雜評」	森山吐虹
第3卷13号	1902年3月31日	「外遊奇話」十一	森山吐虹
第3卷14号	1902年4月7日	「外遊奇話」十二	森山吐虹
第3卷16号	1902年4月21日	「党論戦片」	森山吐虹
第3卷17号	1902年4月28日	「外遊奇話」	森山吐虹
第3卷19号	1902年5月12日	「旅中放言」	森山吐虹
第3卷46号	1902年11月17日	「印度人粧飾」	在印度 法学士森山吐虹
第3卷50号	1902年12月15日	「印度人の迷信」	森山吐虹
著書	出版年月	出版社	署名
『政治史』	1900年4月	博文館	森山守次
『松平伊豆』	1900年10月	博文館	法学士森山守次
『世界歴史譚 第30編「 メッテルニツヒ」』	1901年10月	博文館	森山守次



『欧米商業実勢』		1902年9月	博文館	森山守次
新声社時代				
『新声』	第10編6号	1903年12月	「奇習画譜」	森山吐虹
著書名		出版年月	出版社	署名
『元老論』		1903年	新声社	森山吐虹
台湾時代				
『台湾統計協会雑誌』	第12号	1905年8月	「北米合衆国ニ於ケル第12回「せんさす」局官制等」	森山守次
『台湾日日新報』		1904年5月22日	「与露国極東大守（太守）書」	森山吐虹
		1905年1月1日	「地下の海舟先生に参らす」	吐虹生
		1905年1月8日	「敗将ステッセル」（一）	吐虹生
		1905年1月10日	「敗将ステッセル」（二）	吐虹生
『満日』時代				
『満洲日日新聞』		1907年11月22日	論説「小獅子起つ」	吐虹生
		1908年5月12日-16日	「船窓漫筆」（1-5）	吐虹生
		1908年5月23日-29日	「逐鹿瑣談」（1-5）	吐虹生
		1908年6月14日-19日	「哈爾賓遊記」（1-5）	吐虹生
		1908年6月30日	「船窓閑語」	吐虹生
		1908年11月6日	「米国選挙余談」	吐虹生
『サンデー』時代				
『サンデー』	第54号	1909年12月	「与桂首相書」	森山吐虹
	第56号	1909年12月	「小村外相の筑基外交」	森山吐虹
	第103号	1910年11月	「寵商素政論」	森山吐虹

	第 106 号	1910 年 12 月	「恐怖来!!!」	森山吐虹
	著書名	出版年月	出版社	署名
	『児玉大将伝』	1908 年 10 月	太平洋通信社	森山守次 倉辻明義
其 他				
	『納富介堂翁事蹟』	1922 年	出版社 納富磐一	納富磐一 森山守次

出典：国立国会図書館サーチ、『サンデー』、『台湾日日新報』（ゆまに書房刊マイクロフィルム）、『満日』（丸善出版マイクロフィルム）などにより筆者作成。

表 1-1 に示したように、この時期の森山は博文館を舞台に多数の著書や文章を発表し続けていた。内容は、政治評論を中心に、経済評論、紀行、随筆など幅広い分野に及んでいる。植民地経営に関わる内容も少なくなかった。

1903 年、森山は雑誌『内外世論』を発刊すると共に、横浜で『横浜新報』を経営し、同年 9 月から、新声社を経営し始めた<sup>29</sup>。しかし、1 年を満たずして休刊し、間もなく『新声』も隆文館に譲渡するに至る<sup>30</sup>。そして 1904 年から、森山は台湾に渡って総督府統計講習会嘱託吏員となったが、間もなく辞職し、東京に帰って再度、新聞記者となった<sup>31</sup>。

これまで森山がいつごろ、どのような契機で後藤と面識を得たのかについて、正確な時期が明らかではなかった。元『満日』社員であった阿部真之助は、森山は台湾総督府吏員であった時（1904 年）に後藤と結び付いたと回顧している<sup>32</sup>。しかし、上述した内容から見れば、二つの可能性が考えられる。第一は、森山が台湾全島を視察した時、台湾総督府で後藤と会見し、後藤との結びつきを築いたという可能性である。第二は、森山は同級生かつ同郷の夏秋亀一<sup>33</sup>の紹介で後藤と出会った可能性である。後藤は、1902 年 6 月からの欧米視察の際、ロシアに立ち寄っている。夏秋はこの時期にモスクワで後藤新平と会見し、以後後藤の腹心として日露間の政治折衝の裏面で重

<sup>29</sup> 掬汀「編輯だより」、佐藤儀助「告別」（『新声』10 編 3 号、1903 年、95、100 頁）、森山吐虹「社告」（1903 年 9 月 20 日付『満日』）参照。

<sup>30</sup> 隆文館発行の『新声』は 1905 年 2 月号から発売されていた。

<sup>31</sup> 宮武外骨・西田長寿『明治新聞雑誌関係者略伝』みすず書房、1985 年、272 頁。

<sup>32</sup> 阿部真之助『老記者の思い出話』比良書房、1950 年、19 頁。阿部は森山を守山と誤記する。

<sup>33</sup> 夏秋亀一は 1874 年 1 月、佐賀県生。1892 年に東邦協会露西亜語学校に入学したが、まもなく退学。1899 年東京帝大法科大学政治学科を卒業し、中国、アメリカを巡遊した。1900 年 9 月露領シベリアに赴き、同地で生糸及び日露貿易に従事した。1908 年に『大阪朝日新聞』の特派員としてペテルブルグに赴任した二葉亭四迷と知り合い、彼の病気の世話をしたことで有名である。1909 年渡満してハルビン新市街に日満商会を開いた。かたわら北満製粉（株）取締役、松花銀行監査役、ハルビン居留民会副会長を務めた。（十川信介「解題」『近代文学研究資料叢書(5) 坪内逍遙・内田魯庵編 二葉亭四迷』所収、日本近代文学館、1975 年、19 頁。竹中憲一『人名事典「満州」に渡った一万人』皓星社、2012 年、1067 頁）。

要な役割を果たした<sup>34</sup>。いずれにせよ、森山と後藤との結びつきは、1902年頃から築かれたのではないかと考えられる。

森山は欧米遊学、海外での調査活動、博文館記者時代、『横浜新報』・新声社時代などを経て、政治・経済・文学など広い人脈ネットワークを構築していたのである。『満日』創刊初期の人事構成を見れば分かるように、東京帝国大学法科大学政治科同人原口聞一<sup>35</sup>、博文館通信記者・『横浜新報』時代の倉辻明義<sup>36</sup>、山中古洞、『横浜新報』時代の西村正雄、西村巳之助、石橋文三郎、安岡重雄（夢郷）、伊藤武一郎、新声社時代の木下栄らがあげられる<sup>37</sup>。（表 1-2 参照）これらの人々の支えがあったからこそ、『満日』が順調に創刊できたとも言えるだろう。これは、後藤が「新聞創刊の仕事」を森山（守次）に与えた<sup>38</sup>一つ理由のではないかと思われる。

表 1-2 創刊初期『満日』の人事構成

社主：星野錫	社長：森山守次	主幹：西村正雄
編集部		
明石定一、石橋文三郎、池内重雄、桑原喜八、清水亀太郎、原田光次郎、藤本軍次郎、水野応佐、安岡夢郷、山本桑吉、吉本雅美、吉本虎彦		
営業部		
木下栄、渡部林次郎、神野良隆、西村永三、千田宗次郎、宮脇たね子、面川秀之助、原口貞次郎、兼谷富五郎、熊谷丈太郎		
旅順支局	宮田暢、依田籙五郎、山口浅右衛門	

<sup>34</sup> 十川信介「解題」『近代文学研究資料叢書(5) 坪内逍遙・内田魯庵編 二葉亭四迷』所収、日本近代文学館、1975年、19頁。

<sup>35</sup> 原口聞一（1873-1935）、1873（明治6）年9月23日生まれ。長崎県出身。1899年、東京帝大法科大学3年の時に東亜同文会広東支部副会長となって広東に渡った。同地で日本語学校の創設と漢字新聞社の経営に当たった後、1902年福建省の三五公司に入り樟脳専売事業に従事した。1907年、満洲日々新聞が創刊された際大連に渡り、翌年奉天支局開設と同時に支局長に就いた。1909年退社して日中合併の清和公司を創設して董事に就いたが1913年解散して、京城日報特派員に転じた。同紙奉天支局を管理するかたわら居留民会長を務めたが、1914年10月両職を辞し、帰国して郷里で静養した。1916年8月再び渡満して奉天で世界新聞社満韓特派員を務め、かたわら榊原農場を整理してその経営に従事した。1935年6月12日63歳で死去。（竹中憲一『人名事典「満洲」に渡った一万人』皓星社、2012年、1176頁）。

<sup>36</sup> 倉辻明義（1877年5月21日-1945年5月）、号は白蛇。東京専門学校英語政治科卒業後、米国に留学。帰朝後『横浜新報』主筆、『万朝報』記者、『やまと新聞』編集長、『東京毎日新聞』主筆、同理事を歴任した。大正14年『二六新報』に転じ、昭和3年秋『報知新聞』論説部に転じた。（『昭和新聞名家録』参照）。李相哲『満洲における日本人経営新聞の歴史』（凱風社、2000年、87頁）は、「今辻明義」と誤記。

<sup>37</sup> 栄元「『満洲日日新聞』の創刊と初代社長森山守次」2015年、189頁参照。

<sup>38</sup> 「満洲日日新聞が創刊した時の追憶」1926年6月23日付『満日』。

営口支局	西村巳之助、鈴木友一
奉天支局	上田務
吉林支局	原口聞一
東京支局	森次太郎（主任）、結城素明、山中古洞、斉藤萃；客員：倉辻明義（万朝報社）、吉武源五郎
大阪支局	水野寅太郎（主任）
東京印刷株式会社 大連出張所 主事：斉藤章達	

出典：1908年1月1日付『満日』により筆者作成。

### 1.3 『満日』の創刊

満鉄初代総裁に就任した後藤新平は、鉄道のほか新聞、印刷、教育、文化事業に当初から強い関心を示していた。後藤は、近代的帝国主義の先駆者として、台湾総督府民政長官時代から、新聞の「操縦」をかなり重視していた<sup>39</sup>。彼の「新聞利用」は、満鉄総裁時代にも大きな影響を与えていた。

満鉄が大連で業務を開始する前の1907年3月、後藤は満洲を視察した。後藤に同行した満鉄庶務課長となった沼田政二郎によれば「満洲に行って、後藤子爵が一番先に目をつけたのが、新聞と印刷事業であった。（中略）文化を促進せしむるには、どうしても新聞の力に寄らなければならない、それには善い新聞を作らなければならない」<sup>40</sup>と、新聞が必要不可欠だということを認識していた。また、「いろいろ研究した末に、愈理想的の新聞を創立する事になった」<sup>41</sup>と新聞を作ろうとした動機に触れている。

当時、大連にはすでに唯一の日本語新聞『遼東新報』（1905年10月末永純一郎により創刊）があった。日露戦争中の1905年4月<sup>42</sup>、末永純一郎（1866年－1913年）は、満洲に渡り、「大連に居を定めて満洲経営に当るの決心をなし、夫れには先づ言論機関を創設する必要ありと認め」<sup>43</sup>、同年5月遼東守備軍司令部に次のように新聞発行の要望を提出した。

#### 新聞紙発行特許願<sup>44</sup>

私儀人文の開発世務の献替を目的とし大連に於て漢文及邦文両様の新聞紙を発行し同時に御管内各官衙の公文を印刷配布仕度候に付御詮議の上特許御保護被成下度別紙

<sup>39</sup> 鶴見祐輔『後藤新平（第2巻）植民行政家時代』（勁草書房、1965年、83頁）には、次のように記されている。「伯の新聞利用は、ひとり台湾の新聞のみに止まらなかった。伯はひそかに人を内地に派して、常に内地の新聞を操縦せしめ、一方、中央政局の機密を内報せしむるとともに、他方、台湾統治に関する世論の喚起に努めた。その如何なる機略によれるものかは、今にいたって分明ではない」

<sup>40</sup> 沼田政二郎「満洲日日新聞が創刊した時の追憶」『満日』1926年6月23日。）

<sup>41</sup> 同上。

<sup>42</sup> 竹中憲一『人名事典「満洲」に渡った一万人』皓星社、2012年、748頁。

<sup>43</sup> 対支功労者伝記編纂会『対支回顧録 下巻』、同伝記編纂会、1936年、723頁。

<sup>44</sup> 井上謙三郎、前掲書、281頁。

雛型並に要項見積書添付此段奉願候也

明治三十八年五月四日  
東京市赤坂区溜池町二番地  
大連有馬組出張所内宿泊  
末永純一郎

この特許願に書かれているように、末永が「遼東新報要項」を同時に提出していた。内容は以下のようなものである。

遼東新報要項<sup>45</sup>

- 一、論説、時務を論議し輿論を指導し以て人文の開発治道の献替に資すべし
- 一、電報、戦局並に世界各方面に於ける重要な事項に限り特に電報機関を応用し適當の方法を以て速報すべし
- 一、摘要、輻湊到着の内外各新聞に顕れたる記事中に就き最も必要な事項に限り之を本欄に掲載し以て前方勤務に服せる戦闘部員の速諒に便ならしむ
- 一、雑報、占領地の実況を精査し日常の生事を探訪し一は以て内地人の参考に供し一は以て居留民の渴望を医せんことを期す
- 一、雑録、文学的趣味を鼓吹し占領地生活の為に慰安の道を開かんことを期す
- 一、公文、毎号遼東守備軍々政署諸官衙の発布にかゝる公文付録を添へ以て綴込保存に便ならしむ
- 一、広告、居留民並に新渡航者の為に営業上の必要機関たらんことを期す
- 一、文体、毎号支那文及邦文の両様新聞紙を各別に発行すべし
- 一、紙幅、当分普通新聞紙四頁を両分し一部を以て漢文とし他の一部を以て邦文とす
- 一、発行、当分一週一回とし追次回数を増加すべし
- 一、号外、重要事件発生したる時は即時号外を発行して読者に速報すべし

「要項書」に書かれた通り、1905年10月25日『遼東新報』は最初週1回、中国語と日本語の「両様新聞紙」として発刊されたが、翌年4月3日から日刊新聞に変えて、「日支両国人に閲読せしむる為め邦文四頁漢文二頁」<sup>46</sup>のものとして発行するようになった。続いて1908年10月25日に漢文欄を廃止し、日本語6頁のものとした。漢文欄は中国語新聞『泰東日報』として独立させた。『遼東新報』は1912年10月にさらに8頁に拡張された<sup>47</sup>。

当時大連唯一の日本語新聞であったので、経営上非常に有利な立場にあった。しかし、1907年4月、満鉄本社が大連に移転すると、『遼東新報』をとりまく環境はきびしくなってきた<sup>48</sup>。

前述した通り、満鉄は、大連で業務を開始した当初、満洲の開発に資するためには、機関紙が不可欠であることを認識したうえで、買収に向けて遼東新報社との交渉を行った。ところが、末永社長をはじめ、遼東新報社内は「民間紙の立場を一貫したい」<sup>49</sup>と拒否した。

それで、後藤は「『遼東新報』は単に日文のみなるを以て清国人は勿論、欧米人等

<sup>45</sup> 同上、281-282頁。

<sup>46</sup> 対支功労者伝記編纂会、前掲書、723頁。

<sup>47</sup> 同上。

<sup>48</sup> 李相哲『満洲における日本人経営新聞の歴史』凱風社、2000年、56-57頁。

<sup>49</sup> 大来修治「遼東新報の二十年」『五十人の新聞人』、電通、1955年、105頁。

に通用せず為に我が満洲方針に関し誤解を惹起するの恐ある」<sup>50</sup>と考へ、「印刷機関を完備して日清英の三文を以て別に日刊新聞を發刊する議を建て」<sup>51</sup>、新たに新聞を作ることにした。

1907年7月、後藤は東京印刷株式会社（以下東京印刷と略す）社長の星野錫（1854年-1938年）に新聞發刊の意を告げた。星野は、1896年に東京印刷株式会社を設立し、自ら社長に就任した。日露戦争に際して、東京印刷は官報号外、恤兵部の承認状などの用紙の提供、或いは日露戦史、日露戦史写真帖、日露戦役記念繪葉書の印刷などを命じられた<sup>52</sup>。そのため、東京印刷は社員を戦地に派遣しており、租借地になる関東州とのつながりを築いていた。戦争後、星野は大連で繪葉書などの印刷業で事業を拡大しようという意欲を持っていたので、後藤満鉄総裁の要請に応じた。

このように、大連に進出する計画をもっていた星野を社主とし、新聞業務に明るい森山を社長とする満日社は1907年8月に東京で創立され<sup>53</sup>、事務所を東京芝区松本町の森山の自宅においた。

東京において、満日社員となった人々は上田務、西村巳之助、池内重雄、石橋文三郎、水野応佐、明石奇峰、桑原喜八、安岡夢郷、宮田暢<sup>54</sup>の9名であった。他に森次太郎、倉辻明義、吉武源五郎、島田重就、結城素明らが支援した<sup>55</sup>。1907年10月15日、森山は満日社初代社長として大連に出発した<sup>56</sup>。

「今考えると随分大胆なるものであった。實際、森山を始め、一人として満洲の土地を踏んだ者がない、否、土地を踏まぬ許りか、満洲に関する何らの知識を持っていなかったのだ。唯、満鉄といふ大きな後援のあるのを頼りにして、大連へ渡ればどうにかなるといふ至極呑気な心持ちでいた者が少なくはなかった」と社員であった安岡夢郷は回顧している<sup>57</sup>。『満日』は満鉄の後援により作られたものであることが明らかであった。

#### 1.4 『満日』創刊号

『満日』創刊号は64頁にのぼり、当時の新聞として膨大なものであり、その前半は東京印刷株式会社深川分工場印刷し、後半は、大連に着いてから元海軍防備隊跡<sup>58</sup>の社内で印刷した。

發刊当時、編輯局には新聞編輯に経験のある社員は少なかった。「当時森山守次の参謀となって、記者の選択、發刊すべき新聞の体裁、一頁の段数、一行の字数、題字其他の枢要事項を決定したのは、些か自画自賛の嫌いはあるけれども事実において私一人の受持であった。そうして『満日』という題名を選んだのも、森山と私と二人で

<sup>50</sup> 「大連日日新聞創刊」1907年10月15日付『東京朝日新聞』。

<sup>51</sup> 同上。

<sup>52</sup> 星野錫翁感謝会『星野錫翁伝』、星野錫翁感謝会、昭和10年、111頁参照。

<sup>53</sup> 安岡夢郷「ひと昔」1917年11月3日付『満日』。

<sup>54</sup> 李相哲『満洲における日本人経営新聞の歴史』（凱風社、2000年、87頁）、貴志俊彦・松重充浩・松村史紀『二十世紀満洲歴史事典』（吉川弘文館、2012年、198頁）は、「宮田陽」と誤記。

<sup>55</sup> 李相哲、前掲書、87頁。

<sup>56</sup> 「人事」1907年10月14日付『東京朝日新聞』。

<sup>57</sup> 安岡夢郷「辛うじて間に合わせた第一号」1916年3月11日付『満日』。

<sup>58</sup> 大連防備隊は1906年10月15日に解隊され同海軍構内は工場のみとなり。東京印刷株式会社大連出張所、満日社本社として使われた。

協議したものである。」<sup>59</sup>と安岡夢郷は述べている。そして、東京印刷から派遣された職工も殆ど未経験者であったため、ようやく11月2日の夜中になって第1号の印刷が出来上がってきた。「辛うじて間に合わせた第一号」と安岡は回顧している<sup>60</sup>。

そして、1907年11月3日<sup>61</sup>『満洲日日新聞』創刊号が発行された。創刊号から年末までの題号は「日支親善」を表す意味で鐵良という中国人の官吏が毛筆字で書いた『満洲日日新聞』が使われることになった<sup>62</sup>。1908年1月1日以後の題字は第10代肅親王善耆が特に『満日』のために書いたものであった<sup>63</sup>。

創刊号には、社長・森山守次、満鉄総裁・後藤新平をはじめ、政治、経済など幅広い分野で活躍する人物の祝辞が載せられた(表 1-3 参照)。「満日」の発刊に対して、満洲経営者たちが大きな期待を持っていたことは明らかである。

表 1-3 創刊号目次

タイトル	署名
発刊の辞	満洲日々新聞社長・森山守次
題字	
	伊藤公爵、山県公爵、井上侯爵、松方侯爵、桂侯爵、西園寺侯爵、曾禰子爵、寺内子爵
祝辞	
	満鉄総裁・後藤新平、外国語学校校長文学博士・高楠順次郎、外務省政務局長・山座円次郎、外務省・中田敬義、三橋横浜市長、貴族院多額納税者議員・大谷嘉兵衛、荘田平五郎、三井物産理事・朝吹英二、第十五銀行頭取・男爵園田孝吉、第百銀行頭取・池田謙三、日本郵船会社社長・近藤廉平、日本郵船会社副社長・加藤正義、大倉喜八郎、東京商業会議所会頭・中野武宮、海軍中将男爵・橋本正明、海軍少将・瀧川具和、日本紡績業と満洲貿易・原田光次郎、関東都督府陸軍参謀長陸軍少将・神尾三臣、在吉林領事・島川毅三郎、在营口領事・窪田文三、在安東領事・岡部三郎
論文	
対満私見	大隈重信
満洲日々新聞の発刊を祝す	朝比奈知泉
満洲啓発	松井柏軒
新聞業苦楽辨	倉辻明義

<sup>59</sup> 前掲「辛うじて間に合わせた第一号」。

<sup>60</sup> 同上。

<sup>61</sup> 安成二郎は「森山吐虹氏のこと」(『政界往来』第22巻第2号、政界往来社、1956年?月、15頁)において、「満洲日日が創刊されたのは明治42年か3年で、そのとき森山氏は社長に、宮田暢氏は副社長になって大連に出かけた」と誤記している。

<sup>62</sup> 李相哲、前掲書、88頁。

<sup>63</sup> 『満日』1908年1月1日。「本日以後の本紙題字『満洲日々新聞』は肅親王殿下が特に本社の為に揮毫せられたるものに係る本社は同殿下が殊寵に対し謹」。

帝国の対清策	高木信威
殖民地経営の第一義	吉武源五郎
満洲経綸の枢軸地	国府犀東
記者足下	島谷部春汀
新聞の進歩	森次太郎
寄満洲日々新聞社長書	村井啓太郎
所謂満洲経営	黒田甲子郎
満洲貿易と日本紡績	原田光次郎
満洲史乗の研究	稲葉君山
小説及び雑俎	
一の子	山田旭南
出稼人	窪田空穂
漂泊	広津柳浪
勇敢	徳田秋声
自炊	三島霜川
自然興会	斎藤弔花
道すがら	海賀変哲
新家庭	山本柳葉
東都芸壇	岡鬼太郎
悲劇的国民	昇曙夢
婦人の職業とは何の意か	嘉悦孝子
家庭料理	津川千代子
猫	大倉桃郎
俳諧小話	高浜虚子
詩歌・俳句	
漢詩	徳富蘇峰
竹拍漫吟	佐々木信綱
沼の姫	与謝野鉄幹
歌四首	与謝野晶子



馬賊	児玉花外
俳句	内藤鳴雪
秋季雑吟	高浜虚子
秋高馬肥	閑堂堂山
講談及び落語	
百万両宝の入船	邑井一
滑稽義士伝	三遊亭円遊
宮本二刀伝	邑井一
絵画	
皇孫殿下写真版	
八十島	横山大観
菊の朝	寺崎広業
菊娘	結城素明
菊花粧	鎬木清方
百万両寶入船	山中古洞
埃及スケッチ	吉田博
秋収豊満	小杉未醒
埃及の文章	中村不折
滑稽義士傳	小山栄達
絵付録	
三色写真版『開発』	結城素明・渡部審也
天長節の歌	佐々木信鋼
天長節の朝	銀葉
天長節諸会	
都督府と天長節祝典	
無罪言	蒼川逸民
後れたる満洲経営	奉天 逸民
満鉄と祝賀余興	

出典：1907年11月3日付『満日』により筆者作成。

創刊号には、広津柳浪、徳田秋声、三島霜川、斎藤弔花、昇曙夢、高浜虚子、徳富蘇峰、佐々木信綱、与謝野鉄幹、与謝野晶子、児玉花子、内藤鳴雪、邑井一、三遊亭円遊、中村不折など、明治期に活躍した高名な人々の作品が載せられている。小説、詩歌、俳句、講談、落語、挿絵など、様々なジャンルで構成され、紙面の豊富さは当時日本国内の大新聞にくらべて全く見劣りがしない。

満日社長であった森山は、政界の黒幕などと言われた杉山茂丸（1864年-1935年）の支援を受け、1908年松井伯軒（廣吉）などとともに東京に太平洋通信社を創立した。森山は太平洋通信社長として、同年11月22日には、日本最初の週刊誌『サンデー』<sup>64</sup>を創刊した。『サンデー』と『満日』は密接な関係を持っている。元『満日』社員であった宮田暢は『サンデー』創刊後に太平洋通信社の副社長に就任し、後に安岡夢郷も入社した<sup>65</sup>。また、当初『サンデー』発行所の太平洋通信社が「『満日』の内地への宣伝橋頭堡であった」ことは、『満日』に就職した阿部真之助が述べている<sup>66</sup>。さらに、1910年7月3日『サンデー』の第83号から、太平洋通信社に週報社が設けられ、『サンデー』の発行所となった。週報社が独立移転するまで、三社は電話を共用して業務にあたっていた<sup>67</sup>。

1909年9月、森山は「太平洋通信社の業務近来漸次整備伸張致来候に伴ひ親しく新聞の業務に当り難き次第と相成候に付今回社主の更代を機とし退社致し専ら通信社の事業に力を尽くし候」<sup>68</sup>という理由で、『満日』社長を辞任し、東京に帰った。

辞任後の森山は、1910年1月に『九州日報』（以下『九日』と略す）社長兼主筆となった<sup>69</sup>。同紙東京支局は、太平洋通信社内に満洲支局が満日社内に設置されていた。就任後間もなく、森山は太平洋通信社経営の関係上、「『九日』の発展を期するためには専任社長を必要とする」<sup>70</sup>との見地から、友人菊池忠三郎を社長に推して、わずかに在任4か月で退職した。

1912年、森山は3月に東京で千住電気株式会社（取締役）、4月に高尾登山自動車株式会社（創立者の1人）、7月にタクシー自動車株式会社（事務）、8月に京王自動車株式会社などを、相次いで創立し、実業家としても活躍した。さらに、政治活動にも活発に参加した。1915年、森山は選挙に立候補するも、落選した（図1-1参照）。その後、森山は再び満洲に渡り、1918年の頃長春に三国公司を設立し、満蒙における資源の開発等を試み、次いで大連で『極東週報』を発刊した<sup>71</sup>。

以上のことから初代社長森山は、満日社長を引退しても「通信社の事業も満洲の事情を世界に紹介することに主力を尽し」<sup>72</sup>と宣言したように、満洲とのつながりが続いていくことが明確である。

---

<sup>64</sup> 太平洋通信社は東京市京橋区元数寄屋町3にあった。大連大阪屋号書店、営口、遼陽、鉄嶺、長春各支店が『サンデー』の販売所であった。

<sup>65</sup> 安成二郎、前掲書、15頁。

<sup>66</sup> 阿部真之助、前掲書、17頁。

<sup>67</sup> 新橋5059番と3549番。週刊『サンデー』29号、1909年6月13日、9頁、同誌30号、1909年6月20日、20頁参照。

<sup>68</sup> 「森山守次辞任 社告」1909年9月10日付『満日』。

<sup>69</sup> 西日本新聞社『西日本新聞社史』同社、1951年、329頁。

<sup>70</sup> 同上、331頁。

<sup>71</sup> 黒龍会編『東亜先覚志士記伝 下巻』黒龍会、1936年、737-738頁。

<sup>72</sup> 前掲「森山守次辞任 社告」。

図 1-1 1915 年公選中の森山守次（右下）



出典：1915 年 3 月 22 日付『朝日新聞』

## 第 2 節 満日社の組織と人事配置

満日社の経営組織は、創刊初期には編集部、営業部、後に印刷部、工務部、工場部、広告部、外交部、庶務部などから構成された。1922 年から編集部を編集局へと変更した。各部門の人事構成について、現時点までに判明しているものを表 1-4 にまとめた。

表 1-4 満日社人事構成（1907 年-1927 年）

1908 年	<p>社主：星野錫            社長：森山守次 主幹：西村正雄            編集部            明石定一 石橋文三郎 池内重雄 桑原喜八 清水亀太郎 原田光次郎 藤本軍次郎 水野応佐            安岡夢郷 山本糸吉 吉本雅美 吉本虎彦            営業部            木下栄 渡部林次郎 神野良隆 西村永三 千田宗次郎 宮脇たね子 面川秀之助 原口貞次郎            兼谷富五郎 熊谷丈太郎</p>
1909 年	<p>社長：伊藤幸次郎            副社長：西村正雄            主筆：稲垣伸太郎            編集長：伊藤武一郎</p>
1910 年	<p>社主兼社長：伊藤幸次郎            支配人兼広告主任：西村正雄            主筆：稲垣伸太郎            編集部            稲垣伸太郎 伊藤武一郎 池内重雄 磯野公彰 伊藤銚子 新倉蔚 西村誠三郎 吉本雅美 筑紫昌門            村上浩 小野澤清治 山本糸吉 山本亀吉 阿部真之助 平山梅蔵 平瀬勝吉            営業部            原口貞次郎 原口秀雄 ■谷幸蔵 大坪一之助 渡部林次郎 渡辺岩吉 曾我純一 吉本三次郎            竹之内清吉 中込長十郎 中西隆太郎 梅野繁雄 藤谷三磨 藤本米蔵 深本市太郎 宮崎安太郎            比良政吉 元芳末吉</p>

1912 年	<p>社長：守屋善兵衛  副社長兼主筆：村田誠治  編輯長：伊藤武一郎  副主筆：田原禎次郎  營業部長：守屋秀也  新聞課長：苛原兼助  広告主任：石橋文三郎  政治部主任：水野応佐  編輯人：岡田雄  発行人：木村柳太郎  印刷人：比良正吉  編輯部  伊原幸之助 伊藤武一郎 原田道寛 樋口次平 西村巳之助 新倉蔚 堀内計三郎 岡田雄  渡辺■ 金崎賢 横矢■ 田原禎治郎 堤浄祐 中村正次郎 永田善三郎 村田誠治 熊谷清一郎  藤本■ 安齋源一郎 安藤 寛 新井■次郎 榊原政雄 関野直次 篠原嘉郎 鬼頭玉汝 皆川秀孝  水野応佐 平山梅蔵  営業部  伊藤長造 苛原兼助 石橋文三郎 長谷川秀隆 原口貞次郎 原口秀雄 橋本武 仁子彦太郎  堀内寅彦 藤谷幸蔵 千葉■蔵 岡林秋太郎 大坪一之助 土屋長正 中込長十郎 矢野松吉  山本■象、山本栄次郎 丸岡来五郎 神野良隆 小松新吉 出井讓 渥美熊雄 ■田勇之丞  佐藤敏 酒井邦之輔 佐々木兼雄 木村柳太郎 渋谷為三 比良正吉 守屋秀也 守屋茂敏 鈴木友一  工務部  飯盛信一 西田章 香月尚枝 吉成誠三 高橋貞夫 夏木瀬信夫 上坂秀■ 清水梅太郎 野村篤之助  小柳新太郎 山田三次 安井源吉 荒木卯之助 庵原惣輔 鈴木栄之助</p>
1913 年	<p>社長：守屋善兵衛  副社長：村田誠治  主筆：田原禎次郎  編輯長：伊藤武一郎  營業部長：守屋秀也  広告部長：石橋文三郎  編輯人：窪田利平  発行人：石橋文三郎  印刷人：比良正吉  編輯部  伊原幸之助 伊藤武一郎 西村巳之助 新倉蔚 堀内計三郎 渡辺殿 金光太口治 田原禎次郎  高橋多佳次 堤浄祐 津上善七 永田善三郎 熊谷清一郎 窪田利平 山田武吉 山口源二 榊原政雄  平山梅蔵 関野直次 水野応佐 篠原嘉郎 皆川秀孝 紀室藤吉 鬼頭玉汝  営業部  苛原兼助 石橋文三郎 長谷川秀隆 橋本武 仁子彦太郎 堀内寅彦 別所友吉 ■谷幸蔵 越智通意  天坪一之助 渡辺兼次 渡邊明巳 高野五十一 土屋長正 中込長十郎 矢野松吉 山本■象  山本栄次郎 丸岡来五郎 古谷政治 神野良隆 出井讓 渥美熊雄 佐藤敏 酒井邦之輔 嶺田嘉蔵  比良正吉 守屋秀也 守屋茂敏  工務部  飯盛信一 香月尚枝 恒川惣太郎 夏木瀬信夫 上阪秀隆 野村篤之助 小桐新太郎 太田為吉  山田三次 安井源吉 荒木卯之助 庵原惣輔 鈴木栄之助 鈴木周哉</p>

1914年	<p>社長：守屋善兵衛 副社長：村田誠治 主筆：田原禎次郎 編輯部長：伊藤武一郎 営業部長：守屋秀也 広告部長：石橋文三郎 編輯部 岩崎潔治 伊原幸之助 伊藤武一郎 西村巳之助 堀内計三郎 渡辺殿 堤浄祐 金光太目治 高橋多佳次 津上善七 熊谷清一郎 窪田利平 山田武吉 山口源二 矢橋良胤 増田達也 鬼頭玉汝 皆川秀孝 水野応佐 篠原嘉郎 平山梅蔵 關野直次 営業部 苛原兼助 石橋文三郎 長谷川秀隆 橋本武 仁子彦太郎 堀内寅彦 細井光延 別所友吉 殿谷幸蔵 越智通意 大坪一之助 小倉誠治 渡辺兼次 渡邊明巳 土屋長正 中込長十郎 矢野松吉 山本■象、山本栄次郎 丸岡来五郎 古谷政治 神野良隆 出井讓 渥美熊雄 佐藤敏 酒井邦之輔 佐々木作之助 嶺田嘉蔵 比良正吉 守屋茂敏 工場 清水梅太郎 吉成誠三 太田為吉 鈴木栄之助 鈴木周哉 香月尚枝 荒木卯之助 安井源吉 野村篤之助 上阪秀隆 夏木瀬信夫 北■善雄 山田三次 恒川惣太郎 寛淵 小桐新太郎 宮川繁次郎 助川廣吉</p>
1915年	<p>社長：村田誠治 主筆：田原禎次郎 編輯長：伊藤武一郎 営業部長：守屋秀也 広告部長：石橋文三郎 編輯人：窪田利平 発行人：石橋文三郎 印刷人：渡辺明巳 編輯部 伊藤武一郎 伊原幸之助 西村巳之助 堀内計三郎 渡辺殿 高橋聿郎 堤浄祐 高橋多佳次 津上善七 窪田利平 熊谷清一郎 山田武吉 山口源二 山田伊勢松 矢橋良胤 増田達也 小林浅吉 皆川秀孝 篠原嘉郎 平山梅蔵 関野直次 営業部 苛原兼助 石橋文三郎 長谷川秀隆 橋本武 仁子彦太郎 楡居春次 堀内寅彦 細井光延 別所友吉 殿谷幸蔵 越智通意 小倉誠治 小沢弘孝 渡辺兼次 渡辺明巳 武本徳次郎 土屋長正 中込長十郎 矢野松吉 山本栄次郎 間室親遠 丸岡来五郎 古谷政治 江口定蔵 出井讓 渥美熊雄 佐藤敏 佐々木作兵衛 嶺田嘉蔵 渋谷為三 守屋茂敏 工場 清水梅太郎 吉成誠三 太田為吉 鈴木周哉 安井源吉 香月尚枝 北岡善治 野村篤之助 上阪秀隆 夏木瀬信夫 鈴木栄之助 庵原惣輔 恒川惣太郎 小桐新太郎 宮川繁次郎 助川廣吉</p>
1916年	<p>社長：村田誠治 主筆：田原禎次郎 編輯主幹：伊藤武一郎 難派主任：高橋聿郎 営業部長：守屋秀也 広告部長：石橋文三郎 編輯部 伊藤武一郎 伊原幸之助 石橋貞男 西村巳之助 渡辺巖 高橋聿郎 高橋多佳次 堤浄祐 津上善七 窪田利平 熊谷清一郎 山田武吉 山口源二 山田伊勢松 矢橋良胤 小林浅吉 皆川秀孝 平山梅蔵 営業部 石橋文三郎 出井讓 長谷川秀隆 楡居春次 堀内寅彦 細井光延 別所友吉 邊谷幸蔵 越智通意 小倉誠治 小沢弘学 渡辺兼次 渡邊明巳 武本徳次郎 土屋長正 鶴田定助 中川宗之助 中込長十郎 矢野松吉 山本栄次郎 間室親遠 古谷政治 香月尚枝 江口定蔵 渥美熊雄 岸幸彦 嶺田嘉蔵 渋谷為三 森本千枝 守屋茂敏 工場 清水梅太郎 吉成誠三 鈴木周哉 安井源吉 北岡善治 野村篤之助 上阪秀隆 夏木瀬信夫 庵原惣輔 和田稔 芦沢■甫 井口銭一郎</p>

1917年	<p>社長：村田誠治  主筆：栗林巳之蔵  硬派主任：高橋聿郎  営業部長：守屋秀也  広告部長：石橋文三郎  編輯部  伊藤武一郎 伊原幸之助 西村巳之助 保科紀十二 渡辺巖 高橋聿郎 堤浄祐  高橋多佳次 津上善七 臼井亀雄 窪田利平 熊谷清一郎 山口源二 矢橋良胤 山田伊勢松  小林浅吉 岸元吉 皆川秀孝 平山梅蔵  営業部  石橋文三郎 出井諺 長谷川秀隆 殿居春次 細井光延 堀内寅彦 別所友吉 ■賢太郎 渡辺兼次  渡邊要 武本徳次郎 立川■ 土屋長正 鶴田定助 中込長十郎 安井源吉 山本栄次郎 矢野松吉  間室親遠 古谷政治 香月尚枝 渥美熊雄 佐々木作兵衛 岸幸彦 嶺田嘉三 森本千枝 守屋茂敏  工場  清水梅太郎 吉成誠三 鈴木周哉 野村篤之助 庵原惣輔 上阪秀隆 夏木瀬信夫 井口錢一郎</p>
1918年	<p>社長：村田誠治  主幹兼社会部長：栗林巳之蔵  副主幹：高橋聿郎  編輯長：森岡愿次郎  政治経済部長：日笠芳太郎  経営部長：柴田一郎  広告部長：石橋文三郎</p>
1919年	<p>社長：村野常右衛門  副社長兼主筆：木下龍  編輯長兼政治経済部長：日笠芳太郎  社会部長：塚越菊治  営業部長：柴田一郎  広告部長兼販売部長：石橋文三郎  取締役：胎中楠右衛門  監査役：武井光尊碎</p>
1920年	<p>社長：村野常右衛門  副社長：西片朝三  取締役兼支配人：柴田一郎  主筆兼編輯長：馬場力  編輯次長兼社会部長：本田康喜  外交部長：津上善七  経済部長：鈴木直枝  婦人欄主任：今杉好美  広告部長兼販売部長：石橋文三郎  取締役：田原禎次郎 武井光尊 監査役：栗林巳之蔵 清瀬規矩雄</p>

1921年	<p>社長：村野常右衛門  副社長：西片朝三  取締役兼支配人：柴田一郎  主筆兼編輯長：馬場力  編輯次長兼社会部長：本田康喜  經濟部長：鈴木直枝  家庭部長：今杉好美  通信主任：林田学  取締役兼販売部長：石橋文三郎  取締役：武井光尊  監査役：清瀬規矩雄  監査役：古仁所豊  編輯局  今杉好美 今村義恵 石川一水 石丸金尚 馬場力 林 学 本田康喜 土井一 保科喜代次  堀尾武夫 利根留子 加藤万三 吉見才二 高島■輔 田中直紀 高田美千代 津上善七 中村親憲  上田務 鶴川久介 野田透 大塚良吉 窪田利平 山田伊勢松 山崎寧 増田静子 香月尚枝  小此木■三 齊藤善之助 貞岡説二 齊藤信夫 清瀬邦弘 菊田良卓 湯浅秀也 湯浅網■ 平山梅蔵  森成美 森井国雄 関谷孝蔵 鈴木直枝 鈴木藤三  新聞營業  橋文三郎 井口廣吉 細井光延 本田常吉 小野純夫 渡辺源太郎 芳野秀雄 立川義澄 中松国彦  松山齡次 葺本寅松 趙尚福 浅井満 三川栄吉 三浦棟雄 三谷英三 遠藤恵治 平山秀雄  助川照吉 杉田一郎  會計  池田正胤 石野ヨネ 羽山虎男 花田夏江 保家善兵衛 田丸久作 長尾景邦 中込長十郎 東フデノ  坂田豊次 桜基■秀 三木一郎 日高七之助  庶務  長谷川秀隆 横川信次郎 高橋俵蔵 橋秀一 鶴本常次 及川新作 沢町亀太郎 新国辰四郎  廣田徳四郎  印刷  井口徳一郎 服部栄一 林圭輔 和田彌市 吉田孝 用瀬昌武 高瀬又三郎 高河原常吉 野村篤之助  安井源吉 山本栄次郎 山田■次郎 松島留三郎 渥美熊雄 吾妻力松 庵原惣輔 勝賀瀬廣吉  材料販売  別所友吉 織田覚治 東善之助</p>
1922年	<p>副社長：小山内大六  取締役支配人：柴田一郎  編輯局長：春名成章  主筆兼編輯長：馬場力  經濟部長：山田伊勢松  家庭部長：今杉好美  營業部長：石橋文三郎  取締役：武井光尊 石橋文三郎  監査役：古仁所豊 藤田秀助  編輯局  今杉好美 石丸金尚 池内忠義 石田■ 馬場力 林田学 本田康喜 保科喜代次 堀尾武夫  利根留子 土井一 大■興氏 加藤誠一 加藤万三 影山卯一郎 高島■輔 田中直紀 谷山ウルエ  中松国彦 中村親憲 中村英 永嶺信恒 鶴川久介 野田透 大塚良吉 窪田利平 久留宗一  山田伊勢松 古田一彦 小此木■三 齊藤信■ 齊藤善之助 桜岡■子 貞岡説二 清瀬邦弘 菊田良卓  湯浅網■ 平山梅蔵 森井国雄 鈴木直枝 鈴木藤三  新聞營業  井口廣吉 林幸太郎 細井光延 本田常吉 小野純夫 芳野秀雄 立川義澄 高木■右衛門 長崎■平  ■谷貞次郎 松山齡次 葺本寅松 趙尚福 赤星三男 三川栄吉 三谷英三 平山秀雄 助川照吉  杉田一郎  會計  石野ヨネ 羽山虎男 花田夏江 長尾景邦 中込長十郎 山■豊 山口■ 榎本■吉 桜基■秀  三木一郎 島田■ 島田智義 日高七之助 田丸久作 高橋金三郎  庶務  新国辰四郎 高島松子 高橋俵蔵 鶴本常次 沢町亀太郎 廣田徳四郎 小島正剛  印刷  井口徳一郎 岩■男 服部栄一 林圭輔 別所友吉 長谷川秀雄</p>

1923年	社長：小山内大六 取締役支配人：柴田一郎 取締役：中西恒郎 春名成章 岡出寅蔵 監査役：藤田秀助 中島亮作 営業局長：岡出寅蔵 編輯局長：春名成章 編輯長：錦織晃 河合乙彦 編輯人：本田康喜 発行人：鶴木常次 印刷人：石橋文三郎
1924年	社長取締役：小山内大六 取締役：柴田一郎 築島信司 錦織晃 橋本芳彦 監査役：橋本戊子郎 顧問：高柳保太郎 支配人：橋本芳彦 編輯長：錦織晃 編輯人：加藤誠一 発行人：鶴木常次 印刷人：岡出寅蔵
1925年	社長取締役：小山内大六 取締役：柴田一郎 築島信司 錦織晃 橋本芳彦 監査役：橋本戊子郎 高橋仁一 顧問：高柳保太郎 支配人：橋本芳彦 編輯長：錦織晃 編輯人：加藤誠一 発行人：鶴木常次 印刷人：中松国彦
1926年	社長取締役：小山内大六 取締役：錦織晃 取締役支配人：小島清友 取締役：木村通 白濱多次郎 監査役：橋本戊子郎 金丸富八郎 編輯局長：錦織晃 広告部長：中松国彦 販売部長：高塚源一 経理部長：鈴木昇 庶務部長：平山秀雄 印刷所長：今周而
1927年	取締役社長：山崎猛 取締役：山崎元幹 高柳保太郎 尾間明 監査役：金丸富八郎 白濱多次郎 編輯局長：米野豊実 編輯長：臼井亀雄 営業局長：扇谷亮 会計部長：鈴木昇 販売部長：山下庄太郎 広告部長：鶴木常次 文書課長：平山秀雄 編輯人：鶴川久介 発行人：鶴木常次 印刷人：中松国彦

出典：1908 から 1927 年にかけて毎年 1 月 1 日付『満日』紙面、日本電報通信社『新聞総覧』（明治 43 年版-大正 5 年版）（大空社復刻、1991 年）、同（大正 6 年版-大正 10 年版）（大空社復刻、1992 年）、同（大正 11 年版-大正 14 年版）（大空社復刻、1993 年）、同（大正 15 年版-昭和 3 年版）（大空社復刻、1993 年）により筆者作成。なお原記載が判読できない場合、■印で示し、推定される欠字分または適当な字数の空白を括弧で表示した。以下同じ。

『満日』は創刊直後、旅順、営口、及び奉天に支局を置いた。その後、柳樹屯、瓦



房店、大石橋、営口、海城、遼陽、千金寨、鉄嶺、昌図、開原、公主嶺、長春、吉林、哈爾濱、新民府、本溪湖、安東、天津、朝鮮でも満洲と隣接する新義州をはじめ主要都市、さらに、東京、大阪にも取次販売所を開設していた<sup>74</sup>。また、各地において通信員を配置した。表 1-5 に示すように、満鉄附属地のほかに、北京、上海、京城、平壤、門司にも通信員を配置していた。

表 1-5 満日社の通信員構成

年度別	支社・支局所在地	氏名
1908 年	旅順支局	宮田暢 依田鎌五郎 山口浅右衛門
	営口支局	西村巳之助 鈴木友一
	奉天支局：	上田務
	吉林	原口聞一
	東京支局	森次太郎 結城素明 山中古洞 斉藤萃 客員：倉辻明義 吉武源五郎
	大阪支局	水野寅太郎
1909 年	営口支局	藤谷三磨 鈴木友一 今井照慶 今井次郎
1910 年	旅順支局	鬼頭玉汝 小林定五郎 堀内計太郎 神野良隆 田中孝次郎 山田七太郎 丸岡来五郎
	営口支局	岡田雄 鈴木友一
	奉天支局	山中寛太郎 木村柳太郎
	鉄嶺支局	大津敏也 藤枝武二郎
	長春支局	佐藤武雄 千田宗次郎
	大阪支局	石橋文三郎

<sup>74</sup> 李相哲、前掲書、89 頁。

	普蘭店	藤本親信 和泉研
	大石橋	小林才治
	遼陽	柴田靖一郎
	千金寨	林藤樹
	芝罘	島田敬之
	上海	山ノ井格太郎
	吉林	■玉多一
	哈爾賓	辻光■
1924 年	東京	小島清友
	大阪	小島清友
	奉天	山王丸豊治
	旅順	河合乙彦
	哈爾濱	大塚良吉
	撫順	長友豊
	營口	東登一郎
	長春	得丸助太郎
	安東	森井国雄
	京城	山副昇
	門司	有村忠恕
	北京	竹内克巳
	四平街	奈良一雄
	鉄嶺	本田正
	開原	佐竹令信
	瓦房店	草葉強太郎
	鞍山	加藤万蔵
	天津	上田良有
	平壤	中丸好太郎
	公主嶺	池永修三

	遼陽	猿渡源蔵
	その他：大石橋、金州、普蘭店、本溪湖、上海、錦州、吉林、青島	
1925年	東京	小島清友
	大阪	小島清友
	奉天	太原要
	旅順	河合乙彦
	哈爾賓	八木沼丈夫
	撫順	長友豊
	營口	東登一郎
	長春	得丸助太郎
	安東	草葉強太郎
	京城	山副昇
	門司	有村忠恕
	四平街	笹岡清克
	鉄嶺	本田正
	開原	佐竹令信
	瓦房店	草葉強太郎
	鞍山	加藤万蔵
	天津	上田良有
	平壤	中丸好太郎
	公主嶺	池永修三
	遼陽	猿渡源蔵
	その他：大石橋、金州、普蘭店、本溪湖、上海、錦州、吉林、青島、北京	

出典：同表 1-4。

### 第3節 満日社の経営

満日社の資本は、創刊当時星野錫が出資し、編輯營業を満日社が行うということであった。營業會計は東京印刷大連出張所において取り扱うこととし、その指揮権は、森山の掌中にあるはずであった。しかし、森山が大連に着いて見ると、恰も『満日』

が、東京印刷大連出張所の附属事業に過ぎないような羽目となっている。これについて、森山は星野と厳談を試みた結果、新聞社の編輯營業を森山が握り、東京印刷には毎月新聞紙の紙代、印刷代を支払うこととした<sup>75</sup>。創刊初期の編輯人は満日社の明石定一で、発行兼印刷人は東京印刷大連出張所主事の斉藤章達であった。満日社と東京印刷がそれぞれ分担した役割は明確であった。

初代社長森山辞任後、1909年に「満鉄の意向に基きて」<sup>76</sup>実業家伊藤幸次郎（号荊堂。1865年-1928年京都市出身）<sup>77</sup>が2代目社長として就任した。それとともに、星野は東京印刷大連出張所の業務を伊藤に譲渡した。1910年5月、満日社は東京印刷大連出張所の財産及び業務の全部を譲り受けて、満日社印刷部と改称した。伊藤社長時代には、稲垣伸太郎が主筆となり、編輯局には内地から新進の新聞記者が数多く入社した<sup>78</sup>。また、満鉄の保護の下に設備を完備し、新聞社の販路は満洲、朝鮮及び日本にとどまらず、シベリアより遠く西欧諸国まで広がっていた<sup>79</sup>。

1911年8月、台湾日日新報（1898年創刊）初代社長守屋善兵衛（1866年-1930年、岡山県出身。号亦堂又は如郷）<sup>80</sup>が大連に渡って、満日社長に就任した。

図 1-2 満日三代目社長守屋善兵衛



出典：日本電報通信社『新聞総覧』（大正2年版）（大空社復刻、1991年、417頁）

守屋は台湾日日新報社時代の同僚村田誠治<sup>81</sup>を副社長に、田原禎次郎（号天南）を編輯長に、守屋秀也を営業部長に任命して、満日社の陣容を固めた<sup>82</sup>。

『満日』は年中無休の日刊紙として発刊した。紙面は大部分が6頁であり、新聞・

<sup>75</sup> 前掲「ひと昔」。

<sup>76</sup> 日本電報通信社『新聞総覧』（大正3年版）、大空社復刻、1991年、602頁。

<sup>77</sup> 長尾半平『荊堂・伊藤幸次郎』財団法人四郎荘、1932年、3頁、61頁。

<sup>78</sup> 由井濱権平『謝恩誌：満洲タイムス廃刊記念』満洲タイムス社、1941年、174頁。

<sup>79</sup> 日本電報通信社、前掲書、602頁。

<sup>80</sup> 關野直次『守屋善兵衛追悼録』守屋善兵衛追悼録編纂事務所、1935年、241頁。

<sup>81</sup> 村田誠治、1863年栃木県生まれ。郷里の小学校を卒業したのち、東京で英語を修め、1885年に英語教師となった。1887年『公論新報』の主筆となり、1889年『国会新聞』編集長に転じた。1896年『関西実業新報』主筆に招かれて神戸に移り、1898年『台湾日日新報』主筆に転じて台北に渡り、1908年に同紙の主筆兼副社長に就任した。1911年7月『満洲日々新聞』主筆となって渡満し、1912年8月以降は副社長として経営に専念した。1913年5月社長に就任し、1916年8月退任した。（竹中憲一『人名事典「満洲」に渡った一万人』皓星社、2012年、1454-1455頁）

<sup>82</sup> 關野直次、前掲書、141頁。

俳句・小説連載・家庭欄・衛生欄・投書欄・文芸欄・広告欄・英語欄などが設けられている。また、「営口週報」、「長春週報」、「鉄嶺週報」、「奉天週報」、「大石橋週報」、「瓦房店週報」など満鉄沿線各地の週報が紙面第 4 頁に掲載された（付録 1-2 参照）。

守屋社長は就任後、台湾日日新報社での経験を活かして、「紙面の整美、記事の公正、報道の敏速」などを推進した。それらの一連の紙面改革により、『満日』の発行部数は 1911 年は 9700 部、1912 年 12,250 部、1916 年は 15,400 部、1920 年は 25,876 部と、順調に増加した（表 1-6 参照）。

表 1-6 『満日』配布部数

年度	名称	毎号配布部数（部/1日）						
		大連	大連以外の中国各地	日本内地	朝鮮	台湾	其他	計
1908 年末	満洲日日新聞	6,500						
	遼東新報	4,500						
1909 年末	満洲日日新聞	6,200						
	遼東新報	4,050						
1910 年末		大連	大連以外の中国各地	日本内地	朝鮮	台湾	其他	計
	満洲日日新聞	3,700	4,000	500	500	500	500	9,700
	遼東新報	2,000	3,500	400	500	200	300	6,900
1911 年末	満洲日日新聞	3,600	4,000	500	500	600	500	9,700
	遼東新報	3,600	3,600	400	500	200	300	8,600
1912 年末	満洲日日新聞	4,250	5,400	850	700	300	750	12,250
	遼東新報	5,500	4,200	800	550	150	600	11,800
1913 年末	満洲日日新聞	4,350	5,400	1,050	700	250	800	12,550
	遼東新報	5,600	5,300	800	600	100	700	13,100
1914 年末	満洲日日新聞	5,800	5,900	950	850	250	700	14,450
	遼東新報	5,900	5,300	800	600	100	800	13,500
1915 年末	満洲日日新聞	5,950	6,000	1,060	920	250	650	14,830
	遼東新報	5,740	5,990	870	950	120	700	14,370
1916 年末	満洲日日新聞	6,450	6,350	1,100	900	150	450	15,400
	遼東新報	5,936	6,578	1,030	720	152	629	15,045
1919 年末	満洲日日新聞	14,900	2,453	4,432	1,810	969	121	24,685

	遼東新報	19,300	5,800	2,350	1,300	370	120	29,240
1920 年末	満洲日日新聞	15,560	2,375	4,862	1,980	891	208	25,876
	遼東新報	24,500	6,300	3,800	2,200	390	135	37,325
	大連新聞	4,204	176	42	30	-	20	4,472

出典：関東都督府編『関東都督府統計書』（明治41年-大正9年版）関東都督府都督官房文書課、により筆者作成。

また、新聞社の発展にともない、印刷業及び印刷諸機械、諸販売を兼営するようになった<sup>83</sup>（図1-3参照）。

図1-3 満日社営業項目（1911年時点）

新聞発行、圖書出版、 各種製版印刷 <small>活版、石版、銅版、 寫眞版、三色版、電氣版、 版、鉛凸版、木版等</small> 和洋	製本、活字類製造、和	洋紙類販賣、印刷用	諸材料販賣、印刷用	各種器械類販賣、製	本用諸器械販賣、其	他諸般の代理業
---	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	---------

日本電報通信社『新聞総覧』（大正2年版）、大空社復刻、1991年、417頁。

満洲事変以前の満日社の出版事業について、表1-7にまとめた。書名でわかるように、満日社が出版した図書の内容は、関東都督府法規、満鉄年史のほか、ほとんど満洲各地の経済、地理などに関する写真集や一覧である。

表1-7 満日社の出版事業

書名	著者	出版年
『安重根事件公判速記録』	満洲日々新聞社	1910年
『南満洲寫真大観』	金沢求也	1911年
『関東都督府法規提要追録』 附・民政署、警務署、領事館、南満洲鉄道沿線法規集	関東都督府	1912年
『沿線写真帖』	南満洲鉄道株式会社	1912年
『満洲土産写真帖』	満洲日々新聞社	1914年
『満洲ニ於ケル通貨及金融』	森田元治郎，矢部仁吉	1914年
『金州概況一覧』	-	1914年

<sup>83</sup> 日本電報通信社『新聞総覧』（大正2年版）、大空社復刻、1991年、418頁。

『膠州湾』	田原天南	1914年
『南満洲写真帖』	満洲日々新聞社	1914年
『南満洲写真帖』	守屋秀也	1917年
『義太夫大鑑』	秋山木芳	1917年
『公主嶺沿革史』	伏屋武竜	1918年
『浄瑠璃各派系統図表』	秋山 清	1918年
『南満洲鉄道株式会社十年史』	南満洲鉄道	1919年
『旅順誌要』	関東庁博物館	1919年
『日本語と蒙古語』	大藪鉦太郎	1920年
『満洲写真大観』	満洲日々新聞社	1921年
『満蒙全書』第7巻	南満洲鉄道株式会社 庶務部調査課	1923年
『最新北支那要圖：満洲日々新聞社特撰』	-	1930年

出典：国立国会図書館サーチ、国立情報学研究所 CINII 大学図書館図書・雑誌検索により筆者作成。

なお、村田は副社長であったが実務に当り、守屋は多くは東京に居住していた<sup>84</sup>。1913年5月には村田が社長に就任し、経営に努力したため、新聞社の基礎が漸く定まった。1913年11月それまで社長の個人名義となっていた満日社を株式会社に変更した。資本金は135,000円、うち110,500円を満鉄の持ち株とした。満鉄はさらに1919年に、同紙の株式を買収して100%子会社にした<sup>85</sup>。

表 1-8 株式会社満日社の収益概況（1913-1927）（単位：円）

	1913年 下半年	1914年 上半期	1914年 下半年	1915年 上半期	1915年 下半年	1916年 上半期	1916年 下半年	1919年 下半年	1920年 上半期	1920年 下半年	1921年 上半期	1921年 下半年
株金	135,000	135,000	135,000	135,000	135,000	135,000	135,000	135,000	500,000	500,000	500,000	500,000
資産	144,944	157,217	160,121	165,111	165,655	182,917	191,407	380,556	782,950	792,077	790,515	885,167
資産の内訳（一部）												
土地 建物	3,890	3,890	4,466	4,466	4,466	4,466	4,466	31,315	42,034	113,516	118,347	188,348
機械 器具	37,464	38,153	38,764	46,385	46,462	46,272	45,554	52,782	56,633	58,490	62,947	69,611

<sup>84</sup> 末木儀太郎『満洲日報論』日支問題研究会、1932年、3頁。

<sup>85</sup> 南満洲鉄道株式会社、前掲書、681頁。

当期純益金	-1,538	7,372	10,315	9,104	6,783	18,442	13,610	0	46,198	24,663	4,320	6,628
-------	--------	-------	--------	-------	-------	--------	--------	---	--------	--------	-------	-------

	1922年 上半期	1923年 上半期	1923年 下半期	1924年 上半期	1924年 下半期	1925年 上半期	1925年 下半期	1926年 上半期	1926年 下半期	1927年 下半期
株金	500,000	500,000	500,000	500,000	500,000	500,000	500,000	500,000	500,000	500,000
資産	908,714	978,116	724,184	616,004	599,481	608,103	604,593	631,827	618,665	1,037,987
資産の内訳（一部）										
土地建物	198,225	204,990	205,296	108,967	209,994	209,995	209,995	209,995	206,439	211,770
機械器具	77,379	77,798	166,192	169,608	168,531	172,036	184,599	185,660	191,997	192,906
当期純益金	6,829	-25,123	27,788	19,005	19,005	11,428	10,691	15,005	10,903	2,859

出典：1914年2月23日、同8月27日、1915年2月17日、同8月30日、1916年3月13日、同8月26日、1917年2月27日、1920年3月8日、同8月5日、1921年2月15日、同8月3日、1922年2月6日、同8月4日、1923年8月30日、1924年2月6日、同8月12日、1925年2月10日、同8月13日、1926年2月17日、同8月19日、1927年2月24日、1928年2月23日付『満日』により筆者作成。

改組後の満日社の収益状況を、表1-8に示した。当初満日社の純益金は赤字であったが、1914年上半期に7,372円、さらに同年下半期に10,315円と黒字化した。これは守屋と村田による社内改革が経営を改善させたのであった。また、資産は、1913年下半期の144,944円から年々増加し、1919年下半期には191,407円、1920年上半期には782,950円に達している。

#### 第4節 『遼東新報』との合併

「満洲経営の急先鋒」と自ら誇った満日社は、新聞を発行し紙面報道での世論喚起だけでなく、付録1-3に示したように、さまざまな事業活動を主催した。また、本社に限らず、満鉄附属地沿線の各地にある支局も各地の状況に応じて本社と同じようにイベントを開催している。その詳細については第2部の各章で検討する。

また、新聞社の組織運営にも積極的に携わっていた。新聞社の事業の刷新にともない、1920年代には、株金は135,000円から500,000円へと増加した。同年4月から紙面は朝・夕刊合わせて8頁となった。さらに、1923年に小山内大六<sup>86</sup>が社長に就任すると、紙面は朝・夕刊合わせて12頁に拡張された。このような『満日』における資本金の増加や紙面の改革により、広告も着実に増えた。

前述したように、『満日』は満鉄の機関紙として出発しており、満鉄から資金などの支援を受けるのは当然である。とはいえ、近代メディアとして新聞社の営利性を否

<sup>86</sup> 小山内大六(1923年-1927年在任)：1869年青森県生まれ。1887年頃青森県師範学校を卒業して教職に就いた後、上京して哲学館大学に入り東洋哲学を研究した。卒業後、1898年に時事通信社に入社したが、翌年の1899年に実業の日本社に転じて編集を担当した。その後退社して日本新聞社に入社。1914年に政友会の機関紙『中央新聞』編集長に就いた。1923年12月、満鉄社長で政友会顧問の川村竹治の招聘により満洲日々新聞社長として渡満した。(竹中憲一『人名事典「満洲」に渡った一万人』皓星社、2012年、346頁)



定することができないと考えられる。新聞経営において最も重要なのは広告料収入である。また、広告はその営業及び商品の種類によって必要の程度を示す一方、広告の増減によって商品の需要の趨勢、及びその営業者の活動の状態が分かる。表 1-9 に示したように、新聞広告の分類を「売薬、化粧品、書籍、呉服、会社、決算、官庁、登記、学校、病院、雑品、出帆、雑件」の 13 項目に分かれ、そのうち、売薬、化粧品、書籍が広告の主力である。『満日』に掲載された広告の大部分は売薬、化粧品及び図書営業者であったことが理解できる。

表 1-9 満日社広告行数分類統計表

年度 (年)		売薬	化粧品	図書	織物	会社	決算	官公署	登記	学校	病院	雑品	出帆	雑件	計
1913	地方	3,036	1,449	14,612	6,501	16,817	2,035	1,298	-	726	2,672	70,060	37,778	11,210	228,194
	東京	31,790	41,809	39,966	3,683	11,600	507	10	-	548	16	29,929	6,847	971	167,676
	大阪	24,589	9,435	1,385	366	608	-	-	-	46	25	7,909	18,602	417	63,382
	計	59,415	52,693	55,963	10,550	29,025	2,542	1,308	-	1,320	2,713	107,898	63,227	72,598	459,252
1914	地方	2,351	530	20,075	5,210	13,502	2,264	1,075	-	704	1,538	58,284	38,414	51,877	195,824
	東京	34,512	58,716	42,563	3,820	14,795	531	-	-	468	-	27,546	6,988	565	190,504
	大阪	37,991	1,897	213	979	801	82	-	-	46	-	10,939	20,387	134	73,469
	計	74,854	61,143	62,851	10,009	29,098	2,877	1,075	-	1,218	1,538	96,769	65,789	52,576	459,797
1915	地方	7,229	325	16,173	7,053	24,770	2,615	803	-	524	3,629	77,158	48,937	39,068	228,284
	東京	30,622	35,104	60,983	2,772	7,182	185	-	-	636	15	25,158	5,607	887	169,151
	大阪	31,878	19,562	299	1,379	20	-	-	-	5	-	5,094	13,593	292	72,122
	計	69,729	54,991	77,455	11,204	31,972	2,800	803	-	1,165	3,644	107,410	68,137	40,247	469,557
1916	地方	8,605	870	27,048	5,053	36,111	2,599	572	45	526	5,125	72,792	44,166	51,142	254,654
	東京	43,569	77,466	69,709	1,732	3,203	167	-	-	529	29	44,830	6,402	514	248,150
	大阪	30,826	23,337	185	602	1,737	-	-	-	-	44	12,036	14,253	736	83,756
	計	83,000	101,673	96,942	7,387	41,051	2,766	572	45	1,055	5,198	129,658	64,821	52,392	586,560
1917	地方	9,770	2,787	30,949	6,156	44,573	4,614	1,613	-	629	7,771	73,575	39,299	88,254	309,990
	東京	118,198	137,838	73,855	1,717	6,769	146	-	-	905	-	76,277	8,626	4,895	429,226
	大阪	43,306	49,497	1,112	795	1,058	-	8	-	-	51	12,144	17,146	1,310	126,427
	計	171,274	190,122	105,916	8,668	52,400	4,760	1,621	-	1,534	7,822	161,996	65,071	94,459	865,643
1918	地方	12,889	3,141	29,422	6,104	43,673	6,463	2,426	83	550	9,751	88,104	43,112	105,360	351,078
	東京	135,790	159,003	84,218	4,342	10,189	61	106	-	1,207	-	106,111	5,755	5,994	512,776
	大阪	58,707	34,806	865	720	1,665	92	-	-	27	421	18,440	11,265	4,135	131,143
	計	207,386	196,950	114,505	11,166	55,527	6,616	2,532	83	1,784	10,172	212,655	60,132	115,489	994,997
1919	地方	15,892	1,365	21,805	12,265	98,691	10,719	2,006	184	723	8,213	101,367	44,073	150,152	467,45
	東京	142,260	169,424	103,699	5,449	11,426	-	16	16	1,042	10	120,233	5,025	3,708	562,598
	大阪	51,997	22,503	3,725	203	3,566	-	-	-	42	-	22,927	11,576	7,800	124,339
	計	210,149	193,292	129,229	17,917	113,683	10,719	2,022	200	1,807	8,223	244,527	60,674	161,660	1,154,102

出典：日本電報通信社『新聞総覧』（明治 43 年版-大正 5 年版）（大空社復刻、1991 年）、同（大正 6 年版-大正 10 年版）（大空社復刻、1992 年）により筆者作成。

広告行数からみれば、『満日』に掲載された広告総行数は 1913 年に 459,252 行、1916 年に 586,560 行、1917 年に 865,643 行、1919 に 1,154,102 行に跳ね上がっている（表 1-10 参照）。そのうち、発行地・大連での広告は毎年度において若干の差異があ

るが、平均的に約 4 割強を占めていたことがわかる。広告の多少によって満日社の収入のほか、大連における商工業の状況とその発展の度合いを推測できるであろう。

表 1-10 広告行数年度別統計表

年度		満洲日日新聞社	遼東新報社
1913 年	地方	228,194	-
	東京	167,676	-
	大阪	63,382	-
	計	459,252	-
1914 年	地方	195,824	-
	東京	190,504	-
	大阪	73,469	-
	計	459,797	-
1915 年	地方	228,284	189,292
	東京	169,151	84,227
	大阪	72,122	49,234
	計	469,557	322,753
1916 年	地方	254,654	440,629
	東京	248,150	243,840
	大阪	83,756	127,983
	計	586,560	812,452
1917 年	地方	309,990	356,722
	東京	429,226	335,476
	大阪	126,427	138,878
	計	865,643	831,076
1918 年	地方	351,078	509,033
	東京	512,776	393,782
	大阪	131,143	174,835
	計	994,997	1,077,650
1919 年	地方	467,455	786,240

	東京	562,598	564,457
	大阪	124,339	196,991
	計	1,154,102	1,547,688
1920年	地方	760,648	1,216,496
	東京	710,196	628,665
	大阪	188,776	278,935
	計	1,759,620	2,124,096
1921年	地方	756,394	947,861
	東京	■	700,889
	大阪	■	379,366
	計	2,123,145	2,028,117
1922年	地方	733,194	1,126,849
	東京	934,271	800,277
	大阪	447,686	449,811
	計	2,115,151	2,376,937
1923年	地方	674,898	647,990
	東京	560,832	525,697
	大阪	310,512	138,454
	計	1,556,242	1,312,141
1924年	地方	1,180,465	1,185,739
	東京	1,173,197	916,551
	大阪	443,332	597,744
	計	2,796,994	2,700,034
1925年	地方	1,364,102	1,448,318
	東京	1,059,427	845,858
	大阪	402,274	499,605
	計	2,825,803	2,793,781
1926年	地方	1,426,470	1,511,059

	東京	973,706	808,907
	大阪	482,732	392,650
	計	2,882,908	2,712,616
1927年	地方	1,543,364	1,160,915
	東京	901,896	701,513
	大阪	482,562	393,574
	計	2,927,822	2,256,002

出典：日本電報通信社『新聞総覧』（明治43年版-大正5年版）（大空社復刻、1991年）、同（大正6年版-大正10年版）（大空社復刻、1992年）、同（大正11年版-大正14年版）（大空社復刻、1993年）、同（大正15年版-昭和3年版）（大空社復刻、1993年）により筆者作成。

この表から分かるように、『満日』の広告総業数が著しい増加を示したのは第1次世界大戦中及び戦後であった。これは、この戦争を背景として、満洲経済が異常な好景気を迎えたことに照応するものであった。1923年の関東大震災の影響で、広告行数の一時的な減少も見られたが、翌年からは再び増加していった。

満日社が土地建物や機械器具などへの投資、多様の事業活動を主催することにより、社業はさらなる発展を遂げた。「全満洲を通じての第一流たるのみでなく内地の新聞にも五指を数ふるの一つ」<sup>87</sup>とみなされるようになった。

一方、前述した通り、『遼東新報』は創刊後、満洲における唯一の日本語新聞として非常に有利な立場に立っていた<sup>88</sup>。末永の個人経営でありながら、関東督府の公布式新聞の地位を与えられていた<sup>89</sup>。しかし、『満日』が創刊されると、『遼東新報』に代わって関東督府の公布式新聞となり、完全に満洲における御用新聞となったのである<sup>90</sup>。その一方で、『遼東新報』は民間紙の立場を貫き、『満日』にとっては有力な競争相手であった。

序章で述べた通り、現在は『遼東新報』は閲覧不可とされているため、遼東新報社の紙面構成や事業活動などについて考察することは困難であるが、日本電報通信社編纂発行の『新聞総覧』をみると、当時の遼東新報の概況を知ることができる。当時の遼東新報社の人事構成を表1-11にまとめた。

表 1-11 遼東新報人事構成

1909年	社長：末永純一郎 総務部長：平岡与平治 主筆：吉倉汪聖 広告主任：市橋賛治
-------	--

<sup>87</sup> 井上謙三郎、前掲書、764頁。

<sup>88</sup> 大来修治、前掲文、105頁。

<sup>89</sup> 高媛「租借地メディア『大連新聞』と「満洲八景」」『ジャーナル・オブ・グローバル・メディア・スタディーズ』（4）、23頁。

<sup>90</sup> 末木儀太郎、前掲書、3頁。

1913年	社主：末永花子 社長：末永節 主筆：吉倉汪聖 編輯長兼營業部長、硬派主任：大来修治 理事長兼軟派主任：角田宏顕 理事：平岡與平治 広告部長：市橋賛治
1914年	社主：末永花子 社長：末永節 主筆：吉倉汪聖 編輯長、総務部長兼營業部長：大来修治 軟派主任：角田宏顕 理事：平岡与平治 広告部長：市橋賛治 販売部長：吉野直治
1915年	社主：末永花子 主筆：吉倉汪聖 編輯長兼総務部長、硬派主任：大来修治 軟派主任：角田宏顕 広告部長：市橋賛治 販売部長：吉野直治
1916年	社主：末永花子 主筆：吉倉汪聖 編輯長兼総務部長、硬派主任：大来修治 軟派主任：角田宏顕 広告部長：市橋賛治 販売部長：吉野直治
1917年	社主：末永花子 社長：末永節 主筆：吉倉汪聖 編輯長兼総務部長、硬派主任：大来修治 軟派主任：角田宏顕 広告部長：市橋賛治 販売部長：吉野直治
1918年	社主兼社長：末永テイ子 主筆：吉倉汪聖 編輯長兼政治経済部長、営業部長：大来修治 社会部長：田原秀穂 広告部長：中村徳三郎 販売部長：吉野直治

1919年	社長：吉倉汪聖 副社長兼主筆：大来修治 編輯長兼政治經濟部長：難波勝治 社会部長：田原秀穂 広告部長：中村徳三郎 営業部長兼販売部長：吉野直治
1920年	社長：吉倉汪聖 副社長兼主筆：大来修治 編輯長兼政治經濟部長：難波勝治 社会部長：早川己三利 広告部長：中村徳三郎 営業部長兼販売部長：吉野直治
1921年	社長：大来修治 主筆：難波勝治 編輯長兼政治部長：佐藤四郎 經濟部長：日新国政 社会部長：早川己三利 広告部長：中村徳三郎 営業部長兼販売部長：吉野直治
1922年	社長：大来修治 取締役：吉野直治、吉倉汪聖、末木儀太郎、末永てい 監査役：平岡与平治、難波勝治 主筆：難波勝治 編輯長兼政治部長：佐藤四郎 事務局長：吉野直治 經濟部長：日新国政 社会部長：三好清太郎
1923年	社長：大来修治 取締役：吉野直治 吉倉汪聖 末木儀太郎 難波勝治 主筆：難波勝治 編輯長：佐藤四郎
1924年	社長取締役：大来修治 主筆取締役：難波勝治 事務局長取締役：吉野直治 工場取締役：末木儀太郎 相談役取締役：吉倉汪聖 監査役：平岡与平治 大陸日日新聞社 社長（兼）：吉野直治 編輯長（兼）：菊池秋四郎 副社長：庵谷忱

1925 年	社長取締役：大来修治 主筆取締役：難波勝治 事務局長取締役：吉野直治 工場取締役：末木儀太郎 相談役取締役：吉倉汪聖 監査役：平岡与平治 大陸日日新聞社 社長（兼）：吉野直治 副社長：庵谷忱 編輯長：田原豊
1926 年	取締役社長：大来修治 取締役営業局長：吉野直治 取締役工務局長：末木儀太郎 取締役編輯局長：難波勝治 事務局長取締役：吉野直治 取締役：吉倉汪聖 監査役：平岡與平治 編輯長：菊池秋四郎 営業局次長：中村徳三郎 工務局次長：蘆澤■甫 総務局主事：長沢千代造 奉天日日新聞社 社長（兼）：吉野直治 副社長：庵谷忱 編輯長：田原豊

出典：日本電報通信社『新聞総覧』（明治 43 年版-大正 5 年版）（大空社復刻、1991 年）、同（大正 6 年版-大正 10 年版）（大空社復刻、1992 年）、同（大正 11 年版-大正 14 年版）（大空社復刻、1993 年）、同（大正 15 年版-昭和 2 年版）（大空社復刻、1993 年）により筆者作成。

まず判明するのは、遼東新報社の組織が、編集部、広告部、販売部、社会部などの部門により構成されることである。

表 1-12 遼東新報社の通信員構成

年度別	支社・支局所在地	氏名
1922	旅順支局	近藤基喜
	奉天支局	菊池秋四郎
	長春支局	柏原孝久
	東京支局	日笠芳太郎 佐野易之助
	大阪支局	亀谷伴吉
1924 年	東京	佐野易之助
	大阪	亀谷伴吉

	旅順	近藤基喜
	奉天	菊池秋四郎
	遼陽	渡辺源次郎
	營口	田邊源吉
	鉄嶺	末広栄二
	安東	佐藤一三
	長春	柏原孝久
	青島	前田七郎
	哈爾濱	松原通育
	京城	小野久太郎
1925 年	東京	佐野易之助
	大阪	亀谷伴吉
	旅順	近藤基喜
	奉天	小林磯蔵
	遼陽	渡辺源次郎
	營口	田邊源吉
	鉄嶺	末広栄二
	安東	佐藤一三
	長春	柏原孝久
	青島	前田七郎
	哈爾濱	松原通育
	京城	高島種夫
1926 年	東京	佐野易之助
	大阪	亀谷伴吉
	旅順	近藤基喜
	奉天	小林磯蔵
	遼陽	渡辺源次郎
	營口	田邊源吉



	鉄嶺	末広栄二
	安東	佐藤一三
	長春	松岡栄蔵
	青島	森本寅吉
	哈爾賓	森本柳作
	京城	高島種夫

出典：表 1-11 に同じ。

遼東新報社は東京、大阪、旅順、奉天に支社、営口、鞍山、遼陽、鉄嶺などの満鉄附属地の主要都市に支社・支局を設置した。また、表 1-12 に示すように、各地に通信員を配置した。満鉄附属地のほかに、北京、青島、京城にも通信員を配置していた。

新聞の頁数、購読料、設備、広告料などについては、表 1-13 にまとめた。

表 1-13 大連・日本語新聞社の概況（1913 年-1920 年）

年度			遼東新報社	満洲日日新聞社
1913 年	機械数		輪転印刷機：1 台 ロール印刷機：4 台	不詳
	活字種類		ルビ付ポイント式	ポイント式
	字母設備		有	有
	写真版設備		有	有
	ステレオ設備		有	有
	紙面体裁	1 行	18 字詰	16 字詰
		1 段	66 行	105 行
		1 頁	8 段	9 段
	頁数		8 頁	6 頁
	購読料(1 ヶ月)		60 銭	60 銭
広告料 (1 行)	普通	50 銭、1 面金 70 銭	50 銭	
	特別	1 円	1 円	
1914 年	機械数		輪転印刷機：1 台 ロール印刷機：4 台	輪転印刷機：1 台 平盤印刷機：9 台
	活字種類		9 ポイント半	9 ポイント半
	字母設備		有	有

	写真版設備	有	有	
	ステレオ設備	有	有	
	紙面体裁	1行	16字詰	
		1段	106行	
		1頁	9段	
	頁数	8頁	6頁	
	購読料(1ヶ月)	80銭	60銭	
	広告料 (1行)	普通	50銭、1面75銭	
		特別	1円	
	公布式掲載		関東都督府公布式、大連民政署公布式	
1915年	機械数	輪転印刷機：1台 ロール印刷機：4台	輪転印刷機：1台 平盤16頁：2台	
	活字種類	9ポイント半	9ポイント半	
	字母設備	有	有	
	写真版設備	有	有	
	ステレオ設備	有	有	
	紙面体裁	1行	16字詰	16字詰
		1段	105行	106行
		1頁	9段	9段
	頁数	8頁	6頁	
	購読料(1ヶ月)	80銭	60銭	
	広告料 (1行)	普通	50銭、1面75銭	50銭
特別		1円	1円	
公布式掲載	大連市公布式	関東都督府公布式		
1916年	機械数	輪転印刷機：1台 ロール印刷機：4台	輪転印刷機：1台 平盤印刷機：2台	
	活字種類	9ポイント半	9ポイント半	
	字母設備	有	有	

	写真版設備	有	有	
	ステレオ設備	有	有	
	紙面体裁	1行	16字詰	
		1段	106行	
		1頁	9段	
	頁数	8頁	8頁	
	購読料(1ヶ月)	80銭	70銭	
	広告料 (1行)	普通	50銭、1面75銭	
		特別	1円	
	公布式掲載	大連市公布式	関東都督府公布式、登記広告	
1917年	機械数	輪転印刷機：1台 ロール印刷機：4台	輪転印刷機：1台 平盤印刷機：2台	
	活字種類	8ポイント半	9ポイント半	
	字母設備	有	有	
	写真版設備	有	有	
	ステレオ設備	有	有	
	紙面体裁	1行	15字詰	15字詰
		1段	120行	105行
		1頁	11段	10段
	頁数	8頁	6頁	
	購読料(1ヶ月)	1円	70銭	
広告料 (1行)	普通	50銭、1面75銭	50銭	
	特別	1円	1円	
公布式掲載	大連市公布式	関東都督府公布式、登記広告		
1918年	機械数	輪転印刷機：1台 ロール印刷機：4台	輪転印刷機：1台 平盤印刷機：2台	
	活字改正	1918年4月	1918年3月	
	活字種類	ルビ付7ポイント半	7ポイント半	

	字母設備	有	有
	写真版設備	有	有
	ステレオ設備	有	有
	紙面体裁	1行	15字詰
		1段	110行
		1頁	11段
	頁数	8頁	6頁
	購読料(1ヶ月)	1円	90銭
	広告料 (1行)	普通	50銭、1面75銭
		特別	1円
	公布式掲載	大連市公布式	関東都督府公布式、登記広告
1919年	機械数	輪転印刷機：1台 平盤印刷機：2台	輪転印刷機：1台 平盤印刷機：2台
	活字種類	7ポイント75	7ポイント半
	活字改正	1919年10月	1920年1月
	字母設備	有	有
	写真版設備	有	有
	ステレオ設備	有	有
	紙面体裁	1行	15字詰
		1段	135行
		1頁	12段
	頁数	8頁	8頁
	購読料(1ヶ月)	1円	1円
	広告料 (1行)	普通	65銭
		特別	1円30銭
	公布式掲載	大連市公布式、登記広告	関東庁公布式
1920年	機械数	輪転印刷機：1台 平盤印刷機：2台	輪転印刷機：1台 平盤印刷機：3台

活字種類		7ポイント75	7ポイント半
活字改正		1919年10月	1920年1月
字母設備		有	有
写真版設備		有	有
ステレオ設備		有	有
紙面体裁	1行	15字詰	15字詰
	1段	135行	135行
	1頁	12段	12段
頁数		8頁	8頁
購読料(1ヶ月)		1円30銭	1円30銭
広告料 (1行)	普通	65銭	85銭
	特別	1円30銭	1円70銭
公布式掲載		大連市公布式、登記広告	関東庁公布式

出典：日本電報通信社『新聞総覧』（明治43年版-大正5年版）（大空社復刻、1991年）、同（大正6年版-大正10年版）（大空社復刻、1992年）により筆者作成。

この表からわかるように、遼東新報社の購読料（1ヶ月）は1913年に60銭となったが、翌1914年から1916年にかけては80銭、1917年に1円となり、さらに1920年には1円30銭と達した。それに対して、1頁の段数は1913年に8段であったが、1914年には9段、1917年には11段となり、さらに1919年には12段に増加した。その背景には、第1次世界大戦による用紙不足の影響があったことも考えられるが、新聞社印刷設備への投資の増大や、印刷能力の強化なども行われたと考えられる。

また、表1-13に示すように、遼東新報社は1913年に輪転印刷機1台、ロール印刷機4台を保有したが、1919年には従来のロール印刷機4台を平盤印刷機2台へと更新した。印刷設備への投資にともない、遼東新報社の発行部数は1916年に15,045部、1919年に約2倍の29,240部と、著しく増加した（表1-6参照）。その発行部数は『満日』を凌駕していたことが明確である。

1919年11月1日に遼東新報社は満日社と同じく株金500,000円で株式会社に変更し、吉倉汪聖を社長、大来修治を副社長にした<sup>91</sup>（表1-14参照）。

表1-14 株式会社遼東新報社の収益状況（1921-1927）（単位：円）

	1921年 下半年	1922年 上半期	1922年 下半年	1923年 上半期	1924年 上半期	1924年 下半年	1925年 上半期	1925年 下半年	1926年 上半期	1926年 下半年	1927年 上半期

<sup>91</sup> 大来修治『記念誌：大連開業二十年連合祝賀会』遼東新報社、1924年、23頁。なお、遼東新報社が株式会社に変更した時期については、李相哲前掲書60-61頁は「1926年に『遼東新報』は全盛期を迎える。会社組織を……株式50万円の株式会社に変更した」と誤記。

株金	500,000	500,000	500,000	500,000	500,000	500,000	500,000	500,000	500,000	500,000	500,000
資本	524,266	530,718	530,532	529,511	524,073	526,710	525,917	523,321	531,623	531,314	523,299
当期益金	5,736	6,860	5,810	5,345	3,238	98	-3,709	1,222	-6,718	4,897	1,942
資産の内訳（一部）											
土地建物	150,970	150,970	150,970	150,970	150,970	150,970	150,970	150,970	150,970	150,970	150,970
機械器具	43,445	45,426	48,461	48,432	48,267	48,306	48,306	48,767	48,167	48,167	48,280

出典：1921年12月22日、1922年6月30日、同12月21日、1923年6月29日、1924年6月28日、同12月29日、1925年6月27日、同12月29日、1926年6月26日、1927年1月11日、同7月2日付『官報』。

1921年12月に大来が社長に就任した。それ以後、紙面の改革や、設備の充実などを図ることによって、社業の更なる発展を遂げていった。さらに、1923年1月、奉天で発行された『奉天日日新聞』を合併し、1924年8月から紙面頁数を12頁に拡大した（表1-13参照）。このように、『満日』創刊後の大連新聞界は『満日』と『遼東新報』によって二分されていた。

1920年5月、大連の実業家・小沢太兵衛（1880年-1939年）の出資を得た上で、弁護士・立川雲平は『大連新聞』を創刊した。当初、『遼東新報』と『満日』の頁数はともに朝刊8頁であった（表1-13参照）。しかし、両紙は『大連新聞』が夕刊紙として発行される計画であることを聞知し、それへの対抗策として、両紙とも朝刊8頁を朝夕刊各4頁に分割し、夕刊も発行するようになった<sup>92</sup>。

大連新聞社の組織は、編集部（社会部、外交部、経済部、政治部、学芸部）、広告部、販売部、工場などの部門により構成される（表1-15参照）。

表1-15 大連新聞社の人事構成

1922年	社長：立川雲平 専務取締役、副社長：栗木栄太郎 取締役：沢田賢太、松内亀太郎、木村好太郎、五泉賢三 監査役：中村檜次郎、新開貢 相談役：小沢太兵衛 主筆兼編輯長、経済部長：宝性確成 社会部長：長谷川良之助 外交部長：森宜次郎 政治部長：山口亀之助 学芸部長：中溝新一 営業部長：佐藤豊 工場監督：金林満茂 会計主任：天津幸一 広告主任：種吉寅蔵 庶務主任：河原信之助
-------	---

<sup>92</sup> 寶性確成「小沢さんと私」、小沢賢吉『小沢太兵衛伝記』小沢太兵衛顕彰会伝記編纂部、1942年、36-37頁。

1923 年	副社長：栗木栄太郎 取締役：立川雲平 沢田賢太 松内亀太郎 木村好太郎 寶性確成 和田敬三 石橋文三郎 監査役：中村檜次郎 新開貢 佐藤豊 相談役：小沢太兵衛 主筆兼編輯長：宝性確成 社会部長：山口可明 経済部長：大内四郎 外交部長：森宜次郎 政治部長兼学芸部長：長谷川良之助 工場監督：金林満茂 会計庶務主任：天津幸一 広告主任：種吉寅蔵
1924 年	取締役副社長：栗木栄太郎 事務取締役：宝性確成 取締役：立川雲平 澤田賢太 松内亀太郎 木村好太郎 和田敬三 石橋文三郎 監査役：中村檜次郎 佐藤豊 相談役：小沢太兵衛
1925 年	取締役社長：宝性確成 取締役副社長：栗木栄太郎 取締役：立川雲平 和田敬三 澤田賢太 松内亀太郎 木村好太郎 監査役：中村檜次郎 佐藤豊 相談役：小沢太兵衛 支配人兼営業部長：前川良三 編輯長：山口可明 工場長：金森満義
1926 年	取締役社長兼主筆：宝性確成 取締役副社長：栗木栄太郎 支配人兼営業部長：前川良三 取締役：立川雲平 和田敬三 澤田賢太 松内亀太郎 監査役：中村檜次郎 佐藤豊 相談役：小沢太兵衛 編輯長：山口可明 会計主任：橘清七 広告主任：（外勤）松田彌十郎、（内勤）兼子政光 販売主任：今崎九十郎 工場長：金森満義 植字長：関根義三 採字長：熊林徳蔵

出典：日本電報通信社『新聞総覧』（大正 11 年版-大正 14 年版）（大空社復刻、1993 年）、同（大正 15 年版）（大空社復刻、1993 年）により筆者作成。

『遼東新報』、『満日』と同じように、大連新聞社は東京、大阪のほか、營口、鞍山、遼陽、鉄嶺などの満鉄附属地における主要都市において支社・支局を設置した。

また、表 1-16 に示すように、各地に通信員を配置した。満鉄附属地のほかに、天津、京城にも通信員を配置していた。

表 1-16 大連新聞社の通信員構成（一部）

年度別	支社・支局所在地	氏名
1924 年	東京	松木七五郎
	大阪	瀬戸保太郎
	天津	桜井宇宙治
	京城	安武一雄
	奉天	進藤興吉
	長春	高橋勝治
	哈爾濱	竹内録之助
	安東	堀山宗逸
	営口	吉住鶴八
1925 年	東京	松木七五郎
	大阪	瀬戸保太郎
	奉天	進藤興吉
	旅順	高田透
	西部大連	河原信之助
	安東	堀山宗逸
	営口	吉住鶴八
	長春	高橋勝蔵
	公主嶺	大口靖太
	吉林	三橋政明
	本溪湖	福田醇介
	鞍山	佐藤新蔵
	開原	田下政正
	撫順	町野哲秀
	大石橋	戸田積苗
	瓦房店	有川徳太郎



	鉄嶺	藤野兵次郎
	四平街	清水久雄
	遼陽	杉木心一
	海城	森松平
	普蘭店	河本照
	熊岳城	杉本謙太郎
	天津	山西健吉
	京城	西村緑也
	哈爾濱	竹内録之助

出典：日本電報通信社『新聞総覧』（大正 11 年版-大正 14 年版）（大空社復刻、1993 年）より筆者作成。

創刊後の『大連新聞』も紙面編集のほか、各種の事業活動（付録 1-4 参照）を主催することによって新聞社の経営に努めた。それにともない、紙面編集・事業活動・通信販売などの面において、大連新聞界は『遼東新報』・『満日』・『大連新聞』の三紙鼎立の状態となった。

とはいえ、表 1-17 に示したように、1920 年に入ってから、遼東新報社は、印刷機などの設備、頁数、段数などの面において、『満日』、『大連新聞』を上回り、民間の代表的な新聞としての地位を確実なものとした。

表 1-17 大連・日本語新聞社の概況（1921 年-1927 年）

		遼東新報社	満洲日日新聞社	大連新聞社	
1921 年	機械数	輪転印刷機：2 台 平盤印刷機：2 台	輪転印刷機：1 台 平盤印刷機：3 台 モノタイプ：5 台	輪転印刷機：1 台 平盤印刷機：2 台	
	活字種類	7 ポイント 75	7 ポイント半	7 ポイント 75	
	活字改正	1920 年 5 月	1920 年 1 月	1921 年 2 月	
	字母設備	有	有	-	
	写真版設備	有	有	有	
	ステレオ設備	有	有	有	
	紙面体裁	1 行	15 字詰	15 字詰	15 字詰
		1 段	135 行	135 行	130 行
1 頁		12 段	12 段	12 段	
頁数	10 頁	8 頁	8 頁		

	購読料(1ヶ月)	金 1 円 30 銭	金 1 円 30 銭	金 30 銭	
	広告料 (1行)	普通	金 85 銭	金 85 銭	
		特別	金 1 円 70 銭、指定 金 2 円 50 銭	金 1 円 70 銭	
	公布式掲載	大連市公文 登記広告	関東庁公布式 大連市公文	登記公告	
1922 年	機械数	輪転印刷機：1 台 平盤印刷機：5 台	輪転印刷機：1 台 平盤印刷機：3 台 モノタイプ：5 台	輪転印刷機：1 台 平盤印刷機：2 台	
	活字種類	7 ポイント 75	7 ポイント半	7 ポイント 75	
	字母設備	有	有	-	
	写真版設備	有	有	有	
	ステレオ設備	有	有	有	
	紙面体 裁	1 行	15 字詰	15 字詰	15 字詰
		1 段	ルビなし 133 行	135 行	130 行
		1 頁	12 段	12 段	12 段
	頁数	10 頁	10 頁	8 頁	
	購読料(1ヶ月)	金 1 円 30 銭	金 1 円 30 銭	金 1 円	
	広告料 (1行)	普通	金 85 銭	金 85 銭	金 85 銭
特別		金 2 円 50 銭	金 1 円 70 銭	金 1 円 70 銭、指 定金 2 円 50 銭	
公布式掲載	-	関東庁公布式 大連市公文	登記公告		
1923 年	機械数	輪転印刷機：2 台 平盤印刷機：4 台 モノタイプ：1 台	輪転印刷機：1 台 平盤印刷機：1 台 モノタイプ：5 台	輪転印刷機：1 台 平盤印刷機：2 台	
	活字種類	7 ポイント 75	7 ポイント半	7 ポイント 75	
	活字改正	1920 年 5 月	1920 年 1 月	1921 年 2 月	
	字母設備	有	有	-	
	写真版設備	有	有	有	
	ステレオ設備	有	有	有	

	印刷業	-	兼営	-	
	紙面体裁	1行	15字詰	15字詰	
		1段	ルビなし135行	ルビなし135行	
		1頁	12段	10段	12段
	頁数		10頁	8頁	8頁
	購読料(1ヶ月)		金1円30銭	金1円30銭	金30銭
	広告料(1行)	普通	金85銭	金85銭	金85銭
		特別	金2円50銭	金1円50銭	金1円60銭、指定金2円55銭
	公布式掲載		-	関東庁公布式、大連市公文	登記公告
1924年	機械数	輪転印刷機：2台 平盤印刷機：4台 モノタイプ：1台 コピー機：4台 活字鑄造機：2台 鉛版鑄造機：2台 鉛版仕上機：2台 写真製版機：1台	輪転印刷機：1台 平盤印刷機：1台 モノタイプ：5台 コピー機：4台 活字鑄造機：4台 鉛版鑄造機：2台 鉛版仕上機：1台 写真製版機：3台	輪転印刷機：2台 平盤印刷機：2台 コピー機：2台 活字鑄造機：2台 鉛版鑄造機：2台 鉛版仕上機：2台 写真製版機：2台	
	活字種類		7ポイント75	7ポイント75	7ポイント75
	紙面体裁	1行	15字詰	15字詰	15字詰
		1段	135行	135行	130行
		1頁	12段	12段	12段
	頁数		12頁	8頁	8頁
	購読料(1ヶ月)		金1円30銭	金1円30銭	金1円20銭
	広告料(1行)	普通	金2円30銭、記事欄金1円50銭	金1円30銭	金1円30銭、雑報欄金2円60銭
		特別	場所指定1行10銭増	金2円60銭、	場所指定1行10銭増
	公布式掲載		大連市公文 登記広告	大連市公文 関東庁公布式 登記公告	登記公告

1925年	機械数	輪転印刷機：1台 平盤印刷機：4台 モノタイプ：1台 コピー機：4台 活字鑄造機：2台 鉛版鑄造機：2台 鉛版仕上機：2台 写真製版機：1台	輪転印刷機：1台 平盤印刷機：1台 モノタイプ：5台 コピー機：4台 活字鑄造機：4台 鉛版鑄造機：2台 鉛版仕上機：1台 写真製版機：3台	輪転印刷機：2台 平盤印刷機：2台 コピー機：2台 活字鑄造機：1台 鉛版鑄造機：2台 鉛版仕上機：2台 写真製版機：2台	
	活字種類	7ポイント75	7ポイント75	7ポイント75	
	字母設備	有	有	-	
	写真版設備	有	有	有	
	ステレオ設備	有	有	有	
	紙面体裁	1行	15字詰	15字詰	15字詰
		1段	135行	135行	130行
		1頁	12段	12段	12段
	頁数	10頁	8頁	8頁	
	購読料(1ヶ月)	金1円30銭	金1円30銭	金1円20銭	
	広告料 (1行)	普通	金85銭	金1円30銭	金1円30銭、雑報欄金2円60銭
特別		場所指定1行10銭増	金2円60銭	場所指定1行10銭増	
公布式掲載	大連市公文 登記公告	関東庁公布式 登記公告	登記公告		
1926年	機械数	輪転印刷機：2台 平盤印刷機：4台 モノタイプ：1台 コピー機：4台 活字鑄造機：2台 鉛版鑄造機：2台 写真製版機：1台 鉛版仕上機：2台	輪転印刷機：3台 平盤印刷機：18台 モノタイプ：5台 コピー機：4台 活字鑄造機：6台 鉛版鑄造機：2台 写真製版機：3台 凸版製版機：1台	輪転印刷機：1台 平盤印刷機：2台 コピー機：2台 活字鑄造機：1台 鉛版鑄造機：1台 写真製版機：2台 凸版製版機：1台	
	活字種類	7ポイント75	7ポイント75	7ポイント半	
	字母設備	有	有	-	
	写真版設備	有	有	有	
	ステレオ設備	有	有	有	

	紙面体裁	1 行	15 字詰	15 字詰	15 字詰
		1 段	135 行	135 行	130 行
		1 頁	12 段	12 段	12 段
	頁数		10 頁	8 頁	8 頁
	購読料(1 ヶ月)		金 1 円 30 銭	金 1 円 30 銭	金 1 円 20 銭
	広告料 (1 行)	普通	金 1 円 30 銭	金 1 円 30 銭	金 1 円 30 銭
		特別	金 2 円 50 銭、場所 指定 1 行 10 銭増	金 2 円 60 銭	場所指定 1 行 10 銭増
	公布式掲載		-	関東庁公布式	-
1927 年	機械数		-	輪転印刷機：4 台 平盤印刷機：20 台 モノタイプ：5 台 コピー機：4 台 活字鑄造機：6 台 鉛版鑄造機：3 台 写真製版機：3 台 凸版製版機：1 台	輪転印刷機：1 台 平盤印刷機：2 台 活字鑄造機：1 台 鉛版鑄造機：1 台 写真製版機：2 台 凸版製版機：1 台
	活字種類		-	7 ポイント 75	7 ポイント半
	字母設備		-	有	-
	写真版設備		-	有	有
	ステレオ設備		-	有	有
	紙面体裁	1 行	-	15 字詰	15 字詰
		1 段	-	140 行	130 行
		1 頁	-	12 段	12 段
	頁数		-	8 頁	8 頁
	購読料(1 ヶ月)		-	金 1 円 30 銭	金 1 円 20 銭
	広告料 (1 行)	普通	-	金 1 円 30 銭	金 1 円 30 銭
		特別	-	金 2 円 60 銭	場所指定 1 行 10 銭増
	公布式掲載		-	-	-

出典：日本電報通信社『新聞総覧』（大正 11 年版-大正 14 年版）（大空社復刻、1993 年）、  
同（大正 15 年版-昭和 3 年版）（大空社復刻、1993 年）により筆者作成。

ところが、昭和に入ってから満洲の政治環境は大きく変化した。民衆の立場を堅持し、不偏不党の編輯方針を貫こうとする『遼東新報』にはますます不利な状況が生じていた<sup>93</sup>。

1925年、満日社は哈爾濱、奉天、天津、北京、青島などにおいて支社支局の大拡張を行った結果、新聞の影響力がますます高まり、満洲に止まらず、中国各地及び朝鮮まで広がっていた。「『満洲日日』を見なければ満洲の話が出来ぬ」<sup>94</sup>という話もある。このように、『満日』においては発行部数や購読者の増加にともない、広告依頼も年々激増していった(表 1-10 参照)。

1927年7月、山本条太郎が満鉄社長に就任した。『遼東新報』は「満洲における新聞としては一大権威であり、一大威力であった」<sup>95</sup>。その結果、1927年10月末、『遼東新報』は『満日』に合併されることになった。合併について、大来修治は次のように回顧している。「昭和2年春、満鉄の首脳部が代って、山本条太郎総裁、松岡洋介副総裁となった。両者とも旧知の間であり、反満鉄の調子の新聞を続けることが心苦しくなった。同時に満日には山崎猛<sup>96</sup>社長が就任、山本、松岡両君の意向を汲んで小泉策太郎が幹旋役となって、満日、遼東両新聞合同という形で、遼東新報を満日に譲渡することになった。それが実行されたのは昭和2年10月24日、奇しくも22年前、遼東新報が生まれたその日であった」<sup>97</sup>。

『遼東新報』合併後の『満日』は1927年11月1日から紙名を『満洲日報』(以下『満日』と略す)に改題した。紙面の刷新、通信網の完備、販売政策の改善などの社内改革によって、合併後の翌年、確実に両紙の購読者を維持した<sup>98</sup>。

さらに、1935年8月7日には『満洲日報』と1920年5月5日創刊の『大連新聞』が合併し、再び創刊時と同じ名称の『満洲日日新聞』の紙名で発行されるようになった。以来、第二次世界大戦が終了する1945年9月まで発行された。

---

<sup>93</sup> 李相哲、前掲書、61頁。

<sup>94</sup> 日本電報通信社『新聞総覧』(昭和2年版)大空社復刻、1993年、543頁。

<sup>95</sup> 末木儀太郎、前掲文、6頁。

<sup>96</sup> 山崎猛は1886年茨城県生れ。第一高等学校を中退して代用教員となった。1910年京城日報社に入り、同社理事、文部大臣秘書官、司法大臣秘書官、水戸市長を歴任した。1920年に立憲政友会から衆議院選挙に出て当選し、戦後も含め通算10回当選した。1927年9月に満日社長として渡満し、同11月遼東新報社を合併して『満洲日日新聞』を『満洲日報』と改題した。

<sup>97</sup> 大来修治、前掲文、108頁。

<sup>98</sup> 日本電報通信社『新聞総覧』(昭和4年版)大空社復刻、1993年、525頁。

## 第2章 植民地統治経済手段としての「大連彩票」（1905年-1915年）

1905年11月、大連在住中国人中の有力者劉肇億<sup>99</sup>及び郭学純<sup>100</sup>は大連に宏済彩票局を創設し<sup>101</sup>、同年12月、第1回大連宏済彩票（以下「大連彩票」と略す）を発売した<sup>102</sup>。

当初は、関東州民政署との契約により、発行部数は1万枚、代価1万円であった。彩票局は、発売代価から代売人手料金を控除した残余の3分の1を民政署に納付し、3分の2を彩票局経費及び諸般の公共事業に支出することが定められていた<sup>103</sup>。このような条件下で、1908年4月には、宏済善堂<sup>104</sup>の事業を開始した。

第1回「大連彩票」開彩から1915年4月の彩票発行廃止に至るまで、総発行回数は167回、892万本、代価892万円である。その内、彩金、公納金、その他の必要な経費を差し引いた利益金は宏済善堂の経費及び地方事業のために支出された<sup>105</sup>。こうしたことから判断して、日本統治初期の大連で、「大連彩票」が大連の地域開発に多少なりとも役割を担ったことは否定できない。

しかし、従来の租借地大連あるいは近代中国東北地域に関する研究において、「大連彩票」を取り上げたものは殆どなく、「大連彩票」というものが存在していたという基本的事実すら知られていないように思われる。

実際には、1905年11月から1915年4月（「大連彩票」廃止）までの『満日』に目を通してみると、「大連彩票」を中心とする情報は、詳細かつ多岐にわたって掲載されていることが分かる。そこで本章においては、「大連彩票」に関する『満日』紙面報道を分析したうえで、「大連彩票」問題の実態を解明することを目指す。それにより、租借地都市大連社会における『満日』の機能、さらに日本の植民地統治の一側面

<sup>99</sup> 劉肇億（1851年-1936年）、大連の中国人商人。1904年に日本当局によって改組された大連公議会総理に就任。1907年には、医療・福利厚生経費の捻出を名目に宏済彩票局を創設して「彩票」を発行し、その利益で慈善施設である大連宏済善堂を開設。中国人の初等教育や大連初の漢語新聞である『泰東日報』の創刊にも尽力。1914年に大連公議会を引退した。（貴志俊彦ほか『20世紀満洲歴史事典』吉川弘文館、2012年、224-225頁）

<sup>100</sup> 郭学純（1876年-1922年）、大連華商公議会会長。大連の商人。1914年の大連公議会改選で総理（会長）に選出される。大連の中国人を対象とする教育、文化事業、慈善事業などに積極的に参与した。郭は日本側の妨害を受けながらも、大連華商公議会総理として関東庁に対して銀建維持の請願を行うと同時に、張作霖政権に対しても反対運動支援を求めるように請願した。金建一本化は、その結果1922年9月金銀併用に変更されることとなったが、郭は反対運動の過労により体調を崩し、1922年11月大連で病死した。（貴志俊彦ほか『20世紀満洲歴史事典』吉川弘文館、2012年、49頁）

<sup>101</sup> 伊藤武一郎『満洲十年史』満洲日日新聞社、1916年、509頁。

<sup>102</sup> 関東都督府官房文書課『関東都督府施政誌』関東都督府官房文書課、1919年、325頁。

<sup>103</sup> 後藤新平「大連彩票私見」、水沢市立後藤新平記念館編『後藤新平文書』、1908年、R-27（7-54）。

<sup>104</sup> 宏済善堂は関東都督府の認可を得て設立された中国人に対する唯一の救済機関であり、施療、育嬰、施棺、義葬、養老、救困等の事業を行うことを目的としていた。（井上謙三郎『大連市史』大連市役所、1936年、750-751頁。）

<sup>105</sup> 関東局『関東局施政三十年史』大連関東局、1936年、761頁。

を理解することが提供できると考えられる。

## 第1節『満日』に現われる「大連彩票」

### 1.1 「大連彩票」概況

日露戦争直後の1905年8月、関東州民政署は、大連在住中国人中の有力者劉肇億及び郭学純に、行政諸般の補助機関として大連公議会を組織させた。大連公議会には、在住中国人の貧困者に対する慈善救済事業を行うことが期待されていた。ところが、日露戦後という状況下で、経費不足だけでなく、各地方に孤児寡婦及び傷病者が多数存在していたことなどにより、事業はうまく進んでいなかった。そのため劉、郭等は、救済機関整備のため、利益を慈善事業の経費に充当することを目的として、彩票局を創立し、彩票発行を関東州民政署に出願した<sup>106</sup>。

日本の租借地となった大連はそもそも中国の領土であり、住民の大多数は中国人であった。中国各地では昔から彩票が発行されていた。関東州民政署は「富籤の発行を以て租借地振興の一策とし、支那多年因襲の嗜癖たる好賭心を節度し且つ経費填補の一財源に資する」<sup>107</sup>という理由で、陸軍、大蔵両省及び満洲軍総兵站監及び関東総督府と協議の上、1905年10月22日に劉、郭にいくつかの条件付で彩票の発行を特許した<sup>108</sup>。このような経緯の下で、同年12月には第1回「大連彩票」が発売された。

関東州民政署が彩票の発行にあたって定めた条文は以下のようなものである<sup>109</sup>。

- 一、彩票局ハ大連ニ設立シ宏済彩票局ト称ス
- 二、彩票ノ数ハ二万号（本）トシ每号十枚ニ分割ス
- 三、売価ハ銀一円
- 四、開彩ハ毎月二回
- 五、当籤票数及彩金
- 六、全部売切レサルトキハ其発売ノ号数ニ比例シ彩金額ヲ逡減ス
- 七、代売人ニハ手数料トシテ売価ノ百分ノ三ヲ与フ
- 八、彩票局所得即発売代価ノ十分ノ二ニ相当スル額ヨリ前項代売人手数料ヲ控除シタル残余ノ三分ノ一ヲ民政署ニ納付シ其残余中彩票局経費ヲ控除シタル利益金ヲ以テ大連ノ振興並ニ公共事業ニ充ツ
- 九、得彩者ハ得彩金ノ百分ノ三ヲ当該代売人ニ報酬スル義務ヲ負フ
- 十、授受ノ貨幣ハ軍票トス

上記の条文にあるように、彩票発行当初の計画は、票数は2万本、売価は1本銀1円、彩金（当籤金）は頭彩（1等賞）5千円から8等賞2円までとし、月2回発行するとされていた。月5000-9000余円の利益金を得られた<sup>110</sup>。売行きが漸次良好になるに従って、1906年6月、10月に臨時特別彩票<sup>111</sup>の発行が許可されたが、いずれも売行き

<sup>106</sup> 井上謙三郎、前掲書、第750-751頁。前掲「大連彩票私見」参照。

<sup>107</sup> 津上善七「大連彩票復活論」1916年3月11日付『満日』。

<sup>108</sup> 関東局、前掲書、761頁。伊藤武一郎、前掲書、509頁。前掲「大連彩票私見」。

<sup>109</sup> 前掲「大連彩票私見」。

<sup>110</sup> 郭鉄庄・関捷『日本植民統治大連四十年史』（下）社会科学文献出版社、2008年、1991頁。

<sup>111</sup> 1906年6月に、1万号、1号4円、頭彩1万円以下総彩金3万4千円とし、同年10月、1万5千号、1号4円、頭彩2万円以下総彩金5万1千円とした。



不良であった。彩票局は前後 8 千余円の損失を蒙ったため、臨時発行は廃止され、通常発行のみに限定された<sup>112</sup>。

表 2-1 当籤票数及彩金変化表

	1905 年 12 月		1907 年 7 月		1908 年 7 月	
	当籤票数 (2 万本の内)	彩金 (銀 )	当籤票数 (4 万本の内)	彩金 (金 )	当籤票数 (6 万本の内)	彩金 (金)
頭彩	1 本	5,000 円	1 本	10,000 円	1 本	10,000 円
2 彩	1 本	2,000 円	1 本	5,000 円	2 本	5,000 円
3 彩	1 本	1,000 円	1 本	1,000 円	3 本	1,000 円
4 彩	20 本	100 円	4 本	300 円	8 本	300 円
5 彩	50 本	40 円	10 本	100 円	24 本	100 円
6 彩	100 本	10 円	50 本	30 円	80 本	30 円
7 彩	330 本	5 円	100 本	10 円	120 本	10 円
8 彩	500 本	2 円	500 本	5 円	700 本	5 円
備考	1905 年 12 月第 1 回：清暦月 2 回発行、売価 1 銀 1907 年 5 月から：月 1 回清暦 20 日発行、同年 7 月から：売価 1 金に変更 1913 年以降：清暦月 2 回 15 日毎に発行、売価 1 金					

出典：後藤新平「大連彩票私見」（水沢市立後藤新平記念館編『後藤新平文書』水沢市立後藤新平記念館、1908。マイクロ版は雄松堂作成発売、R-27 (7-54) ）、『満日』に基づき筆者作成。

また、発行票数と発行回数は徐々に増加し、表 2-1 に示したように、1907 年 7 月 12 日からは、1 回の票数を 2 万本から 4 万本に増やし、月 1 回から月 20 日毎の開彩とした。尚、地方通貨の変遷にともなって彩金は総て金建てに改定された。

1908 年 7 月第 35 回開彩から票数は従来の 4 万本から 6 万本となり、2 彩（2 等賞）以下の当籤数も増やすことに改定された。さらに、1913 年から 1915 年最終の開彩日までは、毎月 2 回 15 日毎に発行された。

また、関東州民政署が定めた条文中の第八条は、「大連彩票」の収益の配分については、発売代価から代売人手数料、公納金、其他の経費などを控除した残余を利益金として大連の地方事業のために支出するとしている。

表 2-2 第 1 回-第 29 回までの収支表

収入総額	金 58823 円 10 銭 5 厘	
内訳	50667 円 74 銭	第 29 次迄ノ利益金
	2922 円	貸付金利子

<sup>112</sup> 前掲「大連彩票私見」。

	5233 円 36 銭 5 厘	第 29 次迄ノ彩票請求私権ニ属スル額
支出総額	金 21618 円 10 銭	
内訳	11124 円 53 銭	善堂建築費及附属備品費
	490 円	公学堂生徒寄宿舍寄附
	331 円 11 銭	日語伝習所費
	951 円 30 銭	1906、1907 年中書慈善事業ニ投資額
	2499 円 26 銭	第 1 次特別彩票損失金補充
	5771 円 90 銭	第 2 次同上
	450 円	彩票局員賞与金
差引	金 37205 円 5 厘	積立金

出典：後藤新平「大連彩票私見」、水沢私立後藤新平記念館編『後藤新平文書』水沢市立後藤新平記念館、1908 年。マイクロ版は雄松堂作成発売、R-27 (7-54) より作成。

『関東都督府統計書・明治 41 年版』によれば、彩票局から都督府に入った納付金は明治 38 年度（1905 年）4764 円、39 年度（1906 年）13103 円、40 年度（1907 年）31241 円、41 年度（1908 年）73768 円とされている<sup>113</sup>。42 年度以降発行された『関東都督府統計書』には、彩票納付金についての記録が残されていない。その収入を隠したのではないと思われる。

また、彩票局はその収益金の 3 万円を基金として宏済善堂設立の計画を立て、1907 年に 2 万 7 千円を投じて建物を建設し、1908 年 4 月から、宏済善堂の事業を開始した。事業内容は、慈善事業であり、主として寡婦、孤児に対する援助、養老、貧困者救済、身寄りのない者の葬儀、棺桶の施し、阿片吸引者に対する治療などを行った。他に公学堂内の日本語伝習所や、小崗子公議所経営の病院も附属病院として継承した<sup>114</sup>。

表 2-2 に示したように、第 1 回から第 29 回までの収入総額は 5 万 8 千余円である。内 1 万余円は善堂の建築費として使用され、3 万 7 千円余円は善堂の基本金として積み立てられた。外に公学堂に 490 円、同公学堂内の日語伝習所に 331 余円、他の慈善事業にも 951 余円を寄付した。その事業は 1915 年 4 月彩票局廃止まで順調に進んでいる。関東州に於ける唯一の中国人経営の中国人慈善救済機関として、当時の大連地域の慈善事業に大きな役割を果たした。

また、収益の増加にともない、彩票局は公共慈善事業の外、出雲大社分祠に 1 万円を寄付し、大連で発行された中国語新聞『泰東日報』にも毎回 300 円を補助した<sup>115</sup>。日本統治初期において、「大連彩票」は大連の地域開発に多少なりとも役割を担ったことは否定できない。

<sup>113</sup> 関東都督府都督官房文書課『関東都督府統計書』（第 3 明治 41 年）、1909 年、322 頁。

<sup>114</sup> 井上謙三郎、前掲書、750-751 頁。

<sup>115</sup> 「彩票局の現状」1910 年 6 月 29 日付『満日』。

## 1.2 新聞紙面に見られる「大連彩票」の実態

『満日』は「大連彩票」について、「当籤番号の掲載」、「紙面企画」、「読者投書」、「新聞記事」などに、詳細かつ多岐にわたって掲載している。以下では国内の新聞やアジア歴史資料センターの史料などを参照しながら、「大連彩票」の実態を浮き彫りにする。

### 1.2.1 「当籤番号表」から見た「大連彩票」の販売

『満日』創刊後、「大連彩票」の当籤番号表は毎回開彩日の翌日の紙面に掲載されている（図 2-1 参照）。一般には、頭彩から 7 彩までの当籤番号が掲載されていた。

図 2-1 「当籤番号の掲載」例

1908 年 8 月 17 日付『満日』

そもそも富籤である彩票は一種の賭博あるいは射幸心を煽る行為であり、日本国内では刑法の賭博罪で禁止されていた。法的に日本内地の延長上にあつた関東州においても、日本人による富籤発売、購買授受することは犯罪とされていた<sup>116</sup>。とはいえ、関東都督府は「彩票ノ発行及ヒソノ授受カ刑法上罪トナルコトハ之ヲ認ムルモ実害ナキノミナラス寧ロ国家事業ノ一部ヲ助成スル便宜ノ方法ナル」<sup>117</sup>という理由で、関東州内における彩票の発行や購買を黙認した。

彩票の日本内地への郵送もしくは携行を防ぐため、関東都督府は「大連彩票」の販売に厳しい監督を加えた。「大連彩票」の販売は大連を中心に、満鉄沿線、哈爾濱、山海関、芝罘及び朝鮮の仁川、京城、釜山など 180 余所に代売所を設置し、さらに、一地方における販売枚数及び一人当たりの購買数を制限した<sup>118</sup>。

表 2-3 「毎回当籤者所在地分布表」 (第 26 次-第 167 次)

開彩日	開彩回数	当籤者所在地
1907 年 12 月 24 日	大連宏済彩票第 26 回開彩	頭彩 旅順、二彩 大連、三彩 奉天
1908 年 4 月 20 日	大連宏済彩票第 30 回開彩	頭彩 大連
1908 年 5 月 10 日	大連宏済彩票第 31 回開彩	頭彩 瓦房店、二彩 大連

<sup>116</sup> 「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C06092155000、明治 42 年 公文備考 卷 13 文書 4 止(防衛省防衛研究所)」「関東州ニ於ケル彩票ニ関スルノ件」明治 42 年 4 月 10 日 (第 7-8 画像目)。

<sup>117</sup> 前掲「関東州ニ於ケル彩票ニ関スルノ件」、第 10-11 画像目。

<sup>118</sup> 関東局、前掲書、762 頁。

1908年6月18日	大連宏濟彩票第33回開彩	頭彩 大連、三彩 大連
1908年7月27日	大連宏濟彩票第35回開彩	頭彩 大連、二彩 大連 普蘭店
1908年8月16日	大連宏濟彩票第36回開彩	頭彩 小崗子、二彩 奉天 旅順、三彩 大連 大連 奉天
1908年11月3日	大連宏濟彩票第40回開彩	頭彩 遼陽、二彩 大連 大連、三彩 大連 大連 大連
1909年2月10日	大連宏濟彩票第45回開彩	頭彩 遼陽、二彩 大連、三彩 大連
1909年3月1日	大連宏濟彩票第46回開彩	頭彩 千金寨、二彩 旅順 奉天、三彩 仁川 釜山
1909年3月21日	大連宏濟彩票第47回開彩	頭彩 海城、二彩 大連 大連、三彩 大連 鉄嶺 長春
1909年4月11日	大連宏濟彩票第48次開彩	頭彩 大連、二彩 大連 長春、三彩 哈爾濱 大連 大連
1909年4月30日	大連宏濟彩票第49回開彩	頭彩 大連、二彩 大連 鉄嶺、三彩 奉天 營口 大連
1909年5月19日	大連宏濟彩票第50回開彩	頭彩 大連、二彩 大連 大連、三彩 奉天 大連 旅順
1909年6月8日	大連宏濟彩票第51回開彩	頭彩 大連、二彩 旅順 柳樹屯、三彩 旅順 大連 營口
1909年6月27日	大連宏濟彩票第52回開彩	頭彩 奉天、二彩 奉天 旅順
1909年7月16日	大連宏濟彩票第53回開彩	頭彩 營口、二彩 大連 大連、三彩 旅順 瓦房店 大連
1909年8月5日	大連宏濟彩票第54回開彩	頭彩 仁川、二彩 大連 柳樹屯
1909年8月26日	大連宏濟彩票第55回開彩	頭彩 大連、二彩 大連 金州、三彩 大連 長春 奉天
1909年9月13日	大連宏濟彩票第56回開彩	頭彩 小崗子、二彩 大連 大連、三彩 大連 大連 大連
1909年10月3日	大連宏濟彩票第57回開彩	頭彩 大連、二彩 仁川 小崗子、三彩 大連 大連 大連
1909年10月23日	大連宏濟彩票第58回開彩	頭彩 千金寨、二彩 旅順 大連、三彩 大連 金州 大連
1909年11月12日	大連宏濟彩票第59回開彩	頭彩 大連、二彩 旅順 大連、三彩 仁川 旅順 新民府
1909年12月3日	大連宏濟彩票第60回開彩	頭彩 金州、二彩 大連 營口、三彩 大連 大連 大連
1909年12月23日	大連宏濟彩票第61次開彩	頭彩 仁川、二彩 大連 奉天、三彩 金州 大連 長春
1910年1月30日	大連宏濟彩票第63次開彩	頭彩 大連、二彩 小崗子 大連、三彩 貔子窩 旅順 奉天
1910年3月1日	大連宏濟彩票第64次開彩	頭彩 大連、二彩 大連 旅順、三彩 奉天 大連 旅順
1910年3月20日	大連宏濟彩票第65次開彩	頭彩 長春、二彩 鉄嶺 大連、三彩 大連 瓦房店 安東県
1910年4月9日	大連宏濟彩票第66次開彩	頭彩 大連、二彩 大連 大連、三彩 哈爾濱 大連 大連
1910年4月30日	大連宏濟彩票第67次開彩	頭彩 旅順、二彩、遼陽 長春、三彩 鉄嶺 鉄嶺 營口
1910年5月19日	大連宏濟彩票第68次開彩	頭彩 奉天、二彩 旅順 大連、三彩 大連 大連 大連
1910年6月6日	大連宏濟彩票第69次開彩	頭彩 大連、二彩 營口 小崗子、三彩 大連 瓦房店 大連
1910年6月26日	大連宏濟彩票第70次開彩	頭彩 仁川、二彩 奉天、大連、三彩 大連、長春
1910年7月15日	大連宏濟彩票第71次開彩	頭彩 仁川、二彩 大連、哈爾濱、三彩 大連、大連、大連
1910年8月4日	大連宏濟彩票第72次開彩	頭彩 大連、二彩 大連、大連、三彩 金州、營口、大連

1910年9月24日	大連宏濟彩票第73次開彩	頭彩 遼陽、二彩 大連、大連、三彩 天津、旅順、大連
1910年10月2日	大連宏濟彩票第74次開彩	頭彩 遼陽、二彩 小崗子、平壤、三彩 營口、大連、仁川
1910年10月22日	大連宏濟彩票第76次開彩	頭彩 奉天、二彩 大連 大連、三彩 奉天 遼陽 濟南府
1910年11月30日	大連宏濟彩票第78次開彩	頭彩 大連、二彩 遼陽、(.....)、三彩 遼陽、大連、金州
1911年1月26日	大連宏濟彩票第81次開彩	頭彩 旅順、二彩 大連、大連、三彩 遼陽、大連、安東縣
1911年4月8日	大連宏濟彩票第84次開彩	頭彩 大連、二彩 大連、大連、三彩 新民屯、哈爾濱、奉天
1911年6月6日	大連宏濟彩票第87次開彩	頭彩 遼陽、二彩 大連、千金寨、三彩 安東縣、旅順、大連
1911年9月12日	大連宏濟彩票第92次開彩	頭彩 大連、二彩 大連、大連、三彩 昌圖、千金寨、遼陽
1911年10月1日	大連宏濟彩票第93次開彩	頭彩 遼陽、二彩 大連、鉄嶺、三彩 旅順、遼陽、安東縣
1912年1月8日	大連宏濟彩票第98次開彩	頭彩 千金寨、二彩 大連、大連、三彩 金州、大連、大連
1912年1月28日	大連宏濟彩票第99次開彩	頭彩 大連、二彩 鉄嶺、鉄嶺、三彩 大連、遼陽、長春
1912年2月27日	大連宏濟彩票第100次開彩	頭彩 大連、二彩 千金寨、金州、三彩 安東縣、大連、大連
1912年8月2日	大連宏濟彩票第108次開彩	頭彩 大連、二彩 芝罘、大連、三彩 大連、大連、大連
1912年8月22日	大連宏濟彩票第109次開彩	頭彩 營口、二彩 鉄嶺、奉天、三彩 鉄嶺、遼陽、大連
1913年12月16日	大連宏濟彩票第136次開彩	頭彩 營口 二彩 長春、大連、三彩、大連、奉天、千金寨
1913年12月30日	大連宏濟彩票第137次開彩	頭彩 安東縣、二彩 大連、貔子窩、三彩 長春、奉天、芝罘
1914年1月30日	大連宏濟彩票第139次開彩	頭彩 大連、二彩 營口、營口、三彩 遼陽、大連、千金寨
1914年3月16日	大連宏濟彩票第142次開彩	頭彩 奉天、二彩 大連、奉天、三彩 奉天、奉天、安東縣
1914年4月15日	大連宏濟彩票第144次開彩	頭彩 奉天、二彩 奉天、鉄嶺、三彩 大連、大連、大連
1915年2月16日	大連宏濟彩票第164次開彩	頭彩 遼陽、二彩 奉天、長春、三彩 遼陽、撫順、大連
1915年3月1日	大連宏濟彩票第165次開彩	頭彩 大連、二彩 長春、小崗子、三彩 大連、大連、奉天
1915年3月16日	大連宏濟彩票第166次開彩	頭彩 大連、二彩 大石橋、長春、三彩 大連、大連、旅順

1915年4月1日	大連宏済彩票第167次開彩	頭彩 大連、二彩 千金寨、營口、三彩 鉄嶺、遼陽、旅順
-----------	---------------	-----------------------------

表注：『満日』により筆者作成。（『満日』マイクロ版の欠号が多いため、確認できない開催日がある。）

表 2-3 が示すように、当籤者は大連にほぼ集中しているものの、大連だけでなく、奉天、營口、遼陽等の満鉄附属地、朝鮮にも及んでいたことが分かる。これによって前述した満洲全体及び朝鮮にも行き渡っていたことが確認できる。

また、販売代価の面では、大連は第 1 位を占め、旅順、鉄嶺、奉天、營口、遼陽、安東がそれに次ぐ地位を占めている<sup>119</sup>。

### 1.2.2 新聞に描かれた開彩光景

そもそも関東都督府は「彩票ノ発行ニ関シテハ我官憲ハ帳簿等ヲ検査スルノ機能ヲ有スルノミナラス其ノ開票ノ際ニハ係官ヲシテ臨檢セシメ嚴重ナル取締ヲ行ヒツトアリ然レトモ之ニ関シ当局官憲ニ於ケ何等法令ヲ発シタルニ非サルハ勿論発行ノ条件等モ該出願書ニ記載シタルニ止マリ一般公衆ニハ全ク知ラレサルモノナリ故ニ関東都督府ノ位地ヨリ[言]ヘハ単ニ従来ノ因襲ヲ認メ出願書ニ記載シタル条件ニ基キ之ヲ監督スルト同時ニ其納付金ヲ徴収シ居ルモノナリ」と明記し<sup>120</sup>、「大連彩票」に厳しい監督を加えたことが『満日』で確認できる。

「大連彩票」の開彩（開票）光景は、『満日』に頻繁に掲載されている。以下一例を挙げる。

（前略）其会場なる近江町支那劇場へかけつけたのに十六日の午前九時過ぎ、■ふ彩票党は押し寄せてきた。土間■水を撒いたやうに静まり返って、読みあげる番号に耳を澄まして居る（中略）抽籤台の側まで行つて見ると、五つ程丸い穴の開けた青塗りの四角の箱から、腕に紺金巾の腕ぬきをした日本人が細かく巻いた籤をつまみ出す、その左には赤塗りの小さい箱がある、それにも穴が一つあつて、支那の子供が同じ、赤い腕ぬきでつまみ出し八彩とか七彩とか読み上げる。（中略）其後には彩票局の書記が十人筆を取つて其番号を書きつける、其両側には警官が三人、憲兵が一人、民政署の属官が一人椅子にかかつて、厳めしく控へて居た、その隙にも開く籤の数は進むで、読み上げるものの声が一段高くなつた。と三彩の番号と二度読み上げる、此の時片唾を飲むでいたらしい見物は、色めき立つて、懐から帳面を出して見るのもある、買ひ込むである彩票を引張り出すのもあつて、口々になにか呟いていたのは、何れも失望の世迷言であつたらう（中略）正午に間もなく頃頭彩と■■■高く読み上げた、待ち

受けた見物は一斉に耳を立てて其読むを聞き、更らに張り出されたのに引較べて、愈々望みなしとあきらめられた頃は、廣い劇場に失望の色が充ちて、（中略）午後零時三十分この彩票開きは無事に終つたのである（中略）終わりに劇場内の人いきれで暑つ苦しいなかに汗みつくで詰かけて居た彩票党に御愁傷様を申上げておく。（やぶ生）

<sup>119</sup> 前掲「大連彩票復活論」。

<sup>120</sup> 前掲「関東州ニ於ケル彩票ニ関スルノ件」、第 7-8 画像目。

<sup>121</sup> 「彩票開き 待ち設けた開彩 彩票党の大失望」1908年8月18日付『満日』。

これは1908年8月16日第36回「大連彩票」開彩の光景である。下線を付した部分からは、「大連彩票」開彩会場は大連近江町大観茶園という支那劇場で都督府の吏員立会の下で執行され、参観席は目の色を変えた人達で満員であった現場情景が明らかになるだけでなく、そこでの生々しい人間模様が浮かび上がってくる。

『満日』はこれらの人々を「彩票党」と名付け、もちろんこれには日本人も中国人も含まれている。前述の引用文にもあるように、中国人の購入者の姿も頻繁に新聞紙面に現れている。しかし、詳しく見れば分かるように、『満日』には「早朝よりひしひしと詰めかけた彩票党を以て埋まり彩票熱は蕤の臭気と言わんより寧ろ苦力の臭気ともいふべき悪臭に混じて蒸しかへる……」<sup>122</sup>、「汚い面を重ね、口あんぐりと舞台を眺めてゐる下級支那人」、「中に目立って注意されたのは直ぐ舞台近くの臭い支那人……」<sup>123</sup>など、「不潔・臭い・貧乏・貪慾」な中国人像が描かれている。

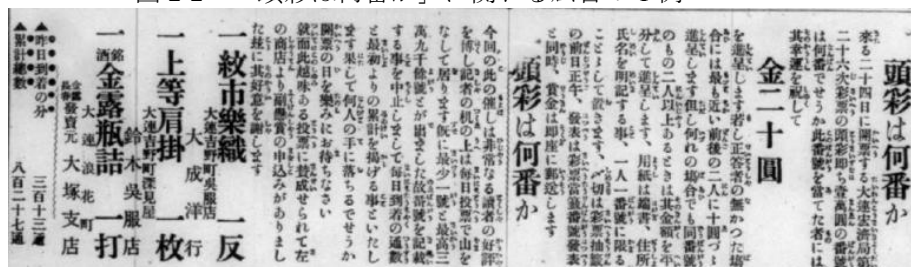
### 1.2.3 「紙面企画」から見た「大連彩票」の注目度

1907年12月15日から『満日』には次のような社告が連日にわたって掲載されている。

来る（十二月）二十四日に開票する大連宏済局第二十六回彩票の頭彩即ち一万円の番号は何番でせうか此の番号を当てた者に賞金金二十円を進呈します若し正答者のなかった場合には最も近い前後の二人に十円づゝ進呈します但し何れの場合でも同番号のもの二人以上あるときは其金額を平分して進呈します、用紙は端書、一人一番号に限ることとして置きます、締切は彩票抽籤の前日正午、発表は彩票当籤番号発表と同時に、賞金は即座に郵送します<sup>124</sup>（引用文中の括弧と下線は筆者による）。

これは「大連彩票」に関わる企画であった。『満日』は開催時間や方式、賞金などの情報を連日にわたって伝え、また、開催初日からの投票累計総数及び最少と最大の番号を紙面に掲載した。そして、「今回の此の催しは非常なる読者の好評を博し、記者の机の上は毎日投票で山をなしております」<sup>125</sup>などと、投票の状況を紹介している。また、この企画に協賛した市内の各商店からの賞品も、紙面で紹介された（図2-2）。協賛した商店の住所や寄贈物品の内容も記されている。

図2-2 「頭彩は何番か」に関わる広告の1例



1907年12月19日付『満日』

<sup>122</sup> 「第37回彩票抽籤結果」1908年9月6日付『満日』。

<sup>123</sup> 「空中楼阁消失る 大連宏済彩票最終日」1915年4月3日付『満日』。

<sup>124</sup> 「予想投票 頭彩は何番か」1907年12月15日付『満日』。

<sup>125</sup> 「頭彩は何番か」1907年12月19日付『満日』。



最終的な「予想投票」の結果は、図 2-3 に示した通りであり、大連を主として各地から投票された票数は 1 万余通、そのうち有効票の総数は、8,276 通であった。第 26 次「大連彩票」頭彩の「予想番号投票」は、大変な人気を博したため、満日社は次のような社告を発表し、第 27 次彩票当籤番号の「予想番号投票」も行うこととした。

図 2-3 「予想投票」結果



1907 年 12 月 26 日付『満日』

前回即ち第二十六次大連宏済局頭彩の予想番号投票はその数実に一万余、非常の成績を以て終了いたしました。満目荒涼たる満洲の冬季に於いて所謂慰藉の尠い読者に対し更に多大の趣味を与ふべく本社はその趣向に思ひを凝らして居りますが爾来調査と研究に時日を経て漸く数種の新案を得たのであります、而して尚多少研究を重ねべき点がありますから之を他日に譲りまして旧臘来各地方から頭彩予想投票の再開始を促し来たりその葉書のみにて既に百余通に達して居りまして本社は諸君の希望を拒絶するの勇なく即ち諸君の為に従ひ又々予想投票を行ふ事といたしました而し頭彩は前回に行ひましたから今回はその次の貳彩 (2 等賞) の番号即ち五千円の当り籤に対し広くその、予想投票を募集します.....<sup>126</sup>

#### 1.2.4 読者投書に現れた「大連彩票」

さて、大連在住の人々が、大連彩票に対して如何なる反応を示していたのか、以下簡単に考察してみよう。

『満日』は創刊当初から読者の声を反映する場として「東西南北」欄を設け、日本橋、岩代町、磐城町、逢阪町、松公園、大棧橋など、日本人が多く暮らす地域に投書箱を設置した。その趣旨は「広く諸君の気焔を蒐むる事としたり何の種類に拘らず、見たり聞いたり為た事を投書され度し」<sup>127</sup>ということであった。

『満日』の「東西南北」欄を見ると、幅広い階層の読者がさまざまな投書を行っていたことが分かる。時に、「大連彩票」に関わる内容が掲載されることもあった (表 2-5 参照)。

表 2-5 「東西南北」欄における「大連彩票」関係投書内容の例

番号	日付	内容

<sup>126</sup> 「予想投票 第 27 次彩票 第貳彩は何番か」 1908 年 1 月 2 日付『満日』。

<sup>127</sup> 「投書箱設置」 1908 年 8 月 2 日付『満日』。



1	1907年11月27日	賭博をやると手が後ろへ廻る恐れがあるが彩票なら大つ平にやれるので我もっと買ひ込む、彩票を買って置くと当たっても当らなくてもふたを開けるまでが楽しみで仕事をするにも励みが付くそうだ。(聞いた生)
2	1907年12月12日	大連彩票内地人より依頼を受け万一当籤し内地人直接買次者の名義を以て受取るとすれば有罪となるや且つ又大連彩票買次送付しても有罪となるや大連居住の人士に問ふ。(一商人)
3	1907年12月30日	諸君正月になったら札びら切って騒ぎ玉へ彩票が当たったら埋合せをしてやるよ。(福助)
4	1908年1月2日	一金十円也右は今回貴社御催しの彩票予想投票に当籤の賞金として御贈與に預かり本日旅順支局の手を経て正に拝受致候に付御礼申上候敬具。明治四十年十二月二十七日(旅順延命芳太郎)
5	1908年1月3日	私は初夢に一万円の彩票が当たった夢を見ましたから早速一枚買ひました当たったら、東西南北の御連中にお振舞をいたします。(好運生)
6	1908年1月4日	貴紙五面の予告にある花あやめと題するものゝ内容は如何なる性質のものぞこれを言ひ当てたものは彩票が当るよ。(福助)
7	1908年1月11日	彩票は無論銀の相場でせうが手数料は当彩に付何程ですか又代理店の手数料など御存じなら教へてよ。(梅香)
8	1908年1月11日	大連彩票の様に貴社の紙上に湖北彩票の当籤番号全部を御掲載くださる事は叶はずや御伺日申上候。(彩票狂人)
9	1908年1月24日	大連宏済彩票は日本人には取次販売法規上できませんか差し支えなくば手続御承知の方はご教示を乞。(一万円)
10	1908年1月26日	貴社の御手数を煩わし彩票熱狂者の為め第一次より当月迄の頭彩二彩三彩の番号及び当籤地を紙上に掲載して諸人の参考に供せられたし。(統計学者)
11	1908年2月5日	一万円の彩票が当たったら早速女房を探しに内地へ帰る。(独身者)
12	1908年2月27日	諸君一万円の彩票が当たったら如何するかね、僕は差し詰め欧州漫遊の途に上る諸君の御考えを聞きたいものだ。(米公)
13	1908年2月29日	彩票僅かに三日で売り切れになったには驚く。(よか坊)
14	1908年3月7日	今度の彩票は必ずと又大連在住の人にあたるよ。(天眼通)
15	1908年3月26日	己は彩票を二十枚買ったがみんな五彩以上に当りさうだから一枚五円づつなら賣るよ、但し頭彩に当たったら己に半分呉れなくちやいけない。(買切人)
16	1908年4月10日	彩票が当たったら払って遣る。

17	1908年5月13日	彩票は一部一円なるに当地に於いての売捌代価は一円二十銭実には奇怪千万ならずや他に売捌店なきに乘じ利を貪る事斯の如きは怒する能わざるの悪行と云ふべし。(彩票狂の一人)
----	------------	--

出典：『満日』により筆者作成。

表 2-5 に示したように、『満日』は「大連彩票」に関わる投書を数多く掲載した。それらの投書の内容は主に (1) 彩票に関する問い合わせ (表 2-5 の第 8、9 番を参照)、(2) 彩票に関わるメッセージ (表 2-5 の第 11、17 番を参照)、(3) 当籤者からのメッセージ (表 2-5 の第 4 番を参照) の 3 種類に分けられる。

また、投書の内容に加えて、「彩票狂人」、「一万円」、「彩票狂の一人」などの署名からみれば、「大連彩票」への注目度や期待度が、非常に高いというイメージが与えられるであろう。

しかし、自由に投書することは可能であっても、その採用は、新聞社が社説との関係でバランスをとりながら決定する場合が多かった。言い換えれば、読者の意見を新聞社にとって望ましい方向へ導くためには、それらの投書は新聞社によって選択的に扱われたものあるいはやらせであり、新聞社の姿勢が表されたものであったと考えられる。

この意味で、『満日』は「大連彩票」に関わる投書を数多く公開し、彩票の発展に適した世論環境を作るための一翼を担ったことは確かである。

## 第 2 節 「大連彩票」廃止への途

このような中、「大連彩票」の売行きは大きく伸びていった。それに従い、上述したように、彩票の利益による同市の慈善事業も順調に進んだ。しかしながら、彩票の人気の高まるとともに、人々の賭博的射幸的欲望は、大連及び満鉄附属地に在住する中国人・日本人に留まらず、内地日本人にまで広がった。

1909 年 4 月、大連民政署は彩票の買占や、内地への携行に対して厳しい監督を加えた。当時の『満日』には、「.....昨今は内地への輸出増加し大連在住の人々に伝手を求めて直接密に購入するものゝ頓に増加したる.....毎回当地在住者と連絡を通じて数百票の買占めを行ひて密輸し来たり 1 票 1 円のものを 1 円 20 銭乃至 1 円 50 銭位に売り付け暴利をむさぼりつつあるものあり.....」<sup>128</sup>といった内容が掲載されているほか、「大連彩票」を買うために渡来する者もあり、「旅館に宿泊して開彩の日を待ち多くを勝ち得ればそれを受け取って直ちに帰国する程の当彩金を得ざれば再び次の彩票を買い入れて.....」<sup>129</sup>などと、彩票の買占や内地への密輸、また販売価格の高騰や風紀上の問題もしばしば掲載されている。

また、関東都督府は「大連彩票」を「発行並ニ一般ノ購買ハ之ヲ従来ノ通り黙認シ唯海軍部内限リニ於テ特ニ訓示ヲ発シテ之カ取次又ハ購買ヲ為サシメサル様取締リ」<sup>130</sup>と、「海軍軍人(陸軍軍人モ同断)ニ付テハ海軍刑法第五条ニ於テモ刑法ソノ他ノ法令ハ外国ニ於テ犯シタル場合ニモ内地ニ於テ犯シタルト同様之ヲ罰スルトトナレルヲ以テ海軍軍人彩票ヲ購買スルト云ハ三万円以下ノ罰金又ハ科料ニ認ムコト法律上疑

<sup>128</sup> 「彩票の密輸出」1910年2月13日付『満日』。

<sup>129</sup> 同上。

<sup>130</sup> 前掲「関東州ニ於ケル彩票ニ関スルノ件」、第 12 画像目。

ナキ所ナリ」<sup>131</sup>と軍人の彩票購買を厳重に禁止することを明記した。ところが、軍人の彩票購買事件が時々起ってきた。たとえば、1909年11月には、独立守備第6大隊第2中隊歩兵特務曹長飯友次郎は常当番卒の後備歩兵1等卒武田孫一の名義で、「大連彩票」（第59回）を購入し、頭彩当籤現金を受領したことが告発された。その結果、飯友は停職処分を受けた<sup>132</sup>。

このように、「経済填補の一財源」として発行されていた「大連彩票」が、様々な社会問題を生み出したことも事実である。

一方、彩票は賭博行為として大清律例では禁止された。しかし、清末においては、不平等条約の締結による賠償金、及び賠償金を返済するための外債は、清朝政府に大きな負担を与えた。清政府は財政補填の名目で彩票の発行を認めた。各地で「救済」の名目を掲げ、相次いで彩票を発行した。清政府は彩票を抑えようとしたが強制力はなかった。この状況は1909年まで続いた。1909年11月から広東省、江蘇省、浙江省では彩票禁止運動が展開され始めた<sup>133</sup>。この影響を受け、中国各地でも相次いで彩票禁止運動が展開された。1910年になって清政府民政部は彩票を禁止する命令を発した。中国各地で発行されていた各種の彩票が相次いで発行禁止となった。また、朝鮮でも彩票輸入が禁止された。これらの禁令が大連及び満鉄附属地にも影響を与え、「大連彩票」の票数は従来の6万本から4万本まで減少し、それにともなって、収益も多少の影響を受けた<sup>134</sup>。

清政府の禁令によって、満鉄附属地でも中国人に彩票の代売を禁じたが、禁じられなかった日本人を全て代売者にすることで、各地の日本人経営の雑貨店、薬屋などが副業として販売するようになった。このため、各附属地においては「大連彩票」が依然として販売され続け、これに対して、清国各地官憲は相次いで当地における「大連彩票」の発売禁止を日本領事館に要求した<sup>135</sup>。

1914年、関東都督府は「州内諸般の秩序漸く整え最早斯くの如き事業の存在を必要とせざるに至れる為」<sup>136</sup>という理由で「大連彩票」の発行を翌年4月1日限りで廃止することを決定した。これに対して、満鉄沿線地方における彩票代売業者は彩票継続について縷々陳情したが<sup>137</sup>、「大連彩票」は、開始以来10年を経て、1915年4月1日の開彩を最終として廃止された。

以上の内容から分かるように、彩票廃止の理由は、彩票自身の問題点、清政府の禁令、関東州内諸般の風紀など、いくつか挙げられる。しかし、その真相を、元『満日』記者の津上善七（蒼洋）は「大連彩票」廃止翌年の1916年3月11日『満日』発刊3000号記念号に掲載した「大連彩票復活論」で触れている。津上は彩票廃止の真相は「支那政府の抗議にありて存じ、我政府は支那の要求を容れて対支外交上の裨補に資せんと欲せし知見に出でしことは蔽ふべからざる事実なり」としている。それが事実であるかは確認できないが、主な理由の可能性が高いと考えられる。

1905年12月の第1回「大連彩票」開彩から、彩票の発行廃止に至るまで、発行回

<sup>131</sup> 同上、第9-10画像目。

<sup>132</sup> 「JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C06084905700、明治43年乾「貳大日記2月」（防衛省防衛研究所）」「軍人富籤買収の件」明治43年1月7日。

<sup>133</sup> 関傑「論清末彩票」『近代史研究』中国社会科学院近代史研究所、2000年、40-52頁参照。

<sup>134</sup> 「彩票禁止と影響」1910年6月29日付『満日』。

<sup>135</sup> 「彩票継続運動」1915年2月19日付『満日』。

<sup>136</sup> 前掲「大連彩票復活論」。

<sup>137</sup> 前掲「彩票継続運動」

数は 167 回、892 万本、代価 892 万円である。その内、彩金として支払ったのは 7,134,408 円、公納金は金 613,400 余円である。その他の必要な経費を差し引いた利益金は宏済善堂の経費及び教育、衛生、廟社の保存など地方公共事業に支出されたが、その総額は 49 万余円に及んでいる<sup>138</sup>。日本統治初期において、彩票の利益金は大連地域の開発に多少なりとも役割を担ったことは否定できない。

1914 年 12 月関東都督府は、関東州のアヘン製造及び販売に対する個人特許制度を廃止した。アヘンの販売特許を宏済善堂のみに指定し、都督府の直接管理の下で、善堂に戒煙部を設け、アヘンの輸入及び販売を行った。さらに、その収益から宏済善堂の運営を控除した残りが、関東州地方費として関東州の金庫に納められた<sup>139</sup>。それが関東州の中央財政と地方財政の安定化に重要な役割を果たした。

こうした経緯を見れば、彩票収入に代わって、アヘン収益が関東州地域の一財源となったことは、「大連彩票」が廃止されたもう一つの理由ではないかと考えられる。

### 第 3 節「大連彩票」に関わる『満日』の立場

以上、『満日』の記事によって、「大連彩票」の販売、開彩の様子及び彩票への注目度など、「大連彩票」を概観した。

言うまでもなく、富籤である彩票は一種の賭博あるいは射幸心を煽る行為であり、日本では「天保の改革によって、富籤は一切禁止せられたが、民間ではやはり密に富興行にも等しいことが行なわれていた様である」<sup>140</sup>。1868 年 12 月太政官は「富興行之儀ハ兼而御禁制ニ有之処、近年諸国ニ於テ金銭融通ヲ名トシ、或ハ社寺再建等ニ興行致候向モ有之趣、元来僥倖之弊風僥倖之利ヲ以テ民心ヲ誘惑スルヨリ、自然農工商共其職業ヲ惰リ往々之カ為ニ家庭ヲ破リ候者不少哉ニ相聞エ以之外之事ニ候、斯御一新之折柄右様之所業殊ニ御趣意ニ相戻リ候儀ニ付更ニ嚴禁被仰出候事」<sup>141</sup>と布告し、富籤は厳禁された。さらに、1882 年の刑法施行により、各地に残っていた種々の富籤は日本から消滅した。その富籤が再び登場したのは日本統治下の台湾であった。

1906 年 6 月、台湾総督府は「資金の島外流出を抑止する」ことと「公共事業設備に必要な費用を獲得する」などという名目を掲げて、同年 10 月 18 日第 1 回「台湾彩票」を発売した。彩票売出しの結果は予想以上の好成績であったが、「台湾彩票」が引き起こした人々の射幸心は、台湾在住の台湾人・内地人または対岸の清国人に留まらず、内地日本人にも波及した。

当時の『朝日新聞』や『読売新聞』などによると、1906 年末から 1907 年の初め頃にかけて、日本国内で「台湾彩票」の売買が始まったことが確認できる。例えば、1907 年 2 月第 2 回「台湾彩票」の当籤者は、頭彩は大阪、二彩は東京、三彩は神戸の在住者であった<sup>142</sup>。続いて、第 3 回の頭彩が再び大阪在住者に当たった<sup>143</sup>。

前述したように、日本の刑法により日本国内での富籤（彩票）発売、購買授受は犯

<sup>138</sup> 関東局、前掲書、762 頁。

<sup>139</sup> 塚瀬進、前掲書、178 頁。

<sup>140</sup> 藤木高三『富籤の話』今日の問題社、1940 年、194 頁。

<sup>141</sup> 松阪市編纂委員会編著『松阪市史』（第 11 巻 史料編 近世 1 政治）蒼人社、1982 年、367 頁。

<sup>142</sup> 「第二回台湾彩票当籤者」1907 年 2 月 6 日付『朝日新聞』。

<sup>143</sup> 「台湾彩票当籤者の失敗」1907 年 3 月 15 日付『朝日新聞』、「五万円の台湾彩票大阪人に当る（盗み出しの訴訟とりどりの大騒ぎ）」1907 年 3 月 15 日付『読売新聞』。

罪とされている。ところが、実際には「台湾彩票」の頭彩が3回のうち2回まで大阪在住者に当たっていたことになる。この事実は直ちに検事局の注目を引いた。調査の結果について、「大阪府第四部にては台湾彩票を密に売買する者あるを旧冬より着目し其第一着として昨八日堂島米穀取引所附近に於て神戸市兵庫塚本通四丁目の相場師三木啓次（四十八）が密売し居るを認めて之を引致し彩票五十一枚を押収したり当府下に彩票に関係ある者一千人もある見込み……」<sup>144</sup>と、『朝日新聞』は報道した。「台湾彩票」売買者であった三木啓次は大阪区裁判所に起訴され、1907年2月19日執行猶予付きの重禁錮1か月と罰金5円の判決を受けた<sup>145</sup>。

この事件をきっかけとして、1907年2月20日から大阪で第2回彩票検挙が行われた。続いて、同年3月から東京地方裁判所でも大阪と同じような検挙が行われた<sup>146</sup>。このようにして、台湾彩票大検挙は当時の一大事件となった<sup>147</sup>。そのため、1907年3月20日に台湾総督府は、一時中止を発表し、「台湾彩票」はわずか5回で中止された。

「大連彩票」は官営の「台湾彩票」と異なって、「租借地振興の一策」<sup>148</sup>として中国人によって発行されたものである。とはいえ、彩票のような富籤は、人々の射幸心を煽り、勤労によって財産を得る美風を損い、結果として社会風俗に悪影響を及ぼすおそれがあるものとして、一般には認識されていたようである。そのため、彩票で得た利益も日本国内の世論においては非難される傾向があった。例えば、1906年6月台湾での彩票発行を発表した際には、『朝日新聞』は「（前略）吾人は富籤興行に反対なり。内地に於て反対なる以上、他の領土内に於ても亦反対なるが、聞く所によれば、我関東民政庁にては本年1月より大連の清国人公議所役員連の合資に成る彼の宏済局の彩票（富籤）興行を許可したり。吾人はかたゞ政府の不用意を非とせざるを得ず。しかも既に関東民政庁に於ては之を許可したる末、台湾総督府は定めて興行に至る可き歟。就ては当籤有効期限の規定にても嚴重にするを注文す。是れ猶已には優る可きなり。兎も角も余計なる事を始むる人々かな。何の役に立つ事にや」<sup>149</sup>と、「大連彩票」や「台湾彩票」の発行に否定的な立場を強調した。また、台湾彩票中止の際にも、『朝日新聞』は「（前略）或は土地の振合の為とか、或は自ら之を行はざれば他に利益を占めらるゝとかの理由の下に、台湾富籤を興行するは、罪深き業なり」<sup>150</sup>と、彩票に対する否定的な立場を改めて表明した。そして、「台湾彩票」の中止をきっかけに、「大連彩票」の存廃についての論議も提起された。

この点について、『満日』は1908年1月10日「大連彩票問題」という論説を掲載した。

<sup>144</sup> 「台湾富籤大検挙（大阪）、1907年2月10日付『朝日新聞』。

<sup>145</sup> 「彩票売買者入監（大阪）」1907年3月9日付『朝日新聞』。

<sup>146</sup> 「市内彩票大検挙始まる」1907年3月11日付『朝日新聞』。

<sup>147</sup> 「第二回彩票検挙（大阪）」『朝日新聞』、1907年2月21日、「市内彩票大検挙の状況」『朝日新聞』、1907年3月13日、「市内彩票検挙談」『朝日新聞』、1907年3月14日、「昨日の大捜索（彩票検挙の為め）」『朝日新聞』、1907年3月15日、「陸軍部内の捜索（大検挙起らん）」『朝日新聞』、1907年3月15日参照。

<sup>148</sup> 前掲「大連彩票復活論」。

<sup>149</sup> 「台湾の富籤案」1906年6月11日付『朝日新聞』。

<sup>150</sup> 「台湾富籤の流毒」1907年3月14日付『朝日新聞』。

(前略) 台湾の彩票が愈々廃止の止むなきに至るあらば、吾が大連宏済局の彩票は東洋唯一のものとなるべく(中略)、第一、都督府たるもの今一層其監督を厳にして独占事業に対する報償の途を明らかにせしめんことを望まざるを得ず(中略)。然れども、日本人の購買を妨ぐべからず若しくは妨げ難きものなりとせば、之が売捌上の利益を支那人のみに占めしむるは、賢なる方針と謂ふべからず、寧ろ場所と員数とを制限して、日本人にも売捌くを許可するの優れるに如かざるにはあらざるか。

我等は道学者流が徒に射幸を排斥するの迂に左袒する能わず、彩票の発行、特に新開地に於ける発行は、適当なる方針の下に之を経営するに於いては、寧ろ其開発に資するもの少なきに非ざるを知る、唯憂ふる所は経営の方針にあるのみ。(三東)

即ち、「台湾彩票」中止をきっかけとして、「大連彩票」は日本領土内唯一の射幸機関となった。そして、都督府が厳しい監督を加え、適当な経営方針を取れば、彩票の発行、特に新開地における発行は、新領地の開発に資するものであることを主張した。これが、『満日』の「大連彩票」に対してとった基本的な論調であったと言える。

また、「大連彩票」第100次開彩に際して、『満日』は次のような論説を掲載している。

大連宏済局の発行に係る彩票は一昨日二月二十七日の開票にて回を重ねること百に至り過般道路説を為す者あり彩票発行は百回を以て終了とすべしと然れども是好事者の捏造にして彩票は従来如く今後も発行せらるべく発行以来何等の弊害を認めざるを以て吾人も亦依然継続を希望する者なり。

彩票発行に反対する論者は(中略)一応有理の議論なる如きも場所と情状とを察せざる偏見と謂わざるべからず。(中略)彩票の利害得失に就いては世論紛々たり(中略)孰れも一理なきにあらざれども本州の如く射幸心に富める支那人十中八九を占むる地方に在りては假令彩票の売買を禁止するも到底其効あらざるべし寧ろ之を官許して一は彩票富籤買入の爲め他に流出すべき資金を防止し一は移民の招来方法として土地繁栄の資に供し一は彩票発行者の利益を割いて其の幾分を公共慈善の費用に投ずる事、事宜を得たるものと謂ふべし(中略)一派の論者中今日の如く特許主義公許主義に依らずして独逸其の他の如く之を官業とし官府之を發行すべしと説く者なきにあらざるも官府の彩票発行は従来我国の歴史にこれなき所にして.....此の点よりするも宜行に適せず況や租借地にして種々の支障あるに於いてをや吾人は現状維持を以て最も適当なりと信ずるものなり<sup>151</sup>。(下線筆者)

下線を付した部分から分かるように、『満日』は「資金流出を防止する」、「移民招来方法として土地繁栄に資する」、「公共慈善費用を獲得する」などの理由を強調して、「大連彩票」が「租借地の発展に資するものであることを承認する」との立場を改めて表明した。つまり、新聞紙面で「彩票の継続発行を希望する」という世論を喚起しようとする『満日』の姿勢が見られる。

続いて、1915年4月1日「大連彩票」の最終日に際して、『満日』は大きく紙面を割いて「空中楼阁消え失う一大連宏済彩票最終日の光景」という記事を掲載した。

賭事の好きな支那人は勿論在満邦人にも一種の魅力を以て猛烈にその射幸心をそよつてゐた大連宏済彩票は、開始以来年を経る事十年、回を重ねる事百六七次にし

<sup>151</sup> 「論説 彩票に就いて」1912年2月29日付『満日』。

て、愈々四月一日の開彩を最終として永久に廃止された。永い十年の間を在満幾多の人間に、毎回一擲万金の空中楼阁を幻想せしめてゐた誘惑の翼かゞろき此の魔物も、茲に全く其『底強い魅力』を封じられて終わったのだ。（中略）果敢ない空中楼阁を終に実現し得ない失望の結果発狂したり自殺したりした者さえあつたではないか。かくてこの恐るべき誘惑の魅力をも有する彩票の存廢が在満邦人の健全なる発展に如何なる影響を及ぼすであらうか。満洲に志を得ず事業の成功に絶望し不愉快な生活に苦しい努力と闘ひながらも尚万一の僥倖を夢想し、一縷の希望を賭けて此の彩票に繋いで踏み止まり、魔物の魅力に引きづられてゐた、意志の弱い、非植地的な一部の在留邦人等が、其の果敢ない希望さへ全く失消して終わった今後を果たしてどう動くであらうか？（下線筆者）

以上の内容から分かるように、『満日』は、「大連彩票」を在満邦人の精神的支柱とし、彩票存廢にともない、在満邦人の精神的支柱も失われていくことは疑いないと強調した。また、前述したように、『満日』は「大連彩票」を移民招来の方法と見なしている。この意味で、『満日』は「大連彩票」の廃止が今後の満洲経営に多少とも影響を及ぼすことは否定できないことを強調していた。言い換えれば、『満日』は「大連彩票」の廃止に反対の立場に立っていたことが分かる。

また、津上善七は「大連彩票復活論」で、もし対中外交関係という理由で「大連彩票」を停止した場合には、「我が政府は（中略）何物を獲ざりしのみならず、狡猾なる支那政府は大連彩票の廃止を好機とし一面支那の窮迫せる財政を救ふの目的を以て北京新華貯蓄銀行をして貯蓄票なる名称の下に頗る大袈裟の彩票を發行せしめたり。我が政府の愚を及ぶ可からざるものなり」<sup>152</sup>と「大連彩票」を廃止することを批判した。津上は、「大連彩票」の廃止は「支那政府に一杯食わされしは否定すべからざるなり」ことを強調している。

続いて、彩票の利害について、津上は「大連の如き新開の植民地に彩票の發行は最も適合したる一種の良政策なり」と強調し、「民衆に一種の慰安を与える」、「刑事政策上必要なり」、「彩票は経費填補の財源なり」という面から彩票の利点を強調した。最後に、津上は「吾人は茲に大連彩票復活論一篇を草して関東都督府に献策し外務当局者の反省を促すと同時に在満邦人の注意を惹かんとす」<sup>153</sup>と「大連彩票」の再開を呼びかけた。

以上、「大連彩票」に関わる『満日』の論説をいくつか取り上げたが、『満日』は、創刊当初から彩票廃止にかけての時期は、終始して大連彩票は植民地経営の一種の良政策として發行すべきものであり、彩票の廃止を反対する、という立場に立っていた。

このような立場に立ったからこそ、『満日』は「大連彩票」に関わる記事を詳細かつ多岐にわたって紙上に掲載し、「大連彩票」の発展に良好な世論環境を構築する一役を担ったことを確認できるだろう。

## 小結

本章では、『満日』の紙面記事によって、大連で發行されていた「大連彩票」の發展経過を検討した。また、「大連彩票」の実態を明らかにすることで、それに関わる『満日』の立場を解明し、さらには大連における『満日』の性格を明らかにした。

<sup>152</sup> 前掲「大連彩票復活論」。

<sup>153</sup> 同上。

当時、大連には「大連彩票」のほか、「安東県彩票」、「湖北彩票」、「安徽彩票」などが普及していたが、日本人のなかでの人気という点では、「大連彩票」に及ぶものはなかった<sup>154</sup>。「大連彩票」の人気の背景には、人間の金銭慾に絡むものも垣間見られるが、その過程における『満日』の世論誘導も一要因であったと考えられる。

前述した通り、「大連彩票」は本質的には一種の賭博であり、かつ射幸心をあおる行為であった。当時日本国内の刑法でも、関東州においても、日本人による富籤発売、購買授受は犯罪とされている。したがって、大連振興策の一つとして、関東州内における彩票の発行や購買を黙認した関東民政署の姿勢は批判されるべきものであったと言わざるを得ない。「大連彩票」は植民地統治を支える装置として機能したものであるともいえる。

一方、『満日』は、大連彩票の廃止について、関東都督府の意図に反する立場に立ったことが明白であった。既述したとおり、当時の大連新聞界において、『満日』と『遼東新報』は競合関係にあった。『満日』の紙面に、当籤番号の掲載、紙面企画、読者投書、新聞記事など、「大連彩票」に関する内容が詳細かつ多岐にわたって掲載された目的の一つは、多くの庶民大衆に対し、彩票購入を勧めた上で、新聞の知名度を高め、新規読者の獲得を狙ったのである。また、「大連彩票」の販売は全満洲及び朝鮮にも及んでいた点からは「大連彩票」の高い人気さがわかる。これらの点を総合的に考えれば、『満日』が「大連彩票」の廃止に反対するのは、読者の嗜好に合わせるや読者獲得などの報道機関としての新聞社の本来的な娯乐的・商業的要素があったことが推察できる。さらに、「投書欄」の設置、「予想投票」の企画などの側面から見れば、『満日』の「大衆新聞」としての性格が現れている。

---

<sup>154</sup> 石田龍蔵『世相百態 明治秘話』日本書院、1927年、40頁。



### 第3章 体育奨励の一方策としての「関東州野球大会」（1910-1920年代）

明治初期に日本に導入された野球は、「身体ノ強健、発達ヲ趣旨トス。之ニヨリテ、精神ヲ緻密機敏ニシ、勇氣、忍耐、不屈及び共同一致ノ精神ヲ修養シ世ニ処シテ事ヲ決行スルトキノ準備トナスモノ」<sup>155</sup>とされた。こうした精神修養を旨とする野球は、明治期に広く日本で行われた。大正時代に入ると、「一層子供たちの野球熱は高まり、小学校の校庭が野球場となり、休み時間に行われるばかりか、小学校単位のチームが編成されるようになった」<sup>156</sup>という状況が示すように、野球熱は幅広い層に広がりを見せた。

有山輝雄が指摘するように、日本において「野球大会」というイベントは、朝日新聞社と毎日新聞社という二つの新聞社の主催事業として始まったものである。また、それは野球の母国であるアメリカではあまり見られない日本独特の現象と位置づけられている<sup>157</sup>。その過程において、新聞社が決定的な役割を果たしたと言えよう<sup>158</sup>。

そして、外地で暮らしている日本人が増加したことにともない、日本本土における野球熱は植民地台湾・朝鮮・満洲にも及んだ。

本章では、1910-1920年代において満日社が主催した「関東州野球大会」をはじめとする一連の野球大会に着目し、その開催に至った背景、開催実態を明らかにした上で、満洲における野球の受容と展開過程において満日社がいかなる役割を果たしたか、これらの野球大会が大連の社会及び大連の野球界にいかなる影響を与えたかについて検討したい。

#### 第1節 大連野球の始まり

満洲で最初に野球の試合が行われたのは1908年に遡る<sup>159</sup>。満鉄が人材を養成するために、1907年9月に満鉄見習夜学校（のち満鉄育成学校）を満鉄本社内に開校した<sup>160</sup>。この学校には野球部が設けられ、若葉会と称された。この若葉会が満洲野球界の先駆者である。1908年に満鉄若葉会は発会式を兼ねて野球大会（満鉄社員対若葉会）を挙行した。大会は当時の満鉄理事・若葉会長沼田政二郎の始球式により開始され、それが大連、ひいては満洲における野球大会の濫觴となった<sup>161</sup>（図3-1参照）。

次いで、1909年9月5-6日に、アメリカの東洋艦隊が大連港に碇泊した際に、アメリカ軍艦の乗組員チームと満鉄若葉会チームの試合が行われた。これが満洲野球界における最初の対外国人の試合である<sup>162</sup>。

<sup>155</sup> 田島龍夫『野球使用』愛知県立第一中学校校友会、1905年、20頁。

<sup>156</sup> （財）全日本軟式野球連盟50年史編集委員会『財団法人全日本軟式野球連盟50年史』（財）全日本軟式野球連盟、1995年、3頁。

<sup>157</sup> 有山輝雄『甲子園野球と日本人—メディアのつくったイベント』吉川弘文館、1997年、8頁。

<sup>158</sup> 有山輝雄「全国優勝野球大会の形成と新聞—メディアがつくった野球」津金澤聰廣ほか『近代日本のメディア・イベント』同文館、1996年、61頁。

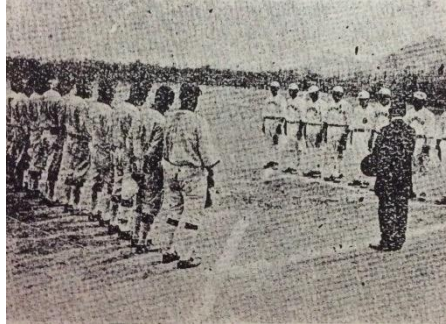
<sup>159</sup> 貴志俊彦ほか『二十世紀満洲歴史事典』吉川弘文館、2012年、218頁。

<sup>160</sup> 秦源治『わが国球界をリードした大連野球界』20世紀大連会議、2009年、9頁

<sup>161</sup> OPQ「満洲野球界の回顧」『満蒙』第5巻、第47冊(6月号)、1924年、165頁。

<sup>162</sup> 同上。

図 3-1 若葉会発会式を兼ねた野球大会における始球式



出典：OPQ「満洲野球界の回顧」『満蒙』第5巻、第47冊（6月号）、1924年、165頁。

これをきっかけとして、大連での野球は次第に盛んになっていった。1910年に旅順工科学堂（のちの旅順工科大学）に野球部が設けられ、靈陽団と呼ばれた<sup>163</sup>。以来、靈陽団チームと若葉会チームは数年間に亘って何回も野球試合を開催した。その過程において、若葉会は次第に満洲野球界の覇権を握るようになった。

次いで1913年に、大連実業界の会社・商店から選手を出して混成された大連実業団（以下実業と略す）、また同年に満鉄及び関連会社の社員を主体とした大連満洲倶楽部（以下満俱と略す）が相次いで誕生したことにより、1913年6月22日、実業と満俱の間で野球対抗戦—実満戦が行われることになった<sup>164</sup>。他には、埠頭倶楽部、沙河口工場軍、電気作業所など各チームの台頭にもない、1911年-1914年の大連は「野球界の群雄割拠時代とも云ふべき」<sup>165</sup>現象を呈したのである。

また、大連だけでなく、満鉄沿線各地においても野球勃興の気運が生まれた。1915年9月には、第1回「満洲野球大会」が奉天で開催され、長春チームが優勝しているが、以後毎年開催されるようになった<sup>166</sup>。

ただし、上述した満洲での野球熱は野球界に限定され、まだ世間に注目されてはいない。「当時の野球界に油を注ぎ肥料を施したともいふべきは満洲日日新聞社であった。同社は当時の趨勢に鑑み、1916年に第1回「関東州野球大会」を主催して多大の氣勢を添へた」<sup>167</sup>のである。

## 第2節 第1回「関東州野球大会」の開催

1916年に満日社が主催する第1回「関東州野球大会」が開かれた。この大会を発案したのは満日社会部にいた山口源二であった。それについては次のような逸話がある。

山口は当時の村田誠治副社長に野球大会開催を請願したが、許可されなかった。その理由の一つは、野球は単なる遊戯であり、世人がそれを「侮蔑し切つてゐたので又

<sup>163</sup> 前掲「満洲野球界の回顧」、166頁。

<sup>164</sup> 秦源治、前掲書、11頁。

<sup>165</sup> 前掲「満洲野球界の回顧」、167頁。

<sup>166</sup> 入江克己「日本近代における植民地体育政策の研究(第1報)—満洲における体育政策の成立過程」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』35(2)、鳥取大学、1993年、405頁。

<sup>167</sup> 前掲「満洲野球界の回顧」、168頁。

此の外に大連市の一般がさうした企ては実行されさうもないと云つてもゐた」<sup>168</sup>。それにもかかわらず、山口は「副社長の態度が煮え切らぬのでそれから一生懸命各方面に対して熱心に勧説を試み、（中略）大部賛成同意者も多く」<sup>169</sup>なった。また、営業部石橋文三郎による裏面からの斡旋の甲斐もあって、ようやく村田副社長の許可を得ることができた。その結果、経費や、優勝チームに贈るカップ、大会挙行の日取などを決定した上で<sup>170</sup>、1916年5月5日付『満日』に正式に第1回「関東州野球大会」開催の社告が発表されたのである。

#### 社告 「満洲野球大会 本社主催の壮挙」

近時野球の隆盛は我が国に於ても漸く国技の一として認められるゝの域に達し其の競技に対する準備乃至場所選定の簡単無雑作なる割に競技の理智的複雑にして高尚なる而も競技者が身体の運動と頭脳の働きとを運用する事に於ての興味と之を見る観衆を熱狂さしむる点に於て野球は寧ろ相撲を圧倒するの氣勢を示し来り我が満洲に於ても昨年長春軍の大連遠征に次で奉天における大会以来其の面白味を解せざりし者にも新たなる興味を感へしめ為めに本年の満洲野球界は一層の熱狂を以て各チームの試合を期待され各選手も又非常の意気込を以て練習しつゝありて、本春も既に大会の機熟せるを見る依つて本社は剛健なる運動の奨励を目的とし大連は勿論沿線主なる野球団に檄して其の参加を慫慂し近く争覇的第一回満洲野球大会を主催せむるとす<sup>171</sup>。

この引用文が示す通り、第1回関東州野球大会の目的は「剛健なる運動の奨励」であった。ところが、「我社は大陸運動界の発達と、協力一致、植民政策、満蒙経営の大業を翼賛する青年子弟の元気を鼓舞すべく、それを信条、目的として第一回関東州野球大会の壮挙を行ふべく発表した」<sup>172</sup>という記事からは、満日社が主催したこの野球大会は、単に体育向上を図るのみならず、野球試合を通じて、満洲在住の青年たちの協力一致の精神、団体意識を涵養することにより、満蒙経営の後継者を育成する企図も窺えよう。

もう一つ注目すべきことは、社告の見出しに「満洲野球大会」と記している点である。それについて、満鉄社員であった猪子一到は次のように回顧している。「満日の山口（源二）君が＜満日主催満洲野球大会＞と新聞に書いた。所が前にも書いたように＜満洲野球大会＞というのは、小日山氏等の主唱で毎年奉天で開くことになっている。それを満日が同じ名称でやるのは混同して甚だ怪しからんじゃないかと選手や野球関係者一同が大いにいきまいた。山口君は少なからず閉口していたが一筆を案じて＜関東州だけなら良からう＞と提案した。」<sup>173</sup>このようにして、「関東州野球大会」が生まれたのである。

大会の開催日、会場、参加チームは以下の通りである。

<sup>168</sup> 「第一回関東州野球大会挙行及び我社内部の事情」1920年12月12日付『満日』。

<sup>169</sup> 同上。

<sup>170</sup> 同上。

<sup>171</sup> 「満洲野球大会 本社主催の壮挙」1916年5月5日付『満日』。

<sup>172</sup> 前掲「第一回関東州野球大会挙行及び我社内部の事情」。

<sup>173</sup> 猪子一到「第二回球界の覇者となるまで」『協和』1933年4月15号、満鉄社員会、（復刻版）龍溪書舎、1983年、34頁。

開催日：6月4日、6月11日

始球式：満日社長村田誠治

場所：大連西公園グラウンド

参加チーム

埠頭倶楽部、旅順工科学堂、南満工業学校、実業団、大連駅、満鉄本社

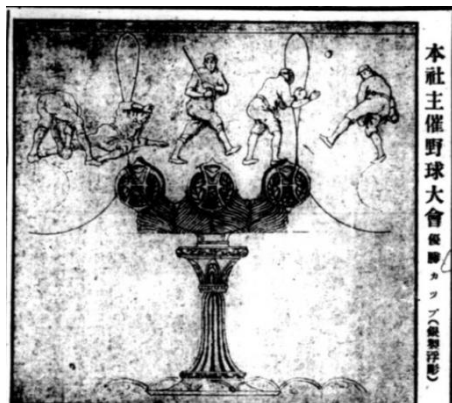
賞品

決勝戦に優勝したチームに特製優勝銀杯を贈ること（図3-2参照）

出場全選手には銅製メダルを、さらに全員中より最高成績者2人を選び、同型銀メダルを贈与すること、大阪朝日新聞社は同社大連での通信社を通じて銀製メダル9個を満日社に寄贈すること（図3-3参照）

試合規則：日本審判協会規則に拠ること

図3-2 第1回「関東州野球大会」優勝カップ



1916年5月22日付『満日』

図3-3 大阪朝日新聞社が寄贈した銀製メダル



1916年6月3日付『満日』

以上が示すように、1916年6月4日満日社村田社長の始球式により、第1回「関東州野球大会」が大連西公園グラウンドで開催された。「奥地各チームの参加を促すとせる処此等は遠距離にして往復に時日を要し且つ優勝戦なるが故第一日において敗退せざる限り第二日にも出場せざるべからざるの困難」を考慮して、第1回「関東州野球大会」の参加チームは関東州域内の埠頭倶楽部、旅順工科学堂、南満工業学校、実業団、大連駅、満鉄本社の6チームとなった。

開催当日、球場内の秩序が乱れないように、満日社は「グラウンドの木柵内、来賓席、選手席、役員席等の縄張内及び一塁側三塁側の応援隊席には入場券なき方」<sup>174</sup>は立ち入りを禁止した。

また、主催者側は観覧席正面に黒板を設置し、試合中絶えず試合の経過得点を掲示した。なお、観衆の興味を引きつけるために、記録方法を記載したスコア用紙を観衆に配布した。

試合当日の観衆席の光景について、『満日』には、「プレイの声青空に響けば、グラウンドの周囲早どよめき起ちて、両軍の声援若葉の樹立を揺つて小南山に呀し、健

<sup>174</sup>「本日の野球大会 州内野球争覇戦の火蓋」1916年6月4日付『満日』。

児の意気未だ戦はずして既に観衆の血を熱せしむ<sup>175</sup>、「見物人は後方山上に迄人山を築き空前の盛況を極めたり、(中略)観覧席は真に立錐の余地なき盛況也<sup>176</sup>」などの記事が掲載され、非常に賑やかな球場の雰囲気を読者に伝えた。ところが、実際は「当時満日社の社員が各会社、商店及び学校団体等を訪ねてく野球戦があるから見に行つて下さい」と懇願する有様、それでもスタンドには試合する両チームの応援者(夫れもホンの小人数)が立ち並ぶ外、暁天の星位の見物人があつたに過ぎなかつた<sup>177</sup>という記述からすれば、まだ野球に親しくない一般民衆の関心をいかに引き付け、どのようにして野球を広く知らせるのかという満日社の腐心が窺えるのである。

1916年6月11日、第1回「関東州野球大会」は実業団の圧勝に終わった。今回の野球大会は「満洲野球界の新機運」<sup>178</sup>と評価されるように、その後の大連野球は勃興の道を辿っていた。

### 第3節 1920年代大連野球界の黄金時代

表 3-1 満日社が主催した「関東州野球大会」の一覧表(第1回-第10回)

回次	決勝戦開催日	始球式	参加チーム	優勝チーム
第1回	1916年6月11日	村田誠治満日社長	埠頭倶楽部、旅順工科学堂、南満工業学校、実業団、大連駅、満鉄本社	実業団
第2回	1917年6月4日			実業団
第3回	1918年6月16日			満鉄本社
第4回	1919年6月9日			満鉄本社
第5回	1920年6月7日			満鉄本社
第6回	1921年5月20日	小川順之助大連民政署長		三井物産
第7回	1922年5月21日	赤羽克己満鉄理事	通信倶楽部、満鉄地方部、工業専門校、満鉄用度、満鉄埠頭、商業学校、電気作業所、大連汽船、三井物産、銀行、満鉄若葉会、工科大学、沙河口工場、満鉄線路課、聖徳課	三井物産

<sup>175</sup> 「飛球緑蔭に鳴る 州内野球争覇戦第一日 絶好の野球日和」1916年6月5日付『満日』。

<sup>176</sup> 「壮絶快絶決勝戦 実業遂に優勝す」1916年6月12日付『満日』。

<sup>177</sup> 前掲「満洲野球界の回顧」、168頁。

<sup>178</sup> 「野球界新機運 実業団投手問題」1916年6月14日付『満日』。

第 8 回	1923 年 5 月 21 日	田中千吉大連民政署長		沙河口工場
第 9 回	1924 年 5 月 25 日	片山義勝鮮銀理事	消費組合、三菱商事、逋信俱樂部、大連列車区、満鉄地方部、工業専門校、満鉄用度、満鉄埠頭、商業学校、育成学校、満鉄鉄道部、電気作業所、大連汽船、工科大学、満鉄興業部、沙河口工場	逋信俱樂部
第 10 回	1925 年 4 月 19 日	大平駒槌満鉄副社長	工科大学、満鉄鉄道部、工業専門校、消費組合、満鉄興業部、埠頭俱樂部、満鉄用度課、三菱野球部、逋信俱樂部、大連商業校、電気作業所、大汽野球部、満鉄若葉会、満鉄地方部	消費組合

出典：『満日』により筆者作成。ただし、1917 年-1920 年 1 月 31 日の決勝開始日は欠号のため、秦源治『わが国球界をリードした大連野球界』（20 世紀大連会議、2009 年、11 頁）を参照。

「関東州野球大会」は 1916 年から 1942 年にかけて、毎年開催され、合計 27 回行われた<sup>179</sup>。表 3-1 に示すように、1916 年第 1 回「関東州野球大会」の参加チームは僅か 6 チームであったが、回を重ねるにつれ、1920 年代になって参加チームも次第に増加していった。この点からは大連野球の発展がわかる。

実際には、1917 年から、満日社が毎年一高、早稲田大学、慶応大学、明治大学、立教大学など日本の野球チームを大連に招聘した。これらの遠征チームは実業や満俱と対戦したが、次々と敗退した。それによって、遠く満洲において野球の強豪チームが存在することを、日本にまで広く知らしめたのである<sup>180</sup>。例えば、『朝日』には「大連実業団零敗」<sup>181</sup>、「慶応敗る」<sup>182</sup>などの記事が散見される。

一方、1917 年から 1920 年にかけて「感情上の衝突の為め」<sup>183</sup>中断していた実満戦が、満日社の斡旋により、1921 年から復活した。以後、満洲野球界の中心である実業・満俱の「混合野球試合」は満日社主催の下に春秋 2 季にわたり年間 6 回行うことになっていた。それにもなって、実業・満俱は「関東州野球大会」から脱退したので

<sup>179</sup> 秦源治、前掲書、11 頁。

<sup>180</sup> 清岡卓行「大連港で」『清岡卓行大連小説全集』（下）日本文芸社、1992 年、506 頁。

<sup>181</sup> 「大連実業団零敗」1918 年 8 月 13 日付『朝日』。

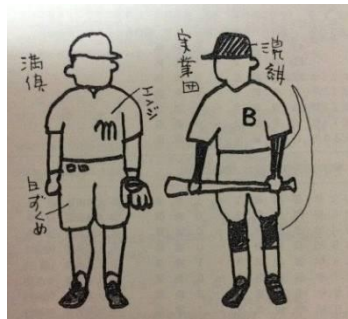
<sup>182</sup> 「慶応敗る」1919 年 8 月 19 日付『朝日』。

<sup>183</sup> 前掲「満洲野球界の回顧」、168 頁。



ある<sup>184</sup>。次いで、1925年には、満俱が日本代表として第7回極東オリンピック大会（マニラ）に参加した。

図 3-4 実業・満俱チームのユニフォーム



出典：秦源治『わが国球界をリードした大連野球界』  
20世紀大連会議、2009年、47頁より転載

ここで強調すべきことは、社会人野球として、実業・満俱両チームによる「実満戦」は1913年に始まり、日本国内よりも早く行われた点である。このことから考えれば、「日本野球史において、社会人野球が最初の大輪の花を咲かせたのは、東京でも大阪でも名古屋でもなく、不思議なことに、海を越えた外地の大連という都市であった。しかも、同時に二つの大輪の花を咲かせたのである」<sup>185</sup>と指摘されるように、1920年代における大連野球は日本国内よりも盛んであったことが示唆されている。

1927年には「全国都市対抗野球大会」が始まった。大連からは「実満戦」の勝利チームが出場し、第1回、3回は満俱（1927、1929年）、第2回は実業（1928年）と、大連チームは三連覇をはたし、「黒獅子旗、三度玄界灘を渡る」の快挙を成し遂げた<sup>186</sup>。このように、1920年代は大連野球界の黄金時代であった<sup>187</sup>。

このほか、満鉄沿線において奉天の「満洲野球大会」なども開催され、全満洲において野球熱が高まったともいえる。

満洲野球界は年と共に盛んになり、「関東州野球大会」に対する世間の関心も次第に高まっていった。それにともない、各チームの応援団も大勢集まるようになった。その中、各学校の応援団は、試合中において応援歌で各自母校の選手を応援する。各学校の応援歌は以下の通りである。

#### 1、大連工業学校

- 一、荒鷲叫ぶ崑崙の 落月情をそゝりては 東の山河を統べなんと 我等健児の意気高し
- 二、遼東湾斗の一角の 伏見が丘に舞え立つ 我が工業の野球団 四辺の敵を衝かんとす
- 三、朝に鍛えし我が健児 夕に錬りし我が選手 飛び込め敵の堅塁に 堅く守れよ我が城を
- 一、鍛えに鍛えし工業の 腕前見するは今なるぞ 打ちて破りてホームラン いざや

<sup>184</sup> 「我満洲日日新聞社主催第六回関東州野球大会 五月八日より挙行す」1921年4月24日付『満日』。

<sup>185</sup> 清岡卓行、前掲書、503頁。

<sup>186</sup> 秦源治、前掲書、46頁。

<sup>187</sup> 貴志俊彦ほか、前掲書、218頁。

進め我選手

- 二、勝鬪今や酣に 球の唸りもいや高く 威風凛たる健児等が 向ふ所に敵はなし
- 一、ハンマー握る鉄腕に 今日はバットを持ち換へて 工業の榮譽を双肩に  
担ふバッターの勇ましや

## 2、大連商業学校

- 一、金鼓の霊音天に鳴り 紫色の旗行く敵の陣 勉めやはげのや選手 男子の意気天  
を冲く
  - 二、人行楽に迷ふ時 馳突する健男子 青春の血の迸り 五大洲をも併呑す
  - 三、如何に強敵来るとも などてか撓む商業軍 商神の羽身につけて 見よや男々し  
き其の姿
- C、OM、MER、CIAL COMMERCIAL ラ、ラ、ラ、ラーラ  
観吾等五百健児 ■■為援■ 勇気満々無可比呀  
一到功必成 戦必勝 大家起来 同■選手能 金城鉄壁無■■哪  
百発百必中 商業必勝商業必勝商業必勝

## 3、満鉄若葉会

- 一、露けき朝に星の夜に 鍛へしこの身この腕  
試さん時は今なるぞ 起てよ健児■迄
  - 二、如何なる敵の堅塁も 只一条に丈夫の 正義の旗の行くところ などが破らで置  
くべきぞ
  - 三、風吹かば吹け雪積れ 知るや若葉の雄々しさを 骨鳴り血沸きて肉又躍る ■れて  
止まん男子の気
  - 四、強敵とても何かある 只時の間の活躍に 最後の勝利我が手にありと 競ふ選手  
の勇ましや
- 一、黄塵鳳に満つるとも 光栄ある歴史汚さじと 西公園■復活の 意気に燃えたる健  
児等が
  - 二、夕に星を戴きつ 朝に月の影を踏み 花を■にまかせたる 不断の努力君見ずや
  - 三、梅檀此処に香を放ち 覇■虹霓の意気を吐く 散れば万朶の山桜 これ神州の精華  
なり
  - 四、緑の林ふるはせて いざや叫ばん我が勝利 宴の宥の楽しさに 躍る心の嬉しさ  
よ<sup>188</sup>

『満日』には「第六回関東州野球大会 第二勝戦の壮観 列風中に熱狂した観衆二万」、「十万ファンの血を湧かせた 晴れの競技が始まる 今日から開かれた関東州野球大会 歓呼裡に選手入場す」、「満洲の野球 本年度の実満戦こそ 数十万のファンが興味を中心」（付録 3-1 参照）など、熱気に満ちた球場の光景を伝える見出しがしばしば掲載されている。また、「満日社から配布する入場券の争奪で紛糾する位」人気があり、「野球戦の開始さるゝや何万といふ人出を見るようになった」<sup>189</sup>という記述からも、「関東州野球大会」の盛況ぶりを推測できる。

また、表 3-1 に示すように、第 1 回「関東州野球大会」の始球式は満日社長により行われたが、その後、大連民政署長や満鉄理事、副社長など、満鉄側、大連民政署側の関係者によって行われた点からは、満洲の統治者が「関東州野球大会」に対して期

<sup>188</sup> 「野球大会応援歌」1921年5月8日付『満日』。

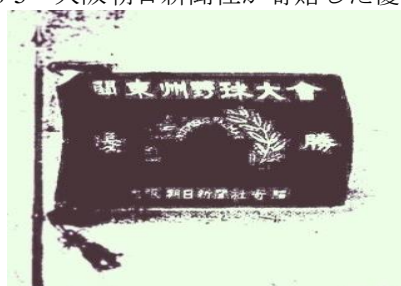
<sup>189</sup> 前掲「満洲野球界の回顧」、168-169頁。



待を持つようになったことが読み取れる。

また、野球奨励に熱心に取り組んでいた日本国内の大阪朝日新聞社は、「関東州野球大会」を応援し、毎年度同社大連での通信社を通じて大会にメダルや優勝旗を寄贈した（図 3-5 参照）。1925 年第 10 回「関東州野球大会」に際して、大阪毎日新聞社も大会に優勝旗を寄贈した。

図 3-5 大阪朝日新聞社が寄贈した優勝旗



1925 年 4 月 21 日付『満日』

満日社は「関東州野球大会」が盛んになるにつれ、「関東州野球大会」規定を新たに制定し、大会委員、審判委員も設置した。また、役員として大連野球界における権威者、一流選手の中から 2 名を選定した。大会規定と委員は以下の通りである。

大会委員長：小日山直登

委員

石田礼助、飯塚祇吉、猪子一到、岩瀬五郎、吉村英吉、竹中二郎、高橋誠、中島謙、中沢不二雄、山本正雄、安藤忍、芥田武夫、木原■次郎、宮崎■一、平野正朝、疋田拾三、元木照五郎

審判委員長：飯塚祇吉

委員

岩瀬五郎、伊藤兼行、井上正雄、花満佐太郎、片岡秀雄、田中茂、高橋誠、竹中二郎、中島謙、中沢不二雄、南■尚夫、宗正要、二神武、福山尋、児玉政雄、安藤忍、芥田武夫、安藤勝、青山太郎、木原慶次郎、北川一氏、木下博喜、緑川郁三、宮崎秀雄、疋田拾三、平田次郎

大会規定

第一条 本大会は関東州野球大会と称す

第二条 大会は毎年一回満洲日報主催の下に四月上旬より五月上旬に至る期間内に於いて大連市に開催す

第三条 本大会の進行を円滑ならしむる為め主催者の諮問機関として大会委員及び審判委員若干名を置き関東州に在住する斯界の権威者に之を委託す両委員は主催者を補佐して大会各般の処理に任ず

第四条 本大会に参加せんとするものは関東州に在る諸官衙公署学校、法人会社若しくは個人商店に勤務する者を以て組織せる野球チームに限る  
但し会員組織の法人団体或は同業組合にして野球部を有し主将会議及び大会委員会の承認を経たるものは本大会に参加することを得  
前項の場合参加各チームの選手は十四日前に於いて各所属個所に就職勤務せる者たるを要す同上但書の場合に在つて満三ヶ月前より引続き法人団体の会員たる者及び同業組合員又は組合所属個所の従業員たることを要す

第五条 参加チームにして大会参加申込後と雖も前条の規定に違反せることを発見せ

る場合は大会参加の資格を取消し大会委員会の決議により大会より除名することあるべし

第六条 本大会に参加せんとするチームは監督、主将、選手の守備位置並に記録者の氏名を明記し主催者より指定せる期日迄に申込みべし

第七条 本大会のルールは日本審判協会制定最新野球規則による但し特殊の事情により別にグラウンドルールを定める必要がある場合は試合当事者の意志を参酌して当該審判委員之を定む<sup>190</sup>

このような規定、組織の整備にともない、満日社が主催した「関東州野球大会」はより一層活発に活動できるようになり、実業・満俱の混合野球試合に次ぐ、全満洲唯一の権威ある野球戦がおこなわれるようになった。

「関東州野球大会」のほか、1921年春には第6回関東州野球大会の開催前に、満日社主催の第1回「満洲少年野球大会」が開催された<sup>191</sup>。以後、毎年同じ時期に開催され、次第に盛んになっていった。また1930年には大連朝日小学校チームが第11回「日本全国少年野球大会」に大連代表として出場したという記録が残されている<sup>192</sup>。

#### 第4節 大連野球に関わる言説

以上のように、1910-1920年代には満日社主催の一連の野球大会により、大連での野球が盛んになった。それにともなって、『満日』紙面において野球に関する記事も次第に増えている(付録3-1参照)。また、『満日』は野球試合の実況に限らず、野球に関する関係者の言説も掲載している。以下にいくつかの例を取り上げてみよう。

##### 例1「野球競技と青年の元気」撫順野球団小林諦亮

(前略)今回貴社主催にて野球大会御催しの由快心此事、近時世人が挙りて曰く工業の独立、産業の発達、海運の奨励、曰く何々と。而も尚未だ其消長の因て岐るゝ所の根本を語るを聞かず。国家が整備の急として以て執るべき方針は多かるべしと雖も、国家消長の根底たる国民の意気と健康は、現時果たして如何なる状態にありや。国民の大多数にして且つ国家発展の先駆たるべき青年の元気と体力とが、事実形容し難き迄の衰れの状態にあるにも拘わらず、世人は此重大なる根本問題の解決を閑却しつつあるに非ずや。貴社が率先して今次野球大会を開催せられむとするは近来の痛快事にて、邦国の為め慶賀措く能はざる処に候。由来世人は運動競技を児戯視し、甚だしきは其の一部の弊害方面のみをみて大局に注目せざりし事、(中略)剛健なる意気と、体力と、国家の為めには何物をも犠牲とする、換言すれば、協同一致の愛国精神。この三要素が根底を為してすべての国家的発展に資するに至りしを想ふ時、吾人は青年国民の体育奨励の必要を痛感する事、更に深甚なるを覚へ申候。而して野球はあらゆる運動中最も吾等青年の体育奨励に適當せるものと存じ候<sup>193</sup>。

例2「満洲野球界の発達を祝し満洲日日新聞社の努力を多謝す」大連汽船主将上野靖

満洲に於ける野球技は最近頗る隆盛を極め、大連市中でもチームの数は実に五十を算するの盛況である。尚之れに満鉄沿線各地のチームを合わせると非常に多い数で、

<sup>190</sup> 1929年3月26日付『満日』。

<sup>191</sup> 「満洲少年野球大会予告」1920年12月26日付『満日』。

<sup>192</sup> 秦源治、前掲書、85頁。

<sup>193</sup> 「野球競技と青年の元気」1916年5月8日付『満日』。

従つて技に於いても長足の進歩を為しお互ひは物足らず。(中略) 当時を振り返つて見ると、その頃大連には満鉄の若葉会、大連実業団、満鉄電気作業所、それから外に一二の小チームがあつた。外に旅順工科学堂靈陽団離れた処で撫順俱樂部があつた位で誠に寥々寂々。今日の盛観に比べるとお話にならず、技量も今日とは比較にならなかつた。(中略) 如何にしてかく短時日の間に進歩旺盛を見たか。それは一に各新聞社が或は主催社となり、後援者となり、且つは満洲日日新聞社が率先して関東州野球大会を挙行し、扱ては莫大の資と労力とを費し、優越せる言論の力を以て球界を指導し不断的努力を拂ひ、此の如何にも男性的にして勇壯一挙一動総てこれ共同動作些かも各個の動作を許さず終始協力一致の運動である処の野球技が植民地の経営事業に最も必要条件とする。協力一致の精神修養上多大の効果あるものとして盛んに奨励された結果で、在満居住同胞総てが熟く諒解野球の普及に力を添えるやうになり、大いに歓迎する様になつたことこれは明らかで今更新しく説く必要がない<sup>194</sup>

例3 「野球競技が与える和衷共同の真精神 本統の野球道は此処にある」

満鉄理事赤羽克己

野球競技が男性的運動競技である事は今更云ふ迄もないが他の運動競技に比してより多く其の団結の必要と云ふ事を感じする処に僕は野球競技を推奨するものである。(中略) 其チームの技量より策戦よりもチーム全員の共同和衷団結力が一番強味となるものである。(中略) 団結心と云ふ事は之等の運動競技のみならず、商業の上などにも非常に必要なもので其の業務に携はる者が一致して其業に当る事になれば其進展は見るべきものがある。(中略) 最近時に野球界が盛んであるから野球競技を行つたり或は夫を觀覽する時に十分経験し吟味して見る事は強ち徒爾でなく且つ其得た所を日常に生活に応用する事は最も意義あるものである。故に僕は野球競技に対して非常の興味を持つて居るのみならず、之が盛んになる事を希望する者である<sup>195</sup>。

下線を付した部分からわかるように、関係者らは野球競技が男性的であり、青年に対して剛健なる意気を鼓舞し、体力を訓練し、共同一致の団結精神を養うことができる点について十分に認識している。また、満鉄理事赤羽克己は、この団結精神は、単に運動競技のみならず、商業上においても非常に必要なものであり、さらに、この精神を日常生活に応用することは最も意義があると強調した(例3参照)。

ほかには、例2が示すように、上野靖は、大連野球界が短い期間で規模も技量も急速に進展した要因は、満日社をはじめとする各新聞社が運動奨励の一策として、多大な資金を提供し、各種の野球大会を主催したり、後援したりしているからであるとともに、新聞紙面においても野球に関する記事を掲載することによって、野球の普及に適した世論を醸成したからであると指摘している。上野は、野球は男性的競技であり、終始協同一致の運動でもあるからこそ、植民地経営事業において野球の持つ役割は更に大きくなるということも強調している。

これらの言説の背景には、1920年代前半の満洲において、在満日本人の経済活動が低迷にあえいでいたことが考えられる<sup>196</sup>。この時点で、満洲バブル経済は崩壊し、満

<sup>194</sup> 「満洲野球界の發達を祝し満洲日日新聞社の努力を多謝す」1920年12月26日付『満日』。

<sup>195</sup> 「野球競技が与える和衷共同の真精神 本統の野球道は此処にある」1922年4月29日付『満日』。

<sup>196</sup> 塚瀬進、前掲書、120頁。

鉄をのぞく日本人商店・企業の大半が経営不振に陥った。<sup>197</sup>対照的に、中国人職人・商人が力量を蓄え、日本人に対抗する経済勢力になりつつあったのである<sup>198</sup>。これらの点に鑑みれば、野球競技を通じて、在満日本人の共同一致精神を涵養することにより、満洲における商工業の振興を図る満洲経営者側の意図が推察できる。

## 小結

以上、1910-1920年代において満日社が主催した「関東州野球大会」をはじめとする一連の野球大会に着目し、その開催に至った背景、開催実態を考察した上で、満洲における野球の受容と展開過程について検討した。

第1次世界大戦中には国民体力の強盛が、国家を発展させる基礎であることが一般に認識され、学校教育のみならず、一般社会人対象の社会体育の振興も第1次世界大戦後の国民国家建設の射程に置かれていた。1918年「臨時教育会議速記録」第28号には、次のような内容が記載されている。

一般国民ヲシテ其身体ヲ強健ニシ且ツ其氣風ヲ健全ナラシムルヤウニ致シテ行ク為ニハ大ニ学校以外ニ於ケル体育上ノ施設ヲ改善シ其普及ヲ図ツテ行クコトガ必要デアラウ（中略）近來学校外ニ於ケル体育普及ノ機運モ漸次見ルベキモノガアルヤウニ至ツタヤウニ思ハレル、就キマシテハ地方青年団等ニ於ケル各個ノ体育場ノ施設ヲ奨励スルト共ニ各種学校地方公共団体青年団在郷軍人会等ト連絡協力シテ健全ナル体育ノ發達ヲ促ス等適當ナル方法ヲ講スルト云フコトガ必要デアアル（中略）而シテ近來イロイロナ運動会ガ段々盛ニナツテ（中略）其間往々競技ニ伴ヒマシテ勝負ヲ試ミルトカ、或ハ興業師ノ如ク唯喝采ヲスル、賞ヲ得ルト云フ為ニ芸人ガ芸ヲスルガ如ク運動ニ従事スルガ如キ弊害ヲ生ズル傾キガナキニシモアラズト云フ狀況デアリマス、故ニ弊学校外ノ体育ヲ普及奨励スルト共ニ此等ノ弊害ヲ矯正スルコトガ必要デアルト認メマシタ<sup>199</sup>

下線を付した部分では、強健な身体を訓練し、剛健な意気を醸成するために、学校教育のほかに、一般社会において体育の普及促進及び施設改善、運動奨励を行うべきことが強調されている。

これに先立って、1915年に教育者山内佐太郎は、「近時各地の新聞社に於いて、（中略）体育奨励の為に、庭球、野球、遠泳等の競技を主催するなど、青年の志気の鼓舞に尽力せらるゝを見て、衷心感謝の念に堪へず、希くば将来益々斯る方針を以て、社会教育に貢献し、一面には学校教育の効果を助成し、以て国民の元気を興起せしめんことを望む」<sup>200</sup>と述べた。

このような背景の下で、満日社が主催した一連の野球大会が開催され、そして回を重ねるにつれ次第にそれが盛んになり、野球も日本国内の強豪チームと比べて遜色ないまでに発展したのである。また、これらの野球大会は毎年同じ時期に実施され、20年以上にわたって開催を重ね、次第に年中行事となり、大連在住日本人の生活の一部

<sup>197</sup> 柳沢遊『日本人の植民地経験 大連日本人商工業者の歴史』青木書店、1999年、332頁。

<sup>198</sup> 同上、172頁。

<sup>199</sup> 「臨時教育会議（総会）速記録」第28号『資料 臨時教育会議』（第5集）文部省、1979年、343-344頁。

<sup>200</sup> 山内佐太郎『国民教育之精神』弘道館、1915年、410-411頁。

となったとも言えるであろう。その過程において満日社をはじめとする各新聞社が大きな役割を果たしたことは間違いない。

これまで新聞社が主催する野球イベントに関する研究は、新聞各社の販売戦略として野球を利用し、新聞発行部数部の拡大を図る目的がその背後にあったことを指摘している。それは満洲における各新聞社との共通点であると考えられる。ところが、租借地という特殊の環境であるからこそ、満日社が主催した一連の野球大会の性格は若干異なっていることが明らかである。

満日社が主催した各種の野球大会は日本国内から強豪チームを大連へ招聘するのみならず、大連の野球チームを日本で行われた全国大会にも参加させることにより、内地と外地が共有する空間を作り上げた。そこには「日満融和」の意図がうかがえる。

また、「野球の善き特性を挙ぐるなら第一に団体としての遊技である故自己の属する団体のために自己一個の利益は犠牲にし、団体に対する自己の責任を確実に守ると云ふは之れ應て社会的公共心、忠君愛国の同念となるべき素質基礎である」<sup>201</sup>というように、野球試合を通じ、母国を離れた日本人は、お互いに日本人としてのアイデンティティを喚起し合い、満洲のために尽力しようという意識を高めることができたと考えられる。またそこには、日本が植民地統治手段の一つとして野球を利用することにより、指導者の指示に従順な集団を創り出そうとした意図もうかがえよう。

---

<sup>201</sup> 1911年9月16日付『東京日日新聞』。

## 第4章 植民地教育政策の一環としての「在満児童母国見学団」（1920年-1927年）

本章では、1920年から1927年にかけて全7回にわたって満日社が主催した「在満児童母国見学団」（以下「見学団」と略す）に注目する。まず、最初に、「見学団」派遣に至るまでの経緯を、当時の時代背景に触れながら概説し、また、先行研究についても検討する。

### 第1節 「見学団」派遣に至るまでの経緯と1920年代における関東州と満鉄附属地の交通環境

#### 1.1 「見学団」派遣に至るまでの経緯

1905年9月5日ポーツマスで日露講和条約が締結され日露戦争は終結した。日本は旅順・大連を含む関東州の租借権、満鉄附属地などの諸権益をロシアから獲得した。それ以来、関東州への日本人の自由渡航が認められるようになったため、渡航者は増え学齢児童も増加し、各地に小学校が設置された。

満洲に設立された日本人学校は、関東都督府が管轄する関東州の学校、満鉄が管轄する満鉄附属地の学校、領事館管轄区域の学校の3種に分かれており、政治や外交においては関東都督府（のち関東庁）と満鉄と領事館という「三頭政治」が学校運営の管轄にも見られた<sup>202</sup>。このうち、領事館管轄の学校（哈爾濱、吉林、鄭家屯など）は満鉄から補助金を受給しており、学校運営面でも満鉄の影響が強かった<sup>203</sup>。言い換えれば、満洲の日本人の教育はほぼ関東都督府（のち関東庁）もしくは満鉄の監督のもとにあった。

管轄機関の相違は教育方針にも反映されていた。関東州の学校においては日本国内の学校教育をそのまま行う「内地延長主義」<sup>204</sup>教育の色彩が強かった。これに対して満鉄附属地の学校においては、満洲事情を取り入れた「現地適応主義」教育の傾向が強かった<sup>205</sup>。ただし二つの教育政策は相いれないものではなく、基本は内地の教育をそのまま移入したような「内地延長主義」教育が主流を占めていた。

1914年、第1次世界大戦が始まった。当時、日本は、日清、日露の二つの戦争の戦勝国として、台湾、朝鮮、満洲などを支配し、一気に経済発展を遂げ、世界の大国の仲間入りを果たしたため、大国意識をもつようになっていた。大戦中の1915年に、日本は中国に対して高圧的な「対華21ヶ条要求」を突きつけ、山東半島や南満洲に大きな利権を獲得した。「対華21ヶ条」により関東州の租借権及び満鉄の権益期限の延長が実現し、満洲での長期在住ないし永住が現実的なものとして現地及び内地に広く認識されるようになった<sup>206</sup>。そして、内地の日本人の満洲への興味関心も高まった<sup>207</sup>。しかし一方で、中国人の反日感情が高まり、中国各地において「対華21ヶ条」に抗議

<sup>202</sup> 塚瀬進、前掲書、108頁。

<sup>203</sup> 『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』原書房、1974年復刻、下巻、1137-1138頁

<sup>204</sup> 内地は、日本国内を指す。なお本稿では現在では不適當な言葉や表現も含まれるが、地名、用語は当時のものを使用した。

<sup>205</sup> 竹中憲一『満洲における日本人教育』同『＜満洲＞における教育の基礎的研究』（第4巻）柏書房、2000年、76頁。

<sup>206</sup> 小泉京美「＜満洲＞における故郷喪失—秋原勝二＜夜の話＞」『日本文学文化』（10）、東洋大学日本文学文化学会事務局、2010年、84頁。

<sup>207</sup> 「満鉄教育沿革史」満洲国教育史研究会『「満洲・満洲国」教育資料集成 第16巻 教育通史II』、エムティ出版、1993年、381頁。

する排日運動が相次いで起こった。同時に、中国側は一連の排日措置を打ち出し、日本人の中国国内での経済活動を厳しく制限した。全国的な日貨排斥運動による日本の経済的損失は大きく、大戦終結後、特に 1919 年の 5・4 学生運動以降、日本の対中国貿易は停滞した<sup>208</sup>。その影響は、満洲にも波及した。満洲の好景気は終焉を迎え、日本人人口の増加率も次第に低下した<sup>209</sup>。それはそのまま在満日本人の社会的・経済的影響力の縮小につながる。一方、学校では満洲生まれの生徒が内地生まれの生徒を上回るようになり、内地への帰属意識の希薄化が進むなど、生徒らの意識も大きく変化していった。

こうした状況の下、満洲の統治者から満洲における教育改革の要請が在満教育関係者に出された。これ以降、「内地延長主義」教育の傾向が強かった関東州の教育界にも満洲の特殊性に根ざした教育を行う必要性を認める意見が強くなっていくこととなる<sup>210</sup>。

1915 年には満鉄附属地の教育に関する一大指針として以下のような「附属地小学校児童訓練要目」が制定された。

#### 「附属地小学校児童訓練要目」<sup>211</sup>

- 一. 我国体ノ尊厳ナル所以ヲ会得セシメ国民道徳ノ涵養ニカムヘシ
- 二. 身体ト精神トヲ鍛錬シ剛健ナル气象ヲ養ハシムヘシ
- 三. 帝国ノ地位ヲ了解セシメ土地ト相親ムノ念ヲ養ヒ質素ニ安シシ勤勞ヲ樂マシムヘシ
- 四. 同胞互ニ和親共同シ国威ノ発揚ヲ期セシムヘシ
- 五. 日本国民タルノ品位ヲ保チ外人ノ信賴ヲ受クルニ至ラシムヘシ

この要目には、日本国民として「国体ノ尊厳」、「国民道徳」の会得に加えて「土地ト相親シムノ念ヲ養ヒ質素ニ安シシ勤勞ヲ樂マシムヘシ」と今後の満洲運営の担い手の育成が目標として掲げられている。

さらには 1920 年頃から内地で郷土教育の機運が高まったことに対応して、満洲を郷土として位置付けることによって、満洲の国土化を観念づける営みとなっていく<sup>212</sup>。一方で、「日本人児童にとって満洲は異国の地である。満洲の日本人児童に対して郷土教育といった場合、母国の風俗習慣を忘れないための内地延長主義教育こそが郷土教育である」<sup>213</sup>という指摘もなされていた。

このような見解の相違を反映し、当時、満洲の教育界において日本人子弟の教育をめぐる次のような議論が展開されていた。

其の一は、満洲の地は、我が忠勇なる将士の血を流した霊地である。この霊地に於いて少年子弟を教育することは却つて忠君愛国の信念を固むる所以である。祖国はこれを見ずして憧憬の聖地として置いた方がよい。見せると却つて失望するのではない

<sup>208</sup> 弘谷多喜夫・広川淑子「日本統治下の台湾・朝鮮における植民地教育政策の比較史的研究」『北海道大学教育学部紀要』（22）北海道大学教育学部、1973 年、34 頁。

<sup>209</sup> 外務省通商局『人口問題ヲ基調トシテ満蒙拓殖策ノ研究』1929 年、84 頁。

<sup>210</sup> 編著者不明『関東州教育史』第 2 輯、1937 年、113 頁。

<sup>211</sup> 南満洲鉄道株式会社、前掲書、824 頁。

<sup>212</sup> 前掲「＜満洲＞における故郷喪失—秋原勝二＜夜の話＞」、85 頁。

<sup>213</sup> 竹中憲一、前掲書、245 頁。

か。といふやうな説。

他の一は、義務教育を終るまでに必ず一度は祖国を見学させねばならない。然らざれば国民的素質が薄らいでしまふといふ説<sup>214</sup>。

上の引用文にあるように、満洲育ちの日本人子弟を対象とする母国見学については賛否が分かれていた。とはいえ、満洲の土地に根をおろすことを目標とする「現地適応主義」においては、単に児童たちを満洲の風土に適応させるだけではなく、同時に満洲に生れ育った児童たちに愛国心を植え付けることの重要性が強調されている。

以上のような流れの中で、1920年頃から満日社は関東庁と満鉄の後援で在満児童の忠君愛国観念を涵養し、満洲に定住し、その開拓、発展に寄与する第二の国民を育成するという趣旨で、「在満児童母国見学団」として在満児童の内地への修学旅行を企画した。

## 1.2 関東州における交通状況：「日本-朝鮮-満洲」交通網の形成

一方、在満児童母国見学が実現した背景には、当時、鉄道と航路による「日本-朝鮮-満洲」交通網が整ったことがあった、と考えられる。

19世紀末から20世紀初頭まで、鉄道は帝国主義列強が中国に進出するための主要手段であった<sup>215</sup>。朝鮮半島では、日清戦争中の1894年に日本政府は朝鮮政府との間に日韓暫定合同条款を締結し、京仁間（京城-仁川）・京釜間（京城-釜山）の鉄道施設権を獲得した。しかし、資金難や朝鮮民衆の抵抗などで工事は停滞した<sup>216</sup>。

その後、日露戦争を機に朝鮮半島の各鉄道が速成され<sup>217</sup>、1905年になって京城-釜山間で営業運転が開始された。この京釜鉄道の全通をうけて、同年9月山陽鉄道が関釜連絡船を就航させたのである。それ以前の1901年に、山陽鉄道は日本で神戸-馬関（のちの下関）間を全通させた。続いて1905年8月には官鉄と山陽鉄道を直通する新橋-下関間急行列車が新設されており、これと京釜鉄道全通・関釜連絡船新設をあわせた鉄道と航路の連絡によって、日本-朝鮮間を結ぶルートが誕生し、後に形成される「日本-朝鮮-満洲」ルートの端緒が開かれたのである<sup>218</sup>。

一方、満洲では、日露戦争後、東清鉄道（哈爾濱-旅順間）を始め、臨時軍用鉄道を含むさまざまな幹線や支線が次々と作られるようになり、またそれらを受け継いだ満鉄時代には、鉄道の敷設がさらに大きな進展を見せることになる<sup>219</sup>。1907年4月、満

<sup>214</sup> 「満洲教育の回顧」嶋田道彌『満洲教育史』文教社、1935年、841-842頁。「大正初期に於ては有識者間に凡そ二種の意見があった。（中略）右のやうな次第で、祖国との関係を考慮されるやうになつて、大正五六年頃から満洲日日新聞社の主催として、全満各小学校尋常六年から希望の児童を集め、教師付添の下に毎年春季に於て母国見学団として内地の修学旅行を実施するやになつた」と記している。

<sup>215</sup> クラレンス・B・ディヴィス「中国における鉄道帝国主義（1895-1939）」クラレンス・B・ディヴィス、ケネス・E・ウィルバーン・Jr.『鉄道17万マイルの興亡—鉄道からみた帝国主義』日本経済評論社、1996年、182頁。

<sup>216</sup> 平山昇「“日鮮満”を結んだ鉄路と航路—関釜連絡船・朝鮮鉄道・満鉄」『歴史と地理 日本史の研究』（592）山川出版社、2006年、2頁。

<sup>217</sup> 小風秀雅『帝国主義下の日本海運—国際競争と対外自立』山川出版社、1995年、247頁。

<sup>218</sup> 平山、前掲論文、2-3頁。

<sup>219</sup> 劉建輝「近代植民地と文化—遼東半島の場合」千田稔・宇野隆夫『東アジアと<<半



鉄は、日本軍の満洲からの撤退完了と同時に営業を開始することになった<sup>220</sup>。それにしたがって、同年 5 月から本線及び支線の標準軌への改軌に着手し、同年 12 月に旅順-大連において標準列車の運転が始まり、次いで、翌 1908 年 1 月に大連-瓦房店、同年 4 月に奉天-鉄嶺、鉄嶺-公主嶺、公主嶺-長春-西寛城子、さらに、同年 5 月に長春方面より相次いで試運転を行い、全線標準列車を開通させた<sup>221</sup>。大連-蘇家屯間の複線工事も同時に着工され、1909 年 10 月に全線の複線運転が実現した。これに対して安奉線の改築は 1911 年 10 月に竣工した<sup>222</sup>。それ以前に、1908 年に京釜線の釜山延長により釜山・新義州間の朝鮮半島縦貫直通列車が開通している<sup>223</sup>。

そして、1911 年 11 月、2 年にわたって行われた中朝国境の鴨緑江架橋工事が竣工したことにより、釜山-京城-平壤-新義州-安東-奉天、すなわち、従来の朝鮮半島縦断鉄道である朝鮮鉄道と満鉄が結ばれた<sup>224</sup>。それと同時に南大門-長春間直通連絡が開始された。そして、翌年の 1912 年には釜山港第一棧橋架設工事竣工にともない、直通列車は釜山に延長され、新設された下関・新橋間直通特急に接続した。さらに 1914 年には下関の連絡棧橋が完成した。このようにして「日本・朝鮮・満洲」間の連絡ルートが確立されたのである<sup>225</sup>。

一方、1905 年 1 月旅順開城とともに満洲開発の先駆として大阪商船株式会社（以下大阪商船と略す）が大阪-大連線を開設した。当時日本郵船も大連線を開通させ大阪商船と競争したが、間もなく協定が成立して撤退したため大連航路は大阪商船が独占することになった。大阪-大連間の航路は 1906 年 4 月から逡信省の命令航路となり、週 2 回の航行を行い、大阪から神戸・門司を経て大連にいたる航路を開設した。その後、租借地関東州の経営と満洲の開発及び満鉄事業の隆盛とともに、この航路の重要性は増加した。

1910 年 4 月に日満連絡運輸、1911 年 3 月に日満露連絡運輸、さらに 1913 年 6 月に欧亜連絡運輸を開始したため、大阪-大連線は欧亜連絡幹線として国際交通網において重要な役割を担うことになった<sup>226</sup>。

以上のように、鉄道と航路による「日本-朝鮮-満洲」交通ルートの整備が、在満児童の母国見学を実現する大前提となったのである。

### 1.3 先行研究について

「見学団」は関東州及び満鉄沿線各地における小学校尋常科 5、6 年、高等科 1 年<sup>227</sup>

---

島空間>>一山東半島と遼東半島』思文閣、2003 年、392 頁。

<sup>220</sup> 鈴木隆史『日本帝国主義と満洲：1900-1945』（上）塙書房、1992 年、150 頁。

<sup>221</sup> 南満洲鉄道株式会社、前掲書、149-150 頁。

<sup>222</sup> 鈴木隆史、前掲書、152-153 頁。

<sup>223</sup> 『朝鮮』（102 号）1923 年 10 月、283 頁。

<sup>224</sup> 劉建輝「制度としての旅・脱制度としての表象：旅行記述がいかん「文学」として成立しうるのか」『アジア遊学』（182）勉誠出版、2015 年、131 頁。

<sup>225</sup> 小風秀雅、前掲書、248 頁。

<sup>226</sup> 岡田俊雄『大阪商船株式会社 80 年史』大阪商船株式会社、1966 年、281 頁。

<sup>227</sup> 1920 年 2 月 6 日付『満日』の社説に第 1 回の見学団は高等科 1 年生を対象とすることが記されているが、1921 年 2 月 19 日付『満日』の社説では、第 2 回の見学団は「関東州内高等小学校及び満鉄沿線各地小学校高等科及び尋常男生徒現在五六年高等一年生」を対象とすることが示されている。この点については、その後の毎年度の見学団に関する記事において詳しく記載されていないが、ほぼ同様であると推測される。ただし、1927 年第 7 回の見学団は高等科の男生徒のみを対象とする（

の男子生徒を参加対象団員として、1920年から1927年にかけて年1回、毎年春に実施された。「見学団」は7回（1926年一時中止）実施され、参加団員の総数は550名<sup>228</sup>にのぼった。

しかしながら、この問題に関してはこれまでの研究ではほとんど言及していない。従来、政治、経済、文学などの分野から、台湾、朝鮮、満洲を対象とした日本植民地研究が展開されており、近年では、近代日本の植民地を「観光」という現象から論じる研究も活発に行われるようになってきている。中国東北地方、朝鮮半島への大規模な満韓修学旅行に関しては、多くの研究成果が出されているものの、その多くは、内地側学校からの日本植民地への旅行である<sup>229</sup>。しかも、それらの研究においては、教育史の視角から高等師範学校や高等商業学校の生徒による修学旅行や教員の鮮満視察旅行に着目する研究が多い。ほかには、満洲教育史の視点から、満洲在住日本人子弟の教育と教科書<sup>230</sup>、日本人のアイデンティティ<sup>231</sup>、あるいは、満洲国成立後の日本人教育に関する研究<sup>232</sup>も行われているが、植民地教育政策の一環として実施された「在満児童母国見学団」についてはほとんど言及されていない。

また、日本統治下南洋群島における旧来からの住民を対象として組織された内地観光団を取り上げた論考としては、千住一の一連の研究があげられるが<sup>233</sup>、日本の植民

---

「本社主催小学生の母国見学団復活す」1927年7月20日付『満日』）。また、1886年、文部大臣森有礼により小学校令が公布された。小学校が尋常小学校（修業年限4年）と高等小学校（修業年限4年）の2段階とし、尋常小学校の修業年限が義務教育期間となる。1907年、小学校令の一部の改正により、修業年限が6年に延長された。それにより、高等小学校の旧1・2年を尋常小学校5・6年とし、高等小学校の旧3・4年を高等小学校の新1・2年とした。入学年齢が、尋常小学校は6歳、高等小学校は12歳であることから見れば、参加者の児童たちの年齢は、11-13歳であると推測できる。

<sup>228</sup> 参加児童は第1回50名、第2回70名、第3回108名、第4回80名、第5回90名、第6回94名で、第7回58名総計550名に及ぶ。

<sup>229</sup> 阿部安成「大陸に興奮する修学旅行—山口高等商業学校がゆく『満韓支』『鮮満支』」『旅遊中国21』（29）風媒社、2008年；有山輝雄『海外観光旅行の誕生』吉川弘文館、2002年。高媛「戦地から観光地へ—日露戦争前後の〈満洲〉旅行」『中国21』（29）風媒社、2008年。同「戦勝が生み出した観光—日露戦争翌年における満洲修学旅行」『ジャーナル・オブ・グローバル・メディア・スタディーズ』（7）駒沢大学グローバル・メディア・スタディーズ学部、2010年。白幡洋三郎『旅行ノススメ—昭和が生んだ庶民の「新文化」』中央公論社、1996年。長志珠絵「『満洲』ツーリズムと学校・帝国空間・戦場—女子高等師範学校の『大陸旅行』記録を中心に」駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』昭和堂、2007年。李良姫「植民地朝鮮における朝鮮総督府の観光政策」『北東アジア研究』（13）島根県立大学北東アジア地域研究センター、2007年などが挙げられる。

<sup>230</sup> 野村章、磯田一雄「〈満洲〉在住日本人子弟の教育と教科書」『成城文芸』（126）成城大学、1989年。

<sup>231</sup> 磯田一雄「在満日本人教育におけるアイデンティティ論—「満洲郷土論」の意味を中心に」『東アジア研究』（45）大阪経済法科大学アジア研究所、2006年。

<sup>232</sup> 大森直樹「〈満洲国〉教育と日本人」『地方史研究』43（6）地方史研究協議会、1993年。木下竹次「新満洲に於ける日本人の教育」『学習研究』11（5）奈良女子大学、1932年。

<sup>233</sup> 千住一「軍政期南洋群島における統治政策の初期展開と第2回内地観光団」『日本

地・占領地あるいは海外における日本人移民による日本内地への観光、特に植民地における日本人小学生の母国見学に関する研究はほとんど行われてこなかった<sup>234</sup>。

従来の植民地ジャーナリズム、植民地ツーリズム及び植民地教育史において満日社が主催した「見学団」を取り上げたものはほとんどない。わずかに『「満洲・満洲国」教育資料集成 第16巻 教育通史Ⅱ』、『満洲教育史』が「見学団」を基本的事実として記述しているのみである<sup>235</sup>。日本内地における同時期の『朝日新聞』、『読売新聞』には、「見学団」に関していくつかの新聞記事が掲載されているものの、全体の状況が確認できるようなものではない。

しかし、1920年から1927年までの『満日』の紙面は、第1回-第7回の「見学団」について詳細に掲載しており、その実施趣旨、実態及び成果を明らかにすることが可能である。本稿は、満日社が主催した「在満児童母国見学団」に焦点をあてることで、満日社が、日本の大陸政策を推進するために、如何に植民政策を支えていたのかについて検討する。

## 第2節 『満日』紙上に見られる「見学団」

1920年2月6日の『満日』には次のような第1回「見学団」に関する社告が掲載されている。

我社満洲日日新聞は植民地教育の発展向上に関し満鉄の満蒙教育研究会と趣旨を同ふし各般の教育施設に就て努力を拂わんとす而して満洲に於ける学生生徒にして母国の事物に接触せざるもの少からずこれ等は其訓育に缺くる所無しとせざれば物質精神両方面に亘りて母国の事情を理解する必要あるを認め我社第一回の施設として左の方法に依り在満生徒を内地に送り修学観光の快挙を敢行せんとす

- 一、期時 本年三月下旬大連出發四月中旬大連帰着
- 二、旅程 海路大連出發神戸上陸、神阪見物、桃山御陵伊勢大廟参拝後、名古屋を経て上京、東京見物の上京都に引返し観光、神戸より乗船帰着
- 三、経費 一切本社に於て支弁す  
但し沿線生徒にして大連迄の費用及び大連帰着後帰還の費用は自弁とす
- 四、組織 関東州内高等小学校及び満鉄沿線各地小学校高等科男生徒現在の一年生より州内二十五名、州外二十五名を各校に於て選抜し五十名の見学団を組織す。教員四名、医師一名同行及び本社員二名同行す
- 五、選抜 見学団加入の選抜は一切当該学に一校仕す

---

植民地研究』(17)日本植民地研究会、2005年。同「軍政期日本統治下南洋群島における内地観光団」『立教観光学研究紀要』(10)立教大学院観光学研究科、2008年。同「南洋群島における内地観光団をめぐる〈内的心情〉」『日本植民地研究』(25)日本植民地研究会、2013年。同「委任統治期南洋群島における内地観光団」(1928-1930年)『奈良県立大学研究季報』24(1)奈良県立大学、2013年。

<sup>234</sup> 曾山毅は「日本統治期台湾における修学旅行の展開—『台湾日日新報』を中心に」(『観光学評論』(1-2)観光学術学会、2013年)において、日本統治期台湾における国語学校の内地修学旅行について触れたているが、その参加者のほとんどが台湾人生徒であり、日本人の母国見学とは異なっている。

<sup>235</sup> 注190を参照。

右の如くして最も安全に最も愉快に見学の目的を達せんとするものにて殊に教員医師等の附添あり父兄は何等の危惧なく其子弟を託すことを得べし而して内地各所の見学観光に就ては文部省、鉄道院其他政府関係当局並に府県当局等大々の便宜を図ることとなり居れば其目的は十分に達せらるべきを確信して疑はず<sup>236</sup>

ここには、「見学団」の趣旨、見学期間、見学中に利用する交通機関、「見学団」の日程、見学ルート、経費、団員の選抜などが詳しく記されている。また、日本側では文部省、鉄道院、その他の政府関係当局、府県当局などが、「見学団」への便宜を提供することとなっている。その後、『満日』は連日、出発前の準備（注意事項、団員・附添教師・団長・特派記者、団歌、各学校長ら関係者の期待等を発表すること）、見学中の現地便り、そして帰着後の一定期間において参加生徒の旅行記や感想文を紙面に掲載している。『満日』はその後の毎年度も同じ形式で「見学団」の情報を公表している。以下でそれらについて考察してみよう。

## 2.1 社告に見る「見学団」の実施趣旨：植民地経営の人材育成

社会教育の一翼を担う機関である満日社は「長年にわたって、日本の満洲経営において各般の施設の整備がいよいよ進んで、満洲に移住する日本人の数も増えるようになった。それによって日本の大陸発展の基礎が築かれていた」<sup>237</sup>という認識をもとに、「植民地教育の向上・発展に向けて、満洲生まれの児童を対象として母国における商工業の発達及び各種の文化的施設その他名所旧蹟等を情操的に活動的に又智育方面から見学させる」<sup>238</sup>ことにより、「大陸経営の後継者を育成する」という趣旨に基づき、関東庁と満鉄の後援で在満小学児童の母国見学団を企画した。

この趣旨は毎年度ほぼ同じであるが、1924年の実施趣旨には「震災後の京浜を視察するといふよりか満洲を代表した小国民が母国の不幸に同情して温かい慰問の辞を捧げ又一つには東宮殿下の御成婚に対し敬意を奉表する事になれば吾々植民地の面目上にも光があると共にドンなに母国上下の満足を得るであらうか」<sup>239</sup>としている。

その背景について簡単に触れておきたい。1923年9月1日に関東地方で発生した未曾有の大震災に際して、人心の安定を図ることを目的として同12日に「帝都復興ニ関スル詔書」<sup>240</sup>が発せられた。同詔書は「東京は帝国の首都」であり、「国民経済の枢軸」、「国民文化の源泉」として国民一般から仰ぎ見られているため、震災により大打撃を受けたが、東京が「我が国都」としての地位を失うことはない、と述べている。それに対して、満鉄社長は教育当事者に訓諭を發し、地方部長に児童生徒の教育上特に留意すべき諸事項を指示した。なお、同11月10日に「国民精神作興ニ関スル詔書」<sup>241</sup>が発せられた直後、満洲における各学校においても奉読式が挙行された<sup>242</sup>。こ

<sup>236</sup> 1920年2月6日付『満日』社告。

<sup>237</sup> 「第二回在満学童母国見学の一大快挙」1921年2月19日付『満日』。

<sup>238</sup> 「第三回在満小学生徒母国見学の一大壮挙」1922年1月26日付『満日』。

<sup>239</sup> 「我社の第五回母国見学団 桜花爛漫の母国に満洲を代表して行く小国民見学団」1924年1月31日付『満日』。

<sup>240</sup> JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A13100594500（第2-5画像目）、「帝都復興ニ関スル詔書」（国立公文書館）。

<sup>241</sup> JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A13100594600（第2-4画像目）、「国民精神作興ニ関スル詔書」（国立公文書館）。

<sup>242</sup> 『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』南満洲鉄道株式会社、1928年。1140-1141頁。

の詔書は「国家興隆ノ本ハ国民精神ノ剛健ニ在リ」とし、「浮華放縱」、「軽佻詭激」を排し、「質実剛健」、「醇厚中正」と「忠孝義勇」の精神を国民に要求した。

このような状況の下で、「満洲経営の急先鋒」と自ら誇る『満日』は、これらの詔書の精神を貫徹・実践して満洲経営の後継者となる児童たちの国民精神を涵養するという目的を1924年度「見学団」の実施趣旨に反映させようとした。

## 2.2 「見学団」に対する期待—教育関係者からのメッセージ

1920年第1回から1923年第3回にかけて「見学団」に関する社告を公表後、『満日』は連日にわたって、各小学校、満鉄学務課、児童の保護者など教育関係者からのメッセージを紙面に掲載し、「見学団」に対する期待を表している。以下にいくつかの例を取り上げ、その内容をまとめてみよう。

### (1) 各小学校からのメッセージ

例1. 「広く浅いよりは狭くとも深き観察を」 旅順第一小学校長：野間雅人  
貴社主催の学校児童内地見学旅行は必ずや良好なる結果を収む可き事と信じ衷心賛意を表する共に其の効果の大なることを祈る次第であります（中略）私一個の希望と注意とを申し上げます次の如くであります

- (一) 植民地の児童として母国の事情を知り自然の風光に接して比較研究の態度を取<sup>ママ</sup>しめたい
- (二) 観察材料の多からんよりは国民教養上最も必要なる資料を徹底的に見学せしめて感奮興起せしめたい
- (三) 観察の凡てに就き其の歴史を説明して物質的精神的努力の結果なることを充分に知らしめたい
- (四) 慈愛深き両親の膝下を離れて旅行するのであるから憂撫的擁護の下に愉快なる且つ規律ある旅行ならしめたい
- (五) 郷国の事物を見学するのが主であるから勿論贅沢心を起すやうな旅行をなさしめたくない
- (六) 旅行の沿道畧地図並に地理歴史等に関する大要の説明書を作製して予め一般に■ちたい<sup>243</sup>

### 例2. 「知識よりも情意方面の陶冶を」 奉天小学校長：河村音吉氏談

今回貴社がお企てになつた内地見学の御催しに対しては誠に結構な事と申すの外ありません而して其の目的は云ふ迄もなく訓育的で情意方面の陶冶を主眼となさる事と愚考いたします尚私共の立場から此の修学旅行に対する希望を申し上げますと

- 第一、宮城、神宮、山陵、御所等の拝観に依り国体皇室に対する尊崇の念を一層深厚ならしめること
- 第二、忠勇賢哲、偉人等の歴史的遺跡を訪ねて大いに士気を鼓舞し兼ねて祖先崇敬の念を高めること
- 第三、母国民の活動並びに事業発展の模様を知らしめ将来国家の為に貢献せんとの観念を抱かしめること
- 第四、教科書で教へた諸種の事項を直観せしめ具体化せしめて其の理解に資すること
- 第五、祖国の気候風土山川等に接して内地気分を味はしめ一面趣味の向上を図ること等であります<sup>244</sup>。

<sup>243</sup> 「広く浅いよりは狭くとも深き観察を」1920年2月4日付『満日』。

<sup>244</sup> 「知識よりも情意方面の陶冶を 我社の母国見学団」1920年2月15日付『満日』

例 3. 「母国見学団員に望む」長春小学校内：平川寛三

第三回母国見学団が組織され各位はその団員となりました。定めしお悦びの事とお察しします。私も第一回の見学団に附添うて旅行しました。その際にいろいろ感じましたのでその当時愚感を記した事もありましたが今又参加せらるゝ各位に御注意を願いたいと思ふ事柄を申し上げたいと存じます。

第一には旅行団の体面を汚す様な事のない様に皆さんが自分々々で充分注意して頂きたいのです。（中略）団体に参加したものゝ一挙手一投足も皆団体の体面に関するのであります。のみならず在満洲児童全体の声誉に関する事と思ひます。（後略）

第二には各位の言葉遣ひに御注意が願ひたいと思ひます。（中略）人の用ふる語によつてはその人の品格を或程度迄察する事が出来るものと思ひますかういふ次第ですから旅行中の言葉遣ひ（平素でも）には特に注意して人の感情を害する様な事や自分の品格を下げる様な事のない様にしてもらいたいと存じます。

第三には金銭を濫費されない様に御注意を願ひたい。（以下略）

第四には各位が内地に行かれたら松、竹、梅、桜等日本在来の植物をよく観て頂きたいと思ひます（中略）今度の旅行には之等を観て各位が普通の植物に対する知識を豊富にするの好機会と思ひます。たとひ路傍の一草一木と雖も見落す様な事なく観察して頂きたいと希望します。

第五には内地に居る日本人は非常な努力を持つて勤勞して居ますその実況■■■に観て頂きたい満洲に居る日本人は少し勤勞を要する事になると低級な支那人を使用し日本人は勤勞する者に非ずといふ様な態度が見えないでもありません。然るに一步内地の土を踏むと内地人がセツセと労働もし活動もして居ます。この日本人の態度を充分味はつて諸君が将来満洲に於て活動せらるゝ基本にして頂きたい。私は満洲に居る日本人はもつともつと勤勞する事を厭はない様にならなければならないものと思つて居ります<sup>245</sup>。

## (2) 満鉄学務課長からのメッセージ

例 4. 「学童母国見学に関する希望 旅行によつて得る効果 所謂百聞は一見に如かず 發育盛りの児童が内地見学によつて智識の蔵を拓くを喜ぶ 保々学務課長談」

（前略）小児の内地見学団と云ふ事は殊によい事である、殊に學問に携はつて居る小学校の児童に於て更に其の感を一層深くなるものである（中略）僕は旅行と云ふ事は如何なる場合でもよろしいものだと云ふ事を考へて居る一人で、教育盛りの小学校生徒に於ては尚更効果も多かるべく双手を挙げて賛成するものである、子供の智識は教室で授かるのも尠なくないが夫よりもヨリ以上に効果あるものは旅行で所謂百聞は一見に如かずで余が如何なる都合如何なる人と雖も旅行はよろしいと云ふ所以は茲にあるのだ<sup>246</sup>

## (3) 保護者からのメッセージ

例 5. 「保護者より植民地の児童に 祖国の美風を感銘させ度い」俣野義郎氏談

<sup>245</sup> 「母国見学団員に望む」1922年2月28日付『満日』。

<sup>246</sup> 学童母国見学に関する希望 旅行によつて得る効果 所謂百聞は一見に如かず發育盛りの児童が内地見学によつて智識の蔵を拓くを喜ぶ」1921年2月26日付『満日』。

満洲日日新聞社が社会教育の爲め一昨年から在満小学児童母国見学団を組織して毎年一回心地よき春の初の殊に学期の終りに祖国の文化的施設や祖先の遺風を実地に見学させるのは此上もなき美挙であることゝ喜んで居た（中略）植民地殊に満洲に生まれた子供で内地の天地に接せぬものは神社仏閣に対しての観念が殆ど無いし祖先の何んたるかも知らぬものが多い又教育の程度も智力の発達も東京等に比して劣つて居ることは事実で（中略）されば祖国の美風や神社仏閣を実地に見学し平易に説明を加へば小さき頭にも容易に注入され智識の発達は意外のものであらうと思う、而して神社として伊勢大廟であるが一面に於て祖国の人々が小さき■家に住居し苦心惨憺して田畑の耕作又は労働に従事して居るのを見せて満洲の生活状態と比較させて今一層の奮闘心を起さすことが最も必要と思ふ、（中略）子供等は出来る限り母国見学をさせて祖国の如何なるものかを味はせたい（中略）そして永遠に此壮挙を継続し単に小国民の爲めでなく延いて祖国の爲め尽力されんことを希ふのである<sup>247</sup>。

以上の例から、前述した「見学団」の実施趣旨に基づき、満洲教育関係者がさまざまな角度から「見学団」に対する期待を詳しく述べていることが分かる。その主旨は、下線を付した部分から次の5点にまとめられる。

(1) 愛国心の涵養

満洲に生れ育った子供は、母国への帰属意識が希薄である。見学中において伊勢大廟、宮城、明治神宮などを拝観し、乃木神社などの忠勇賢哲の歴史的遺跡を訪ねてさらに母国民の活動及び事業発展の実況を見ることにより、皇室尊崇と祖先崇敬の念と国家のために貢献しようとする愛国観念を涵養することを目標としている。

(2) 知識の獲得

母国の山水や神社仏閣などを実地に見学し、満洲では教科書でしか見るものの出来ないものについて平易に説明を加え、知識の獲得や理解を深めることを目指す。

(3) 自立の精神と集団意識

両親のもとを離れた長距離の見学旅行であるため、周りに依存せず自分のことは自分で処理する自立の観念を形成するのみならず、見学中の集団宿泊などの団体活動を通じて、生徒たちの規律意識、仲間意識、集団意識の芽生えを培うことも期待できる。

(4) 「在満児童を代表する」行動規範

団員たちは在満児童の代表として、その一挙手一投足が団体の名誉、さらに満洲全体の体面に関わるので、母国滞在中において言葉遣いなどの行動規範を守ることが極めて大切である。

(5) 金銭観念と勤労意識

「満洲の子供は内地の子供より金銭を濫費する癖がある」と指摘し、母国滞在中、物欲を自制して、親から頂いたお金を濫費しないよう注意がうながされた。また、「満洲に居る日本人は少し勤労を要する事になると低級な支那人を使用し日本人は勤労する者に非ずといふ様な態度が見えないでもありません」と批判し、内地日本人が持つ勤労の姿勢を見習わせ、在満児童たちの勤労意識を醸成することを目指した。

こうした期待の背景には、関東州・満鉄附属地の児童の特性に応じた配慮があると考えられる。満鉄創設時代に在満児童の特徴について満鉄沿線各地の小学校において調査が行われている。それによると、在満児童の短所として、「奢侈贅沢の気風」、「孤立的で協同一致の精神に乏しい」、「規律作法正しくない」、「倦怠懦弱」、「

<sup>247</sup> 「保護者より植民地の児童に 祖国の美風を感銘させ度い 第三回児童見学団に対する希望」1922年3月8日付『満日』。

勤労をいやしむ」、「金銭観が薄い」、「同情心と約束を守る念が薄い」、「謝恩の念が乏しい」、「満洲の土地に愛着の念が乏しい」、「祖先に対する念が乏しい」などといったことが挙げられている<sup>248</sup>。在満教育関係者はこうした在満児童の短所を認識した上で、それを補完する一つ的手段として「見学団」に大きな期待を寄せたということがうかがえる。

## 2.3 出発前の準備

### 2.3.1 見学団員の選抜

毎年度、団員の選抜は関東庁及び満鉄学務課によって実施された。具体的には、「中産階級を目標とせられた上」<sup>249</sup> (1) 満洲で生まれ育ち (2) 一度も日本に渡ったことのない (3) 最近5か年以内において転校したことがない<sup>250</sup>、関東州及び満鉄沿線各地における小学校尋常科5、6年、高等科1年の男子生徒が団員の要件であった。この応募要件に基づき、各学校の生徒数に応じて参加者の人数が割当られた。また、付添教員の選抜について、関東庁及び満鉄学務課は各自の管轄範囲において各学校から選任することとした(表4-1参照)。

表4-1 第1回-第7回在満児童母国見学団参加生徒・教員一覧

年度	関東州		満鉄沿線	
	生徒数(名)	教員数(名)	生徒数(名)	教員数(名)
1920年(第1回)	25	2	25	2
1921年(第2回)	35	4	35	4
1922年(第3回)	67	6	41	4
1923年(第4回)	40	4	40	4
1924年(第5回)	45	4	45	4
1925年(第6回)	49	4	45	4
1927年(第7回)	58			
合計	550			

出典：1920-1927年『満日』により筆者作成。

そして、付添教員の人数によって団員はいくつかの班に分けられ、各班に班長を配置した。付添教員は代理保護者として、見学中のそれぞれの所属する班の生徒を保護し監督する義務を負っていた。

主催者として満日社は社員の石橋文三郎<sup>251</sup>(第2回-第4回)、高塚源一(第5回-第6回)、山田好文(第7回)を「見学団」団長、本田康喜(第1回)、今杉好美(第2

<sup>248</sup> 「満教育沿革史」、前掲書、1213-1224頁。

<sup>249</sup> 「第三回母国見学団 参加学童割当極る」1922年2月17日付『満日』。

<sup>250</sup> 「満教育沿革史」、前掲書、1118頁。

<sup>251</sup> 第1回目は見学団団長を置かなかった。満日社は新聞営業部長・石橋文三郎を見学



回)、永嶺信恒(第3回)、石田薫(第4回)、池内忠蔵(第5回) 鶴川久介(第6回)、山下庄太郎(第7回)らの特派記者として派遣した。

このように、「見学団」は関東庁、満鉄、満日社から成っていた。

### 2.3.2 旅費

「見学団」の経費は、第1回目は満鉄沿線各地から大連までかかる往復交通費を除いて、満日社が見学旅行中の全てを支弁した。1921年第2回目に際して、満日社は「前回は一切我社に於て負担処弁したが、かくては永續性を缺くと同時に素白純真の児童に独立自修の念を涵養せしめざる憾みあり且つは卑屈に流れしめる虞れなしとも限らず、此の点を慮り」<sup>252</sup>という理由で、往復交通費(船車料金)金40円は団員の自己負担とし、満日社は見学中にかかるその他の費用を支弁することとした。

実際には、毎年度鉄道院及びその他の政府関係当局、府県当局、満鉄、満日社東京支社など各方面は、「見学団」に便宜を提供した。詳しい状況を表4-2にまとめて示す。

表4-2 「見学団」への便宜供与に関する状況

	各方面からの協力	寄贈
第1回 (1920年)	鉄道院：特別車両一両を連結 大阪商船会社は往復乗船を五割引として優待 神戸市市役所：市内見学を案内 万朝報：写真班を特派 陸軍省：見学団のために小石川後樂園を開放	古財治八：金五百円 藤飯弥太郎、馬場金助：金百円 大連鈴木商店支店主任濱田正稲：金五百円 奉天毛原洋行、大連木原薬局、関東庁東京出張所、満日社東京支社、丸三会社、毎日新聞社、中井洋紙店大阪支店などからの寄贈品多数
第2回 (1921年)	東洋汽船株式会社：船内諸般設備などに関するものを紹介 神戸市視学：市内見学を案内 名古屋市学務員：市内見学を案内	大連宅合名会社、神戸市、兵庫県庁、大阪府学務課、王子製紙会社大阪支社、大阪毎日新聞社、第四師団司令部、大阪市役所、京都銅駝尋常小学校、名古屋新聞社、日本燐寸株式会社、奈良市役所、名古屋市役所、京都市役所、島津製作所、関東庁東京出張所、満鉄東京支社などからの寄贈品多数
第3回 (1922年)	満鉄：内地旅行中の汽車の提供 鉄道省：車両一両を借切る 大阪浪速洋行：自動車二十台を提供	満洲起業会社事務取締役千田次郎：金百円 無名氏：金二十円 満洲製菓株式会社、朝鮮総督府、安東民団、大阪浪速洋行、大連林洋行、名古屋市及び県庁、新愛知新聞社、神戸市などからの寄贈品多数

団幹事として派遣した。

<sup>252</sup> 1921年2月19日付『満日』社告。

第4回 (1923年)	満鉄：特別車両の提供 名古屋駅長の特別なる配慮により 東京までの連絡列車の提供 満日東京支社、関東長官伊集院彦吉、満鉄社長川村竹治らの斡旋により宮城拝観を許可 大阪浪華洋行：自動車 22 台を提供	京城府庁各学校、全羅南道憲兵隊長、京城日報社、渡辺均平商店京城支店、名古屋新愛知、新報聞社、大連三越呉服店、大連林洋行などからの寄贈品多数
第5回 (1924年)	満鉄病院臨時東京出張所：団員の健康診断を施行 満鉄：釜山に直通の豊敷客車を提供 満日東京支社：陸軍省や航空隊と交渉し飛行機見学をすることと決定 満鉄東京支社：東京見学中に自動車を提供	満日奉天支社、朝鮮銀行、カルピス本店、三越呉服店大連支店、満鉄京城鉄道局、京城日報社、朝鮮新聞社、京城日々新聞社などからの寄贈品多数
第6回 (1925年)	満日東京支社：1) 宮城拝観を斡旋 2) 戸山学校での演習模擬戦について陸軍当局と交渉 満鉄：大連から連結して行った豊敷列車を提供	満日社遼陽支局、奉天尋高父兄会、奉天第一小学校父兄会、奉天第二小学校父兄会、大阪屋号書店、奉天清野新聞舗、満日社奉天支社、中山太陽堂、三越呉服店、仁丹本舗森下営業所、ライオン齒磨小林支店、ブルトーゼ発売元藤澤友吉商店、丸三合名会社、満鉄鮮満案内所、大阪商船会社、大阪毎日新聞社、岡山市の教育会などからの寄贈品多数。
第7回 (1927年)	神戸新聞社：自動車 12 台を提供	不詳

表注：『満日』により筆者作成。

表 4-2 に示すように、「見学団」は旅行中、鉄道院、満鉄、大阪商船会社から特別車両の提供や運賃割引などの援助を受けたほか、大連、満鉄沿線附属地や見学都市において県庁、商店、学校、新聞社などの各方面から寄付金や寄贈品を受けたことが分かる。1922 年第 3 回目には、「旅費は実際に於て一人宛六十七円余要するが各方面から多大の同情があつたので四十五円になり」<sup>253</sup>、その後の 3 回の旅費も金 45 円とした。

### 2.3.3 見学団歌「東洋平和に捧げんと」と団章

「見学団」は第 2 回目から団歌と団章を制定した。具体的には以下のようなものである。

<sup>253</sup> 「第三回在満学生母国見学団観光日程極る」1922 年 2 月 15 日付『満日』。

第2回母国見学団の歌（あゝ玉盃の譜）<sup>254</sup>

- 一、愛国の血に萌え出でゝ 満洲野彩る若桜 母国の春に会はゞやと  
成れる我等の見学団 大連港をあとにして 嬉しや茲に鹿島立ち
- 二、朝鮮半島迂廻して 玄海洋に来かゝれば 思ひぞいずる弘安や  
日露の役の大快戦 響を永久に語るらん  
逆巻く怒涛の勇ましさ
- 三、翠緑の国絵の如く 今前眼に近づきぬ あゝ我母国大八洲  
瑞穂の国は笑を以て 五百重の浪路渡り来し 我等迎ふる嬉しさよ
- 四、関門海峡入り来れば 内海波は静かにて 尽きぬ眺めの須磨明石  
歴史の蹟をたづねつゝ 舞子浜風松葉散る 靄の昼の真帆片帆
- 五、我乗る船よサイベリヤ 此処は神戸の港なり あゝ忠臣は楠公の  
あゝ忠臣は菊水の 流れはつきぬ湊川 社頭に襟を正しつゝ
- 六、民のかまどは賑ひて いよゝ栄行く 大御代の文化を誇る市民博  
佛投ぜし難波江や 豊太閤が夢の跡 今はた如何に尋ね見ん
- 七、奈良の都も春なれば 七堂伽藍八重桜 昔変らぬ鐘の音  
ふりさけみれば三笠山 上りし月に友を呼ぶ 神鹿の声可憐なる
- 八、五十鈴の水に身を浄め 神のみ前に額づけば 森厳の気は肅然と  
天地のむた極みなき 我国体の尊さを 愈深く覚ゆなり
- 九、金の■鋒後に見て 東海道を直走り 玲瓏八朶富士が嶺の  
気高き姿仰ぎつゝ 函嶺の嶮越え行けば 帝都は近しいざ来れ
- 十、玉の宮居をまのあたり 拝すも畏し二重橋 代々木に明治の大帝  
慕ひまつりて赤阪や 赤き心の乃木神社 社前に遺訓思ひつゝ
- 十一、靖国神社に詣づれば 大和心の桜花 旭に匂ひ爛漫と  
咲きて気高き花の精 大東京を一眸に
- 十二、議事堂日比谷芝愛宕 霞がくれに鳴り響く 鐘は上野か浅草か  
四十七土の泉岳寺 隅田の春の夕景色 ボートの歌や都島
- 十三、名残りぞ尽きぬ東京を惜くもあとに鎌倉や  
源氏の古跡たづねつゝ 汽車に■かな夢乗せて  
行く手は琵琶の湖か 吹く朝風の心地よき
- 十四、桃山御陵伏し拝み 前途の幸を祈りつゝ 山紫に水清き  
平安の京来て見れば 実に千年ふる我旧都 歴史を語る蹟多し
- 十五、流れも清き加茂の水 禁裡を拝す三条や 五条の橋の橋板を  
とどろとどろと踏ならし 訪ふものよし東山 花の寺々見に行かん
- 十六、琵琶湖に舟を泛ぶれば 八景さながら絵の如く 小波清き湖の面を  
走るボートの面白や 水平線上竹生島 かすかに見えて風涼し
- 十七、神戸の港船出して いざや帰らん新日本 父母同胞も待ちまさん  
忠孝の国花の国 日本国よ永へに 栄よさらばいざさらば

<sup>254</sup> 「母国見学団の歌（あゝ玉盃の譜）」1921年3月25日付『満日』。第2回の見学団の歌は、作詞者は不明であり曲名も付けられていない。内容に関しては、第2回目の団歌は18節、第3回、4回目はそれぞれ3節からなっている。旋律は旧制第一高等学校の寮歌「あゝ玉杯に花うけて」のものを使っている。第3回目の団歌の曲名は「東洋平和に捧げんと」と名付けられ、旋律は最初は前回と同じように「あゝ玉杯に花受けて」と決定されたが、後に軍歌「橋中佐」のものに変更することとなった。第4回目になると、曲名と旋律は第3回目と同じである。

十八、二句の旅を無事に了へ 春まだ浅き遼東の 山も程なく見えてくれば  
父母恋しさの弥まさる やがては花と咲き出ん 家苞満てし胸の中  
(終わり)

第3回母国見学団の歌「東洋平和に捧げんと」<sup>255</sup>

- 一、東洋平和に捧げんと 若き血汐は迸る 満洲野に咲きし健児等が  
母国の春を訪んと 心も勇み鹿島立つ 我等満日見学団
- 二、幾年夢にあこがれし 祖国は花の園生なり 大君居ます千代田城  
上野を飾る平和博 清き流れの五十鈴川 富士の高嶺も仰ぎ見た
- 三、げに三句の旅枕 尊き恵みに浴すなる 我等の幸を胸に彫り  
若草萌ゆる満洲に 文化の花を移し植え 共に培ひ養はん

下線を付した部分には、「見学団」の日程に基づき、各見学地の地名、歴史、風物などが織り込まれているだけでなく、「瑞穂の国」、「忠孝の国」、「東洋平和に捧げんと」などの内容も含まれている。団歌の内容を総合的にみれば、「愛国の血」に燃えた「満洲野」の健児は、夢にも憧れた祖国に渡り、「二句」にわたって、祖国の長い歴史や壮麗な山河を見学することにより、皇室や国体の「尊き恵み」を「胸に彫り」、それら「文化の花」を「新日本」としての満洲に移し植え、「東洋平和」、日満共栄へ尽力しよう」と、児童らの愛国心を鼓舞する意図など、前述した「見学団」の実施趣旨や教育関係者らの期待の主旨はほぼ団歌に反映されていることが分かる。

主催者は見学中に満洲各地から集まった参加児童に団歌を頻繁に歌わせて、生徒の意識を統一した上で、「忠孝愛国」「国体尊崇」の観念を知らず知らずのうちに、児童に内面化させる意図がうかがえる。

団歌の制定とともに、団章も設けられた。団章のデザインは図4-1に示すものである<sup>256</sup>。「見学団」のシンボルとして、見学中に団章を胸や肩など見やすいところに付けることが定められていた。

図4-1 第2回見学団団員章



出典：1921年3月20日付『満日』より

<sup>255</sup> 「朝鮮から母国から歓迎するとの知らせ 団長も成り団歌も出来た 出発アト十日に迫る 団員の興味は平和博へ」1922年3月4日付『満日』。第4回の団歌は、第3回とほぼ同じであるが、第2節に「上野を飾る平和博」から「舊（むかし）を語る鎌倉宮」へと変更された。第4回目の団歌はその後の2回でも継続して使用された。

<sup>256</sup> 団章は盾形で、中央に丸型の模様を嵌め込み、周囲を植物の模様で囲んだものである。身分によって団章の色が分けられ、団員は赤、付添教員は青、衛生班は黄、また満日社員は紫となっている。

主催者である満日社は見学日程、団員名簿、各地見学要項附鉄道案内、見学团团歌、囑託医名、宿泊旅館、大阪、東京見学世話係氏名等を記した印刷物を作成し、出発前に各学校を通じて参加生徒に配付した。

#### 2.4 出発当日の光景

「見学団」出発当日の光景は、『満日』にその都度掲載されている。第1回「見学団」を例として取り上げてみよう。

(前略) 在満生徒を内地に送り修学観光の快挙を企て一月以来紙上に発表し一般の多大なる喝采を博し又甚大なる同情を得たるが其後着々準備を整へ愈々昨二十日出帆の哈爾濱丸にて其壯途に就く事となれり之より先き我社よりは人を派して船内の準備を為し万遺憾無きを期し各児童の来着を待てば集合定時午前十時大連高等小学校生徒十六名は羽場教師に引率され旅装軽々しく元気よく到着し之に送るゝ十分に奥地長春鉄嶺四平街開原奉天安東大石橋等の各学校生徒を乗せたる列車は埠頭に到着し茲に全員の到着を見海務局前庭に整列し本田記者の挨拶に次で西片本社副社長(中略)の挨拶あり終つて、紀念の撮影を為し、九時三十五分憧れの内地に向ふべく。喜色顔に溢れ意気揚々として乗船すれば、民政署学務課、満鉄学務課及び大連高等小学校生徒其他父兄親戚知己の見送り之に続き、歓声湧くか如く。此日、中西満鉄副社長、杉浦理事其他乗客満員の事とて、埠頭は空前の盛況を呈し、之等の見送りも我社の壮図を賛し、同一団となりて学生見学団に対して万歳の声を浴せ、午前十時歓呼裡に懐かしり内地へ向け、黒煙を残して解纜<sup>257</sup>

図 4-2 第1回「見学団」出発当日の光景



出典：1920年3月21日付『満日』

<sup>257</sup> 「我社の学童母国見学団出発す」1920年3月21日付『満日』。

引用文からは、出発当日、参加児童が各地から大連へ集合し、大連埠頭にある海務局の前庭に整列し、主催者からの挨拶の後に、記念撮影をして大連民政署学務課、満鉄学務課及び参加生徒の父兄や親戚などの見送りを受け、大阪商船会社の哈爾賓丸に乗込んだ状況が明らかとなる。また、図4-2に示すように、大連埠頭に参加児童、見送り人及びその他の乗客が多数集まる様子から、当日の盛況を推測できるだろう。

そして、出発当日、満日社副社長西片朝三は団員に次のような送辞を述べた。

(前略) 年々五六十万づゝ殖るの人口は到底内地の如き小さき島国には這入りきれない(中略) 依て我日本国では此満洲が最も必要な所である。万一此満洲を失ふときは丁度金魚が水を失ふやうな状態になるのである。然らば此大切の満洲を誰が維持して行くのであるか、誰が段々発展せしめて行くのであるか、それは満洲に生まれ、又は満洲に成長せらるゝ皆さんの腕によらねばならぬところであつて、其責任は皆さんの肩に掛つて居るのである<sup>258</sup>。

以上の内容から分かるように、主催者は狭い国土に多くの人口を抱える日本の実状を述べながら、満洲の重要性を強調した。また、日本と満洲とが緊密な関係であると訴えたことから、見学団員に「帝国臣民として日本のために、満洲のために尽力しよう」という意識を向上させる意図がうかがえる。

このように、諸準備を整えた上で「見学団」は各方面からの期待を背に「花咲き鳥謳ふ、懐かしの母国」<sup>259</sup>へ向けて出発したのである。

## 2.5 母国見学の実態

### 2.5.1 見学都市及び場所

各年度の見学都市及び場所を整理したものが表4-3である。

表4-3 1920年-1927年母国見学都市及び場所一覧

見学ルート	見学場所
1920年第1回(3月20日-4月3日) 大連港出発(大阪商船会社哈爾賓丸)→門司→下関→神戸→大阪→東京→名古屋經由山田→京都→神戸→大連港	下関：八幡製鉄所、赤間神宮 宮島：巖島神社 大阪：中之島公園、大阪城、大阪通天閣、天王寺、市民博覧会、大大阪記念博覧会、中央公会堂、造幣局、砲兵工廠、王子製紙場、中山太陽堂化粧品製造工場、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社、愛日尋常高等小学校、船場小学校、千日前、道頓堀、松竹座、三越呉服店 東京：宮城拝観、靖国神社、明治神宮、新宿御苑、東宮御所、乃木邸、二重橋畔楠公銅像、西郷翁の銅像、愛宕山曲垣平九郎の旧蹟、桜田門、増上寺、高輪泉岳寺、後樂園、上野動物園、日比谷公園、小石川植物園、帝国劇
1921年第2回(3月26日-4月13日) 大連港出発(東洋汽船サイベリヤ丸)→神戸→大阪→奈良→山田→名古屋→東京→鎌倉→京都→神戸→宮島→門司→大連港	東京：宮城拝観、靖国神社、明治神宮、新宿御苑、東宮御所、乃木邸、二重橋畔楠公銅像、西郷翁の銅像、愛宕山曲垣平九郎の旧蹟、桜田門、増上寺、高輪泉岳寺、後樂園、上野動物園、日比谷公園、小石川植物園、帝国劇
1922年第3回(3月14日-4月5日) 大連駅出発→蘇家屯→安東→京城→釜山→神戸→大阪→東京→名古屋→山田→奈良→京都→神戸→門司→大連港	

<sup>258</sup> 同上。

<sup>259</sup> 「花咲き鳥謳ふ、懐かしの母国へ」1921年3月26日付『満日』。

<p>1923年第4回(3月15日-4月4日) 大連駅出発→奉天→安東→京城→釜山→下関 →大阪→京都→奈良→山田→東京→神戸→大連港</p>	<p>場、帝国議会議事堂、衆議院、貴族院、外務、海軍、司法各省、関東庁東京出張所、満鉄東京支社、東洋汽船見学、鐘淵紡績会社、森永製菓会社、本所被服廠跡、三越呉服店、浅草、平和博覧会、歌舞伎座、国技館、日光見学、第一高等学校、帝国大学、永田町小学校</p>
<p>1924年第5回(3月13日-4月2日) 大連駅出発→奉天→京城→釜山→下関→宮島 →大阪→東京→名古屋→山田→奈良→京都→神戸→大連港</p>	<p>鎌倉：八幡宮、江ノ島、大仏、建長寺 名古屋：熱田神宮 山田：伊勢大廟、二見浦 奈良：春日神社、東大寺、橿原神宮、興福寺、皇室博物館</p>
<p>1925年第6回(3月13日-4月4日) 大連駅出発→奉天→京城→釜山→宮島→岡山 →京都→奈良→山田→名古屋→東京→大阪→神戸→大連港</p>	<p>京都：桃山御陵、御所、平安神宮、乃木神社、豊国神社、八坂神社、知恩院、金閣寺、東本願寺、三十三間堂、方広寺、清水寺、円山公園、北野天満宮、京都市商品陳列所、嵐山、東山、耳塚、動物園、修道校、郁文小学校、南座、島津製作所、近江八景其他</p>
<p>1927年第7回(7月25日-8月13日) 大連港出発(大阪商船会社哈爾濱丸)→門司 →下関→神戸→大阪→京都→奈良→山田→名古屋→東京→神戸→大連港</p>	<p>岡山：後樂園、深柢小学校 神戸：諏訪山、布引の瀧、熊内小学校、湊川神社、日本燐寸会社工場 京城：景福宮、昌徳宮、昌慶苑、南山公園、漢陽公園、高麗の遺跡、朝鮮総督府、朝鮮銀行、美術品製作所、李王職植物園、博物館、京城日報社、朝鮮新聞社、高等普通学校、桜井小学校、南大門小学校</p>

出典：1920年-1927年『満日』により筆者作成。

表4-3に示したように、第1、2、7回目の見学は大連を出発し、海路で神戸に上陸するというルートを取ったが、1922年第3-6回目の見学は、往路が大連を出発し、鉄道で朝鮮を経由し、京城、釜山において市中見学を終えてから関釜連絡船で下関に上陸し、さらに山陽線で神戸に至るというルートに、復路が神戸を出発し海路大連に帰航するというルートに変更された。

見学都市は、東京、大阪、京都、名古屋、奈良、神戸、また朝鮮の京城、釜山を中心とする。旅行中は主に鉄道によって諸都市間を移動した。見学場所はさまざまであったが、分類すると、次の9点にまとめられる。

- (1) 伊勢神宮、宮城、明治神宮、御所、桃山御陵など、天皇と関係の深い場所
- (2) 靖国神社、乃木神社、豊国神社、東大寺、清水寺、興福寺などの神社仏閣
- (3) 二重橋楠公銅像、乃木邸などの忠勇賢哲の歴史的遺跡
- (4) 貴衆両院、外務省、海軍省、司法省などの政府機関、及び朝鮮総督府、関東庁東京出張所、満鉄東京支社などの植民地関係の場所
- (5) 大阪愛日尋常高等小学校、船場小学校、東京永田町小学校、神戸熊内小学校、京都郁文小学校、岡山深柢小学校、第一高等学校、帝国大学、京城南大門小学校、桜井小学校などの教育機関
- (6) 日比谷公園、上野公園、平和記念東京博覧会、大大阪記念博覧会、博物館、京都南座劇場、帝国劇場、宝塚などの文化的な場所
- (7) 中山太陽堂化粧品製造工場、造幣局、砲兵工廠、王子製紙、島津製作所、鐘淵紡績会社、森永製菓会社、日本燐寸会社工場などの会社・工場



- (8) 満日社東京支社、京城日報社、朝鮮日報社、大阪毎日新聞社、大阪朝日新聞社などの新聞社
- (9) 近江八景、嵐山、江ノ島などの観光名所
- 以上の見学場所において特に注目されるのは宮城の拝観である。

### 2.5.2 「見学団」への特典—日本初の小学生の宮城拝観

現在、一般の日本国民は新年や天皇誕生日の一般参賀や修学旅行などの一般参観で、皇居を拝観できるが、明治期においては宮城の拝観は宮殿営造にのための献金や献品をした人々に対してのみ許可された<sup>260</sup>。

ところが、前章で述べたように、第一次世界大戦の勃発、ロシア革命、米騒動という内外の衝撃がおよぼした影響は政治、経済に止まらず、思想にも波及した。民主主義・平和主義の思想は徐々に人々の心を捉え、それにともない、国民思想も激しい動揺に見舞われつつあった。それについて、1918年第41議会に提出された「教育振興に関する建議案」では「欧州大乱の後を承け世界的思潮の動揺甚しく延て我か国民思想の上に多大の影響を及ぼすへき今の時に於て殊に国民教育の上に最善の努力を致さざるへからす」<sup>261</sup>と主張され、国民思想の動揺への対処策として国民教育の充実が求められた。その後は、国民思想の善導や、皇室尊崇・敬神の念を養成することが教育上における最も重要な目標となったのである。

このような背景の下、1918年には通信省所管の商船学校学生が課程を修了して実習に派遣される際、宮城拝観が許可された。これを嚆矢として、その以後一般の人々の拝観が次第に行われるようになっていく<sup>262</sup>。そして、その後も宮城拝観は拡大し続けていく<sup>263</sup>。

1923年2月12日、皇室尊崇の念を深めるため、東京市学務委員小久江美代吉、長町康夫が宮内省に出頭、高橋事務官に会見して、東京市内小学校卒業生に対する宮城拝観の許可を出願したという経緯がある<sup>264</sup>。3月30日にいたって、文部省を通じて東京市学務課に「今年度卒業生から拝観を許されたので四月一杯に拝観を終るような形式で改めて出願するよう」<sup>265</sup>との非公式の通牒があった。そこで、東京市では高等科6,400人、尋常科33,000人、計40,000人近くの卒業生を3,000人ずつに分けて、大体10日間で拝観させる計画を立てた<sup>266</sup>。それをきっかけに、小学校の子どもに対する宮城拝観が許可されるようになった<sup>267</sup>。とはいえ、宮城拝観を実現する最初の一步を踏み出したのは、日本国内の小学校ではなく、満洲からきた「在満児童母国見学団」であった。

満日社は1923年第4回「見学団」を企画した際に、満日社東京支社を通して、宮内

<sup>260</sup> 河西秀哉『皇居の近現代史—開かれた皇室像の誕生』吉川弘文館、2015年、18-19頁。

<sup>261</sup> 大日本帝国議会誌刊行会『大日本帝国議会誌』第11巻、1929年、969頁。

<sup>262</sup> 河西秀哉、前掲書、21-22頁。

<sup>263</sup> 同上、33頁。

<sup>264</sup> 「宮城拝観願ひ」1923年2月13日付『朝日新聞』。

<sup>265</sup> 「小学生の宮城拝観 いよいよ許可 四月一ぱいに」1923年3月31日付『朝日新聞』。

<sup>266</sup> 同上。

<sup>267</sup> 小学生の宮城拝観は全国的に許可 宮内省と文部省とが協議中」1923年3月22日付『朝日新聞』。



省に「見学団」の宮城拝観を出願した。その後、関東長官伊集院彦吉、満鉄社長川村竹治らの斡旋によって、3月17日に宮内省は、「見学団」の宮城拝観を許可した<sup>268</sup>。同年3月27日午後「見学団」一行は宮城を拝観した。

それについて、『満日』は「実に此の事たる我社のみ占有すべき光栄でなく母国植民地全部を通じての最大の光栄感激でなければならぬ、近年宮中に於かせられては国民思想の変遷に留意され皇室と民衆との接触に重きを置かせられ諸御儀式の如き又宮内省の如き次第に簡略に開放的に御躬ら国民に質実の範を垂れさせ玉ふやうになつた、殊に国民教育の振作興隆といふことに就ては殊に重きを置かせられ児童の精神を陶冶しさうして皇室と国民との接触の上から近く全国の小学児童に対し宮城拝観を許可すべく詮衡さるゝまでに至つた、これは近く実現すること疑ひないが此時に當つて我社主催の見学団に対し拝観許可の恩典を與えられたといふことは洵に我社の光栄のみでなく全国民の光栄として感激恐懼する次第である」<sup>269</sup>と、感謝の意を表した。そして、満洲の教育関係者も「見学団」の宮城拝観について、『満日』に祝賀のメッセージを送った。例えば、大連民政署長は「満洲の如く宮城の所在地に遠く離れて内地の事情を深く知らない小学児童は動もすれば皇室に対する尊敬の念が薄くなり易い傾きがあり勝ちであるがさういふ弊害を一掃する上にも多大の意義があると思ふ、恐らく貴社主催の見学団の小学児童の宮城拝観第一回の光栄に浴するであらうが児童のためにも此の上ない幸福であると共に教育のためにも実に慶賀すべきことである」<sup>270</sup>。大連民政署視学は「団員は始めて宮城を実地に拝して皇室に対する崇敬の念を幼き胸に刻み今までは只学校で教科書を通じて教師の口より抽象的に教へられたのがその実物を拝することによつて一層尊敬の心を深くし陛下の御鴻恩を感得するやうになるであらうと思ふ」<sup>271</sup>。また、参加児童の保護者は「今回満洲の小学児童に宮城内拝観を許された事は今日の御代の有難さが沁みじみ感ぜられる宮城内を拝観した子供は永久の其印象を深くし単に子供其ものよりも之等の子供等が将来親となつて其子弟を教養する上に於て何の位宜い効果が齎すかは筆舌に尽くし難い所であらう（中略）兎に角海外に在る一新聞社たる貴社が内地の大新聞社でさへ企て及ばなかつた事を企て愈拝観を許された事は一大成功と云わねばならぬと共に我満洲の為に誇るに足るべき事であらう何にしても感激に堪えぬ次第である」<sup>272</sup>などと、満日社に祝辞や感謝の意を伝えた。それに加えて、教育関係者は国民教育とくに在満日本人教育における宮城拝観の役割を強調した。「見学団」に対する宮城拝観が許可されたことには、植民地統治者が日本の植民地としての満洲の重要性を十分に認識した上で、「母国と母国の延長をつなぐ国家の最前哨線に健かに生立つ第二の国民」<sup>273</sup>に皇室尊崇の念を与えることに

<sup>268</sup> 「宮城拝観の特典を与へらる」1923年3月18日付、「宮城拝観 正式許可 我社主催第四回母国見学団の光栄 国民教育上一新紀元を画する最大の感激」1923年3月21日付『満日』。

<sup>269</sup> 「宮城拝観 正式許可 我社主催第四回母国見学団の光栄 国民教育上一新紀元を画する最大の感激」1923年3月21日付『満日』。

<sup>270</sup> 「皇室と人民と接触の第一歩 母国見学団宮城拝観の許可は教育上大慶」1923年3月21日付『満日』。

<sup>271</sup> 「敬虔に打たれた 拝観の思ひ出 岐津視学の講話」1923年3月21日付『満日』。

<sup>272</sup> 「保護者として真に感謝に堪えぬ 千田次郎氏の談」1923年3月21日付『満日』。

<sup>273</sup> 「満日晴れの今朝八時 第四回母国見学団出発」1923年3月16日付『満日』。

より、将来的に満洲経営の後継者として満蒙発展、国民教育における十分な役割を果たすことを期待する意図が見られよう。

### 2.5.3 見学都市における小学校との交流

内地と満洲の生徒の親交を深めるという目的で「見学団」は各見学都市における小学校と交流を行った。例えば、1922年3月第3回「見学団」は大阪愛日小学校を参観した。『満日』は当日の様子を次のように掲載している。

午前十時同校を訪ふた全生徒一千余名拍手起立して見学団を迎え生徒総代は一步を前に進めて挨拶した曰く「母国は今や島唄ひ花笑ふの好季となりました此の時期に当りまして皆々様は遠き満洲から母国の春を訪はれるのみでなく我校を観覧下さいました事は唯だ感激の外はありません吾々一千余の生徒否兄弟姉妹は親の許を離れぬ幼き燕と等しいもので今皆さんのご来阪を耳にし不甲斐なさを恥た次第であります然し吾々も何れ皆さんの様に海外に出る時も来るであります其時は必死の力と皆さんの援助とに依りまして忠君愛国の念を益々深くし国家の為め働きますから何卒宜しく御願ひ致します、(中略)」云々と述べ我一行は団歌を歌つて答辞に代へ夫より講堂に入り演芸会を見た演芸会は前後十数日あり歌劇学校劇、独唱ありて一同感謝し終つて茶菓の饗応を受け夫より大阪毎日新聞社を見学し三時四十分東京に向つた<sup>274</sup>。

下線を付した部分からは、「見学団」のため、愛日小学校は全校を挙げて歓迎式典を開催したことがわかる。生徒代表は両親のもとを離れ長旅の末に来阪した「見学団」に対して敬意を表した。また、在満児童が祖国を離れて遠い満洲に移住したのは、「忠君愛国の念を益々深くし国家の為め」であるとの認識も示した。さらに、将来自分たちも「忠君愛国」の念で働きたいという志を表していた。それに対して、「見学団」は答辞として団歌を高唱した。

見学後、見学団員は「愛日小学校から一児童が代表として歓迎の辞を述べましたが態度と言ひ演説と言ひ実に立派でありました之に対して見学団は団歌を高唱して答辞に代へました夫から学芸会がありました歌劇の如きは堂に入った者でした一行は悉く感心致しまして私共も同じく日本の児童でありまして同じく稽古をして居りますがとても及びません<sup>275</sup>という感想を述べ、在満児童は、内地小学生は自分達より進んでいるとして、内地の児童の優秀さに感心していた。さらに、「之は畢竟私共の勉強が足りないからであります、帰つたら一心に勉強して母国の生徒に負けないやうにしなければなりません<sup>276</sup>との認識を示した。

2年後の1924年、第5回「見学団」も愛日小学校を訪問した。見学当日、愛日小学校が行なつた歓迎会において、愛日小学校生徒代表の歓迎の辞に対して、団員代表は快活かつ明瞭な答辞を述べた<sup>277</sup>。

このように、「見学団」は内地小学校との交流を通じて、在満児童に内地小学生の優秀さを見せると同時に、内地小学生に在満児童の実力を示すこともできるため、児童たちは互いの優れたところを認め合うこととなる。

<sup>274</sup> 「第三回在満小学児童母国見学だより」1922年3月23日付『満日』。

<sup>275</sup> 「母国を見学した児童の感想」1922年4月11日付『満日』。

<sup>276</sup> 同上。

<sup>277</sup> 「我社主催 母国見学 第十三信(大阪の通信池内特派員)」1924年3月24日付『満日』。

ほかには、見学中、団員と見学地の小学生との間で野球試合も行った。前述したように、1922年から「見学団」は朝鮮経由で日本へ向かった。朝鮮滞在中、京城、釜山の市中見学も実施した。1923年3月第4回「見学団」は京城滞在中に桜井小学校からの要請で歓迎野球試合を行った。

試合はたんに「見学団」と桜井小学校との間の野球対抗戦というだけではなく、母国を離れた満洲と朝鮮で生まれ育った少年との野球交歓会であった。それについて、『満日』は「<数多くの試合を見たが未だ曾て斯くの如く愉快にして意義多き試合を見た事が無い>とは観衆の口から一斉に漏れた嘆美の声であつた（中略）内鮮人観衆はスタンドを囲んで熱心に観戦しファインプレーの演ぜらるゝ度毎に歓呼の声が湧き両軍応援団の声援も却ゝ素晴らしい」と当日の場面を描いた<sup>278</sup>。結果は6対0で「見学団」の圧勝に終わった。

朝鮮での試合をきっかけとして、第4回「見学団」は京都滞在中に修道校からも歓迎野球試合の要請が届いた。試合の結果は「七回ゲームに於いて我チームは第一回二点、第四回二点、第五回四点、第六回三点合計十一点を得たるに敵は終始振はず遂に零敗の憂目を見せしめ大いに満洲の為に気を吐き応援団熱狂したるに反して敵は全く沈黙し只我連合軍に対し感嘆するのみであつた」<sup>279</sup>。このような野球試合はその後の内地見学旅行でも継続された。

前章で触れたように、野球は団体の遊技であり、活動中には団体意識のみならず、社会的公共心、忠君愛国の念を涵養することもできる。この意味で、朝鮮や内地の小学校との野球試合を通じ、母国を離れてそれぞれ満洲と朝鮮に育った児童たちは、お互いに日本人としてのアイデンティティを喚起し合い、自分が属する満洲や朝鮮のため尽力しようという意識を高めることができたと考えられる。またそこには、日本が植民地統治手段の一つとして野球を利用することにより、指導者の指示に従順な集団を創り出そうとする企図もうかがえよう。

### 第3節 感想文からみた見学成果—

#### 日本人としてのアイデンティティ及び満洲宣伝

表 4-4 関東州及び満鉄沿線初等学校生徒逐年表（1920-1925年）

関東州		満鉄沿線	
年度	生徒数（名）	年度	生徒数（名）
1920	8,035	1920	8,432
1921	8,612	1921	9,110
1922	9,249	1922	9,559
1923	9,772	1923	10,420
1924	10,212	1924	10,830
1925	10,423	1925	11,166
合計	56,303	合計	59,517

<sup>278</sup> 「京城の見学振り 偶発的鮮満対抗野球 試合に半島球界の幕開き」1923年3月22日付『満日』。

<sup>279</sup> 「第四回母国見学団だより」1923年3月27日付『満日』。

総計	115,820
----	---------

出典：関東州の生徒数は『満洲教育史』（嶋田道彌、文教社、1935年、47頁）、満鉄附属地の生徒数は『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』（佐田弘治郎、南満洲鉄道株式会社、1928年、1142頁）に基づき筆者作成。

本章の第1節で述べた通り、見学団員は、1920年から1925年にかけて全6回にわたり計492名にのぼった。表4-4が示すように、1920-1925年において、関東州及び満鉄沿線各地における小学生生徒総数は115,820人に達した。したがって、「見学団」の参加者は全体の0.5%に満たない。

とはいえ、教科書や教師の言葉で伝えるより、実際に目で見るという方法が有効であることは言うまでもない。参加児童は3週間前後にわたって日本国内各都市に滞在しながら古跡名所のみならず、文化的な公園や博覧会、化学工場なども見学した。そして、見学都市における小学校などとの交流も行った。母国見学が在満児童にもたらした影響は児童らが書いた感想文を分析することで明らかになると思われる。

表4-5に示したように、在満児童は、宮城拝観や伊勢神宮の参拝を通じて、皇室に対する尊崇の念だけでなく、日本人としてのアイデンティティをも認識することとなった（表4-5の1、2を参照）。

表4-5 団員からの見学感想文の例

番号	日付	内容
1	1921年4月11日	私は老杉天を摩す伊勢の神々しさに驚きました。
2	1921年4月17日	僕の常々の望みが始めて今日遂に達せられたのだ、それはどうしてかといふと外国人ならいざしらず自分は日本国民と生れた以上はどうしても一度は皇城を拝したいと思つて居た。
3	1921年4月19日	各地何れも建築物■道路等は寧ろ満洲の方が良いと想つて敢えて驚かなかつたが交通機関の完備しているに一驚を■した小さな家や小路の処に一杯詰まつて建っているのには一番驚かされた云々要するに満洲の方がいい自分達は満洲で活動するといふに一致しているようであつた。
4	1922年4月2日	内地のめづらしい■が次から次へと織り出される様であつた。山々はもう青々として木は緑の葉をたくさん出して満洲の春にくらべるとまことに早いのは驚いた、麦はもう三四寸程のびて百姓は朝早くから畑の手入れ、たねまきをして居り、くわをかついで尻をへし折つてわらちをはいてトボトボ行く様子は大変おかしかつた。内地は大変老人が多いが中々元気なもので百姓をしたり散歩をしたりしてゐるのはよく衛生上の心得をわきまへた人と云はれるであらう。

5	1922年4月2日	(前略) 其の長年ののぞみをはたす第一歩に今はいつたのであるから我々の喜びは非常なものである其の祖国へ上陸して見れば我が想像以外のものであつた併し我々は大坂等の道路の悪い所等を見て将来日本人となつたならば大いに努力して益々盛んに良くしなければならぬと思つた。
---	-----------	---

出典：『満日』により筆者作成。

また、当時、在満日本人の半分近くは満鉄社員であり<sup>280</sup>、内地よりも高額な給料をもらっていた。こうした経済的な余裕が派手な生活に結びついていた<sup>281</sup>。この意味で、満洲において余裕のある家庭で育てられた見学団員に、狭い家に居住し（表 4-5 の 3 を参照）、苦心惨憺して田畑の耕作または労働に従事している（表 4-5 の 4 を参照）内地の日本人の姿を見せることにより、国民精神涵養の一環として、在満児童の奮闘心を喚起しようとした意図もうかがえよう。

他方、「見学団」に対して、内地の日本人はどのような認識を示したのか。第 3 回見学団員、奉天春日小学校尋常 6 年生の原田順一が書いた感想文を取り上げてみよう。

(前略) 又一人のお爺さんか来て

「学生さん■は、何処から来たのかな」と問ふから

「満洲から来ましたよ」と言ふと

「えー満洲から。それでは支那人ですな」

「いや、違ひますよ、皆日本人です」

「か、日本も満洲も言葉は同してすな」

こんな門答をした。またこんなことを思つて居る人かあるかと思ふと、情なくなつた。

(中略) 次に久留島先生の御招待で帝国劇場へ行つた。面白い喜劇や音楽を見たり聞いたりして居る内に久留島先生か「足跡の花」と謂ふ題てお話をなさいまして、終に僕等を紹介してくださいました。

「皆さんの中に、大変元気な勇氣に充ちた方々か来て居られることを御紹介致します。夫れは皆さんの後の方に徽章をつけて居る学生諸君です我が同胞の血を肥料として生ひ育つた満洲の児童諸君です……」すると大勢の人々の眼は一齋に僕等の方に向いた。

僕等は急に鼻か高くなり出した。

先生のお話かすむと、高い舞台の上に上つて楽隊に合せて団歌を歌つた。大変な拍手喝采でした。

そして文化の花束を貰ひ、団長さんか挨拶をなさつた後僕等満洲の者と、内地の人と一緒に「君か代」を歌ひました。

この時は皆涙を落して、今迄威張つて居たのに急に打■れる■強い感して打たれました、そして何でも満洲で働いて御国の為に盡したいと考へました。……<sup>282</sup>

上述の例からみれば、「見学団」は見学中の内地の人々との交流を通じて、「満洲

<sup>280</sup> 塚瀬進、前掲書、176-177 頁。

<sup>281</sup> 同上、186 頁。

<sup>282</sup> 原田順一「日本内地見学記」三井兵治『朋友』新進堂、1922 年、140-157 頁。

は、忠勇な将士の血を流した土地であり、満洲に在住する日本人はわれわれと同じように日本語を話す同胞である」というように、内地日本人の対満認識を深めた。また、内地の人々と「君が代」を合唱することにより、在満児童が日本人としてのアイデンティティを再確認したことも読み取れる。

そして、参加児童は所属学校の代表として旅行中に各自の見学の感想を見学地から各学校に送ることが義務として定められていた。それに加えて、各学校は「見学団」の行程図を作成して、「見学団」の日程の順に従って在校中の児童たちにその地の地理や歴史について説明を行った。見学終了後、参加児童は各学校で開催された見学報告会において、見学地でもらった土産としての学習参考用品を展示したり、見聞談や感想談を発表したりした<sup>283</sup>。さらに、学校生活における日々の交流を通して、見学した感想を直にほかの児童に伝達することにより、参加できなかった児童にも見学の利益を共有させるという主催者や教育関係者の意図もうかがえる。この意味で、「見学団」がもたらした有形無形の影響は、単に参加団員だけでなく、参加しなかった児童にも及んでいることが看取できるだろう。

## 小結

以上、1920年から1927年にかけて継続的に組織された満日社が主催した「在満児童母国見学団」に焦点をあてて、『満日』の紙面記事と照合しつつ、その実施趣旨、内容及びその成果を概観した。

満洲と日本内地の間で、数週間の内地滞在を伴う往来を6年間6回にわたって定期的に繰り返した見学活動によって、児童達は母国日本に関する地理・歴史知識への理解をより深めただけでなく、伊勢神宮、宮城の拝観により国体皇室に対する尊崇の念、近代的な商工業を見学して母国日本への「敬意」を涵養することはもちろん、母国と満洲との関係に対する理解も一層深めたと考えられる。さらに、満洲生まれの児童を「第二国民」として模範的な日本国民に育て上げるという植民地統治者の意図がうかがえる。

他方、在満児童の行動を通じて、満洲の実状を母国の人々に知らせることにより、内地日本人の対満洲認識を深めるには多少なりとも資することができたと思われる。植民地経営において、「見学団」が教育政策の一環として重要な役割を担ったことは否定できない。

ところが、満日社は1926年4月5日に『満日』紙面に次のような社告を掲載し、2年連続病死した団員がいたという理由で、1926年から6年にわたって実施した「在満児童母国見学団」を中止することとした。

### 「母国見学団の主権につきて」

我社主催の母国見学団は、その行程を終り、昨日大連埠頭において解散した。我社は、団員諸君の健康を祝し、将来益々、学業に専心し、邦家のため、満蒙のため、最善の努力を盡されんことを希望しておく。

我満蒙の天地において、将来大いに活動せんとする第二の日本国民を最も国民的に陶冶すべく、満蒙において生まれたるもの或は生まれたも同然なる少年諸君に、母国の風土文物を見学せしむるは、緊要かくべからざるところ、而して我社の夙に主催して

<sup>283</sup> 「我社の母国見学団 学童見学準備成る 生徒附添参加者決定 内外各方面の好意と便宜」1920年3月13日、「第三小学見学報告会 土産品の展覧」1923年4月13日、「我社主催の小学生母国見学団 希望者が多数なので公平に抽籤で決定する」1924年2月20日付『満日』。

恒例となり来たつたところであつた。而して殊に、皇居を拝し、宮城の拝観を差許さるることは、国民精神涵養の上に、切実深刻なる感激を与ふる、必ずしも喋々を要せざるところである。故に我社は、万難を排し、最も周到なる注意を以て、大連旅順を初め沿線各地より、優秀なる少年諸君を募集し、母国見学の壮挙を敢行し来つた。これ我社が満蒙の植民地において国民精神を作興せんとする微衷に外ならぬ。

然るに今度の一行中、奉天の松岡正三君、哈爾賓の山口■君は不幸にも東京の旅館において病没した。（中略）尽力を傾注して、しかも如何とかもすべらざる不可抗の不幸の出来を見たる以上は、我社としても、国民精神の振作にのみ邁進する訳には行かない。我社の目的とする微衷の努力は、他の手段に代へて、これを遂行すべきであらう。茲において我社は、遺憾ながら、（中略）昨年及び今年の不幸に鑑、恒例なる主催を中止し、これに代ふるに、他の適当なる方法を以て、我社の目的とするところを遂行し、些か以て国家社会に貢献せんと期するものである<sup>284</sup>

下線を付した部分からわかるように、満日社は「満蒙の植民地において国民精神を作興し、植民地経営にふさわしい後継者を育成する」という目的で「在満児童見学団」を企画した。

また、「在満児童見学団」（第7回）は1927年7月25日から8月13日にかけての19日間において一時再開されたが<sup>285</sup>、翌年から閉幕することとなった。

第一次世界大戦がおよぼした国民思想の動揺、中国各地に起った排日運動などの影響で、国民精神を作興するために、日本国内だけではなく、植民地においても教育について改革が求められた。こうした状況の下で、満洲の統治者である関東庁及び満鉄は、満日社の名を借りて、植民地教育を発展させる一つの装置として「見学団」を利用しようとした。

満日社は、関東庁、満鉄の後援をはじめ、大阪商船、東洋商船、また、日本国内において満日社東京支社、関東庁東京出張所及び満鉄東京支社を通じて、文部省、鉄道院、宮内省、その他の政府・府県当局、各地における商店、旅館、小学校、工場、新聞社などの斡旋に努めた上、「日本-朝鮮-満洲」交通網を利用し、大連を中心に、満鉄沿線各地における日本人小学生を団員として、団長、付添教員、衛生医、特派記者、団歌、団章などを含む完備な「見学団」を組織したのである。

「見学団」は、年1回、毎年春季（第7回のみ夏季）に実施され、参加者は3週間前後にわたって日本国内各都市に滞在しながら古跡名所、近代的商工業などを訪問し、その足跡は植民地朝鮮にも及んでいた。これは日本国内外を通しても非常な「大壮挙」と言っても過言ではない。その背景には、「日本-朝鮮-満洲」交通網を通じた「内鮮満一体化」の意図があったと考えられる。

また、見学場所の多くは神社仏閣及び天皇制と関係の深い場所である。そのことから遠く満洲に生れた児童たちに尊皇愛国への理解と「帝国臣民」としての自覚を育てるという主催側の企図がうかがえよう。

この時期、日本国内の修学旅行あるいは日本の植民地から内地への修学旅行におい

<sup>284</sup> 1925年4月5日付『満日』社告。

<sup>285</sup> 「本社主催小学生の母国見学団復活す」1927年7月20日付『満日』。「従来は尋常科の生徒をも参加させたが、長途の旅行に於て保健上遺憾の点もあるが今回小学校長会議において小学生の母国見学が教育上非常なる好結果を果す事を証明し、是非継続されたき■、本社に交渉し来れるを以て茲に之を復活本年度より心身の相当発達せる高等科生のみを選抜して以て団員とする事になった。」

て、見学させた場所の多くは、神社や近代化の成果である。換言すれば、修学旅行を通じて生徒たちの意識に国体と日本固有の歴史、近代化の産物を注入するという役割を果たしたという点で共通している<sup>286</sup>。さらに、1920年代の大連在住日本人を取り巻く社会状況を簡単にふりかえると、「在満児童母国見学団」の果たした役割の重要性が一層大きいものとして捉えられる。

前章で触れたように、1920年代前半の満洲では、在満日本人商工業者の経営的衰退に対して、中国人職人・商人が勢力を伸ばしていた。このような状況の下、将来に不安を覚える日本人は少なくなかった<sup>287</sup>。この点から考えれば、新聞社、商工業工場、公園、学校など「母国工商業の発達をはじめ各種の文化施設」を見学させるのは、満洲における商工業の振興にとって大きな意味があったといえよう。さらに、そこには「帝国が世界に冠絶せる国家たる所以を解せしむる」<sup>288</sup>という大目標を達成する意図もうかがえる。

また、満日社は「見学団」を組織するにとどまらず、『満日』紙面に「見学団」の趣旨、団員の選抜、見学日程、見学ルート、感想文などを詳しく掲載することにより、「見学団」の趣旨を在満日本人に浸透させ、さらに、「見学団」に対する良好な世論環境の形成を図った。当時の中国東北地域において『満日』が広く読まれたという点からみれば、「見学団」の影響は東北広い地域に及んだことが推測できるだろう。

---

<sup>286</sup> 曾山毅「日本統治期台湾における修学旅行の展開—『台湾日日新報』を中心に」『観光学評論』（1-2）観光学術学会、2013年、190頁。

<sup>287</sup> 塚瀬進、前掲書、125頁。

<sup>288</sup> 「第二回在満学童母国見学の一大快挙」1921年2月19日付『満日』。



## 第5章 海軍宣伝の一助としての「艦隊便乗見学」（1921年-1932年）

第4章でも触れたように、第1次世界大戦は各分野に大きな影響を与えたが、国際的に見るならばそれは国際政治のバランスに少なからぬ変動をもたらした。戦争の結果、ドイツ海軍は崩壊し、フランス海軍も、凋落した（表5-1を参照）。結局、戦後においてなお強大な海軍力を持つのは、日本・アメリカ・イギリスの三国だけとなった<sup>289</sup>。

表5-1 第1次世界大戦終了時における列強海軍主要艦艇数

	戦艦	巡洋戦艦	重巡洋艦	軽巡洋艦	嚮導艦	駆逐艦	潜水艦	空母
日	13	7	9	9	-	72	16	-
英	61	9	30	90	23	443	63	4
米	39	-	16	19	-	131	86	-
仏	20	-	21	8	-	91	63	-
伊	14	-	7	10	8	44	78	-
独	40	5	3	32	-	200	162	-

出典：財団法人 海軍歴史保存会『日本海軍史 第3巻 通史 第4編』第一法規出版、1995年、27頁。

以来、日本の八八艦隊案<sup>290</sup>、アメリカのダニエルズ計画<sup>291</sup>、イギリスのジェリコー勸告<sup>292</sup>と、太平洋の覇権をめぐる、この三大海軍国間で新たな建艦競争が展開され

<sup>289</sup> 財団法人海軍歴史保存会『日本海軍史 第3巻 通史 第4編』第一法規出版、1995年、26頁。

<sup>290</sup> 八八艦隊は戦艦は(大砲を主要兵器とする大型主力軍艦)八隻と巡洋艦(航海力の優れる中型軍艦)八隻を主力とする日本海軍の構成計画である。日露戦争から10年後の1914年7月に第1次世界大戦が勃発すると、日本は日英同盟に基づき参戦したが連合艦隊は編成しなかった。大戦で列国海軍が得た戦訓は、日露戦争同様に「ド級艦は依然として海戦の大勢を決する最大要素であり、海軍兵力の基幹である」との戦艦中心主義で、日本海軍も「各国相競フテ高速ノ巨艦ヲ実現シツツあり」と、1917年には戦艦8隻、巡洋戦艦4隻の八四艦隊、1918年には八六艦隊、続いて1920年には八八艦隊の予算案を通過させた。(平間洋一「連合艦隊盛衰記」『世界の艦船』(733号)海人社、2010年、75-77頁を参照。)

<sup>291</sup> アメリカの海軍建艦計画。日本海軍の八八艦隊計画に対抗して、戦艦10隻、巡洋戦艦6隻を基幹とする155隻、合計80万トンに及ぶ艦隊を3年間で整備するとしたものであった。

<sup>292</sup> 1919年10月に、イギリスのジェリコー提督から提出された「ジェリコー・レポート」である。日本を将来紛争が起り得る国家と規定し、対日戦争に備えるためにカナダ、オーストラリアなどの自治領諸国が資金を分担して戦艦8隻、巡洋戦艦8隻、空母3隻、軽巡洋艦9隻、駆逐艦40隻、駆逐母艦2隻、潜水艦36隻、潜水母艦3隻、艦隊掃海艇12隻、機雷敷設艦1隻、修理艦2隻からなるイギリス自治

ようとしていた。ところが、建艦による軍事費の増大は、疲弊した戦後財政に重圧を加え、イギリスもアメリカもその計画の実現はとうてい不可能だった<sup>293</sup>。

一方、日本海軍は1920年には八八艦隊の予算案を通過させた<sup>294</sup>。それにともなって、八八艦隊整備にかかる費用は莫大なものとなり、表5-2に示されるように、1921年には、海軍費は1917年の3倍に膨れ上がり、国家歳出の3分の1を占めるに至ったのである<sup>295</sup>。こうした海軍費の増加は社会事業費や教育費などの削減を招き、国民は大きな負担を強いられた。このように、将来的に海軍費を維持することへの財政的不安が生じた結果、各国の軍縮気運が高まっていったのである。

表5-2 日本の国家総予算に対する海軍予算（1917年-1926年）

年 度	国家総予算 (百万円)	海軍予算 (百万円)	海軍予算の総予算に 対する割合 (%)	陸海軍予算の総予算 に対する割合 (%)
1917年	780	118	15.2	28.5
1918年	902	184	20.5	33.7
1919年	1,064	249	23.4	37.0
1920年	1,504	398	26.5	42.0
1921年	1,591	502	31.6	48.1
1922年	1,501	397	26.5	43.6
1923年	1,389	278	20.0	34.9
1924年	1,785	282	15.8	28.0
1925年	1,580	227	14.4	27.0
1926年	1,666	239	14.4	26.4

出典：野村實『日本海軍の歴史』吉川弘文館、2002年、113頁。

こうした海軍軍縮問題が、1920-1930年代において、最も重要な政治的争点となった。この情勢に対して、日本国内の新聞だけでなく、植民地日本語新聞も積極的に軍縮に関する報道や事業活動を展開した。

その中で、最も注目すべきなのは、大連海務協会（以下は海務協会と略す）と満日社が共催した「艦隊便乗見学」（以下「便乗見学」と略す）である。

1921-1932年の12年間に亘って、海務協会と満日社は海事思想普及の目的で、帝国艦隊が大連、旅順へ回航した場合、海軍省及び艦隊司令長官の特別の許可を受けて、

---

領混成艦隊を創設することを勧告した。（「建艦思想に見る海上防衛論—イギリス海軍編」

[http://hiramayoihi.com/yh\\_ronbun\\_kenkan\\_e\\_3.html](http://hiramayoihi.com/yh_ronbun_kenkan_e_3.html)、（平間洋一歴史・戦略・安全保障研究室）。

<sup>293</sup> 池田清『日本の海軍 下 躍進篇』学研M文庫、2002年、74-75頁。

<sup>294</sup> 平間洋一「連合艦隊盛衰記」『世界の艦船』（733号）海人社、2010年、77頁。

<sup>295</sup> 財団法人海軍歴史保存会、前掲書、31頁。

大連、旅順及び満鉄沿線における官民や学生を組織し、「艦隊便乗見学」（以下便乗見学と略す）を行った。

この問題に関してはこれまでの研究ではほとんど言及されていない。「軍艦便乗見学」に触れた研究は、円入智仁『海洋少年団の組織と活動—戦前の社会教育実践史』（九州大学出版会、2011年）、同「大正末期の海軍士官が見た海洋少年団」（『中村学園大学・中村学園大学短期大学研究紀要』44号、2012年、121-129頁）、中嶋晋平『戦前期における海軍の広報活動の展開と民衆—海軍記念日講話を中心に』（大阪市立大学博士学位論文、2013年9月授与）などが挙げられる。園入の研究では、海洋少年団と海軍の関係に着目し、海洋少年団の活動の一環として軍艦便乗を取り上げ、その実態について簡単に触れている。また、中嶋の研究は、1920年代の軍縮期において、海軍はより効果的な広報を展開するため、民間人の軍艦への便乗・見学を活用したことが指摘されているが、軍艦便乗見学の実態については詳しく説明されていない。また、中嶋は、軍艦への便乗・見学に際して、新聞記者を同行させることが多いことに言及しているが、新聞社の軍艦便乗見学への参与などについてはほとんど触れていない。

つまり、従来の研究において、海軍、あるいは少年団のような特定の団体が主催した軍艦便乗見学が注目され、植民地新聞社が主催した軍艦便乗見学を取り上げたものはほとんどないのである。

実際には、海軍省公文備考には、「便乗」という項目がある。この史料の中には、満日社が主催した「便乗見学」に関するものが散見される。ほかには、『満日』、海務協会の機関誌『海友』には、毎年度「便乗見学」の趣旨、内容、参加者の数・属性、注意事項など基礎的な事項のほか、「便乗見学」の一環として実施される講演会や海軍軍楽演奏会などの内容や実施方法、便乗者の感想文も掲載されている。

本章は、この「艦隊便乗見学」に焦点をあてて、海軍省公文備考、『満日』の紙面記事、『海友』、『大連新聞』、『朝日新聞』などを照合しつつ、「便乗見学」の成立とその展開過程及び便乗者の感想について歴史的に考察したうえで、1920-1930年代の軍縮時代において、この「便乗見学」がいかなる役割を果たしたのか、その過程において満日社がいかなる姿勢や考えに基づいて報道活動と事業活動を展開したのかについて検討する。

まず、最初に、「便乗見学」に至る経緯を歴史的背景と絡めて概観する。

## 第1節 ワシントン軍縮会議前後における言説空間

### 1.1 日本国内新聞界の立場—『朝日新聞』の場合

日本国内において東京の有力紙『朝日新聞』（以下『朝日』と略す）は、1920年9月9日にいち早く社説でこれを取り上げ、次のように論じている。

独逸海軍が全滅を見た今日、世界の海軍国と称せらるべきものは、英米日仏伊の五箇国に過ぎない。此中でも仏伊は造艦計画を一切中止し、（中略）其財政状態は今後と雖も此種の拡張を許さぬから、世界の海軍国と指称さるべきものは英米日の三国に出でぬ訳で、今後とも競争相手たるものも此三国に外ならぬ。従つて国際連盟の精神たる軍備縮小にして遵奉さるべきものとすれば、強ひて連盟総会の討議を俟つを要せずして、日英米三国の協議に於て実行さるべき性質のものであると思ふ。（中略）是に於て吾人は当局に向つて注文したい。連盟の精神たる海軍縮小の協議を英米に対し

て提議し、率先して世界平和に貢献せんことである<sup>296</sup>。

つまり、日本が進んで日・英・米三国による軍縮会議の開催を提議すべきであると論じているのである<sup>297</sup>。

アメリカで 1920 年 12 月中旬、共和党上院議員ボラーが、海軍軍縮を訴える動議を提出した<sup>298</sup>。軍事費の財政的圧迫、対米関係の悪化に苦慮した日本政府は、この軍縮会議に対して「欣然参加」の態度を示した。それ以降、各新聞紙の社説は様々な角度からこれを論じている。

1921 年 1 月 21 日、『朝日』は社説「海軍制限協定問題」で、軍備制限の利点について、「軍備支出を社会事業支出に向けることによって、人間幸福の増進を図ること」、「国民の負担の軽減を図ること」、「戦争を防ぐこと」、「国家の壮丁を商工業等に従事させ、国家の富強に資すること」などにまとめ、海軍軍縮の必要性を認めている。さらに、「打ち上げて言へば、吾人は独り英米日の三国のみに限らず、世界各国を網羅する軍備縮小を以て最も望ましきこと思惟す。(中略)吾人は(中略)三国間の軍備制限協定を提議せるに対しては、満腔の賛意を表せざる能はず<sup>299</sup>と軍縮を支持する立場を明らかにした。

1921 年 7 月 11 日、アメリカ政府は日英仏伊四国に対して軍縮制限及び極東問題討議のための会議をワシントンで開催することを非公式に提議した<sup>300</sup>。それ以降、ワシントン会議の準備とともに、日本国内の軍縮世論も一層高まりをみせ始めた。

『朝日』は 7 月 13 日にさっそく社説でこの問題を取り上げている。

外電に依ると、米国大統領ワーレン・ハーディング氏は、愈英仏日伊四国に対し明確に招待を發し、追つて定む可き期日に於て華盛頓に軍備制限会議を開催す可きが故に之に賛成参加せんとを求めたとの事である。打ち明けて言ふと、吾人は早晚斯くの如き時局の發展を予期して居たのであつた。(中略)殊に我日本の如きは国貧にして、最も負担の過重に苦しみつゝあるもの、同会議の成功を見せしむるに尽力す可きや、勿論の事と言はねばならない。併し斯くの如き太平洋に重きを置く軍備制限会議が迅速に開催せられんとするに至つた最要の事情の一は、矢張り日英同盟条約改訂に在ることを忘却してはならぬ。(中略)即ち我國民は宜しく此会議が日英同盟その者に密接なる点に於て普通の軍備制限会議以上なることを了解し、刮目以て其今後の發展を見る可きであらうと思ふ。殊に同会議が単に軍備問題のみに止まらず、一般太平洋問題にも及ばんとするに於て、吾人益重要なる分子の伏在を感ぜねばならない<sup>301</sup>。

以上の内容から分かるように、『朝日』はワシントン会議に大きな期待を抱きながらも、この会議が単に軍備問題のみにとどまらず、日英同盟、さらに太平洋問題一般にも関連するものであると強調した。

<sup>296</sup> 「日米関係と海軍縮小 吾より進んで提議せよ」1920年9月9日付『朝日新聞』。

<sup>297</sup> 朝日新聞百年史編集委員会『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』朝日新聞社、1991年、176頁。

<sup>298</sup> 財団法人海軍歴史保存会、前掲書、34頁。

<sup>299</sup> 「海軍制限協定問題」1921年1月12日付『朝日新聞』。

<sup>300</sup> 姜克實「尾崎行雄と軍備縮小同志会—ワシントン会議前後の軍備制限論」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』(38)岡山大学大学院社会文化科学研究科、2014年、6頁。

<sup>301</sup> 「軍備会議及日英同盟」1921年7月13日付『朝日新聞』。

また、『朝日』は同年 8 月 6 日付社説「先決問題は軍国主義の打破 華盛頓会議と軍縮縮小」で、「吾人はさし当つて我政府殊に陸海軍当局が、果して誠心誠意この問題を考慮し、世界平和の大なる見地から、軍備縮小を希望してゐるか否かを疑はんとするものである。（中略）吾人は本能的に我陸海軍人が自己の権限縮小に反対すべきを予想して斯く觀察するものである。果して然らば華盛頓会議に対する大障害は外にあらずして寧ろ内に在りはせぬかと」といった論旨を展開し、「況や帝国議会中軍国主義者の充満するに於て、軍備縮小の前途は容易に樂觀を許されざるものがある。」（中略）然らざれば従来からの関係からして我国際関係は決して円滑なる能はず、華盛頓会議に臨んでも決して旨く軍縮協定が出来やうとも思へないことを遺憾とする。我國民は先づ以て内に向つて軍国主義の打破を行ひ、會議に臨むの大覚悟を要する」<sup>302</sup>と断じた。つまり、『朝日』は、軍備縮小を実現するには、なによりもまず日本国内に存在する軍国主義を打破すべきであると強調したのである。

このような世情のなかで、ワシントン会議（海軍軍縮会議）は 1921 年 11 月-1922 年 2 月に開催された。会議は、日本、イタリア、フランス、イギリス、中国、アメリカなどの 9 ケ国が参加し、太平洋水域と極東の問題の討論、及び各国の間で拡張傾向にあった軍備を制限することが目的であったが、会議の議題は、民族自決と海軍軍縮が柱をなした<sup>303</sup>。

1922 年 2 月 6 日に海軍力の拡大競争を抑制するための海軍軍備制限条約が結ばれた。この条約には、締約国が 10 年間にわたり主力艦の建造を停止したあと、条約で各締約国が保有できる最終の主力艦合計基準排水量トン数を米・英 52 万 5000 トン、日 31 万 5000 トン、仏・伊 17 万 5000 トンと定める内容が含まれていた。また、日本は「陸奥」「長門」「日向」「伊勢」「山城」「扶桑」「霧島」「榛名」「比叡」「金剛」の 10 隻保有が認められた一方、日本海軍の八八艦隊は修正され、建造中のものを含め戦艦などが廃棄された<sup>304</sup>。軍縮条約にしたがって日米英三国の主力艦建造競争が抑制され、国家財政に占める海軍予算の割合は劇的に減少し（表 5-2 を参照）、表面的には海軍軍拡は不可能となったのである。

『朝日』はこの会議の成果について、「兎も角瀬踏みの平和会議としては成功と云うて善からう。一面太平洋の島嶼に関する日米英仏の四国協約も首尾克く締結され、又支那に関する領土不可侵、主権不干渉のルート氏四原則も協定され、其の将来の安定を指導された事は、平和保障として確かに有意義である。（中略）之を大局から見ると、全く現代人類の思想の反映である。（中略）只今後は此の各種の協定に対して、各国が平和に対する誠意を捧げて、人類慶福の為に其の実行に最も忠実なるべきを望むのである」と述べたように、成立した海軍協定を高く評価していた<sup>305</sup>。

以上のように、ワシントン会議は 1921 年 11 月から開催されたが、『朝日』はそれに先だつて「軍縮キャンペーン」を開始し、年間を通じてこの運動を展開した。朝日新聞社社史によると、この 1 年間の大阪朝日と東京朝日の軍縮に関する社説と、太平洋・極東問題に関する社説は、合わせて大阪朝日 123 編、東京朝日 85 編にのぼった。ことに大阪朝日は 3 日に 1 回強の割合で軍縮を中心とする社説を掲載し<sup>306</sup>、また、お

<sup>302</sup> 「先決問題は軍国主義の打破 華盛頓会議と軍縮縮小」1921 年 8 月 6 日付『朝日新聞』。

<sup>303</sup> 成田龍一『シリーズ 日本近現代史 4 大正デモクラシー』岩波書店、2007 年、157 頁。

<sup>304</sup> 野村實『日本海軍の歴史』吉川弘文館、2002 年、111-112 頁。

<sup>305</sup> 「華府会議と日本 日本本土除外問題」1922 年 1 月 8 日付『朝日新聞』。

<sup>306</sup> 朝日新聞百年史編修委員会『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』朝日新聞社、1991

おむね軍縮を歓迎している各国の新聞論調を積極的に紙面に転載した<sup>307</sup>。

軍縮を一貫して主張していた『朝日』のほか、これまで終始一貫して海軍拡張を主張していた東京の有力紙『時事新報』も、1921年1月元旦から、一転して海軍縮小論を公表した<sup>308</sup>。

一方、「軍縮を支持する」立場を明確にする『朝日』と異なり、『読売新聞』（以下は『読売』と略す）は、最初から軍縮の可能性について次のような疑問を示していた。

ボーラー氏の造艦休止に関する提案は、其の真相並に真意の如何と、ハーディング氏の之に対する方針如何とは、暫らく別箇の問題とし、其の主義理想に関する限り、何人も之に反対すべき理由を有たない。殊に我国としては、既に国際連盟規約に於て、軍備縮小の原則に賛成し居るのみならず、實際上今日既に軍事費の予算全体に対する割合は、四割以上となり、世界無比の高率に上り居る実例に照らし、海陸軍備の何れを問はず、其縮小は何国よりも更に緊切である。（中略）現在に於ける日英米三国の海軍力は、（中略）米国は日本の二倍強を有し、英国は米国の二倍弱を有して居る。（中略）勿論、単に之を財政上の見地から観る時は、造艦の休止若しくは其の制限は、何れにしても大に歓迎すべきであるが、我国の如きは其の一戦略単位の完成を犠牲にしてまでも、之に応ずるの覚悟を為し得可きか。実際問題として是れは大なる疑問である。（中略）然らざる限り単に軍事上乃至財政上より三国の軍備、就中其海軍造艦の計画を中止又は制限せんとするも、主義としては兎に角、事実問題としては、遺憾ながら吾人は其可能性を疑ふものである<sup>309</sup>。

下線を付した部分から分かるように、『読売』は財政的な側面から軍縮の必要性を認めるが、日本の如くまだ一戦略単位の艦隊を持っていない国の軍縮実現の可能性を疑う立場を示している。

そのほか、中嶋晋平の研究<sup>310</sup>によると、日本国内では、地方紙『京都日出新聞』（以下は『京都日出』と略す）も軍縮問題に関する報道を重点的に取り上げ、社説や論説記事によって自らの主張を積極的に行っていた。中嶋は1921年、1922年における『京都日出』が、軍縮の実現不可能を主張し、ワシントン会議を「失敗」と評価したことを指摘している。

そして、土田宏成が指摘するように、民間においてもワシントン会議反対運動が行われており、大きな広がりを持たなかった<sup>311</sup>とはいえ、その存在は否定できない。

とはいえ、日本国内において、軍部及び一部の国粋主義者を除いて、世論の大勢はこの時期から軍縮を支持する方向へ傾いたと言える<sup>312</sup>。その背景としては、第1次世

---

年、179頁。

<sup>307</sup> 同上、184頁。

<sup>308</sup> 伊藤正徳『新聞生活二十年』中央公論社、1933年、323頁。

<sup>309</sup> 「海軍縮小案の可能性（政治的協定必要）」1921年1月17日付『読売新聞』。

<sup>310</sup> 中嶋晋平「戦間期における地方紙の軍縮論—ワシントン会議前後の『京都日出新聞』の報道を事例に」『都市文化研究』（12）大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター、2010年、24-34頁を参照。

<sup>311</sup> 土田宏成「ワシントン会議と世論—海軍軍縮反対運動とその影響」『日本歴史』757（6月号）吉川弘文館、2001年、71頁。

<sup>312</sup> 加地直紀「尾崎行雄の軍備縮小論」『平成法政研究』6（1）平成国際大学法政学会

界大戦後に生じた平和主義の気運や、1920年に始まった不況及び財政悪化の現実が、国内の軍備縮小論を強めたという点が挙げられる。

一方、日本政府はこの時期の日英米関係を改善するために、世論を日本に有利な方向に導く必要性があると認識していたとも考えられる。

1921年7月28日に外務省アジア局が起草した『支那問題ヲ中心トシテ見タル太平洋會議方針』<sup>313</sup>では、日英米の関係について、「日英同盟更新ノ成否如何ニ拘ラス米  
国トノ間ニモ無用ノ葛藤ヲ避ケ努メテ友好親善ノ關係ヲ確保スルノ得策ナルハ勿論ニ  
シテ米國ニ対スル友好的政策ハ終始一貫儉ルコト無ク」と述べ、「軍費特ニ海軍費節  
約ノ緒ニ就カシメ進メテ日英ノ連契ト併行シテ米國トノ間ニモ真摯ナル國際協力ニ  
依テ東洋平和ヲ獲得スル」と指摘した。さらに、日英連携関係の強化、日米協調の構  
築が、東アジアにおける日本の地位を確保する「国家百年ノ長計」であることも強調  
したのである。

また、同年12月に、ワシントン会議において日本首席全権であった加藤友三郎海相  
は、次のように指摘している。

米國官民ノ対日感情融合ハ喜フヘキ現象ナルモ右ハ主トシテ今回ノ會議ヲ成功セシ  
メントスル意ニ基クモノト思ハル（中略）目下当國官民トモ最モ注意ヲ集中シ居ルハ  
海軍勢力比ニ対スル日本側ノ態度ニシテ（中略）一〇対七説ヲ我カ方ニ於テ主張セル  
コト発表セラレシ以來當國輿論ハ一時動揺セントセシモ米國側ノ決心固キト英國政府  
カ米國案ニ賛成セントニ依リ結局日本側ニ於テ讓歩スルコトト確信シ居リ比較的冷静  
ニ其結果ヲ俟チ居ル様子ナリ（中略）此ノ上日本ニ於テ之カ為各種ノ宣伝盛ニ行ハル  
ルニ至ラハ米國官民ハ失望ノ結果必ス前記ノ友好的態度ヲ變シテ我ニ不利ナル形勢ヲ  
惹起スヘキノミナラス之迄會議ノ内外ニ於テ友好的ナ態度ヲ採リ来リタル英國側モ其  
態度ヲ變シテ米ト共ニ我ヲ圧迫スルノ方針ニ出ツル虞アリ形勢一度斯クノ如クナラン  
カ今回ノ會議ヲ失敗ニ帰セシムルノミナラス将来海軍競争ヲ惹起シテ我ハ結局六割以  
下ノ率ニ下ルヘキハ勿論帝國ノ将来國際上全ク孤立ノ地位ニ陥リ或ハ我ニ對抗シテ英  
米支僞間ニ堅キ提携ヲ生スルコトナキヲ保セス實ニ現下ノ状態ハ帝國ノ将来ニ取り禍  
福ノ決スル分岐点ト見ルヘク<sup>314</sup>

下線を付した部分から分かるように、加藤の見解は日本が余りにも対米7割比率に  
固執し<sup>315</sup>、殊に日本の新聞言論界がそのことを過大に伝えれば、ワシントン会議を失

、2001年、196頁。

<sup>313</sup> 「JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B06150939500（第40-41画像目）、会議  
開催ノ提議及開會ニ至ル迄ノ経過一般 松本記録 第三卷(2-4-3-0-1\_003)(外務省外交  
史料館)」

<sup>314</sup> 「七割固執ハ會議ヲ失敗セシムル虞アル旨意見具申ノ件」1921年12月5日着、ワ  
シントン会議全権より内田外務大臣宛（電報）、外務省『日本外交文書 ワシント  
ン会議』（上）、1977年、295-297頁。

<sup>315</sup> ワシントン会議にのぞむにあたって、当然、海軍部内から猛反対が予想された。議  
論の中心点は、対米七割比率（主力艦の総トン数）の要求であった。それは、「ア  
メリカ艦隊が太平洋を越えて日本近海に攻めてくるには、日本の5割以上の優勢な  
兵力を必要とする」という前提から導き出された数値である。この7割比率思想は  
、1907年頃佐藤太郎と秋山真之によってはじめて定式化されて以来、ワシントン  
会議のときまでに日本海軍の固定観念になりはじめていた。（麻田貞雄「ワシント  
ン海軍軍縮の政治過程—ふたりの加藤をめぐって」『同志社法学』49巻3号、同

敗に導くのみならず、国際的孤立に陥ると判断したのであった。それを防ぐために、加藤は、「昨今七割論者ハ我新聞言論界等ノ指導ニ着手セル形跡」<sup>316</sup>があるが、「前記ノ如キ状態に在ルニ係ラス此際国論ヲ大勢ニ逆行シテ沸騰セシムルニ於テハ早晚帝國政府ハ内外極メテ困難ナル立場に陥テルヘク」<sup>317</sup>という懸念を示し、さらに「輿論ノ指導上特ニ此点御留意ヲ仰キ度」と強調した。

以上の点からは、この時期において軍縮を支持する主張が世論の主流になったのは、日本政府が時勢を読み取り、国際社会における日本の地位を保つために、日本国内世論を日本に有利な方向に導こうとする姿勢によるものであったことがうかがえるのである。

## 1.2 植民地日本語新聞の立場—『満日』と『大連新聞』の場合

軍縮問題に対して日本国内の新聞界が動き始めた 1921 年初頭、遠く満洲にもその影響は及んでいた。租借地大連における『満日』、『大連新聞』にもそれに関する記事がしばしば見られるようになったのである。

『満日』は、1921 年 5 月 11 日付社説で、「一口に国際軍備縮少を提唱し、黒い腹の底に海軍大拡張を理想する一部米人の精神は那邊にあるか。平和提唱も何等の価値を持たぬ」<sup>318</sup>と痛切し、次いで同 5 月 19 日付社説では、「日英米海軍縮少案の提唱される半面に於て提唱者の米国先づ其所説を裏切りて拡張説に傾き、更に英国に於て今亦此拡張説を耳にするに至れるは注意すべきである。軍備制限の理想は何人も希望する処であるが実際の事情が斯く反対の結果を示すのは感服出来ぬ。日本に於ても一部の間に軍備制限説が起つて居るが、英米に於てかなりな傾向を示す以上正直に信用する事の出来ぬを遺憾とする」<sup>319</sup>と、アメリカやイギリスによる軍備縮小の裏に自国の海軍を拡張させようという意図を読み取り、軍備制限の平等性に対する不信を表明した。

1921 年 7 月 11 日、アメリカは日本、イギリス、フランス、イタリアにワシントン会議開催の非公式な提議をおこなった。『満日』は 7 月 15 日付社説でワシントン会議に対して「拡張の根本たる原因の消滅に努力し、併せて太平洋永遠の平和と国民疲弊の一大原因たる軍費の節約が軍備制限会議に依て実行さるゝ事となれば、其は直接太平洋諸国の幸福計りでなく実に世界平和の為にも欣幸とすべきである。（中略）兎に角世界的平和策の一道程として本問題が斯く体现の一步にまで進んだ事は注目の価値を持って居る」<sup>320</sup>と、軍備を制限して、国民の負担を減少し、世界平和を促進するという精神を評価した。

一方、『満日』は「軍備制限の新提議を敢えてした米国は（中略）殊に軍備制限の触出しの下に太平洋問題と極東問題とを接いだのは、どちらが果たして主題であるかと云ふ疑ひも生ぜしむる訳で」<sup>321</sup>あり、ワシントン会議は「何しろ問題は大きい」、ただアメリカ発案の「国際的ドラマ」にすぎないと批判的な立場を表明した。

---

志社大学、1998 年、103 頁)

<sup>316</sup> 「七割固執ハ会議ヲ失敗セシムル虞アル旨意見具申ノ件」1921 年 12 月 5 日着、ワシントン会議全権より内田外務大臣宛（電報）、外務省、前掲書、297 頁。

<sup>317</sup> 同上。

<sup>318</sup> 「非縮少拡張」1921 年 5 月 11 日付『満日』。

<sup>319</sup> 「英海軍拡張」1921 年 5 月 19 日付『満日』。

<sup>320</sup> 「体现せる軍備制限問題」1921 年 7 月 15 日付『満日』。

<sup>321</sup> 「米国発案の国際的ドラマ」1921 年 7 月 19 日付『満日』。



1921年11月12日、ワシントン会議の開催にあわせて、『満日』は紙面で議論を展開した。同年11月16日付社説で、『満日』は「此の会議が軍備制限を主題として而も太平洋問題殊に極東問題に重きを置いて居る」<sup>322</sup>と、太平洋・極東問題が軍備制限よりも上位の位置にあることを認識したうえで、「極東に利害関係の深い日本の留意すべき点であつて、支那問題、満蒙問題、西伯利問題が此の会議の成行と共にどんな風になるかは、日本国民の熱心に且真面目に充分注意すべき事である」と強調した。つまり、『満日』はワシントン会議の場で中国大陆における日本の特殊権益が認められるかどうかという点について懸念を示していたのである。

1921年2月6日に九カ国条約及び海軍軍備制限条約の成立をもってワシントン会議は閉幕した。それについて、『満日』は「華盛頓会議の開催ありて、軍備問題が■せられ、各国協調して海軍軍備を縮小することゝ為つたため軍縮問題が世論となり、(中略)誠に大勢の然らしむる所である。(中略)世論には愚なる物もあるが、(中略)今日の軍縮的世論は、決して根柢の乏しい愚なるものでない」<sup>323</sup>と評価した。

一方、『大連新聞』の場合は、「該会議の結果は非常に重要視さるべきものあらん」<sup>324</sup>と、ワシントン会議について大きな期待を抱いた一方、「其主要なる議題が軍備制限にあるに拘らず、英国の如きは海軍拡張の名を避けつゝあるも、艦艇充実の名義にて盛んに軍艦の建造に着手し、米国は■■中拡張したる陸軍を縮小するを■まずして、依然として北陸軍を維持せん」<sup>325</sup>と指摘しながら、「吾人は兎も角平和の目的に向つて歩を進むるものとする意味に於て軍備制限案を歓迎するも、列強が平和愛好の仮面を装ひ、表面的に軍備縮少を唱道して内面軍備の充実を怠らざる現状を見聞しては、会議の前途に対して何等の希望を繋ぐる能はざる」<sup>326</sup>と強調したうえで、この会議を「失敗だ」<sup>327</sup>と批判した。

以上の内容から分かるように、『満日』と『大連新聞』は平和及び財政的な側面から軍縮の必要性を認めるが、日本国内新聞界における「軍縮を支持する」世論の高まりと異なり、両紙ともにアメリカが提唱したワシントン会議について、強烈な不信感を抱いていたのである。

また、『大連新聞』が明確にこの会議を「失敗」と評価したのに対して、『満日』の方はそれを世論の大勢と評価した。ここでは、一見して『満日』は軍縮を支持する立場に立つように見えるが、同時期に満日社が主催した「艦隊便乗見学」を考えあわせれば、実際にはそうではなかったことが分かる。

## 第2節 満日社による「軍艦便乗見学」の始まり

満日社による「軍艦便乗見学」がいつ頃から行われていたのかは確認できないが、海軍省公文備考には次のような内容が記されている。

大正十年五月十三日 旅順要港部司令官中野直枝 海軍大臣男爵加藤友三郎殿  
部外者駆逐艦便乗ノ件  
海事思想ノ涵養並普及ノ目的ヲ以テ満洲日日新聞社主催ノ下ニ当地方官民ノ重立タ

<sup>322</sup> 「華府会議と極東問題 満蒙及び西伯利と日本」1921年11月16日付『満日』。

<sup>323</sup> 「軍備縮小は世論也 大勢は竟に支ふべくも無い」1921年2月10日付『満日』。

<sup>324</sup> 「大連評壇 軍備縮小協定」1921年7月15日付『大連新聞』。

<sup>325</sup> 「大連評壇 軍備制限至難」1921年7月30日付『大連新聞』。

<sup>326</sup> 「大連評壇 軍備制限問題」1921年10月16日付『大連新聞』。

<sup>327</sup> 「華府会議失敗」1922年1月12日付『大連新聞』。

ル者約百名旅順大連間駆逐艦便乗方願出有之候所右者至極有益ナル企ト認メ候ニ就テハ許可致度候條御認可相成度<sup>328</sup>

ここで示されているように、1921年5月13日に旅順要港部司令官中野直枝から海軍大臣加藤友三郎宛に「部外者駆逐艦便乗ノ件」として、「海事思想ノ涵養並普及」を目的とする満日社による旅順大連間の駆逐艦便乗の請願が寄せられた。

ついで、同5月26付『満日』は、次のような社告を掲載している<sup>329</sup>。

我社主催の駆逐艦便乗旅順大連埠頭間航行の壮挙に就ては旅順要港部並に海軍当局の異常なる好意に依り、愈々六月十二日挙行の事に確定した。其目的たる素より海事思想の涵養普及に在るは謂ふ迄もない事だが、海軍当局が容易に便乗するを許さざる軍艦に便乗の便宜を与へられ特に大連に航行するを容認された好意に対しては大いに感謝の意を表せねばならぬ

時日 6月12日(日曜日)

祭典 当日午前9時10分より

上記の駆逐艦便乗に関する請願は海軍大臣が許可し、1921年6月12日に行うことと決定されたことがわかる。なお、「昨年第一回の老虎灘航行に於てよく経験せる處であつて、本年も海軍当局の厚意に因り此挙を発表する」<sup>330</sup>という記事により、1920年に老虎灘において、第1回の駆逐艦便乗が行われたことが確認できる。

今回の「軍艦便乗見学」は2日間に分けて行われた。6月12日、1日目の便乗者は、旅順、大連在住官民150名、満日社員11名、合計161名に達した。そのうち、大連側の参会者は大連民政署長田中千吉を初めとして75名、旅順側の参会者は旅順民政署長西山茂ほか、34名等であった<sup>331</sup>。当日、便乗者は旅順駅前の閉塞隊記念碑の前に集合し、「閉塞隊の憑弔式」<sup>332</sup>が行われた。その後、水無月、卯月、長月、菊月の4艦に分乗し、艦上で実地講話を聴き、駆逐艦行進中において各種の戦闘演習を見た。

続いて、6月13日、2日目の「軍艦便乗見学」は大連各小学校上級生を中心として行われた。各学校の生徒数に応じて便乗者の人数が割当られた(表5-3参照)。なお、各学校から引率教員が1名ずつ選抜された。

表5-3 1921年6月駆逐艦便乗見学学生の割当一覧

学校名	割当人数(名)
-----	---------

<sup>328</sup> 「部外省駆逐艦便乗ノ件」 「JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.C08050180000(第3画像目)、大正10年 公文備考 卷27 艦船4(防衛省防衛研究所)」

<sup>329</sup> 「満洲日日新聞社主催 旅大間沿岸航行 駆逐艦見学壮挙 海軍当局の好意により六月十二日に行ふ」1921年5月26日付『満日』。

<sup>330</sup> 「旅大沿岸 駆逐艦便乗見学 アト三日に迫る 便乗者の心得ておく事 大連碇泊中は拝観許可 帰航は小学生便乗」1921年6月9日付『満日』。

<sup>331</sup> 「初夏微風の碧海に 駆逐艦四隻の戦闘演習 宛然海戦當時を髣髴 本社主催第二回駆逐艦便乗」1921年6月13日付『満日』。

<sup>332</sup> 日露戦争中、日本海軍が旅順のロシア海軍太平洋艦隊を港内に閉じ込める旅順港閉塞作戦を3回に亘って行ったが、いずれも失敗に終わった。その戦死者を祀るために、毎年「閉塞隊の憑弔式」が行われていた。

大連第一尋常小学校	9
大連第二小学校	10
大連第三小学校	11
大連第四小学校	5
大連第五小学校	6
大連高等小学校	37
沙河口尋常小学校	15
合計	93

出典：「壮絶！！快絶！！小学生駆逐艦便乗 火箭の放射や発火演習 智を磨き歓を盡して無事解散」1921年6月14日付『満日』。

6月13日当日、各学校生徒は大連埠頭に集合し、引率教員の監督のうで乗艦した。各艦において艦長及び乗組将校は便乗者に乗艦中の注意事項や艦内設備について説明した。その後、大連から旅順港に向かって出港した。航海中、火箭の放射や発火演習が行われた<sup>333</sup>。

今回の「軍艦便乗見学」について、『満日』は6月12日付社説で「日露戦役に際し殆ど一年に近く旅順要港の封鎖に任じて戦没せし勇者或は壮烈世界の耳目を驚かせし同港口閉塞隊戦死者の忠魂を慰め且つ旅順及び大連の有志者百余名と大連各小学校児童百余名を便乗せしめて当時の戦況を追憶し以て国家の為め聊か海事思想の普及を計ると同時に満蒙経営に於いても是等犠牲者の真精神を永遠に堅く基礎とせざる可からざる事」と、「軍艦便乗見学」の趣旨を強調したうえで、軍備制限問題にも言及した。

『満日』は「軍備制限の問題は理想として何人も異存なき処であるが、実際の事情は各国共理想に進むの甚だ難事とする処である。（中略）吾等は此の国防の重要案件に就て何時も其知識の向上と研究の必須なる事を等閑に附してはならぬ、外交が国民的である事を必要とする如く、海軍に於ても陸軍に於ても夫は同様に国民的でなくてはならぬ、国防軍備の事は当局者だけの仕事であるとしているのは、国民の重大なる誤謬と云はなければならぬ」と、軍備制限の実現は容易ではないことを強調したうえで、国防軍備における国民の役割が看過できないとした。そこで、国民に「一般的知識の普及を計る事は最も必要としなければならぬ」と強調しながら、「吾等は永遠に国家の富強と安泰を期せねばならぬ、海軍の研究に国防の知識を増進し、勇士の犠牲に鑑みて満蒙発展の基礎を強固にしなければならぬ」と述べている<sup>334</sup>。

以上からわかるように、満日社が主催した「軍艦便乗見学」は表面的に「海事思想の普及」を目的としたが、実際にはそれを軍備制限問題に絡めて、国民に国防上における海軍軍備の必要性を認識させることにより、意図的に国民を「軍備制限に反対する」方向に導こうという姿勢が窺える。この姿勢はその後の各年度の「軍艦便乗見学

<sup>333</sup> 「壮絶！！快絶！！小学生駆逐艦便乗 火箭の放射や発火演習 智を磨き歓を盡して無事解散」1921年6月14日付『満日』。

<sup>334</sup> 「閉塞隊追憶と駆逐隊の迎送 海軍省の好意と本社の企画」1921年6月12日付『満日』。

」にも確認できる。

### 第3節 大連海務協会と満日社の提携事業：「艦隊便乗見学」

#### 3.1 大連海務協会について

大連海務協会の前身は1909年に創立された大連海友会である。1907年満鉄の大連進出にともない、貿易は発達を遂げ、船員の大連港への来往も著しく増えた。そのため、大連港で船員の慰藉救済をする機関を設置する必要性が一段と大きくなった。そこで1909年1月創立委員に鎌田豊之助（海務局）、綾末広（海務局）、小林繁松（満鉄）、小喜多鉄雄（満鉄）、袴田可坪（満鉄）松尾小三郎（所属不明）の6名が囑託され、1909年4月10日に創立総会を開催し、大連海友会が生まれたのであった<sup>335</sup>。また1913年2月15日に大連海友会を解散して、組織を改めて社団法人大連海務協会を創立した<sup>336</sup>。

海務協会は海事に関する業務の発達及海員の扶掖を図ることを目的とする組織であり、検査部・海損精算事務部・海事仲裁鑑定部・海員慰藉部・海員救済部・海員講習部・雑誌部の7部が設置された。

雑誌部（1925年度からは海事宣伝部）は1910年4月10日に設置され、大連港を紹介する目的と海事思想普及を使命として機関誌『海友』<sup>337</sup>を創刊した<sup>338</sup>。また、ほかに、海事講演会、艦隊便乗見学、学生海事見学等、海事思想の普及宣伝に関する一切の事項を扱っていた<sup>339</sup>。

#### 3.2 第1回「便乗見学」に至るまでの経緯

1921年8月2日付の『満日』紙面において第2艦隊司令長官・海軍中将鈴木貫太郎が第2艦隊を率いて、8月20日頃に旅順に入港し、同24日に大連に廻航することが発表された<sup>340</sup>。第2艦隊の来航を機に、海務協会は旅順要港部（以下要港部と略す）と打合わせ、旅順・大連間において「艦隊便乗見学」を行うことを決定した。それにより、同8月5日に海務協会会長村井啓次郎は「海事思想涵養」を目的として、第2艦隊が「旅順港より大連湾に御回航の際学生並に旅大官民の便乗」をしたいと、鈴木中将に出願したのである。

御願<sup>341</sup>

今般旅順大連方面御巡航の光栄に浴し弊会は万腔の赤誠を披瀝して歓迎仕候弊会は此機会に於て海事思想涵養に就き微力を捧げ度候条貴艦隊の旅順港より大連湾に御回

<sup>335</sup> 『大連海務協会二十年史』大連海務協会、1930年、1-2頁。

<sup>336</sup> 同上、5頁。

<sup>337</sup> 『海友』は大連港の紹介を中心として満蒙貿易の大勢及び一般海運界の状況より港湾、造船、船舶、航路標識等海事百般の事項を網羅報道し、海員の思想善導、趣味向上等、海事思想普及を使命としていた。（『大連海務協会二十年史』大連海務協会、1930年、85頁。）

<sup>338</sup> 前掲『大連海務協会二十年史』、5頁。

<sup>339</sup> 同上、85頁。

<sup>340</sup> 「第二艦隊の旅順入港は愈々は二十日に決定 旅順市と要港部と聯合して 一大歓迎会を開催すべく準備中 煙火数百発を打揚げて我社の歓迎」1921年8月2日付『満日』。

<sup>341</sup> 「第二艦隊便乗見学」『海友』（135号）大連海務協会、1921年、76-77頁。

航の際学生並に旅大官民の便乗方仕度大体左記の通り希望を有し申候何卒特別の御詮議を以て御許可被成下度此段奉願上候

#### 記

1. 目的：海事思想涵養の為め
2. 便乗者人員：約一千五百名
3. 便乗者種類：大連中学校、大連高等女学校、実科高等女学校、大連商業学校、南満洲工業学校、大連高等小学校（約一千名）
4. 日時：旅順港より大連湾に御回航当日  
大正十年八月五日

この願書は要港部を通じて、鈴木中将に提出された。願書には「便乗見学」の目的、便乗者の定員数と所属、実施時期などが詳しく記してある。

また、「便乗見学」に関する宣伝その他の協力を得るため、同 8 月 6 日に『海友』主幹袴田可坪は満日社、遼東新報社及び大連新聞社の 3 社を訪問し、各新聞社の後援を求めた<sup>342</sup>。続いて、同 8 月 9 日に、大連海務協会と新聞社との協議会が開催された。会議には満日社記者永嶺信恒、遼東新報社記者小林磯蔵、大連新聞記者森宣次郎、また、海務協会村井会長、来村琢磨同協会副会長及び袴田可坪主幹などが出席した。会議では次のいくつかの事項について議論がなされた<sup>343</sup>。

#### 仮協定事項

- 一、各新聞社に於ては出来得る限り後援をなす。
- 二、便乗者は学生一千名旅大官民を五百名とし抽籤により一般より応募するも其内新聞記者本会会員並に本会より特別に招待したるのを控除す。
- 三、学生は各学校に於ては按分の上当該教職員監督の下に参加すること。
- 四、申込は海務協会宛往復はがきにて申込む事。
- 五、便乗者の服装は洋服着用の事。只女学生に限り和服の場合は袴着用の事。
- 六、学生は当該教職員引率全責任を負ひ其他は各自に於て危険を予防すること。
- 七、履物は靴、万止むなき場合は草履の事。
- 八、費用は各自負担の事。
- 九、弁当、中食用としてサンドイッチ又はパンの事。
- 十、団体輸送割引を満鉄運輸部に交渉のこと。
- 十一、各列車には便乗者を区別整理すること。
- 十二、天候の為め中止の場合は停車場、日本橋並に各交番に赤旗（冬季裂寒の場合小学生の休業を知らしむる旗）を掲揚方交渉し周知の方法を執ること。
- 十三、大連警務署へ届出置くこと。
- 十四、其他詳細の事項は海務協会に於て処理すること。

会議中、出席者たちが「便乗を得べく学生は、中学校、商業学校、工業学校、従事員養成所、高等小学校などである」ことについて討議したが、要港部側は、便乗者は男子だけでなく、「特に将来の母となるべき大連高女、実科高女生徒の便乗を希望した」<sup>344</sup>。

<sup>342</sup> 同上、77 頁。

<sup>343</sup> 同上、77-78 頁。

<sup>344</sup> 「海軍側の希望で 女学生をも乗せる 来航第二艦隊便乗見学 旅大官民五百名学

8月12日、海務協会は第2艦隊「便乗見学」について大連と旅順の中等学校当局者との協議会を開催した。会議で便乗見学人員の割当について協定が結ばれた。

続いて、8月15日、満鉄、大連民政署、大連警務署、商業会議所、海務協会、大連市役所の各代表者は第2艦隊の来航歓迎について協議会を開催した。満鉄文書課長竹中政一、大連警務署長山川、満鉄庶務課長真鍋五郎、海務協会主幹袴田、大連商業会議所書記長篠崎嘉郎、憲兵曹長江口定男、大連市長村井啓太郎、助役伊佐寿などが出席した<sup>345</sup>。会議では8月24日、25日に歓迎会を開催し、出席希望者は会費5円とすることを決定したうえで、次のような内容を決定した。

- 一. 大連市地図を市内重要個所に掲示して便宜を図ること
- 二. 大連市地図を旅順碇泊中に艦隊に送り市中の一般予備知識を与ふること
- 三. 電車は無賃とし市中の風呂屋を開放すること（但し入浴券を与ふること）
- 四. 活動写真を昼間開放すること
- 五. 下士官以下に対しては満鉄よりは絵葉書贈呈に決し居れば清酒を贈ること
- 六. 准士官以上約五百名に対してはヤマトホテルに招待し歓迎会を催すこと<sup>346</sup>

ほかには、会議では便乗見学人員中の学生の割当を表5-4のように決定した。

表 5-4 1921年8月便乗見学学生の割当一覧

学校名	割当人数（名）
大連中学校	146
大連高等女学校	146
大連実業女子学校	85
大連商業学校	130
南満洲工業学校	33
大連商工学校	18
大連高等小学校	201
満鉄従事員養成所	75
旅順中学校	65
旅順高等女学校	65
旅順工科学堂	20
旅順師範学堂	16

生一千名」1921年8月10日付『満日』。

<sup>345</sup> 「第二艦隊の歓迎は出来るだけ盛んに 軍艦便乗の人員割当も定る」1921年8月16日付『満日』。

<sup>346</sup> 「大連市の第二艦隊来航歓迎」1921年8月13日付『満日』。

合計	1000名
----	-------

出典：「第二艦隊の歓迎は出来るだけ盛んに 軍艦便乗の人員割当も定る」  
1921年8月16日付『満日』より筆者作成。

また、海務協会をはじめ、大連市、満鉄、大連警務署など、各方面が「便乗見学」に便宜を提供した。満鉄学務課は、満鉄沿線生徒の便乗見学旅行について、沿線各学校との斡旋に努めたのである<sup>347</sup>。その結果、沿線各学校便乗生徒の割当は、瓦房店 40名、海城 25名、遼陽 109名、奉天 126名、鉄嶺 91名、撫順 60名、ほかには 115名、計 566名と決定した。なお南満洲医学堂、長春商業学校及び満鉄見習 300名は旅順から便乗することに決定した<sup>348</sup>。他には、拝観人の渡船について、要港部は汽艇、警務署は舢舨を提供することとなった<sup>349</sup>。

1921年8月17日、海務協会の「便乗見学」出願が正式に許可された。ついで、同8月22日、巡洋戦艦金剛、第1戦隊旗艦球磨、水雷戦隊旗艦北上をはじめ、巡洋艦霧島、多磨、木曾、駆逐艦十隻、合わせて 16隻の戦艦からなる<sup>350</sup>第2艦隊が旅順に入港した。こうして、旅順・大連間の第1回「便乗見学」がいよいよ開幕したのである。

### 3.2.1 艦上見学の実態

1921年8月25日、「便乗見学」当日満鉄運輸部は便乗者を輸送するため、13両編成の特別列車を運行した<sup>351</sup>。一方、海務協会袴田及び同協会支局員等が旅順駅において大連から来た便乗者一行を迎えた。便乗者一行が旅順駅に到着後、駅までいくつかの班に分かれていた学校生徒は監督に引率され、一般便乗者ととともに、指定された棧橋に向かい、ランチと団平船に乗って所定の軍艦に乗船した。

金剛艦への乗艦の終了にともない、艦長は便乗者に向かって挨拶した。ついで、副官は便乗者に注意事項を伝えた後、便乗者の艦内見学が行われた。

午前9時に、2,000余名の便乗者を乗せた第2艦隊は旅順から大連に向かって出発した。9時40分に合戦準備の命令によって、当日の戦闘演習を開始した。それについて、『満日』は次のような記事を掲載している。

九時四十分合戦準備の命下ると北上艦は駆逐艦十隻を率ひ一行と敵対行為を取る事になり、東の方に姿を没し、金剛は九時三十分から準備されて居た。横廠式三号飛行機を山下大尉の操縦、馬場少尉の同乗で水上滑走を初め金剛より霧島艦の上を迂回し■

<sup>347</sup> 「沿線各学童艦隊見学 満学務課斡旋」1921年8月17日付『満日』。

<sup>348</sup> 「沿線小国民の拝観 二十五日朝来連」1921年8月24日付『満日』。

<sup>349</sup> 「朦朧海を圧して来るの日は近い 歓迎準備も定って旅順官民鶴首してその日を俟つ 大連回航は二十四日」1921年8月17日付『満日』。

<sup>350</sup> 「甲堅艦十六隻 堂々来航する壯観 愈々二十四日大連入港に決した 鈴木中将麾下の第二艦隊」1921年8月12日付『満日』。

<sup>351</sup> 特別列車の1号車には委員長、副委員長、主幹、新聞記者、学校教員；第2-4号車には一般市民；第5号車には市民の一部、工業学校、商工学校生徒；第6号車には大連中学校生徒、7号車には大連中学校生徒の一部、満養成所、高等小学校生徒；9号車には高等小学校の一部及び実科女学校生徒；10号車には高等女学校生徒及び実科女学校の一部、11号車には海務協会役員及び高等女学校の一部、12号車には商業学校生徒、13号車は予備車と定めている。（「軍艦旗 秋風にはためき艦十六隻堂々 海波を圧してけふ旅順から大連へ回航 二千の見学者を乗せて」1921年8月25日付『満日』）

金山の砲台を掠めて旅順市街に最後の袂別を為し再び金剛の上空に現はれ、旋回二度に及びて後敵駆逐艦隊の跡を逐ふて大連に向ふ黄金台、海水浴場を遙か、左手に臨み球磨、多磨、木曾、金剛、霧島の順序で十二哩の速力を出し大連へ大連へと進む。右手から旅順要港部駆逐艦四隻は発火演習を為しつゝ登舷礼を為して帰港の途に就いた十時十分敵艦見ゆるの信号旗掲げられ艦内は喇叭の響き鳴り渡ると水雷艇隊の襲撃に移り北上を先頭に駆逐十隻は金剛以下五艦を目かけて突進し来たから直ちに戦闘教練に移り前甲板に据付けられた十四吋の巨砲四門は上下左右自由自在に運転して敵艦目かけて発射し右舷の六吋砲又発射し戦闘■となり信号兵の旗信号伝令士の見学団の中を縫ふて各方面に走り十時四十分合戦準備■■の命を下る迄約三十分間は■■戦場の如き……<sup>352</sup>

以上の内容からは、艦隊行進中、合戦準備や戦闘操練を行い、また、金剛と霧島両軍艦に据え付けられている 14 吋砲の操縦、水雷戦隊の衝撃、金剛艦載の水上飛行機が滑走台を離れていく様子、これに加えて各艦からの飛行機の衝撃など、当日の戦闘演習の生々しい模様が浮かび上がってくる。

### 3.2.2 便乗当日の市内光景

便乗当日の大連市内の光景は、『満日』に頻繁に掲載されている。以下に 1 例を挙げて考察してみよう。

二十五日正午以来大連市中は艦隊来—艦隊来—の声で■え返り浪速町を最として市中到る処の商店は第二艦隊来航歓迎に就き大割引のビールを出して水兵達の来店を歓迎し大連電鉄は車台全部を繰出し歓迎艦隊に乗組員無賃乗車と書き国旗を交叉して乗車の便を図つたので大喜び逢坂町の如きはデングリ返つた沿線の内地人にして艦隊拝観に来連するもの多く大連市民と共に埠頭に押寄せ押すなくゝの大雑踏であつたために電車は文字そのままに鈴なりの盛況山県通り日本橋電気遊園下交叉接■■は電車待の人で埋られ来る電車も来る電車も乗車することが出来ない程であつた。已むなく馬車や車を駆つて一刻を争ふと云ふ有様に到る処に人が雪崩れるので水上支署は非番警官を召集した上に本署の応援を得て警備又は整理に汗みどろになつて居た<sup>353</sup>。

引用文からは、「便乗見学」の当日、便乗できなかった大連市民、あるいは満鉄沿線各地から日本人が数多く埠頭や、海岸へと集まり、軍艦見学を行ったことがわかる。また、大連市内から埠頭にいたる途中に見学者が多数集まったという記述からも当日の盛況が推測できるだろう。加えて大連市内の各商店が、この好契機を利用して、積極的に販売を展開していた姿勢も窺える。

便乗見学者でもあつた満日社記者永嶺信恒は「日本国民は島国に生れながら海事思想に乏しく且つ趣味を有せざるもの多きは実に嘆はしき事で殊に海軍知識に至りては全く無知の有様で寒心の至りである。（中略）然るに二三年前より新聞社又は教育会等の主催で軍人の講演を乞ひ青年の指導を為し実業家、教育家、学生等を軍艦に便乗せしめ航海中で特に戦闘教練及び実地説明を乞ひて海軍知識の普及に努め延いて一般国民と軍人とを接触せしめ、本年の如きは練習軍艦に教育家を特に便乗せしめて世

<sup>352</sup> 「軍艦旗 秋風にはためき 鉄艦十六隻堂々 海波を圧してけふ旅順から大連へ回航二千の見学者を乗せて」 1921 年 8 月 25 日付『満日』。

<sup>353</sup> 「軍艦拝観!!!埠頭へ～雪崩れを打つ幾万 市中は白の水兵で埋まり 電車は文字その儘の鈴なり」 1921 年 8 月 26 日付『満日』。



界漫遊の途に上りたるが如き破天荒の事を為し」と、「便乗見学」を通じて一般国民と軍人との接触を図ろうという主催者側の目的を改めて明確にしたうえで、「海軍知識の発達のみならず軍事後援の資に偉大なる影響を及ぼすべく企画された事を蔭ながら喜んでいた」<sup>354</sup>と、「便乗見学」を海軍に対する国民の理解と支持を取り付けるのに資するものとして高く評価した。

この後海務協会は今回の好結果に鑑み、1923年の第1艦隊と第2艦隊を合わせた「連合艦隊便乗見学団」の組織計画を立てた。ところが、同年9月1日に関東地方で未曾有の大震災が発生したため、計画された「便乗見学」は中止された<sup>355</sup>。

次いで、海務協会は1924年4月10日の15周年記念日に際し、海軍知識の普及を目的として、加藤寛治中将の第2艦隊に3,500名の大見学団を便乗させる第2回「便乗見学」の計画を立てた。

続いて同年8月4日、第3回の艦隊便乗として、海務協会と満日社の主催によって大連湾から旅順港に巡航する「練習艦隊便乗見学団」が組織された。1925年第4回の「便乗見学」から1932年の最終回にかけて、「便乗見学」は毎年4月に行われることとなった。

そのほか、満鉄、満鉄埠頭事務所、海務局、警察署、水上警察署、市役所等の各方面は、「便乗見学」に毎年度便宜を提供した。例えば、満鉄運輸部は臨時列車を編成し陸上輸送を担当し、満鉄埠頭事務所、海務局は大連及び旅順両港の間の海上輸送を担当したのである。

### 3.3 「艦隊便乗見学」の概況

年度ごとの「便乗見学」の開催日、便乗艦隊、便乗者人数、会費、主催などは表5-5のようにまとめられる。

表5-5 「艦隊便乗見学」の概況一覧

開催日	便乗艦隊	人数（名）	会費	主催者
第1回 1921年8月25日—27日 第2艦隊に便乗、旅順より大連湾に回航	金剛、霧島、球磨、多摩、木会、北上	1,500		海務協会、満日社
第2回 1924年4月10日 第2艦隊に便乗、大連湾より旅順港に回航	金剛、比叡、名取、山良、若宮	3,500	一般金70銭、学生金30銭	海務協会、満日社、大連新聞社

<sup>354</sup> 永嶺信恒「軍艦に便乗して」『海友』（136号）大連海務協会、1921年。27-28頁。

<sup>355</sup> 「聯合艦隊便乗見学団計画 本会と満日新聞社の主催で海事思想普及の為に計画したが帝都地方の大震災で遺憾ながら中止す」『海友』（160号）大連海務協会。58頁。

第3回 1924年8月4日 練習艦隊に便乗、 大連湾より旅順港に回航	八雲、出雲、磐手	605	同上	海務協会、満日社
第4回 1925年4月9日 連合艦隊に便乗、 旅順港より大連湾に回航	陸奥、日向、山城、扶桑、霧島	5,018	同上	同上
第5回 1926年4月12日 第2艦隊に便乗、 旅順港より大連湾に回航	霧島、比叡、名取、川内、五十鈴、長鯨	3,232		同上
第6回 1927年4月10日 第1艦隊に便乗、 旅順港より大連湾に回航	陸奥、長門、伊勢	4,062		同上
第7回 1928年4月12日 第2艦隊に便乗、 旅順港より大連港に回航	金剛、比叡	3,662	一般金 80 銭、 学生金 40 銭（ 汽車賃その他を含む）	同上
第8回 1929年4月8日 第2艦隊に便乗、 旅順港より大連に回航	榛名、比叡	2,996		海務協会、満日社、海軍協会満洲支部
第9回 1930年4月5日 潜水母艦迅鯨に便乗、 旅順港より大連回航、 6日第1艦隊に便乗、 大連港より旅順に回航	潜水母艦迅鯨、由良、長良、川内	1,740		同上

第10回 1931年4月9日 第2艦隊に便乗、旅順港より大連に回航 4月10日第1艦隊に便乗、大連港より旅順港に回航	第1艦隊：長門、伊勢、日向、霧島 第2艦隊：妙高、那智、足柄、羽黒、青葉、古鷹	5,529		同上
第11回 1932年4月6日 第2艦隊に便乗、旅順港より大連港に回航 4月8日第一艦隊に便乗、大連港より旅順港に回航	妙高、那智、羽黒、足柄、金剛、伊霧、日向、伊勢	2,739		同上
合計		34,583		

表注：第1回-第7回は『大連海務協会二十年史』（大連海務協会、1930年。90-91頁）、第8回-第11回は『満日』より筆者作成。

表5-5が示す通り、便乗者が乗艦した軍艦は1922年に締結された軍縮条約により保有された主力艦（陸奥、長門、伊勢、日向、霧島、金剛、比叡、山城、扶桑、榛名）、同条約に基づき建造された重巡洋艦（妙高、那智、羽黒、足柄、青葉、古鷹など）、軽巡洋艦（由良、長良、川内、五十鈴など）がほとんどであった。この点からは大連、旅順へ回航していた帝国艦隊の編成が一目瞭然である。前述のように、軍縮条約は日英米三国の主力艦建造競争を抑制する効果をあげた。ところが、他方においては補助艦艇の整備建造、既成主力艦の性能向上、改装競争を激化させたという側面も指摘されている<sup>356</sup>。このような状況は、上述の便乗艦の艦種からもその一端が明らかになる。

また、各年度「便乗見学」の主催者は、表5-4に示したように、1928年までの「便乗見学」はほぼ海務協会と満日社の共催によって開催されたが、第2回のみ大連新聞社が加わり、1929年から主催者に海軍協会満洲支部<sup>357</sup>が加わることになった。このようにして、「便乗見学」活動は1932年まで続けられたのである。

<sup>356</sup> 財団法人海軍歴史保存会、前掲書、111頁。

<sup>357</sup> 1917年、「海国日本の国是として大量生産工業を奨励し延して海外貿易の進展発達を期し、併せて之を助長し同時人国防の第一線を守護すべき帝国海軍の整備充実に貢献する」という目的で日本において海軍協会が設立され、1928年に大連を中心として海軍協会満洲支部が設立された。次いで、1935年に満洲支部を満洲本部に改めた。満洲本部の附属事業として大連海洋少年団を組織してそれを指導するほか、一般海軍思想の涵養普及に従事している。事務所は大連市役所内に設置された。（井上謙三郎、前掲書、第759頁。）

### 3.4 「便乗見学」の余興

毎年度、海務協会と満日社及び遼東新報は「便乗見学」に関する準備会議を開催した。その大要は、次のようなものである。

- 一、軍艦便乗と旅大両市の海事講演会は従前通り海務協会及び我社（満日社）の主催とすること
- 二、軍楽隊の公演並に諸種の運動競技も従前通り遼東新報社の主催として挙ること<sup>358</sup>

引用文からは、毎年度艦隊便乗の延長として、海務協会と満日社は海事講演会を主催し、遼東新報社は海軍軍楽隊演奏会及び各種の運動競技を主催する役割を担っていたことがわかる（付録 5-1 参照）。

例えば 1924 年第 2 回「便乗見学」に際しては、遼東新報社が主催した艦隊チームと民間人チームとの歓迎野球試合が行われた。「便乗見学」の余興活動に野球試合が加わった背景には、前章でも触れたように野球熱の高まりがあったと考えられる。その一方で第 1 次世界大戦における英米軍の活躍は、軍隊とスポーツに密接な関係があることを示した。その経験に鑑みて、フランスやドイツは軍隊へのスポーツ導入を本格化した。1920 年代になると軍縮、平和主義、軍隊無用論の風潮など、軍隊は深刻な危機に直面しながら、新しい時代に適応した軍の男性性を構築することが迫られていた<sup>359</sup>。このような背景の下で、日本も 1920 年代に軍隊にスポーツを導入し、その結果軍隊内部にスポーツ熱が広まったのである<sup>360</sup>。

第 4 章で述べたとおり、野球競技は男性的な運動であり、精神的な鍛練でもあることから、野球試合を通じて、協同精神、犠牲心及び団結力が涵養できるのである。これらの点に鑑み、野球は軍隊の体技として奨励に値するものとして認識されていた。こうして軍隊における野球熱も高まったが、そのような動向は『満日』の紙面記事とも正確に一致する。

規律と服従とで固められた軍隊生活にも、現代思潮とやらの響きは三十八瓏の大砲よりも効めがあったと見え、先には野球熱に魔された「国家の干城」達がゲームを許して呉れと只管嘆願してやうやく公認され、折角の日曜日をバットを握って暮らす事となった<sup>361</sup>。

上の引用文には、当時の軍隊における野球熱の一端が捉えられていると同時に、大

<sup>358</sup> 「今年もまた艦隊便乗を請願する 第二艦隊の旅大訪問を控へて 海務協会で打合決定」（1926 年 2 月 14 日付『満日』）によると、「麗陽花の四月半帝国第二艦隊が旅大の地を訪問するについて毎年の例にならひ海事思想の普及及び海事軍備の紹介について海務協会、遼東新報社及び我社は旅順防備隊より杉坂司令の出願を乞ひ、一昨十日午後四時海務協会下相談の結果大体次の如き協定をなし各社その実行に就て準備に着手することになった。」という記述から、海務協会と満日社及び遼東新報社は毎年度、同じ形式の準備会議を開催していたことが推測できる。

<sup>359</sup> 高嶋航「菊と星と五輪—1920 年代における日本陸海軍のスポーツ熱」『京都大学文学部研究紀要』(52)、2013 年、295 頁。

<sup>360</sup> 同上論文、197 頁。

<sup>361</sup> 「軍隊生活にも漸次時代思潮 野球や音楽熱が」1922 年 9 月 14 日付『満日』。

正デモクラシーの影響を垣間見ることができるであろう。

また、『満日』は、1924年に行われた歓迎野球の試合ぶりを次のように描いた。

第二艦隊歓迎の意味で举行された艦隊対実業、満俱の野球戦は遼東新報社の主催で六日午前九時より艦隊対実業戦を開始されたが、実業側は最初川井田を投手に立たせたので、海軍側相当の当りを見せ緊張したが、六回目より正投手たる田中と交代せしめて以来、海軍の打撃全く封せられて振はず。結局七対三で海軍敗れ、午後の艦隊対満俱戦は、児玉関東長官の始球式ありて観衆多かりしも多士済々の満俱と練習不足の艦隊の事とて、其の勝敗の数は既に戦はざるに明かで、結局十三対ゼロのスコアを残して、艦隊惨敗を喫するの已むなきに至つたが、其の技能の如何に係らず、艦隊側の選手が常に軍人氣質を發揮して、キビキビしたる動作に運動精神を發揮したのは観衆を喜ばした<sup>362</sup>。

下線を付した部分が示す通り、歓迎野球試合は民間人に軍人氣質と運動精神を誇示すると同時に、在満日本人の実力を示す場ともなったのである。

さらに補足すると、野球試合を通じて民間人と軍、また前章でも触れたように内地と外地が共有する空間が作り上げられたことにより、「軍隊と国民との接近」、「内地と外地との融合」を図る主催者側の姿勢も示されている。

#### 第4節 感想文からみた「便乗見学」の成果

毎年度の便乗者の構成は表5-6のようにまとめられる。

表5-6 便乗者所属一覧表（一部、筆者作成）

類別	所属機関
初等教育	南山麓尋常高等小学校、沙河口尋常高等小学校、伏見台尋常高等小学校、沙河口尋常小学校
中等教育	大連第一中学校、大連第二中学校、旅順第一中学校、旅順第二中学校、奉天中学校、撫順中学校、大連商業学校
大学教育	旅順工科大学
師範教育	旅順師範学堂
専門学校	南満洲工業専門学校、南満洲教育専門学校
団体	旅順少年団、大連少年団、大連青年団、大連修養団
女子学校	大連高等女学校、大連女子商業学校、大連市立高等女学校、大連女子工芸学校、旅順高等女学校、
中国人教育機関	沙河口公学堂、西崗子公学堂、旅順附属公学堂、大連商業学堂
政府機関	関東庁、大連民政署、旅順警察隊
軍事関係	旅順陸軍将校団、海軍関係者、柳樹屯連隊将校、遼陽軍人団、陸軍軍属
一般市民	旅順市民、大連市民

<sup>362</sup> 「第二艦隊歓迎野球」1924年4月7日付『満日』。

練習所・講習所など	満鉄従事員養成所、旅順警官練習所、大連通信講習所、青年訓練所、満鉄社員
-----------	-------------------------------------

表 5-6 からわかるように、便乗者は旅順、大連における初等教育、中等教育、大学、専門学校、少年団、女子学校など幅広い層に及んでいる。その中には、中国人の教育機関である公学堂から選抜された便乗者も含まれていた。これらの便乗者が、「便乗見学」にどのような印象を受けたのかについて、便乗者らが書いた感想文を分析することで明らかになしたい。

#### 4.1 大連少年団からの感想文

##### 4.1.1 大連少年団の成立

1910 年代半ば以降、日本各地でイギリスのボーイスカウトの影響を受けて陸の少年団が発足した。1924 年 1 月 26 日、旅順少年団結団式が挙行され、続いて同 4 月 29 日に大連少年団結団式が挙行された<sup>363</sup>。団規、綱領守規は次のようなものである。

##### 大連少年団規<sup>364</sup>

- 第一章 総則
- 第一条 本団は大連少年団と称し大連市及其附近に在住する日本少年男子を以て組織す
- 第二条 本団は本部を大連民政署内に置く
- 第三条 本団は綱領の趣旨に依り健全有為の団員を養成し一般少年の思想風紀を向上せしむるを以て目的とす
- 第四条 本団は前条の目的を達する為に左の諸項を実施す
- 一、神宮及皇居遥拝並に神社参拝
  - 二、講演及講話
  - 三、各種の実習
  - 四、団体教練
  - 五、武道及運動競技
  - 六、見学旅行
  - 七、交通整理公共物の擁護其他社会奉仕
- 第二章 役員
- 第五条 本団に左の役員を置く
- 一、 団長 二、副団長 三、参与若干人 四、幹事若干人 五、指導員若干人 役員は名誉職とす
- 第六条 団長、副団長は幹事会に於て之を推薦す、参与は団長之を囑託す、幹事は市内各小学校長に之を囑託す
- 前項の外団長に於て必要ありと認むる時は幹事若干名を囑託する事を得、
- 指 導員は団長之を囑託す
- 第七条 団長は大連を代表し団務を総理す。副団長は団長を補佐し団長事故ある時

<sup>363</sup> 嶋田道彌『満洲教育史』文教社、1935 年、592-593 頁。

<sup>364</sup> 1924 年 1 月 26 日付『大連新聞』。

は其の職務を代理す。参与は本団の重要事項に関し団長の顧問に申す。幹事は団長の指揮を承け団務に従事す。指導員は団長の指揮を承け団員の指導教育を掌る

- 第八条 本団に顧問若干名を置く事を得、顧問は幹事会の推薦により団長之を囑託す
- 第三章 入退団
- 第九条 本団に入団し得べき者は操行善良身体強壯にして年齢十一年以上十三年以下の者とす
- 第十条 入団志願者は所定の願書を提出し団長の許可を受くべし
- 第十一条 入団を許可せられたる者は入団金一円を納付すべし
- 第十二条 入団期は毎年四月とす但し時宜に依り中途入団を許可することあるべし
- 第十三条 退団せんとする者は其事由を具して届出づべし
- 第十四条 心身の状況団員たるに適せずと認めたる者には退団を命ず
- 第十五条 入退団の決定は幹事会の決議を経て団長之を行ふ
- 第四章 編制
- 第十六条 団員を分ちて正団員及予備団員とす
- 第十七条 正団員を分ちて三分団とし入団初年の者を第一分団に編入し漸次在団一ケ年を以て考査の上進級せしむ但し成績佳良なる者は幹事会の決議を経て随時進級せしむることあるべし
- 第十八条 他の団より転入せんとする者に対しては前項但書の規程を準用す。正団員の課程を修了したる者を予備団員とし其期間を二ケ年とす
- 第五章 経費其他
- 第十九条 本団に要する経費は補助金入団金寄付金其他の収入を以て之に充つ
- 第二十条 本団の趣旨を賛し金十円以上を寄附したる者を賛助員とす
- 第二十一条 本規程の変更は幹事会の決議を経て団長之を行ふ
- 第二十二条 本団に関する細則は団長別に之を定む

#### 少年団綱領守規<sup>365</sup>

##### 綱領

- 一、忠孝を重んじ義勇奉公の誠を効す
- 二、正義を尚ひ博愛共存の実を挙ぐ
- 三、心身を錬り質実剛健の気を養ふ

##### 守規

- 一、私は皇室を崇ひ祖先を敬ひます
- 二、私は礼儀を守り父母長上の命を重んじます
- 三、私は友誼を厚うし何人にも親切を盡します
- 四、私は喜んで人の為に盡し世の為に働きます
- 五、私は規律を正うし公德を守ります
- 六、私は勇敢にして責任を重んじます
- 七、私は身体を鍛ひ困苦に堪へます
- 八、私は快活にして仕事を樂しみます
- 九、私は軽佻を戒しめ儉約を守ります
- 十、私は純潔にして品位を保ちます

<sup>365</sup> 1924年4月4日付『大連新聞』。

以上の内容から、大連少年団は「健全有為の団員を養成し一般少年の思想風紀を向上せしむる」という目的の下に、「善良身体強壯にして年齢十一年以上十三年以下の」大連市及其附近に在住する日本少年男子を集め、団規、綱領、守規、団長、副団長、幹事などを含む完備な組織であったことが明らかになる。

また団規には少年団の事業として、少年団精神の涵養（神宮皇居遥拝、神社参拝、社会奉仕など）、少年団特技の練磨（武道及び運動競技）、団体訓練も記載されている。

#### 4.1.2 感想文

大連少年団が組織されて、最初の団体行動は1924年4月10日行われた第2回「便乗見学」であった。この時、軍艦に便乗した団員の感想が『海友』に記されている。その中の一部を取り上げて表5-7にまとめた。

表 5-7 大連少年団第2回「便乗見学」の感想文

番号	氏名	内容の概要
1	清水輝雄	（前略）船が軍艦をはなれるとき、声をそろへて万歳を三唱した、そうして団歌を歌って旅順に向つた。軍艦に始めてのつた私は、水兵さんの規律正しい生活と艦内のきれいに整頓されて居ることをひそかに感じました。
2	井手功	我が大連少年団は幸ひにも、旅順まで軍艦の便乗を許可せられた。先づ艦内の雄大なること、砲の自由自在に活動すること、機関部の有様や、海軍軍人のキビキビした勇しい働きにはただただ驚くの外なかつた。（中略）僕も大きくなつたら海軍の軍人になつて大いに国家のため働きたいと考へた。努力せよ、活動せよ、社会につくせよと其のしるしに優勝旗を艦長さんから下されたのは、我が大連少年団の名誉であります。
3	吉村有二	（前略）軍艦に乗つて一休みすると、艦長からのお話は僕等少年団にとつて、大切なことであつた。ことに記念に旗をいただいたのは少年団に強い力を与へた。（中略）旅順について又艦長のお話をきいて、軍艦の人と万歳をとなへて、わかれをつげた、そして団歌をうたつた。（中略）水兵さんの一せうけんめいで働く姿が、夢のやうに頭に浮んで来る。
4	山口克己	僕等は軍艦の見学して、規律の正しいのに感心した、第一に大じな物は大じな物ばかり、ならべて、ひきだしに入れてある。（中略）普通僕等が儉約して居るよりも、モツトモツト儉約して居る。僕は海中だから、水は儉約して居るとは思つて居たが、こんなに切りつめた儉約しているとは思はなかつた。軍艦を下りる前に水兵さんから「これから朝鮮に行くのだ」と聞いたとき、このまま僕も朝鮮まで乗つて行きたかつた。



5	白井 亨	<p>(前略) これぞ帝国軍艦八雲であつた。梯子を上ると番兵が立っている、敬礼して艦内に這入る。上甲板艦尾にあつまり、艦長から少年団員に対する訓話があつた、其の上優勝旗までいただいた。(中略) 旅順港外についた、艦長から旅順要塞の御話、古川司令官から訓話等があつた。御召艦浅間に最後のお別れを告げて、ランチに乗つた、陽は早や西に沈んだ、あたりは薄暗い。万歳を三唱し、団歌を歌つて帰途についた。生まれて初めて軍艦に乗つたので、非常に嬉しく、家に帰くとすぐ、此の話を父母にして上げた。</p>
6	木谷正男	<p>(前略) 艦長様のお話は僕等にとっては、大変為めになりました、まだまだ長いお話を聞きたかつた。戦闘の演習をする時などは実に早く、見事なことでした、古川中将閣下のお話や、お顔はいつまでもおぼえています。又少年団に下さつた優勝旗も大変ありがたく思つた。もう一度あのやさしい海軍の軍人にあひたくなつた。</p>
7	三田 勇	<p>僕は未だかつて軍艦に乗つて見たことがない、こんど入港した練習艦隊に便乗出来るといふ話を聞いて、何んなに嬉しかつたのであらう。(中略) 少年団が、これまでいろいろ為したことの夫等の総ては嬉しい事ばかりであつたが、何と言つても今度の軍艦に乗れるといふのが一番大きな嬉しさである。(中略) そして艦内を一通り見学して、それが終ると間もなく動き出した。軍艦と軍艦の間を四百米突の距離を保つて行くのださうだ。星ヶ浦沖にさしかかると、演習が開かれ、大砲を打ち出した。今更らのやうに我が海軍の威力といふものを知ることが出来た。僕は何だか急に大きくなつた、そして前から海軍の軍人になつて、国の為につくしたいといふ心を一層強く且つ深めた。殊に軍艦旗は、天皇陛下と同じだと聞いたとき、私は何となく気が引きしまつた。又こうして軍艦に乗つて居れば外国に行つても大日本帝国の土地に居ると同じことだと感じたのである。(中略) 僕等は今まで少しも知らなかつた、海軍の有益なことどもを知ることが出来たのは、何より嬉しかつた。</p>
8	本多賢輔	<p>(前略) 僕が軍艦に乗つて一番強く感じたのは、水兵の御飯のことだ、麦ばかりの飯と、まづいおかずばかりであつた。それに僕等は、あたたかい白い御飯をたべ、おいしいおかずで、たべることは、ぜいたくであると思つた。(中略) 又艦長のお話は僕等には大変よいことで、僕等も一生懸命に勉強して、身体をきたへ、人々にしんせつをして、益々日本の国威をかがやかさうと思ふ。</p>
9	湯目隆雄	<p>私はこんど練習軍艦に便乗して、忘れることの出来ないことが一つあります。それは八雲艦長の元気であります。私達少年団が八雲艦に乗つて、後甲板に休んでおりますと、艦長はニコニコした顔で、私等の前に出てきまして。「今の人間は智恵と情が教育されているが、意志は教育されていない。少年団といふものは意志が強くなければならない。そして日本人はまとまつて仕事をしなければなりません。商売人は自分だけもうければ好いと思つているからいけない。君達も大きくなつて、御国の為めなんでもしなさい。」私はこのお話を聞いて、意志をつよくしやうと思ふ。</p>

出典：「大連少年団軍艦便乗記」『海友』172号（大連海務協会、1924年）より筆者抜粋。

表 5-7 に示したように、少年団員は、「便乗見学」を通じて軍艦内部が整頓されている様子や海軍軍人の規律正しい姿勢を目の当りにした（番号 1、4 参照）。また、艦長の講話を聴くことで帝国海軍を強く意識し、海軍への憧れを強める（番号 2、8、9 参照）と同時に、海軍軍人の儉しい生活を見て、少年団員の奮闘心が喚起されたことも推測できる（番号 8 参照）。

また、少年団員は軍艦を日本帝国の象徴的な縮図と捉えていたことも確認できる（番号 7 参照）。帝国海軍軍人との接触、軍艦旗の掲揚、万歳の三唱などにより、在満少年が日本人としてのアイデンティティを再確認したことも読み取れる。

さらに補足すると、1924 年第 2 回の「便乗見学」は大連少年団が組織されて最初の団体行動である。少年団の綱領守規によれば、その内容には忠君愛国、義勇奉公、質実剛健などの内容が記されている。第 4 章と第 5 章で触れるように、1920 年代初頭、国民思想の善導や皇室尊崇などを養成することは教育上における最も重要な目標であった。つまり、少年団の綱領は国家目標ともつながっているのである。以上の内容から総合的に考えれば、少年団の便乗を通して帝国経営にふさわしい後継者を育成しようとする主催者側の意図がうかがえる。

#### 4.2 女子学生からの感想文

「便乗見学」には、男子学生のみならず、女子学生も参加していた。以下に、1921 年第 1 回「便乗見学」に参加した女子学生の感想文から 2 例を取り上げて、その内容をまとめてみよう。

##### 例 1、大連高等女学校第四学年 間原節子

今迄は海及び海軍に対する知識の皆無な為幾らかの恐怖心を待っていたが軍艦に便乗して整った設備進んだ武器と戦術等多くの知識を得て、其の恐怖心は深い興味と頼もしさに変つて行った。十六隻の浮城が正々堂々海を押し波をけたて、進様又嚙喰たる喇叭の音につれて軍艦旗の昇り行く有様は、壮快と敬虔其のものであつた、日本国民である感激に全身は戦きふるへた。（中略）我等異郷にある者は海に対する強い信念を持つていらねばならぬ、大洋の怒濤にもまれて港に入つた時の海の人々の感じは、如何なるものにも例へる事は出来ないだろう、しかしすべて発展的世界的だ、海の王は世界の覇者である、軍艦便乗の光栄に浴して多くの海事思想を得、婦人の使命の一つが強き海の征服者をつくるにある事を教へられた、其の賜物に感謝するのである

366。

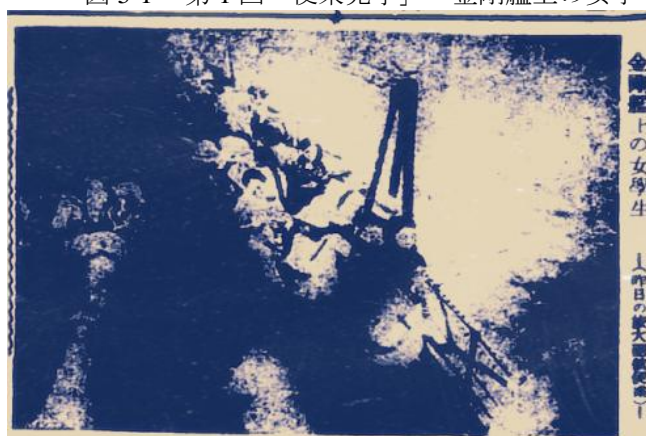
##### 例 2、大連市立実科高等女学校補習科 山本きみ子

（前略）私はうれしい心又は恐ろしい心がこみあつて、一種いひあらはず事の出来ない感じがした、それは恐らくうれしい心であつたらう。私は早く軍艦に乗りたくと云ふ一念より外は何物もなかつた。（中略）軍艦に乗り移つている折から荘厳なる喇叭と共にしづ／＼軍艦旗が掲げられたそれをみると自ら頭を垂れずには居られない荘厳なる感に打たれた。（中略）軍艦は進行して種々の戦闘教練が行なわれた。私は皆関心するばかりであつた。（中略）それより私共五六人は案内者に案内をして頂いて艦内を見学した。艦内は迷ひ子になるやうに広かつた案内者より艦内生活などについて、くはしく説明して下さつた第一に感じたのは、掃除のよく行届いている事であつた。（中略）そして又よく整頓がしてある事、規律正しい事など皆恥づべき事である。私等は女としてこれに恥ぢない様にしなければならぬ。（中略）私は生れて、はじ

<sup>366</sup> 「第二艦隊便乗見学感想」『海友』（136号）大連海務協会、1921年、37-38頁。

めて此様な愉快的な事はなかった。この愉快的な機会を得たのをうれしく思つた。(中略) 如何にも哀愁を帯びていた小舟が巨大なる軍艦の側をはなれた時甲板上には白い眼をつけた士官、水兵等が出て皆別れを惜しみつつ帽子をかぶつた。私等もハンカチをふりながら別れを惜しんだ遠くはなれてから巨大なる金剛艦の雄姿をながめた時は、何とも云へない感じがした」<sup>367</sup>

図 5-1 第 1 回「便乗見学」・金剛艦上の女子学生



1921 年 8 月 26 日付『満日』

引用文からわかるように、女子学生の中から見た「便乗見学」は単に「海や海軍に対する知識を涵養」するだけではなく、異郷すなわち、日本と遠くはなれた満洲における在満日本人にとっては、日本国民としてのアイデンティティを再確認する機会であると同時に、帝国の将来における婦人の使命をも強く認識する経験であったことが読み取れるのである。

#### 4.3 「便乗見学」の中止

以上、便乗者の感想文について考察した。これらの感想文に関しては、主催者側が提出を求めたのか、あるいは教育機関が自主的に提出したのかは判然としないが、「便乗見学」が便乗者にどのように受け止められたのかを読み解く上で貴重な資料であると考えられる。

これらの便乗者の感想文からは、「便乗見学」を通じて「海事思想の普及」、「忠君愛国」、「義勇奉公」の精神がほぼ完全に便乗者に内面化されたことが読み取れる。

さらに補足すると、前述の通り、「便乗見学」当日に軍艦に便乗できなかった市民も数多く埠頭や海岸に向かい軍艦の航行を見学したのである。それも加えれば、「便乗見学」にかかわる人数はさらに多かったと推測できる。

これらの点から、艦隊便乗がもたらした影響は、単に便乗者のみにとどまらず、便乗できなかった者にも及んでいることが看取できるであろう。

「便乗見学」は回を重ねること 11 回、便乗人員は実に 34,583 余名の多数にのぼった。これは、日本国内外において、希にみることであったと言っても過言ではない。

ところが、1933 年に『海友』に次のような社告が掲載された。「連盟脱退等より日本国家の非常時に際しているので、果たして来港せらるゝや否やは全く不明であつて、吾等が待望する連合艦隊に対する一切の事業は已むを得ず中止さるゝに至つたこと

<sup>367</sup> 同上、38 頁。

は甚だ如何とする処である」という理由で、「便乗見学」は中止されることとなった。

#### 艦隊便乗見学中止

例年四月上旬を機として帝国海軍の精鋭を以て編成せる連合艦隊は北支那方面の巡航に上り、大連及び旅順へ寄港しつつあつたが、新興満洲国の発展、且つ又母国を遠く離れている吾等は年一回の来港に多大なる期待をかけ、歓喜と感激とを以て歓迎するは勿論、この好機会に於て本会は徹底的に海軍思想の普及宣伝をなすため海軍協会及び満洲日報社と合同主催の許に数千名の官民学生等の艦隊便乗を計画し、親しく艦内生活の実情を見聞する外、壮烈なる艦隊の大演習を見学して大連、旅順間を航海し、更に陸上に於ては軍楽隊の演奏会及び海軍講演会等を開催して、所謂オール海軍デーとして全市は湧き返る殷賑を呈したのであるが、本年は連盟脱退等より日本国家の非常時に際しているので、果たして来港せらるゝや否やは全く不明であつて、吾等が待望する連合艦隊に対する一切の事業は已むを得ず中止さるゝに至つたことは甚だ如何とする処である<sup>368</sup>。

下線を付した部分が示すように、「便乗見学」を企画する目的はこれまでの「海事思想普及」という文面から「海軍思想の普及宣伝」へと変更されたのである。換言すれば、これまでの「便乗見学」を海軍思想宣伝の一助として位置付けようとする主催者側の意図が読み取れる。

#### 小結

本章では 1920-1930 年代の軍縮時代にあつて、同時代の『朝日新聞』、『大連新聞』の言説とも比較対照しながら軍縮をめぐる満日社の紙面報道の内容を分析した。さらに、満日社が主催した「艦隊便乗見学」に焦点をあて、「便乗見学」の成立とその展開過程及び便乗者の感想について検討した。

第 1 節で述べた通り、軍縮は、1920 年代初めごろに、最も重要な政治的争点となっていた。当時、『朝日新聞』は、陸海軍の軍縮を支持し、積極的にこの問題を取り上げ、国民の軍縮世論を喚起した。一方、植民地における日本新聞の場合には、『大連新聞』が明確に軍縮を否定する姿勢を示したのに対して、『満日』の方は軍縮を世論の大勢と評価した。ここでは、一見すると『満日』は軍縮を支持する立場に立っていたように見える。

他方、軍縮問題に関して日本海軍は消極的な姿勢をとっていたのである。その背景は、次の 3 点にまとめられる。

第 1 は、日本は自給自足が不可能な国家であるがゆえに、米国をはじめとする列国の軍事・経済政策に対抗しようとするれば、中国大陸を資源供給地や海外製品市場として利用するほかない。その場合、中国との連絡を保つうえで、十分な海軍力をもって日本海と東—南シナ海の制海権を維持する必要がある、という海軍側の認識があつた<sup>369</sup>。

第 2 は、第 1 次世界大戦後、中国で民族運動が展開する一方、当時はアメリカの中国進出や日系移民排斥問題なども巻き起こっていた。このような状況下にあつて日中・日米関係を牽制したいという海軍側の考慮があつたと考えられる。

<sup>368</sup> 「艦隊便乗見学中止」『海友』（275号）大連海務協会、1933年、64-65頁。

<sup>369</sup> 樋口秀実『日本海軍から見た日中関係史研究』芙蓉書房、2002年、48-49頁。

第3は、第一次世界大戦を契機に、世界は国を挙げての総力戦体制の重要性を認識するに至り、日本も同様に総力戦体制を構築する必要がある、という見方である。

ところが、当時の日本人にとって第1次世界大戦は、主戦場がヨーロッパだったこともあり、日清戦争や日露戦争ほどの緊迫感を伴わない戦争であった。それについて、山室信一は「第1次世界大戦によって精神的影響を受けることが少なかったというだけでなく、戦争の存在さえ意識しなかった人々が多かったのではないだろうか」<sup>370</sup>と指摘している。

こうした世情のなかで、軍拡世論の喚起に努めようという目的で、海軍はより積極的な宣伝活動を展開する必要に迫られることになる。

これらの点から総合的にみれば、海軍省及び艦隊司令長官は「便乗見学」を海軍思想宣伝に資するものと認識したうえで、毎年度、満日社と海務協会が共催した「便乗見学」の出願について特許を与えたと考えられる。

「便乗見学」を通じて、在満日本人、特に第二国民としての生徒達は、海軍や海事思想への理解をより深めるだけではなく、軍艦内部や実戦演習などの見学により、海軍への関心はもちろん、日本国民としてのアイデンティティ、忠君愛国、義勇奉公の思想を一層深めるようになったと考えられる。

また前述の通り、当時軍隊は男性的であると一般的に認識されていた。特に日本国内においては女性の「便乗見学」というのはめったに見られない珍しいことであったのに対して、第二国民であり、また未来の国民教養の担い手でもある女学生の「便乗見学」が認められたのは、上述した総力戦体制構築への対応として捉えられるものであろう。

さらに、軍縮問題に対する『満日』紙面報道を考えあわせれば、1920年-1930年代の軍縮時代において、紙面報道と事業活動という二つの側面で、海軍の軍拡主張を正当化しようという満日社の姿勢が垣間見えると同時に、1920年代の満日社の海軍への積極的な接近も示唆されている。この点は海軍宣伝の協力者、さらに植民地経営の協力者としての満日社の性格をより一層顕著に示すものだろう。

---

<sup>370</sup> 山室信一『複合戦争と総力戦の断層 日本にとっての第1次世界大戦』、人文書院、2011年、9頁。

## 第6章 初春の吉例としての「歌かるた競技大会」

第2章から第5章において「大連彩票」、「関東州野球大会」、「在満児童母国見学団」、「艦隊便乗見学」などのトピックを取り上げ、それぞれの歴史的経緯、開催実態、その効果などについて詳しく検討した。本章では、満日社が主催した「歌かるた競技大会」（以下「かるた大会」と略す）に注目する。まず、歌かるたの歴史を記す。

### 第1節 歌かるたの歴史について

歌かるたは、本来歌を覚えるための教育的な遊びであり、「小倉百人一首」をはじめ「伊勢物語」、「源氏物語」、「古今和歌集歌かるた」など種々の歌集や物語中の歌を用いたものが作られ、枚数も歌の数に合わせてさまざまであった。その中で最もポピュラーなのは「小倉百人一首」であり、はじめは上流階級でだけ遊ばれていたのが、次第に庶民の間にも普及して、江戸中期を過ぎてからはお正月の遊びの一つとして定着した<sup>371</sup>。

明治に至って外国の近代的印刷技術が導入されると、「かるた」も木版以外に石版・銅版刷りのものが登場する。それにともなって、歌かるたはさらに普及し、一般家庭でもかるた会が開かれるようになった。1887年には帝国大学（現東京大学）にかるた倶楽部が誕生し、個人戦のみならず倶楽部対抗の競技として大流行した<sup>372</sup>。

当時の歌かるたの流行はこの時代の小説の中でも確認できる。例えば、尾崎紅葉はこの流行をとらえ、1897年1月1日から『読売新聞』に連載された「金色夜叉」の冒頭に歌かるた会の模様を次のように生々と描いている。

箕輪の奥は十畳の客間と八畳の中の間とを打抜きて、広間の十個処に真鍮の燭台を据ゑ、五十目掛の蠟燭は沖の漁火の如く燃えたるに、間毎の天井に白銅鍍の空気ランプを点したれば、四辺は真昼より明に、人顔も眩きまでに耀き遍れり。三十人に余ぬる若き男女は二分に輪作りて、今を盛と歌留多遊を為るなりけり。蠟燭の焰と炭火の熱と多人数の熱蒸と混じたる一種の温気は殆ど凝りて動かざる一間の内を、萋の煙と燈火の油煙とは更に纏れて渦巻きつつ立迷へり。込合へる人々の面は皆赤うなりて、白粉の薄剥げたるあり、髪の解れたるあり、衣の乱次く着頼れたるあり。女は粧ひ飾りたれば、取乱したるが特に著るく見ゆるなり。男はシャツの腋の裂けたるも知らで胴衣ばかりになれるあり、羽織を脱ぎて帯の解けたる尻を突出すもあり、十の指をば四まで紙にて結ひたるもあり。さしも息苦き温気も、咽ばさるる煙の渦も、皆狂して知らざる如く、寧ろ喜びて罵り喚く声、笑頰るる声、扨合ひ、踏破く犇き、一斉に揚ぐる響動など、絶間無き騒動の中に狼藉として戯れ遊ぶ為体は三綱五常も糸瓜の皮と地に塗れて、唯これ修羅道を打覆したるばかりなり<sup>373</sup>。

作者が歌かるた会の流行をそれほど意識していたかどうかは確認できないが、歌留

<sup>371</sup> 村井省三「日本のかるたの歴史」下中邦彦『歌留多』平凡社、1984年、215-216頁

<sup>372</sup> 吉海直人「百人一首かるたの近代化—競技かるたの成立と変遷」『ユリイカ』44巻16号、2012年12月、194-195頁。

<sup>373</sup> 紅葉山人『金色夜叉』（春陽堂、1898年）精選名著復刻全集 近代文学館、日本近代文学館、1972年、7-8頁。

多という競技はすでに当時の実生活に浸透していたことが推測できる。

当時一般に使用されていたかるた札は、変体仮名の連綿体で書かれたものであった。その中には、印刷されたものもあり、手書きのものもあったため、各家庭やかかるたグループで使用された札はさまざまであった。それにともない、ある札を使い慣れた者とそうでない者が競技する場合、競技の公平さを著しく欠くことになる<sup>374</sup>。これに着目した万朝報社社長の黒岩涙香（1862年-1920年）は従来の変体仮名の札ではない総平仮名による現在の標準かるたを考案し、1904年に東京かるた会を創設、同年の2月11日紀元節に標準かるた札を用いて万朝報社主催の第1回かるた大会を開いた。

小倉百人一首 かるた会 会費三十銭晚餐呈弁当

本日日本橋萬町常盤木倶楽部に開く正午開場、一時開会同好の方々男女御誘合され御来場被下度候。

当日朝報社遊技部の考案になる新式の最も公平なる歌留多を用ひ秀技者には金牌其他の賞品を贈り候（時刻を後れて来会さるゝ方は或いは加入致し難きやも計り難きに付き成る可く早刻に御出下され度候。）

東京かるた会発起人謹白<sup>375</sup>

この第1回かるた大会が競技かるたの始まりであるとも言われている。その後「東京かるた会競技規定」が制定され、その中で「競技は一人対一人で行われること、各自の持札を二十五枚とすること、早く持札が無くなった者を勝ちとすること、相手陣の札を取った場合は自陣の持札を一枚送ること、札の配列を縦三段横三尺の範囲内とすること、取札に触れた手が同時の場合はその札を持っている者の取りとすること、お手付に関する罰則」等が定められた<sup>376</sup>。今日の「全日本かるた協会競技規定」の主たる事項は、すべてこの競技規定に網羅されている<sup>377</sup>。さらに、黒岩は『万朝報』を広報に活用し、1905年1月1日の付録として「かるた早取秘伝」を掲載している。その中では「決まり字」のことが解説され、さらに「一字決まり」も明らかにされている。ここに至って伝統的かつ優雅な「歌かるた」に科学的な分析が用いられることで、歌を暗記してさえいれば強い（早く取れる）という「お座敷かるた」から離脱し、いよいよ本格的な「競技かるた」がスタートしたわけである<sup>378</sup>。

このような流れの中で、かるた競技はますます盛大になり、日本全国津々浦々、更に満洲、朝鮮などにも普及するに至った。

## 第2節 満日社が主催した「かるた大会」の始まり

「かるた大会」がいつ頃から満洲で始まったのかは判然としないが、満日社が主催した最初の「かるた大会」は1908年1月12日に開催された。

1908年1月10日の『満日』紙面に次のような案内が掲載されている。

<sup>374</sup> 競技かるた百年史編纂委員会『競技かるた百年史』社団法人全日本かるた協会、2008年、15-16頁。

<sup>375</sup> 1904年2月11日付『万朝報』。

<sup>376</sup> 競技かるた百年史編纂委員会、前掲書、16頁。

<sup>377</sup> 同上、16頁。

<sup>378</sup> 前掲「百人一首かるたの近代化—競技かるたの成立と変遷」、195頁。



かるた大競技会<sup>379</sup>

日時：来る十二日（日曜日）正午十二時より

場所：美濃町千勝館

会費：一人金五十銭（当日持参の事）

同好の士は奮つて御来会を希望仕候

申込所発起人：満洲日日新聞社内水野、池内、木下

満鉄運転課内阿部龍一

これは満日社が主催した最初の「かるた大会」であった。下線を付した部分が示すように、1908年の「かるた大会」は満日社と満鉄が共催したものであった。また、第1章の表1-4と照合すれば、満日社の発起人は編集部の水野應佐、池内重雄及び営業部の木下栄であったことがわかる。

同年1月12日「かるた大会」当日の記事には、「所謂正月遊びの最策なるものにして又我が国古風の遊戯を偲ぶに足るべく殊に新植民地の遊戯としては母国を想うのよすがともなりぬべし、屢々記載したる如く来会者は官吏たると商人たると学生たると労働者たるとを問わず又男女の差別を設くる事なく一切平等唱だ一日の清遊を試むるが目的なれば……」<sup>380</sup>と「かるた大会」の主催趣旨が示されている。この趣旨からは、かるたが母国を離れて満洲に暮らす日本人の心構えを養うものとして捉えられていたことがわかる。

『満日』は「かるた大会」開催当日の光景を、次のように伝えている。

（前略）会場入り口には黑白の段々染幕を張り、国旗を交叉し入口右側の柱にはかるた大競技会々場と筆太に記されたる。先づその清興を偲ばしめたり続々来り合せし、競技者は定刻に至りて既に堂に満ち、なほ遅れ走せに来るもの引も切らず。さしもに開き大広場も之等を容る々に由なく午後三時といふに大戸を閉切りたり、来会者総て百人と注せられ、定刻を告ぐるや思ひ／＼の場所に陣を取りて、何れも練習を始めたるが二時半といふにいよいよ第一回競技は開始せられぬ。先づ競技者六十名を二分し半数づつを源平に分ちて互にその技を闘はしめ、毎回優勝者を選抜し慥くて逡次に闘技せしめて、終に最優勝者米村、西堀、田瀬、森安、佐藤、谷崎の六氏を抜き最後の決戦を為さしめたり、細心鏤刻なる米村氏と容悠沈着なる西堀氏、精悍なる森安氏と俊捷なる田瀬氏と敏慧なる谷崎氏と温籍なる佐藤氏。互に相対し席定まるや折から大連不二に日は落ちて、天地暗く風死し殺気漲る大広間に花電燈の影のみ冴に六氏を中に四方を囲て中原の鹿誰が手に落つらんと片唾を呑んで見つむる様颯風起らんとする一分時前の静寂を示しぬ、慥くて審判官の戦闘開始の宣告と共に敷島の大和島根を偲ぶなる妙なる歌声は誦み始められつ々、いづれ劣らぬ勇士の面々一指空に舞ふや閃電射眼牌札■として飛び、疾励飄忽抄を刻み分を重て戦倍酣に入り三分にして、戦茲に終りを告げたり、時に七時四十分なり慥くて第一等より第五等迄の月桂冠は終に次の諸氏の手に落ちたり（中略）予想以上の来会者ありたるも些の混雑なく不平なく互に歓を盡して万歳聲裡に散会をつけたるは八時なりき、当日数名の女流戦士来会し緘手克く男児の胆を寒からしめ緑草中の点紅といふべし<sup>381</sup>。

下線を付した部分からは、「かるた大会」開催当日の会場設営や競技の様態など、

<sup>379</sup> 1908年1月10日付『満日』。

<sup>380</sup> 「今日の歌留多会」1908年1月12日付『満日』。

<sup>381</sup> 「一昨日の歌留多競技会」1908年1月14日付『満日』。



その場の生々しい人間模様が浮かび上がってくる（図 6-1 参照）。

図 6-1 「かるた大会」席上の一部



1908年1月14日付『満日』

また、当日の優勝選手及び各方面からの寄贈品は次のようなものであった。

表 6-1 満日社が主催した最初の「かるた大会」の優勝選手と寄贈品

優勝選手	
等級	所属及び氏名
第一等	郵便局電信掛 米村甚次郎
第二等	上同 西堀長作
第三等	上同 田瀬一太郎
第四等	満鉄庶務課 森安敏暢
第五等	満鉄建設課 佐藤應次郎
寄贈品	
品目	寄贈者
上等襟巻	中島専之助
上等皮製ベルト	
鏡	
ハンカチーフ	商船会社深尾氏
靴下	貝瀬技師
■衣	
皮製煙草入れ	

エジプト煙草	
蜜柑	
金 18 円	印刷会社
新聞購読券	満日社
麦酒	
煎餅	
帛紗	森山守次社長

出典：1908年1月14日付『満日』

第1回「かるた大会」の後、1等賞の米村甚次郎は『満日』のインタビューに次のように語っている。

(前略) 故郷の金澤に居ました時はただ下の句を読むで下の句を取つて居た位で左程興味を持つて居ませんでしたが三十八年の十月臨時電信隊に従ひて遼陽に来てから戸外は寒いものですから従て籠り勝で友達などの仲に好きなものがありましたので、自分も所在なさに歌留多をやつてみやうと思つてゐる内奉天に転勤になり越えて翌三十九年七月営口へ転じましたが同地は御承知の通り冬季は結氷し海路は交通杜絶するので万事閑散になりますから従つて室内遊戯が盛んに行はれます。八島君などいふ豪の者や中馬という薬店の奥さんが非常にお好きで其方達にお稽古をして戴いたのが始めで御座います<sup>382</sup>。

下線を付した部分からわかるように、満洲において「かるた大会」が盛んになった背景には、満洲の長い厳寒の気候が関わっていると考えられる。またこの米村のかるた経歴談からは、満洲に渡ったかるたが在満日本人の移動により、冬の室内遊戯として定着してきたことが推察できる。

また、『満日』の「東西南北」欄を見ると、今回の「かるた大会」に対して、多くの読者がさまざまな投書を行っている。その内容は表6-2にまとめた通りである。

表6-2 「東西南北」欄における「かるた大会」関係の投書内容の例

番号	日付	内 容
1	1908年1月15日	御社の催に係る歌留多会は非常な盛会で僕はいの一番にまけたけれど素敵に愉快だった。(僧正遍照)
2	1908年1月16日	先日の千勝館に於ける歌留多競技会は実に盛大で俗事にくるしめられて居た頭脳を一拭して新たなる勇氣を得ました希くは第二回を举行せられよ。(四郎)

<sup>382</sup> 「本社主催歌留多会選手」1908年1月16日付『満日』。

3		先日の歌留多会に僕は一等を取るつもりだったらツイツイ席上にあつたビールを飲み過ぎて眼がちらちらしてまけちゃった。(負惜み生)
4	1908年1月17日	歌留多競技会の決勝戦は実に目覚ましい物であつた中にも1、2等賞を得られた米村西堀両氏の謙抑なる態度は実に奥床しい感を与えた。(傍見生)
5		12日の歌留多大競技会は我等をして無我の境に入らしめ乾燥無味な生活に困らせる我等を甦えらしめた多謝多謝。(大友黒主)
6	1908年1月18日	歌留多会第二回協議はいつの日だ。当日はよろしく西山御嬢を来会さしむべし。(大友黒主)
7	1908年1月24日	今度の歌留多会には屹度一等を取って見せる。(紫式部)
8	1908年1月25日	歌留多競技会第二回は何日やるのですか。(待兼生)
9	1908年2月5日	歌留多競技会第二回は何時始めますか早くやってくださいな。(東山御嬢)

表 6-2 の内容が示すように、これらの投書の中には選手からのメッセージもあり (表 6-2 の 1、3)、観覧者からの便りもある。投書の内容には、選手として受賞できなかったことに対する残念な気持ち (表 6-2 の 3)、優勝者の謙虚な態度に対する敬意 (表 6-2 の 4)、第 2 回の「かるた大会」の開催に対する期待などが含まれている。また、「御社が主催した歌留多大競技会は我等をして無我の境に入らしめ乾燥無味な生活に困せる我等を甦えらしめた多謝多謝」(表 6-2 の 5) のような読者便りを見れば、「かるた大会」は娯楽の一手段として外地にいる日本人の郷愁や家族を思い慕う気持ちに対して多少の慰めになったのではないかと思われる。

このようにして、満日社が主催した最初の「かるた大会」は成功裏に幕を閉じた。満日社は今回の好結果に鑑み、早くも同年 2 月 9 日には第 2 回「かるた大会」の計画を立てた。

表 6-3 満洲における「かるた大会」一覧

第 1 回かるた大競技会 期日：1908 年 1 月 12 日 正午 12 時 会費：金 50 銭 場所：大連美濃町千勝館 発起人 満日社：水野應佐、池内重雄、木下栄 満鉄運転課：内部熊一
---

<p>第2回かるた大競技会  期日：1908年2月9日午後1時  会費：金60銭  場所：大連美濃町千勝館  発起人  満日社：水野應佐、池内重雄、木下栄 満鉄運転課：内部熊一</p>
<p>大石橋かるた大会  期日：1908年2月23日正午12時  場所：大石橋梅の家旅館</p>
<p>歌かるた大競技会  期日：1909年1月10日正午12時  会費：50銭  場所：大連美濃町千勝館  発起人 満鉄：佐藤應次郎、岩佐可蔵、伊藤秀吉、森安敏暢 電信掛：西堀長作、米村甚二郎、田瀬一太郎 進和洋行：大北勘三郎、 満日社：阿部真之助、吉本雅美、池内重雄</p>
<p>営口歌かるた大会  期日：1909年1月17日午後1時  会費：銀50銭  場所：営口新市街祇園閣  主催：満日社営口支局</p>
<p>遼陽かるた大会  期日：1909年1月24日午後1時  場所：満鉄倶楽部  主催：満鉄</p>
<p>長春かるた会  期日：1909年1月30日午前開会  場所：新市街本願寺客殿</p>
<p>営口第2回歌かるた会  期日：1909年1月31日午後1時  場所：営口新市街祇園閣  主催：満日社営口支局</p>
<p>第4回かるた大会  期日：1909年2月11日午後1時  場所：大連美濃町千勝館  主催：満日社</p>
<p>旅順かるた競技会  期日：1909年2月14日午後1時  場所：旅順衛生組合内旅順協会  主催：満日社旅順支局</p>

<p>歌かるた大会  期日：1910年1月15日午後1時  会費：銀50銭  場所：営口新市街浄土宗教会所  主催：満日社営口支局</p>
<p>歌かるた会  期日：1910年1月23日午後1時  会費：50銭  場所：大連磐城町菊屋  主催：満日社</p>
<p>長春歌かるた会  期日：1910年2月20日午後1時  会費：50銭  場所：長春新市街本願寺出張所  主催：満日社長春支局</p>
<p>歌かるた大会  期日：1911年1月15日午後1時  会費：金50銭  場所：大連吉野町金城ホテル  主催：満日社</p>
<p>南満かるた大会  期日：1912年2月18日  主催：大石橋千早会主催</p>
<p>営口かるた大会  期日：1913年1月19日午後1時開会  場所：営口浄土宗教会所  会費：金50銭  主催：満日社営口支局</p>
<p>旅順かるた大会  期日：1915年1月30日午後4時  場所：旅順料亭弥生大広間  主催：白露会  後援：満日社旅順支局</p>
<p>撫順かるた会  期日：1915年2月14日午後1時  場所：撫順山陽楼大広間  主催：満日社撫順支社、遼東新報撫順支社</p>

<p>満鮮かるた大会  期日：1915年2月11日  場所：安東県公会堂  主催：満日社安東支局</p>
<p>旅順かるた会  期日：1917年2月11日正午開会  会場：旅順青葉町龍心寺  会費；金50銭  後援：満日社旅順支局</p>
<p>第3回満洲かるた大会  期日：1920年2月8日正午開始  場所：大連美濃町千勝館  主催：満日社</p>
<p>旅順かるた大会  期日：1920年2月22日午前11時開会  場所：青葉亭  会費：男子1名金1円50銭、婦人1名金1円  主催：満日社旅順支局</p>
<p>第4回満洲かるた大会  期日：1921年1月30日午前10時開会  会費：金1円50銭  場所：大連大山通陽暉楼上  主催：満日社</p>
<p>第4回満洲かるた大会  期日：1922年1月22日  場所：大連福昌倶楽部楼  主催：満日社</p>
<p>旅順親睦かるた大会  期日：1922年2月11日正午開会  会費：金1円  会場：旅順鮫島町寿料理店  主催：満日社旅順支局</p>
<p>第5回満洲かるた大会  期日：1923年1月21日午前10時開会  場所：大連山県通福昌倶楽部  会費：金50銭  主催：満日社</p>

<p>第 6 回満洲かるた大会  期日：1924 年 1 月 20 日午前 10 時開始  会費：金 30 銭  場所：大連山県通福昌倶楽部  主催：満日社</p>
<p>第 7 回満洲かるた大会  期日：1925 年 2 月 15 日午前 11 時開会  会費：金 30 銭  場所：大連山県通福昌公司裏同倶楽部  競技方法：甲組五回戦切抜 乙組従来通り  主催：満日社</p>
<p>第 7 回長春かるた大会  期日：1926 年 1 月 31 日  場所：長春料亭丸芳楼上  主催：長春かるた倶楽部</p>
<p>第 8 回全哈かるた大会  期日：1926 年 3 月 7 日午後 1 時開始  場所：哈爾賓名古屋館  主催：満日社哈爾賓支社  後援：哈爾賓日日新聞社</p>
<p>旅順かるた大会  期日：1928 年 2 月 11 日正午開始  会費：金 1 円  場所：旅順旧市街青葉  主催：満洲日報社旅順支社  後援：外山洋行新聞部、遠洲屋新聞店、文英堂書店、大阪屋書店</p>
<p>全鞍かるた会  期日：1928 年 2 月 5 日午後 1 時開会  場所：鞍山赤城町社員倶楽部  主催：鞍山みちのく会</p>
<p>大石橋かるた大会  期日：1928 年 2 月 11 日正午開始  場所：満鉄倶楽部  主催：満鉄倶楽部</p>

出典：『満日』により筆者作成。

表 6-3 が示したように、満洲における「かるた大会」はほとんど満日社及び満日社支社による主催したものであった。これらの「かるた大会」は毎年お正月や紀元節前後に大連を中心として満鉄附属地の各地で開催されるようになった。また、第 4 章でも触れたように、1911 年中朝国境の鴨緑江架橋工事が竣工したことにより、朝鮮鉄道と満鉄が直接連結し、釜山-京城-平壤-新義州-安東-奉天間直通連絡が開始された。こ

のような背景の下に、1915年2月11日に満日社安東支局が主催した満鮮歌留多大会が安東県公会堂で開催された<sup>383</sup>。さらに、1920年代前後になると満日社による「かるた大会」はさらに拡大し、各地域の「かるた大会」を「満洲かるた大会」と銘打ちながら、在満日本人の年中行事として開催されるようになった。

### 第3節 1920年代満洲かるた界の全盛期

表6-3に示した通り、1920年2月8日には「第3回満洲かるた大会」が実施された。その後、『満日』紙面には1921年「第4回満洲かるた大会」<sup>384</sup>、1922年「第4回満洲かるた大会」<sup>385</sup>、1923年「第5回満洲かるた大会」<sup>386</sup>、1924年「第6回満洲かるた大会」<sup>387</sup>、1925年「第7回満洲かるた大会」<sup>388</sup>などの記事が掲載された。1922年は1921年と同じように「第4回」と表記されており、どちらが誤記かは明確でないが、1920年の「第3回」という表記から類推すると、「第1回」は1918年前後もしくはそれ以前に開催されたことになる。

「満洲かるた大会」では審判委員及び競技委員が設置された。審判員は大連かるた界における権威者から選定された。例えば、1920年第3回「満洲かるた大会」の審判委員は以下の通りである。

木浦将一（満鉄中央試験所）、小田部二郎（医院）、永井潔（通管）、和田義正（用度）、隅田和敬（用度）、日下卓四郎（医師）、伊藤祐雄（海関）、三輪正清（満鉄中央試験所）、上野清（大連汽船）、清田三五（車輛）、真庭三千三（工場）、木浦和男（瓦斯）、増田隆治（通管工務）、渋川春秋（満鉄工務）、小森豊次（大連管理局）、田中小一郎（沙河工場）<sup>389</sup>

「かるた大会」は当初ほとんど個人参加型であったが、1920年代の「満洲かるた大会」は会員限定となり、個人に限らず、旅順工科学堂のみちのく会、大連の鶴会、満鉄中央試験所の漣会、日本橋倶楽部、海関正隆銀行団など各種団体や倶楽部も積極的に参加するようになった<sup>390</sup>（表6-4参照）。また、大会には参加会員徽章も設けられた。身分によって徽章の色が分けられ、大会審判委員は白色リボン、競技委員は赤色リボン、一般参加会員は紫色リボンとなっている。

表6-4 各年度の「満洲かるた大会」入賞者一覧

年度	入賞者	賞品及び寄贈品
----	-----	---------

<sup>383</sup> 「満鮮歌留多大会 優勝旗は新義州」1915年2月24日『満日』。

<sup>384</sup> 「第四回全満洲歌留多大会」1921年1月24日付『満日』。

<sup>385</sup> 「歓春の閃き、福昌倶楽部楼上に散る指頭火 全満の猛者連を集めて 第四回満洲歌留多大会」1922年1月24日付『満日』。

<sup>386</sup> 「遠征軍大に振り覇権は安東へ 婦人選手権は鞍山へ 盛況を極めたきのふの 我社主催第五回満洲かるた大会」1923年1月22日付『満日』。

<sup>387</sup> 「初春の吉例 全満かるた大会 その第六回を来る 二十日福昌倶楽部で」1924年1月9日付『満日』。

<sup>388</sup> 「第七回全満歌留多大会」1925年2月6日付『満日』。

<sup>389</sup> 「指頭花火を散らす 今日の歌留多大会 月桂冠を得るものは誰 参加会員実に百二十名」1920年2月8日付『満日』。

<sup>390</sup> 「愈々明八日！千勝館にて 満洲歌留多大会」1920年2月7日付『満日』。



1920 年	<p>甲組</p> <p>1 等 (満鉄沙河口工場の鶴会) 齊藤光雄  2 等 (満鉄沙河口工場の鶴会) 一法師真  3 等 (満鉄中央試験所の漣会) 阿南?  4 等 (睦会) 浜本休一  5 等 (海関正隆銀行団) 末光挙  6 等 (■会) 藤掛更生  7 等 (旅順工科学堂のみちのく会) 植木友太郎  8 等 (旅順工科学堂のみちのく会) 鈴木  9 等 (満鉄電信) 吉野宇恵吉  10 等 (満鉄沙河口工場の鶴会) 道具孝一</p> <p>乙組</p> <p>1 等 (満鉄沙河口工場の鶴会) 岡山輔治  2 等 (大連商業) 小西清  3 等 (満鉄中央試験所の漣会) 山住■造  4 等 福島重雄  5 等 (旅順工科学堂のみちのく会) 成瀬武  6 等 (満鉄沙河口工場の鶴会) 日高永  7 等 (睦会) 早川與三  8 等 (満鉄沙河口工場の鶴会) 小島巖  9 等 (満鉄沙河口工場の鶴会) 木村一市  10 等 (技術) 松田幸七  11 等 (満鉄中央試験所の漣会) 銭谷合行  12 等 (旅順工科学堂のみちのく会) 岩田正五</p> <p>丙組</p> <p>1 等 (満鉄沙河口工場の鶴会) 園田二一  2 等 (満鉄沙河口工場の鶴会) 竹内治道  3 等 (満鉄沙河口工場の鶴会) 武内松五郎</p>	<p>甲組賞品</p> <p>1 等 純金メダル (1 個)  以下 10 等まで銀メダル (1 個)</p> <p>乙組賞品</p> <p>1 等 純金メダル (1 個)  以下 10 等まで銀メダル (1 個)</p> <p>丙組賞品</p> <p>1 等 純銀メダル (1 個)  以下 3 等まで副賞を呈する  副賞寄贈者  ■久呉服店、鈴木呉服店  出口呉服店、嘉納合名会社大連支店、花屋本店</p>
1921 年	<p>甲組</p> <p>1 等 (和泉会) 澄田  2 等 (和泉会) 三原  3 等 (和泉会) 末光</p>	<p>甲組、乙組</p> <p>1 等 特製金メダル  以下 18 等まで特製メダルを贈る</p>

1922 年	<p>甲組</p> <p>1 等 (範多商会) 三原彌一</p> <p>2 等 (和泉会) 庄田末春</p> <p>3 等 (明星会) 鹿瀬省造</p> <p>4 等 (和泉会) 竹内光</p> <p>5 等 (明星会) 齊藤光夫</p> <p>6 等 (満鉄会計) 梅原小次郎</p> <p>乙組</p> <p>1 等 (遼陽白塔会) 有馬勝良</p> <p>2 等 (瓦斯作業所) 武田宇三郎</p> <p>3 等 (明星会) 日高永</p> <p>4 等 (明星会) 福島■雄</p> <p>5 等 (明星会) 鶴田寿</p> <p>6 等 (明星会) 大津俊侍</p> <p>7 等 (大連商業) 柴田芳雄</p>	
1923 年	<p>甲組</p> <p>1 等 (安東住の江会) 文徳治</p> <p>2 等 (明星会) 鹿瀬尚造</p> <p>3 等 (鞍山クロガネ会) 月山</p> <p>4 等 (明星会) 齊藤</p> <p>5 等 (遼陽白塔会) 有馬勝良</p> <p>6 等 (埠頭) 堀亭</p> <p>乙組</p> <p>1 等 (明星会) 萩野</p> <p>2 等 (安東住の江会) 岡崎</p> <p>3 等 (遼陽白塔会) 尾崎</p> <p>4 等 (遼陽白塔会) ■■</p> <p>5 等 (明星会) 大津</p> <p>6 等 (さと波会) ■■</p> <p>7 等 (明星会) 大田正</p> <p>8 等 (明星会) 太田道</p> <p>9 等 (明星会) ■本</p> <p>婦人組</p> <p>1 等 (鞍山クロガネ会) 原夫人</p> <p>2 等 (大連) 山本夫人</p> <p>3 等 (鞍山クロガネ会) 柳原夫人</p> <p>4 等 (大連) 久松夫人</p>	<p>甲組賞品</p> <p>1 等 純金メダル (1 個)</p> <p>2 等 純銀メダル (1 個)</p> <p>3 等 純銀メダル (1 個)</p> <p>4 等 銅製メダル (1 個)</p> <p>5 等 銅製メダル (1 個)</p> <p>乙組賞品</p> <p>1 等 純銀メダル (1 個)</p> <p>2 等 銅製メダル (1 個)</p> <p>3 等 銅製メダル (1 個)</p> <p>以下 10 等まで副賞を呈する</p>

<p>1924 年</p>	<p>1 等 (いなづま会) 吉川猛  2 等 (大連白露会) 塚本一郎  3 等 (旅順) 杉町實次  4 等 (大連白露会) 堀亭  5 等 (いなづま) 野原五郎  6 等 新井喜代太  7 等 (住の江会) 岡崎準一  8 等 (大連白露会) 小寺章太郎  9 等 (いなづま) 三科五郎  10 等 竹田芳夫  11 等 (いなづま) 平田淳  12 等 (住の江会) 三原強一  13 等 (住の江会) 阿部藤一  14 等 山下幸雄  15 等 井筒武一  婦人組  1 等 (開原) 小林文子</p>	<p>優勝第 1 等 金製メダル  同上第 2 等 銀製メダル  第 3 等 同上  第 4 等 銅製メダル  第 5 等 同上  第 6 等 同上  寄贈品寄贈者：  伊藤呉服店、林洋行、宅合名会社、小林商店、三越呉服店、三星洋行、肥塚支店、満書堂書籍店、大阪屋号書店、常盤号、辻利茶店、奥田時計店、浪速洋行、大谷支店、天正堂、近江洋行、平田洋行、船塚商店、井元商店、岩倉洋行、今中洋行、柳屋洋行、鮎川洋行、井上薬舗、前澤金物店、山葉洋行、檉村洋行、金鳳堂書店、満洲清酒株式会社、バインジス商会、東昌洋行、正美堂、藤井卯商店、白石洋行、田中屋呉服店、豆塚商店、木村屋本店、菊水堂、内田洋行、福田金物店</p>
<p>1925 年</p>	<p>甲組  1 等 (大連錦会) 疋田  2 等 (大連住の江会) 庄田  3 等 (大連白露会) 小寺  4 等 (鞍山クロガネ会) 月山  5 等 (大連白露会) 塚本  乙組  1 等杉松、2 等本田、3 等松越、4 等西村、5 等原夫人  6 等石禾、7 等荻野、8 等山内、9 等小川、10 等小田、11 等竹内</p>	

出典：1920 年 2 月 10 日、1921 年 1 月 31 日、1923 年 1 月 22 日、1922 年 1 月 24 日、1924 年 1 月 22 日、1925 年 2 月 17 日付『満日』により筆者作成。

また女性選手が毎年多数参加したことにより、表 6-4 が示す通り、1923 年第 5 回「満洲かるた大会」では婦人組を設けることが決定された。満洲かるた界において女性選手が活躍していたことがわかる。また 1920 年代、大連を中心に満鉄沿線各地においてさまざまなかるた団体が存在したことも確認できる。これらの団体は毎年「満洲かるた大会」に出場するために、安東、鞍山、遼陽など満鉄沿線から大連へ遠征し、「満洲かるた大会」の優勝メダルを争っていた。

「満洲かるた大会」が毎年開催されるにあたって、大連市内の各方面は大会にさまざまな便宜を提供した。例えば、福昌公司や料理店の千勝館は会場を提供し、また、大連市内の各商店は賞品を多数寄贈した（表 6-4 参照）。

ほかには、表 6-5 に示すように、1920 年代において大連新聞社も毎年度大連、旅順

を中心に「かるた大会」を開催した。

表 6-5 大連新聞社が主催した「かるた大会」

「全満連合かるた大会」 日時：1922年2月5日正午開始 場所：沙河口桜亭 会費：1円 主催：明星会、大連新聞沙河口支局 後援：大連新聞社
「旅順親睦かるた会」 日時：1923年1月21日正午開始 会場：旅順寿亭 会費：1円 主催：大連新聞旅順支局
「南満洲かるた大会」 日時：1923年2月4日正午開始 場所：大連沙河口劇場 会費：1円 主催：大連新聞沙河口支局主催 後援：沙河口明星会
「旅順親睦かるた大会」 日時：1924年2月10日正午 場所：旅順青葉 会費：1円 主催：大連新聞旅順支局 後援：大阪屋号書店、文英堂書店
「恒例全満かるた大会」 日時：1924年2月24日正午開会 会場：沙河口劇場附属茶屋 会費：1円 主催：大連新聞沙河口支局 後援：沙河口明星会
「第4回旅順親睦かるた大会」 日時：1925年1月18日午後1時開始 会場：旅順瓢亭 会費：1円 参加者：旅順在住者限り 主催：大連新聞社旅順支局 後援：文英堂、大阪屋号書店
「全満かるた大会」 日時：1925年2月1日午後1時開始 会場：サツマ温泉会場大広間 婦人組の参加も大歓迎 主催：大連新聞社老虎灘支局

<p>「全満洲かるた大会」  日時：1925年3月1日午前11時開始  会場：沙河口おきた2階広間  会費：1円  主催：大連新聞沙河口支局</p>
<p>「第7回全満かるた大会」  日時：1926年2月11日午前10時開催  会場：沙河口元柵内大徳寺新築大広間  会費：80銭（小学生と婦人は50銭）  主催：大連新聞大連西部支局  後援：沙河口明星会</p>
<p>「第8回全満洲かるた大会」  日時：1927年3月18日正午開始  場所：沙河口有明亭楼上  会費：80銭  主催：大連新聞西部支局</p>

出典：『大連新聞』により筆者作成

以上の点からみれば、1920年代満洲における「かるた大会」はほとんど新聞社によるものであったことが明確になった。とはいえ、満日社が主催した「満洲かるた大会」は会員、審判委員、競技委員、徽章などを含む組織として発展するにしたがって、その活動は一層活発化し、全満洲唯一の権威ある「かるた大会」になったことで1920年代満洲かるた界の全盛期を作り上げた。

## 小結

以上、満日社が主催した「かるた大会」に着目しその開催の実態を考察し、満洲におけるかるたの受容と展開過程について検討した。

かるたは日本人の生活に根付いている伝統的な室内遊戯の一つである。日本の満洲進出とともに、日本内地で開催されていた「かるた大会」の盛況ぶりは大連にも波及した。満日社は創刊後、毎年、お正月の遊びとして大連を中心に満鉄沿線各地において「かるた大会」を開催した。満洲に移住した年月がまだ浅い在住日本人にとって、内地と同様に毎年繰り返しやってくる「かるた大会」は、祖国を離れて外地に暮らす日本人たちの精神を養うものとして捉えられる。また前述したように、かるたはお正月の遊びの一つであり、一般庶民の教養の手段でもあった。このような意味において、かるたは趣味・娯楽的な側面からみれば、大連在住日本人の慰安であったのに対し、修養という側面から考えても最適な催しであると認識されていたのだろう。

年と共に盛んになるにつれ、「かるた大会」は1918年前後から1925年にかけて「満洲かるた大会」と銘打って、「冬籠りの満洲室内遊戯シーズンのけふ此頃典雅にして痛烈な歌留多大会は我民族の特性に相応しくも亦興味ある競技」<sup>391</sup>として、初春の吉例から競技へと移行した。その過程において満日社が決定的な役割を果たしたことは間違いない。

<sup>391</sup> 「初春の吉例 全満かるた大会 その第六回を来る 二十日福昌倶楽部で」1924年1月9日付『満日』。

さらに補足すると、「歌がるたは真に面白い遊びである。唯だそれのみでなく社交的の戸内遊戯として多人数上下の距てなく男女老幼何人でも愉快に勝負を争ふ事が出来るのは之を外にして他に見出し得ぬ」<sup>392</sup>という特徴を持つ一方、競技かるたにおいては持久力と精神力を同時に鍛えられるという特徴がある<sup>393</sup>。これらのかるたが持つ特徴を第4章、第5章でも触れた1920年代の大連在住日本人を取り巻く社会状況とを結びつけて考えれば、「満洲かるた大会」を通じて持久力と精神力を涵養する一方で、在満日本人の交流を深め、団結心を養うことによって帝国国民を育成しようとする主催者側の意図もうかがえる。

---

<sup>392</sup> 「歌がるた観」『遊楽雑誌』（15号）the amusement、1906年。

<sup>393</sup> 津久井勤「競技かるたにおける心技体」『21世紀連合シンポジウム—科学技術と人間—論文集』（2）、アイオニクス、2003年、368頁。

## 終章

### 1. 本論文の内容と意義

本論文は、1907年（創刊）-1927年（『遼東新報』との合併）という時間軸に沿って、報道活動及び新聞社事業という二つの側面から、『満日』及び満日社について考察した。その文化事業活動の軌跡を辿りながら、同社が一新聞機関として、日本の満洲経営及び大連の都市近代化過程においていかなる機能を果たしたのかについて系統的に検討した。

第1章では、まず、満日社初代社長森山守次の生立ちを考察した上で、『満日』の創刊にいたるまでの経緯を明らかにした。また、新聞社の経営（収益状況、発行部数、広告行数・分類、設備）、人事異動の状況、紙面構成と事業活動を概観し、『遼東新報』と『大連新聞』の状況もあわせ見ながら、1907年の創刊から1927年の『遼東新報』との合併にいたるまでの満日社の20年史を概略的に振り返った。

第2章では、『満日』の紙面記事をもとに、大連で発行されていた「大連彩票」の展開経過を検討した。「大連彩票」の概況（当籤票数、彩票の当選額の変化、収支状況）、新聞紙面に見られる大連の実態（販売状況、当籤者の居住地の分布、投書内容）を分析することで、それが植民地統治を支える経済手段としていかに機能していたかを明らかにした。また、「大連彩票」に対する『満日』の立場を解明し、『満日』の世論誘導の姿勢を明確にした一方、『満日』の「大衆新聞」としての性格も浮かび上らせた。

第3章では、1910-1920年代に満日社が主催した「関東州野球大会」をはじめとする一連の野球大会に着目し、その開催に至った背景や実態を考察した。また、それらの野球大会の性格についても検討した。満日社が主催した野球大会は20年以上にわたって開催を重ね、次第に年中行事となり、大連在住日本人の生活の一部となった。このような野球大会の定着には、満日社をはじめとする各新聞社が決定的な役割を果たしていた。これらの考察により、満日社が体育奨励の一方策として野球大会を利用し、「日満融和」や指導者の指示に従順な集団をつくり出そうとした意図を持ってこの事業を進めていたことが浮き彫りとなった。

第4章では、満日社が1920年から1927年にかけて組織した「在満児童母国見学団」について、その趣旨、内容及び成果を概観した。その結果、実質的に満洲を統治していた関東庁及び満鉄が、第一次世界大戦後の国民思想の動揺、中国各地における排日運動などの情勢に対応するため、満日社を隠れ蓑とする「在満児童母国見学団」に植民地教育政策の一環を担わせていたことを明らかにした。また、満日社が「在満児童母国見学団」を組織するにとどまらず、『満日』紙面で「在満児童母国見学団」に対する世論形成を図っていたことについても追究したことで、満日社の植民地経営の協力者としての性格が明確になった。

第5章では、1920年-1930年代の軍縮時代において、軍縮をめぐる満日社の報道内容を分析した。また、満日社が主催した「艦隊便乗見学」の成立とその展開過程及び便乗見学者の感想を歴史的な文脈のなかで検討した。これらの分析によって、1920年代の軍縮時代に満日社が海軍に積極的に接近し、海軍の軍拡主張を正当化する宣伝協力者、さらには植民地経営の協力者としての姿勢を有していたことが明らかになった。

第6章では、日本の伝統文化であるかるたの歴史を振り返りながら、満日社が主催した「歌かるた競技大会」に着目し、その開催の実態を考察した上で、満洲におけるかるたの受容とその展開について検討を加えた。かるたはもともと日本人の生活に根

付いていた伝統的な室内遊戯の一つである。日本の満洲進出とともに、日本内地で行われていた「歌かるた競技大会」は満洲にも波及し、盛況を極めた。満日社は、祖国を離れて外地に暮らす日本人たちの精神を養い、かつ在住日本人の教養を高めるために、初春の吉例として大連を中心に満鉄沿線各地においてかるた大会を開催した。1920年代になると、満洲におけるかるた大会は全盛期を迎え、それは吉例から競技へと移行した。その過程において満日社が決定的な役割を果たしたことは言うまでもない。

以上のように、本論文は、森山守次関係資料など新しい一次資料によって様々な角度から『満日』及び満日社の歴史を総合的に検証した結果、『満日』が満洲経営の一つの手段である一方、政治、経済、そして社会、文化、消費生活の面で大連を中心とした満洲社会に大きな影響を与え、近代化の方向へと移行させる役割も果たしたことを明らかにした。その成果はメディア史研究、植民地文化史研究の領域にも多くの知見を与えうるものと考えられる。本稿の解明した問題は、以下の4点に整理することができる。

第1に、満日社初代社長森山守次と『満日』創刊との関係を初めて明らかにしたことによって、これまで未解明だった『満日』創刊の経緯を明確にした。

第2に、これまで十分に利用されなかった『満日』の記事を中心に、『海友』の記事、『朝日新聞』や『読売新聞』など新聞データベースを活用しつつ、アジア歴史資料センター所蔵の「大連彩票」「在満児童母国見学団」「艦隊便乗見学」に関する史料を発掘したことにより、これまで植民地研究史のみならず、メディア研究史においてもほとんど注目されてこなかった満日社主催の事業活動の実態を解明した。

第3に、『満日』を一次資料として、特定の時期の新聞記事内容を分析したことにより、新聞報道と世論との関係性を論じた従来研究と異なり、メディア研究史の分野に限らず、植民地政治史、文化史及び社会史など他分野までも俯瞰し、報道活動と事業活動という二つの側面から『満日』及び満日社が日本の大陸政策推進のために、いかにその植民政策を支えていたのかについて系統的に検討した。

第4に、満日社が主催した各種事業活動の参加者からの感想文を整理・分析したことによってこれら事業活動が参加者にどのように受け止められたのかを明確にした。

## 2. 租借都市大連における『満日』の多面的機能

### 2.1 満洲経営の一つの手段としての『満日』

日清戦争後、日本の台湾領有にともなって、植民地政策を推進するためには、新聞の発行は欠かすことのできないものとして認識され、1898年に台湾総督府の機関紙として『台湾日日新報』が発刊された。以来、日本のアジア進出にともなって、新聞の進出は台湾のみならず満洲へも広がっていった。植民地統治者は当地における既存の新聞の買収や、機関紙の発行を進め、朝鮮では『京城日報』（1906年）、そして、満洲では『満洲日日新聞』を相次いで創刊していった。

それ以後、「満洲経営の急先鋒」と自ら誇る『満日』は、「満蒙大陸の文化的開発を中心の目的として東亜全局の精神的並に物質的発達を企図し、助長し、新聞紙としての天職と使命を全ふせんとする」<sup>394</sup>という編輯方針の下で、積極的に各種の事業活動を展開した。

その中で、「歌かるた大会」のように日本の伝統的な文化として日本国内から持ち込まれたものや、植民地統治における経済手段としての「大連彩票」、体育奨励のための方策としての「関東州野球大会」、植民地教育政策の一環としての「在満児童

<sup>394</sup> 「創刊より現在に至る」 1921年11月3日付『満日』。



母国見学団」、海軍宣伝の一助としての「艦隊便乗見学」などが、当時の国内外情勢や日本の満洲経営政策の変化にともない、日本の大陸政策を推進するために創出されたものであることが明らかになった。

第3章から第6章で触れたように、第1次世界大戦の勃発、ロシア革命、米騒動がおよぼした影響は政治、経済に止まらず、思想にも波及した。民主主義・平和主義の思想は徐々に人々の心を捉え、それにともなって、国民思想も激しい動揺に見舞われつつあった。そのような動向の中、1923年の関東大震災に直面した後、人々の心の安定を図ることは急務となった。

一方、満洲は中国の主権下にある土地であり、1930年まで在満中国人の人口は総計約3,000万人に達していた。これに対して、在満日本人の数は関東州をふくめ約24万人を数えるにすぎず、中国人との経済的競合においても次第に劣勢となってきた<sup>395</sup>。1920年代前半の満洲においては、在満日本人商工業者の経営衰退に対して、中国人職人・商人が勢力を伸ばしてきていた。「新しい環境や価値観が劇的に変化するとき、社会的結び付やアイデンティティを確保することが必要になるため、支配や忠誠心のきずなを確立するための新たな方法が要求された」<sup>396</sup>、と指摘されるように、国民思想の善導や皇室尊崇などは日本国内に限らず、植民地においても重要な課題となった。

日本国内外の情勢へ対応するために、満日社が一新聞機関として満洲経営の「文装的武備」の理念の下に、「関東州野球大会」、「在満児童母国見学団」、「艦隊便乗見学」、「満洲歌かるた競技大会」など一連の事業活動を通して在満日本人同士の交流を深め、団結心を養うことによって、帝国経営にふさわしい帝国国民を育成しようとする企図がうかがえるのである。さらに、これらの事業活動は5年以上一貫して連続的に開催され、在満日本人の国民意識の形成に一定の役割を果たしたことも見落としてはならないであろう。

そして、主催者側が提出を求めたのか、あるいは教育機関で自主的に提出されたのかに拘らず、参加者の感想文からは、これらの事業活動を通じて、「忠君愛国」、「義勇奉公」の精神がほぼ完全に内面化されていたことがわかる。換言すれば、日本本土と同様に、あるいは内地よりも大きな規模で行われたこれらの事業活動は、新聞社を媒介とした、在満日本人に帝国の権力を顕示する一つの接点としての役割を果たしたことも考えられる。さらに補足すれば、序章で触れた「文装的武備」の満洲経営理念がほぼ完全にこれらの事業活動に反映されていた。これらの点を総合的に鑑みれば、『満日』は帝國的宣伝の場として、日本が満洲経営を進めるうえで重要な機能を果たしたことを指摘できる。

## 2.2 大衆新聞としての『満日』

序章で述べた通り、大連の港湾都市としての最初の青写真は、1899年から1904年までロシアによって作られた。1904年から1945年までの41年間において、大連は日本による港と鉄道を中心とした商業都市として建設された。とりわけ満鉄本社が1907年に東京から移ってきて以降、大広場・道路・発電所・上下水道・ガスなどの都市インフラは1909年までには概ね整備されており、さらに、伏見台と名付けた高台には電気の照明がついた遊園地が設けられた。同年には大連港から市内までの電車が開通したことも重要である。都市インフラの整備にともない、中国大陸と日本を往来する人やモノは大連を経由し、大連の経済は次第に繁栄し、在住日本人の数も増加していっ

<sup>395</sup> 山室信一『キメラ—満洲国の肖像』中公新書、1993年、21-22頁。

<sup>396</sup> 同上、408頁。

た（序章、表 3 参照）。第 1 次世界大戦を契機として、大連経済はさらなる発展を遂げ、1920 年になって大連は上海に次ぐ第 2 位の地位に躍り出て、極東における五大貿易港の仲間入りを果たした<sup>397</sup>。このように、大連はいよいよ近代商業都市へと変貌していったのである。その中で、社会的な変化として、都市住民の急増や人々の生活空間の拡大が生じたこと、また、政治・経済・社会に関わる内外の情報の必要性が高まっていったことなどが考えられる。

一方、20 世紀初頭の日本本土においては、新聞界全体で企業化が急速に進行した<sup>398</sup>。また、都市化の進展や、鉄道網の拡大、マス・コミュニケーションの進展にともなう余暇の大衆化が出現した<sup>399</sup>。この時期において、映画、音楽、演劇などのほか、観光、スポーツ、趣味などの領域における余暇活動の機会を次第に拡大し、それと同時に、これらの余暇活動が新聞などのマス・メディアによって浸透した結果、大衆自身が余暇を自由に使いたいという要求もまた拡大した<sup>400</sup>。それにともない、新聞が従来の論説中心から報道・娯楽中心へと編集の重点を移したことによって、新聞の大衆化傾向がみられるようになった。この影響は満洲新聞界にも波及した。

第 1 章で触れたように、創刊当初から「満洲経営の急先鋒」、「日清両国の（中略）提携相護の啓発」と自ら誇る満日社は、『満日』の紙面に新聞・俳句・小説連載・家庭欄・衛生欄・投書欄・文芸欄・広告欄・英語欄などを設けただけでなく、積極的かつ多面的に各種の事業活動を主催した。1910 年代において、満日社は紙面の改革、設備への投資、各種事業活動の主催、広告行数の増加などによって、社業のさらなる発展を遂げた一方、その大衆化傾向がみられるようになった。

新聞はもはや政治を動かす輿論の機関としてよりも、ニュースを製造し送り出す企業としての役割を肥大化させつつあった。企業化する新聞では、大衆の主張よりも読者としての大衆の数が重要であった<sup>401</sup>。

前述したように、1920 年代の大連新聞界は三紙鼎立の状態にあった。満鉄の機関紙でありながら、『遼東新報』、のちに『大連新聞』と競うよう、積極的に各種の事業活動の開催に着手した。第 4 章、第 6 章でも触れたように、1911 年中朝国境の鴨緑江架橋工事が竣工したことにより、朝鮮鉄道と満鉄が直接連結し、釜山-京城-平壤-新義州-安東-奉天間の直通連絡が開始され、満洲における交通網は徐々に整備されていった。それを通じて、1920 年代の新聞社による事業活動が全満地域に及ぶほど非常に活発なものになり、発行部数や広告収入などは拡大していった。『満日』の発行部数について、大連在住日本人の人口数から見て、1910 年末には 3 人につき 1 部であった状況が、1920 年末には 1 人につき 1 部になった（序章表 2、表 1-6 参照）。

新聞の大衆化という現象には、読者の拡大、記事内容の質的低下、広告による商業化という 3 つのベクトルが含まれている<sup>402</sup>。この意味で、それは『満日』の「大衆新聞」としての機能も浮かび上らせた。

---

<sup>397</sup> 篠崎嘉郎『大連』大連出版社、1920 年、790、792 頁。

<sup>398</sup> 西原茂樹「1910 年前後におけるメディア・イベントとしての日米野球試合——東京・大阪の新聞社による主催試合を中心に」『スポーツ史研究』（19）、2006 年、3 頁。

<sup>399</sup> 竹村民郎『笑楽の系譜-都市と余暇文化』同文館、1996 年、179 頁。

<sup>400</sup> 同上、206 頁。

<sup>401</sup> 土屋礼子「大正期の夕刊紙『東京毎夕新聞』にみる新聞の大衆化」吉見俊哉ほか『大衆文化とメディア』ミネルヴァ書房、2010 年、57-58 頁。

<sup>402</sup> 土屋礼子、前論文、33 頁。

### 2.3 在満日本人共同体を創出する装置としての『満日』

20世紀初頭の日本において、国民の大衆化という概念が生まれた。それは国家への帰属意識を持った人々の量としての増大を指している<sup>403</sup>。ベネディクト・アンダーソンによれば、国民は「イメージとして心に描かれた想像の政治共同体」であり、近代の国民意識の形成過程において、新聞という「一日だけの（しかし毎日の）ベストセラー」が重要な役割を果たした<sup>404</sup>。

表1 国民統合の前途と諸要素

1.	交通（コミュニケーション）網、土地制度、租税、貨幣-度量衡の統一、市場.....植民地	←経済統合
(2)	憲法、国民議会、（集権的）政府-地方自治体（県）、裁判所、警察-刑務所、軍隊（国民軍、徴兵制）	←国家統合
(3)	戸籍-家族、学校-教会（寺社）、博物館、劇場、政党、新聞（ジャーナリズム）	←国民統合
(4)	国民的なさまざまなシンボル、モットー、誓約、国旗、国歌、暦、国語、文学、芸術、建築、修史、地誌編纂	←文化統合
(5)	市民（国民）宗教-祭典（新しい宗教の創出）-ミニユレ、伝統の創出-ホブズボウム	

出典：西川長夫・松宮秀治『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』（新曜社、1995年、11頁）

一方、表1に示したように、西川長夫は、国民統合の前提となる諸要素を「経済統合、国家統合、国民統合、文化統合の四項目に大別した。

表2 国民化（文明化）

(1)	空間の国民化-均質化、平準化された明るく清潔な空間/国境中央（都市） 地方（農村）-海外（植民地）/中心と周辺、風景
(2)	時間の国民化-暦（時間の再編）、労働・生活のリズム/神話、歴史
(3)	習俗の国民化-服装、言語、アイサツ、儀式（権威-服従）/新しい伝統
(4)	身体の国民化-五感（味覚、音感、.....）、起居、歩行-学校、工場、 軍隊等々の生活に適応できる身体と感覚/家庭
	↓
	ナショナリズム 国民の誕生

出典：西川長夫・松宮秀治『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』（新曜社、1998年、31頁）

西川によれば、国民化（文明化）は、まず空間・時間・習俗・身体という4つの位相を通じて行われたとされる（表2参照）。

満日社が主催した各種の事業活動の参加者は児童から青・中・壮年まで、また男性から女性までの幅広い年齢層の在満日本人に及んでいた。参加者は指定時刻に指定場所に集合させられ、身体的な動員、視覚的な刺激、感情的な準備を通して、近代国家

<sup>403</sup> 奥武則『大衆新聞と国民国家—人気投票・慈善・スキャンダル』平凡社、2000年、19頁。

<sup>404</sup> B・アンダーソン著、白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同体-ナショナリズムの起源と流行』NTT出版、1997年、61頁。

という想像の共同体に統合していた。また、満日社は事業活動の開催に際して、紙面報道や講演会、演奏会、映画上映会など、読者に歓迎されるような内容を増やすことによって、これらの事業活動を時間的延長し、空間において共時的な展開を見せ、主催者のイデオロギーの伝達において特別な効果を引き出した。

この意味で、『満日』は満洲経営の一つの手段である一方、政治、経済、そして社会、文化、消費生活の面で大連を中心とした満洲社会に大きな影響を与え、近代化の方向へと移行させる役割も果たしたのであったことは明白であろう。

### 3. 今後の課題

最後に課題として残されている点について述べる。

本論文はこれまでの研究の中でほとんど触れられてこなかった『満洲日日新聞』、とりわけ、同社の文化事業を取り上げて、在満日本人社会の様相や同紙の果たした役割について多角的に考察した。補助線として当地で発行された『遼東新報』や『大連新聞』のほか、日本国内の『朝日新聞』も断片的な資料であっても、集積していくことを通じて、『遼東新報』や『大連新聞』の組織・人事、経営状況などを考察したが、大連新聞界の全体像の把握はまだ不十分である。また、日本の満洲経営について、これらの新聞紙の立場、さらに大連で発行された中国語新聞の立場についてはほとんど言及しておらず、今後の課題である。

また、本論文は第5章で『満日』が主催した「艦隊便乗見学」の歴史的経緯、開催実態、見学者らの感想文について詳しく分析したうえ、『満日』が海軍の軍拡宣伝を支援する立場にあったことについて論じたが、海軍内部における意見場の対立についての分析は現状不十分である。加えて、日本国内の新聞紙との比較も、今後の課題の一つに挙げられる。同時に、日本のアジアの進出にともなって、台湾で発行された『台湾日日新報』、朝鮮で発行された『京城日報』などの植民地内部の他新聞との比較研究もまた、この研究領域において最も重要な課題といえる。

付録 1-1 株式会社満日社の経営動向表（1913年-1927年）（単位：円）

第1回決算報告（1913年下半期）	
貸借対照表	
負債	
株 金	135,000
仮受金	230
取引店	485
社員積立金	9,229
計	144,944
資産	
土地建物	3,890
機械器具	37,464
貯蔵品	26,872
英 文	713
支 局	2,608
仮払金	14,254
銀 行	21,486
振替貯金	1,533
有価証券	5,364
担保金	105
現 金	1,809
新聞未収金	8,728
印刷未収金	16,892
販売未収金	1,687
当期損失	1,538
計	144,944
損益計算	
総損失	8,389

総益金	6,851
差引損失金	1,538
第2回決算報告（1914年上半期）	
貸借対照表	
負債	
株 金	135,000
仮受金	3,635
取引店	1,429
社員積立金	9,5929
販売前金	189
当期利益	7,372
計	157,217
資産	
土地建物	3,890
機械器具	38,153
貯蔵品	23,210
ディリーニウス社	985
支 局	3,548
仮払金	13,8438
銀 行	30,8648
振替貯金	1,4788
有価証券	5,2648
担保金	105
現 金	1,438
新聞未収金	9,606
印刷未収金	18,786
販売未収金	4,509
前期繰越損失金	1,538

計	157,217
損益計算	
当期総収入	26,940
当期総支出	19,567
差引当期利益	7,372

第3回決算報告（1914年下半期）	
貸借対照表	
負債	
株 金	135,000
法定準備積立金	300
建物機械類償却積立金	600
社員恩給基金及社員相済会 補助金	300
仮受金	873
取引店	1,240
社員積立金	11,260
前期繰越金	234
当期利益	10,315
計	160,121
資産	
土地建物	4,466
機械器具	38,764
貯蔵品	22,553
ディリーニウス社	932

	支 局	4,576
	仮払金	17,714
	銀 行	31,123
	振替貯金	852
	有価証券	5,264
	担保金	105
	現 金	370
	新聞未収金	8,663
	印刷未収金	20,865
	販売未収金	3,875
	計	160,121
	損益計算	
	当期総収入	29,668
	当期総支出	19,353
	差引当期利益	10,315
	第 4 回決算報告 (1915 上半期)	

貸借対照表	
負 債	
株 金	135,000
法定準備積立金	900
建物機械類償却積立金	1,800
社員恩給基金及社員相済会 補助金	900
仮受金	754



取引店	1,479
社員積立金	11,840
新聞前金	434
前期繰越金	2,899
当期利益金	9,104
計	165,110
資 産	
土地建物	4,466
機械器具	46,385
貯蔵品	21,942
デイリーニュース社	1,630
支 局	4,605
仮払金	17,612
銀 行	24,064
振替貯金	881
有価証券	5,264
担保金	105
現 金	1,944
新聞未収金	7,735
印刷未収金	24,813
販売未収金	3,664
計	165,110
損益計算	
当期総益金	27,623
当期総損金	18,519
差引当期純益	9,104
第 5 回決算報告（1915 下半期）	
貸借対照表	

負 債
-----

株 金	135,000
法定準備積立金	1,500
建物機械類償却積立金	3,000
社員恩給基金及社員相済会 補助金	1,500
仮受金	795
取引店	1,440
社員積立金	10,735
新聞前金	450
前期繰越金	4,453
当期利益	6,783
計	165,655
資 産	
土地建物	4,466
機械器具	46,462
貯蔵品	27,113
マンチュリヤディリーニウ ス社	1,133
支 局	2,681
仮払金	18,844
銀 行	9,787
振替貯金	602
有価証券	5,264
担保金	105
取引店	412
光明洋行	14,168
現 金	2,401

新聞未収金	6,008
印刷未収金	21,100
販売未収金	5,109
計	165,655
損益計算	
当期総益金	23,723
当期総損金	16,940
差引当期純益	6,783
第 6 回決算報告 (1916 上半期)	
貸借対照表	
負 債	
株 金	135,000
法定準備積立金	1,850
建物機械類償却積立金	3,700
社員恩給基金及社員相済会 補助金	1,850
仮受金	420
取引店	5,505
社員積立金	10,648
新聞前金	567
前期繰越金	4,935
当期利益	18,441
計	182,917
資 産	
土地建物	4,466
機械器具	46,272
貯蔵品	45,845
マンチュリヤディリーニウス社	1,593

支 局	3,442
仮払金	19,606
銀 行	15,824
振替貯金	3,310
有価証券	5,264
担保金	105
取引店	1,326
光明洋行	9,848
現 金	3,259
新聞未収金	6,761
印刷未収金	12,140
販売未収金	3,849
計	182,917
損益計算	
当期総益金	34,991
当期総損金	16,550
差引当期純益金	18,441
第 7 回決算報告（1916 年下半期）	
貸借対照表	
負 債	
株 金	135,000
法定準備積立金	2,850
建物機械類償却積立金	7,700
社員恩給基金及社員相済会 補助金	2,850
仮受金	420
取引店	12,355
社員積立金	10,084

新聞前金	665
前期繰越金	5,851
当期利益	13,610
計	191,407
資 産	
土地建物	4,466
機械器具	45,554
貯蔵品	48,569
マンチュリヤディリーニウス社	1,500
支 局	7,166
仮払金	25,076
銀 行	9,124
振替貯金	324
有価証券	5,264
担保金	105
取引店	1,824
光明洋行	10,171
現 金	3,655
新聞未収金	6,326
印刷未収金	17,301
販売未収金	4,982
計	191,407
損益計算	
当期総益金	28,715
当期総損金	15,105
差引当期純益金	13,610
第 13 回決算報告 (1919 年下半期)	

貸借対照表	
負 債	
株 金	135,000
法定準備積立金	20,500
建物機械償却積立金	69,000
社員恩給基金及社員相済会 補助金	13,090
仮受金	47,078
取引店	68,820
社員積立金	6,053
前期繰越金	5,626
当期利益金	13,975
計	380,556
資 産	
土地建物	31,315
機械器具	52,782
貯蔵品	125,887
支 局	14,111
仮払金	26,886
銀 行	18,981
振替貯金	3,595
有価証券	5,264
取次店	3,890
現 金	4,083
新聞未収金	20,012
印刷未収金	45,417
販売未収金	28,333
計	380,556

損益計算	
収 益	
■用	30,160
印 刷	24,327
販 売	1,270
雑投入	2,295
計	58,051
損失	
営業費	28,637
雑 損	5,439
当期利益	13,975
計	58,051
第 14 回決算報告（1920 年上半期）	
貸借対照表	
負 債	
株 金	500,000
法定準備積立金	21,500
建物機械償却積立金	71,000
銀行貸借	5,095
取引店	67,463
社員積立金	6,675
社員恩給基金及社員相済会 補助金	14,024
新聞前金	1,402
未払金	12,187
仮受金	27,060
前期繰越金	9,201
当期利益金	46,198

計	782,950
資 産	
払込未済株金	273,750
土地建物	42,034
機械器具	56,633
貯蔵品	204,891
有価証券	6,264
現 金	11,519
振替貯金	1,162
貸 金	19,746
取次店	4,414
支社支局勘定	8,117
新聞未収金	10,661
広告未収金	22,271
印刷未収金	57,076
販売未収金	42,493
仮払金	21,918
計	782,950
損益計算	
当期総益金	543,400
当期総損金	497,203
当期純益金	46,198
第 15 回決算報告（1920 年下半期）	
貸借対照表	
負 債	
株 金	500,000
法定準備積立金	24,000
別途積立金	20,000



財産償却積立金	76,000
担保金	895
取引店貸借	33,748
社員身元保証金	10,322
社員恩給基金及社員相済会 補助金	16,910
未払金	14,103
仮受金	43,226
支払手形	14,147
前期繰越金	14,063
当期利益金	24,663
計	792,077
資 産	
払込未済株金	273,750
土地建物	113,516
機械器具	58,490
貯蔵品	147,677
有価証券	6,014
現 金	2,492
振替貯金	516
銀行貸借	3,780
通信社貸借	4,625
未収金	136,981
仮払金	34,195
受入手形	8,195
支社支局勘定	1,842
計	792,077
損益計算	

当期総益金	641,087
当期総損金	616,424
当期純益金	24,663
第 16 回決算報告（1921 年上半期）	
貸借対照表	
負債	
株 金	500,000
法定積立金	25,500
別途積立金	30,000
財産償却積立金	79,000
銀行貸借	14,783
担保金	865
取引店貸借	37,908
社員身元保証金	14,458
社員恩給基金及社員相済会 補助金	13,946
未払金	9,355
仮受金	42,998
支払手形	3,844
前期繰越金	13,539
当期利益金	4,320
計	790,515
資 産	
払込未済株金	273,750
土地建物	118,347
機械器具	62,947
貯蔵品	124,406
有価証券	6,014

現金	3,583
振替貯金	374
通信社貸借	4,759
未収金	139,759
仮払金	29,325
受入手形	2,349
支社支局勘定	11,668
工場勘定	10,134
野球勘定	266
見学団勘定	2,833
計	790,515
当期総益金	562,978
当期総損金	558,659
当期純益金	4,320
第 17 回決算報告（1921 下半期）	
貸借対照表	
負債	
株 金	500,000
法定積立金	25,800
別途積立金	30,000
財産償却積立金	79,500
銀行貸借	35,575
証券貸借	1,975
取引店貸借	46,527
社員身元保証金	19,330
社員恩給基金及社員相済 会補助金	13,826
未払金	3,858

仮受金	106,655
支拂手形	5,882
満日共済会	42
前期繰越金	9,571
当期利益金	6,628
計	885,167
資 産	
払込未済株金	273,750
土地建物	188,348
機械器具	69,611
貯蔵品	140,735
有価証券	6,014
現金	5,785
振替貯金	925
通信社貸借	4,857
未収金	101,069
仮払金	31,817
受入手形	4,437
担保金	1,110
支社支局取次店勘定	48,123
工場勘定	8,587
計	885,167
損益計算	
当期総益金	573,269
当期総損金	566,642
当期純益金	6,628
第 18 回決算報告 (1922 年上半期)	
貸借対照表	

負 債	
株 金	500,000
法定積立金	26,200
別途積立金	30,000
財産償却積立金	80,200
銀行貸借	49,542
証券貸借	1,975
取引店貸借	30,515
社員身元保証金	23,912
社員恩給基金及社員相済 会補助金	10,846
未払金	16,939
仮受金	106,396
支拂手形	17,145
満日共済会	904
前期繰越金	7,311
当期利益金	6,829
計	908,714
資 産	
払込未済株金	273,750
土地建物	198,225
機械器具	77,379
貯蔵品	124,902
有価証券	6,014
現 金	4,152
振替貯金	371
通信社貸借	4,909
未収金	120,793

仮払金	27,958
受入手形	3,103
担保金	890
支社支局取次店勘定	55,402
工場勘定	10,866
計	908,714
損益計算	
当期総益金	450,411
当期総損金	443,582
当期純益金	6,829
第 20 回決算報告（1923 年上半期）	
貸借対照表	
負 債	
株 金	500,000
法定積立金	26,600
別途積立金	30,000
財産償却積立金	80,900
銀行貸借	49,600
証券貸借	175
取引店貸借	24,150
担保金	590
社員身元保証金	32,600
社員恩給基金及社員相済 会補助金	197
満日共済会	297
未払金	13,747
支拂手形	39,843
仮受金	179,406

優待券勘定	12
計	978,116
資 産	
払込未済株金	273,750
土地建物	204,990
機械器具	77,798
貯蔵品	134,■34
有価証券	6,014
現金	2,261
振替貯金	553
貸金	7,629
通信社貸借	4,910
未収金	144,114
仮払金	31,902
受入手形	4,289
支社支局取次店勘定	42,677
工場勘定	7,661
工業部勘定	497
委託品勘定	9
前期繰越金	9,204
当期損失金	25,123
計	978,116
損益計算	
当期総益金	424,839
当期総損金	449,962
当期損失金	25,123
第 21 回決算報告 (1923 年下半期)	
貸借対照表	

負 債	
株 金	500,000
法定積立金	26,600
財産償却積立金	900
証券貸借	1,615
取引店貸借	15,014
社員身元保証金	29,296
未払金	2,993
支拂手形	6,819
満日共済会	371
仮受金	112,789
当期純益金	27,788
計	724,184
資 産	
土地建物	205,296
機械器具	166,192
貯蔵品	84,300
有価証券	4,634
現 金	2,185
振替貯金	1,212
銀行貸借	117,254
貸 金	690
新聞未収金	21,325
印刷未収金	64,373
受入手形	1,838
担保金	1,104
支社支局勘定	14,377
仮払金	5,079



前期繰越損失金	34,327
計	724,184
第 22 回決算報告 (1924 年上半期)	
貸借対照表	
負債	
株 金	500,000
法定積立金	26,600
財産償却積立金	900
証券貸借	1,515
取引店貸借	6,780
社員身元保証金	25,707
未払金	3,585
支拂手形	18,992
仮受金	2,920
当期純益金	19,004
計	616,004
資産	
土地建物	108,967
機械器具	169,608
貯蔵品	86,694
有価証券	4,634
現 金	6,983
振替貯金	193
銀行貸借	38,070
貸 金	2,070
新聞未収金	23,139
印刷未収金	50,464
受入手形	1,609

担保金	1,139
支社支局勘定	14,478
仮払金	2,425
前期繰越損失金	6,569
計	616,004
損益計算	
当期総益金	431,278
当期総損金	412,274
当期純益金	19,005
第 23 回決算報告 (1924 年下半期)	
貸借対照表	
負債之部 (貸方)	
株 金	500,000
法定積立金	27,230
財産償却積立金	2,150
社員恩給基金及社員相済 会補助金	650
証券貸借	1,475
取引店貸借	3,497
社員身元保証金	20,941
未払金	8,471
支拂手形	3,231
仮受金	1,265
当期益金	27,836
前期繰越金	2,716
計	599,481
資 産	
土地建物	209,995

機械器具	168,531
貯蔵品	77,606
有価証券	4,633
現金	3,431
振替貯金	2,410
銀行貸借	34,268
貸金	1,282
新聞未収金	14,964
印刷未収金	65,021
受入手形	1,127
担保金	653
支社支局勘定	15,456
仮払金	106
計	599,482
損益計算	
当期総益金	431,278
当期総損金差引	412,274
当期純益金	19,005
第 24 回決算報告 (1925 年上半期)	
貸借対照表	
負債	
株金	500,000
法定積立金	28,750
償却積立金	16,850
社員恩給基金及社員相済 会補助金	2,150
身元保証金	16,228
証券貸借	470

仮受金	■,776
未払金	3,740
支拂手形	25,560
当期純益金	11,428
当期繰越金	1,151
計	608,103
資 産	
土地建物	209,995
機械器具	172,036
貯蔵品	53,942
有価証券	4,633
担保金	79
貸 金	2,869
振替貯金	3,628
銀行貸借	35,400
取引店貸借	11,064
支社支局勘定	19,834
新聞未収金	21,896
印刷未収金	64,462
仮払金	3,407
受入手形	2,261
現 金	2,598
計	608,103
第 25 回決算報告 (1925 年下半期)	
貸借対照表	
負 債	
株 金	500,000
法定積立金	29,520

財産償却積立金	16,859
社員恩給基金及社員相済 会補助金	2,150
身元保証金	12,102
証券貸借	1,270
取引店貸借	6,339
仮受金	730
未払金	5,568
支拂手形	18,136
当期純益金	10,691
前期繰越金	1,180
計	604,593
資 産	
土地建物	209,995
機械器具	184,599
貯蔵品	52,410
有価証券	5,570
担保金	213
貸 金	4,411
振替貯金	773
銀行貸借	23,074
支社支局勘定	14,933
新聞未収金	14,452
広告未収金	5,818
印刷未収金	74,975
販売未収金	6,211
仮払金	945
受入手形	5,691

現金	4,725
計	604,593
第 26 回決算報告 (1926 年上半期)	
貸借対照表	
負債	
株金	500,000
法定積立金	29,350
財産償却積立金	17,436
特別積立金	2,125
社員恩給基金及社員相済 会補助金	2,708
身元保証金	10,629
証券貸借	890
担保金	727
取引店貸借	3,020
仮受金	2,028
未払金	5,548
支拂手形	41,140
当期純益金	15,005
前期繰越金	1,221
計	631,827
資産	
土地建物	209,995
機械器具	185,660
貯蔵品	65,921
有価証券	5,571
貸金	2,366
振替貯金	486

銀行貸借	20,407
支社支局勘定	20,942
新聞未収金	16,028
広告未収金	9,150
印刷未収金	68,510
販売未収金	10,817
仮払金	399
受入手形	9,717
現金	5,860
計	631,827
第 27 回決算報告 (1926 年下半期)	
貸借対照表	
負債	
株 金	500,000
法定積立金	29,350
財産償却積立金	16,284
特別積立金	3,285
社員退職資金	1,807
身元保証金	10,080
証券貸借	890
担保金	602
取引店貸借	870
仮受金	1,099
未払金	7,845
支拂手形	34,425
当期純益金	10,903
前期繰越金	1,226
計	618,665

資 産	
土地建物	206,439
機械器具	191,997
貯蔵品	65,947
有価証券	2,083
貸 金	1,039
振替貯金	166
銀行貸借	20,897
支社支局勘定	18,453
新聞未収金	14,420
広告未収金	5,035
印刷未収金	73,416
販売未収金	10,771
仮払金	271
受入手形	1,456
現 金	6,276
計	618,665
第 29 回決算報告 (1927 年下半期)	
貸借対照表	
負 債	
株 金	500,000
法定積立金	29,330
財産償却積立金	8,854
特別積立金	81
社員退職資金	■
身元保証金	7,048
証券貸借	1,440
取引店勘定	12,886



仮受金	423,147
未払金	20,163
支拂手形	24,741
前期繰越金	1,128
遼東勘定	6,512
当期純益金	2,858
計	1,037,987
資 産	
土地建物	211,770
機械器具	192,906
貯蔵品	62,825
有価証券	7,083
担保金	68,500
貸 金	3,993
振替貯金	5,225
銀行貸借	15,788
支社支局勘定	18,779
新聞未収金	26,554
広告未収金	7,989
印刷未収金	48,349
販売未収金	7,126
仮払金	420,300
受入手形	1,805
金銀有高	8,332
計	1,037,987

出典：1914年2月23日、同8月27日、1915年2月17日、同8月30日、1916年3月13日、同8月26日、1917年2月27日、1920年3月8日、同8月5日、1921年2月15日、同8月3日、1922年2月6日、同8月4日、1923年8月30日、1924年2月6日、同8月12日、1925年2月10日、同8月13日、1926年2月17日、同8月19日、1927年2月24日、1928年2月23日付『満日』により筆者作成。

付録 1-2 満日社年表（1907 年-1927 年）

年 月	主な事項
1907 年 8 月	満洲日日新聞社東京で創立
10 月	東京における諸準備ほぼ終わり、森山社長以下西村巳之助、石橋文三郎、片岡善雄、宮田暢、桑原喜八、明石定一、安岡重雄、水野應佐諸氏着任
	山中古洞、森次太郎、倉辻明義、吉武源五郎、島田重就、結城素明の諸氏、在京社員として発刊に努める
	上田務、池内重雄、原口聞一、木下栄、西村正雄、千田宗次郎、兼谷富五郎、面川秀之助、原田光次郎、原口貞次郎、神野良隆 西村永三、石原平作、藤本軍次郎、吉本虎彦、依田籙五郎入社
11 月	11 月 3 日、創刊号
	家庭欄新設
	森山守次氏、社用を呼び 11 月 26 日発大義丸にて上京、12 月 22 日帰連
12 月	営口支局及び奉天支局を下記の箇所に開設 営口支局： 元新廟街 172 号 営口支局 奉天支局： 城内総督衙門門前 奉天支局
	千金寨日東洋行・坂本格、満洲日々新聞社通信員を囑託す
	清水亀太郎、渡部林次郎、宮脇たね子、吉本雅美、山本条吉入社 片岡善雄退社
1908 年 1 月	英文欄、衛生問答欄を新設
	宮田暢氏旅順から営口支局詰
	小笠原皓、田中吉三郎、安藤倭文子、元芳末吉入社 山口浅右衛門、佐藤鉞之進：旅順支局に入る 営口支局主任西村巳之助、旅順支局主任宮田暢氏本社詰 明石定一旅順支局長主任に就任 奉天支局主任上田務、吉本虎彦、田中吉三郎退社 原口聞一退社、遊軍的通信員として奉天支局主任兼任
2 月	「営口週報」（2 月 1 日より）、「長春週報」（2 月 5 日より）、「鉄嶺週報」（2 月 11 日より）、「奉天週報」（2 月 19 日より）を紙面第 4 面に掲載

	<p>西村正雄氏 本社主幹 沿線各地へ出発 藤谷三麿、平山梅蔵、平島栄三郎、木原謙策（旅順支局）の諸氏入社、西村永三及び旅順支局員山口浅右衛門退社 萩原哲蔵新たに奉天支局に入り、川添慎平、轡田吉司、佐藤武雄亦入社 旅順支局主任明石定一病死、萩原哲蔵（元奉天支局主任）は旅順支局主任となり、石橋文三郎は奉天支局主任に就任</p>
4月	<p>営口における『満洲日報』が廃刊、満洲新聞界統一の第二歩として、本紙に挿し込み日刊奉天付録の発刊</p> <p>『遼陽時報』を廃刊し、元遼陽時報社主安東貞元は遼陽支局主任に就任、4月24日より遼陽週報を開始</p> <p>築紫昌門、稲垣伸太郎、新倉蔚、木村柳太郎、宮崎安太郎、北浦恵太郎の諸氏入社 木下栄、平島栄三郎、川添慎平、清水亀太郎の諸氏退社</p>
5月	<p>5月1日より本紙の付録として日刊『奉天日報』を刊行し、奉天、鉄嶺、千金寨及び遼陽の読者に無代配布することとし、ついで『遼陽日報』を刊行し、遼陽の読者に配付することとなった。其結果本紙の「奉天週報」及び「遼陽週報」を中止する</p> <p>水野應佐は営口支局より奉天支局に、藤谷三麿は営口支局に転じる 小林定五郎は新たに奉天支局に入り、木原謙策は旅順支局より本社に転じる 藤本軍次郎、宮脇たね子は退社する</p> <p>演劇「親不知」、常磐座において本紙連載小説『親不知』を演ずる</p>
6月	<p>鉄嶺支局を設置、築紫昌門を主任として派遣</p> <p>6月7日より「日曜家庭週報」を「日曜倶楽部」と改称</p> <p>安藤篤助、岡田雄は入社し、宮田暢は退社する</p>
7月	<p>7月2日より「撫順週報」開始</p> <p>千田宗次郎は長春支局に転じ、大坪一之助は入社する</p> <p>常磐座、黄金座において本紙連載小説『親不知』、『頭彩一万円』を演ずる</p>
8月	<p>森山守次氏は太平洋通信社を起こし、来月より開業</p> <p>8月30日、本社記者安岡重雄（夢郷）、太平洋通信創立の用務を帯び9月1日発上京</p> <p>安藤篤助は桑原喜八氏に代わり長春支局主任として赴任し、樋口精一は旅順支局に入り、安岡重雄、轡田吉司は退社する</p>

9月	9月1日、関東都督府始政2周年記念号を刊行し、24頁、付録として八大将列座の肖像を掲載する
	伊藤武一郎、鬼塚郡太郎は入社し、加茂貞次郎は奉天支局に入る
	本社長・森山守次は東京に太平洋通信社を創立し、本社の東京支社を同社内に置き、同社満洲支部を本社内に置く
10月	10月16日より「瓦房店週報」開始
	阿部真之助は入社し、桑原喜八は退社し、神野良隆は奉天支局に転じる
11月	本社長・森山守次：11月7日発 開城丸にて内地へ
	本社編輯長・伊藤武一郎：11月19日鉄道沿線視察の為 北方へ
	英文欄新設
	毎日曜日「大石橋週報」
12月	本社記者・阿部真之助：鉄道沿線視察、12月16日に帰社
	12月30日、本社記者・石橋文三郎、鉄嶺丸にて内地
1909年4月	満洲日々新聞社の招請「記者団渡満」 やまと新聞主筆・松井廣吉、東京毎日新聞主筆・倉辻明義 都新聞主筆・大谷誠夫、東京二六新聞記者・野沢藤吉 太平洋通信社記者・高田一二、東京日々新聞記者・橋本善勝 国民新聞記者・濱田佳澄、報知新聞記者・徳久武治 万朝報記者・田中基臣、中外商業新聞記者・平松米蔵 東京朝日新聞記者・宮部敬治、中央新聞記者・阿部鶴之輔 日本新聞記者・早川茂一、ジャペンタイムス記者・秋本俊吉
	満洲日々新聞社主筆・稲垣伸太郎：清国大葬のため、北京に特派
	鉄嶺支局を鉄嶺西町1番地旧陳列館に移転
5月	5月5日、本社長・森山守次、本社主・星野錫：東京記者団と共に旅順へ
	5月16日、本社長・森山守次：嘉義丸にて東京記者団一行と共に東上
6月	満洲日日新聞社編集部：家庭文芸募集 毎日曜日発行の家庭ページに掲載のため家庭に関する短編小説（百行以内）小品文、新体詩、和歌、俳句を募る

	投書函設置 従来の投書函を撤回して更に下記の五箇所へ設置、毎日一回開函収集 第一号 日本橋 落合薬店前 第二号 浪速町 加藤看板店前 第三号 松公園 やぶそば脇 第四号 西通 蕎麦屋中国屋前 第五号 逢阪町 松の家前
7月	満洲日々新聞奉天支局を奉天十間房警第101号に設置 岡田雄：営口支局主任に就任、元営口支局主任・藤谷三磨本社詰 満洲日日新聞安東県新聞販売及び広告取次：安東県3番通5丁目
8月	満洲日日新聞大石橋販売：大石橋警務支署前通 永田洋行支店 満洲日々新聞大阪出張所：大阪市北区西野田吉野東野ノ町391 支局主任：石橋文三郎
9月	紙面体裁の変更 1909年9月1日の関東督府始政3周年記念日より、毎頁を8段とし、1段の字数19字詰を17字詰に改む 森山守次辞任 元満洲日々新聞社社主・東京印刷株式会社社長星野錫退社 満洲日々新聞社主兼社長・伊藤幸次郎就任
10月	英文夕刊発行
12月	英文夕刊の独立
1910年5月	満洲日々新聞社印刷部を設置
7月	全部新式小型活字を使う
8月	今回新式活字使用仕候結果広告面は1行18字詰め1段104行となり
1911年2月	伊藤幸次郎辞任
8月	守屋善兵衛社長就任 西村正雄退社
1914年12月	青島販売所を設置。(青島横須賀町、山崎新聞舗)

1915年2月	第3回満日社株主総会開催
3月	元満日社編輯鬼頭玉汝は青島で『青島新報』を創刊
1916年3月	3月11日に『満日』3000号に達する
1917年2月	平日8頁に増加し、紙面拡大と共に、3月1日より1か月70銭に値上する
1920年1月	主筆・上田務(号:黒潮)退社
1920年3月	元満洲日日新聞社奉天支局主任・皆川秀孝は退社し、奉天取引所信託会社専務取締役役に就任
	元満洲日日新聞社取締役副社長・木下龍、取締役・胎中楠右門退社。西片朝三は取締役副社長に就任。元監査役・武井光尊(東京支社長)取締役役に転任。清瀬規矩雄監査役に就任。
	元満日社社会部記者・塚越菊治(五葉)退社
	山崎峯奉天支局長に就任
	元満日社記者徳島元太郎退社
	遼東新報社、満洲日々新聞社共に広告料改正。5号活字15字詰1日1行に85銭に、特別広告料は倍額にする
	高島護輔入社
	7・75ポイントルビ付及びベタ版収容新活字を採用して、従来の8頁新聞より約五割強の拡張した
6月	満日婦人欄新設
1921年11月	我社現役重役 社長村野常右衛門、副社長西片朝三、監査役 青瀬規矩雄、取締役支配人柴田一郎、監査役古仁所豊、取締役武井光尊、取締役石橋文三郎
1923年2月	長春支局長田中直記が解任、西山新は長春支局長に新任
4月	石橋文三郎退社
12月	法律欄新設
1924年1月	社告 摂政宮殿下の御成婚に対し記念号発行
	満日印刷所 新活字印刷の御注文
	平山梅蔵 営口経済日報社主筆
	満洲日日新聞哈爾賓公館発展号

2月	旅順支局を拡張して支社となった。編輯長橋本芳彦を支社長に任命した。記者清瀬邦弘を通信に、又営業員河合八郎を販売広告に担当。
6月	東京支社移転 東京市京橋区宗十郎町一三二番地 満日東京支社
1926年3月	大矢信彦は北京支局支局長に就任。

出典：『満日』により筆者作成。

付録 1-3 満日社が主催した事業活動の概況（1907 年-1927 年）

開催時間	名 称
1907 年 12 月	予想投票「頭彩は何番か」
1908 年 1 月	第 1 回かるた大競技会
2 月	「懸賞余興 新廿四考 筍堀り」
	第 2 回かるた大競技会
	第 1 回 お伽芝居（於常磐座） 脚本：巖谷小波先生原作 中幕 俵藤太 全四場 脚色：安岡夢郷
	大石橋歌留多大会
3 月	陸軍記念日祝賀会
11 月	児童の大運動会
	旅順児童大運動会
1909 年 1 月	歌かるた大競技会
	営口歌かるた大会
	営口第 2 回歌かるた会
2 月	営口の囲碁大会
	第四回かるた大会
	旅順歌留多競技会
6 月	8 月 9 日満洲日々新聞社主催「大阪大火罹災者救済慈善演芸会」 入場券 一等 1 円、二等 50 銭 出演者 鞍馬連、陸連、芸妓連、娘義太夫連
7 月	「夏家河子の浜遊」 参加者：大連より 450 名、旅順より 150 名合わせて 600 名 会費：1 人 1 円、ほかに大連より 1 円、旅順より 1 円 20 銭



8月	<p>満洲日日新聞社主催第一回学術講演会 日時：8月7日（土曜日）午後正8時開会 場所：大連西広場 救世軍会館（元岩代町郵便局跡） 弁士及演題：理学士・木戸忠太郎『火と水』、理学士・鈴木庸生『石炭の話』 会費：入場随意</p> <p>大阪大火罹災者救済慈善演芸会 出演者：鞍馬連、睦連、芸妓連、娘義太夫連</p>
9月	<p>「老鉄山下の鶉狩」 参会者：300名を限り 会費：1円50銭（汽車賃及び朝の弁当を支弁する） 出発：1909年9月18日（土曜日）午前1時20分大連駅発 帰路：同日午前8時旅順駅発同9時40分大連着</p>
10月	<p>「空中飛行器展覧会」 日時：大連10月7日午前9時より、旅順10月8日午前9時より 場所：大連東公園町、旅順乃木町旅順協会跡 参加者：大連約5千名、旅順約3千名 其他、營口、大石橋、遼陽、千金寨、奉天、鉄嶺、公主嶺、長春などでも開催</p>
1910年8月	各地の『満日』1千号祝賀の講演会
11月	<p>「満洲写真大会」 会場：大連電気遊園地 会期：1910年11月1日より 主催：遼東新報社、満日社</p>
1911年5月	<p>「吉林大火罹災民救助義金募集」 主催：遼東新報社、泰東日報社、満洲日々新聞社</p>
1915年8月	<p>「新民府水害救済義捐金募集」 発起人：泰東日報社、遼東新報社、満日社</p> <p>「夏家河子納涼列車」 日時：1915年8月21日 会費：往復汽車賃共60銭、子供は45銭</p>

10月	「京城共進会観覧団」 時期：10月上旬 往復日数：約一週間 会費：50円以内 定員：百名を限る
1916年5月	第1回満洲野球大会
10月	「本社主催学術講演会」 時間：1916年10月29日（日曜）午後7時 会場：東洋協会商業学校講堂 演題：「乃木将軍に就いて」黒木安雄 「随感」文学博士 上田万年
1919年6月	第4回関東州野球大会
1920年2月	第3回全満洲歌留多競技大会
	「旅順歌留多大会」
	第1回在満児童母国見学団
1920年3月	「旅順読者慰安会」 日時：3月29日午後4時より 会場：旅順市八島座 余興：芝居三曲（回？）合奏、義太夫、浪花節、筑前琵琶、講談、茶（雷？）狂言、手踊其他 主催：満日社旅順支局
6月	「第3回懸賞 画探し当選者」
	「大連市長は誰が適任か」投票
	「第5回関東野球大会」
1921年1月	「小学生新年会」 日時：1921年1月31日 会費：15銭 主催：教育活映普及会主催 後援：満日社
	「第4回満洲歌留多大会」
2月	「南満洲第1回ピンポン競技大会」
3月	「満日旅順支局読者慰安会」
	「第2回在満学童母国見学」

1922年1月	「有権者演説大会」 日時：1月29日午後一時から 場所：大連商業学校大講堂
4月	「旅順支局主催 旅順撞球大会」
1923年12月	「懸賞募集 東亜振興の歌」
1924年2月	「鞍山支局主催 愛読者慰安能会」
	「沙河口支局 読者慰安活動写真」
3月	「全満漫画展覧会」
4月	「旅順観桜デー」
	「大和尚山探勝会」
	関東州野球大会
5月	「大和尚山学術探勝会」 期日：5月11日（日曜日） 賃金：往復金 80 銭 小児半額 主催：満日社 後援：満鉄地質調査所
6月	「朝鮮金剛山探勝会」
	「懸賞募集 夏家河子に代る名を求む」
1925年2月	「満日月極読者優待映画会」
	第2回満鮮卓球選手大会
	「支那劇研究 欧陽一座観劇会」 出演：支那代表俳優 欧陽予倩一座 日時：2月21日 観劇料：普通白券2円、青券1円50銭 主催：満蒙文化協会 後援：満日社
	第5回全満洲卓球選手権大会
3月	「満日月極読者優待映画公開」 映画種目 時代劇 番町皿屋敷 全六巻 映画 欺かれた女 全五巻 活劇 想国の呪 全七巻 期日：3月6日から5日間 後援：満日社奉天支社

	<p>「新講談 谷口天風独演会」  演題 1、「最近の支那政局と段祺瑞氏」  2、「奉直戦争と呉佩孚氏」  3、「瀕死の孫逸仙氏と波瀾ある生涯」  期日：3月4日午後六時より  会場：市内敷島広場青年会館  後援：日満通信社 満日社</p>
	<p>「名映画「君国の為に」公開」</p> <p>「大連囲碁大会」  期日：3月29日日  主催：満日社  後援：大連方円社</p>
4月	<p>「日露交歓 交響管弦楽演奏会」  莫斯科 哈爾賓 合同管弦楽団  山田耕作氏指揮  時日：4月14日  会場：大連市立高等女学校講堂  主催：双葉幼稚園  後援：松竹合名会社、日本交響音楽協会、満鉄社  会課、満日社 入場券：特等券 5円、普通券 3円 学生券 1円50銭</p> <p>「由良之助劇 春季演芸大会」 主催：由良之助 後援：満日社安東支局 場所：南地座</p>
5月	<p>「天津・北京へ視察旅行団」 期日：1925年5月16日奉天発、同24日大連帰着 会費：1名107円 主催：満蒙文化協会 後援：満日社</p>
8月	<p>「拳銃射撃大会」  射証料：会員免除、一般40銭、学生半額</p>

	<p>「農業大学全大連対抗卓球大会」 期日：8月16日、17日 場所：敷島町青年会館 観覧券：全回通一般50銭、学生、婦人30銭 主催：満洲卓球協会 後援：満日社</p>
	<p>「懸賞募集 旅大道路十景」</p>
	<p>「東亜川柳大会」 期日：8月23日午後1時</p>
	<p>会場：山県通福昌倶楽部楼上 主催：満日社、大連川柳会</p>
	<p>「大連博覧会旅順及千山」</p>
1926年1月	<p>「講演会」 演題：「蒙古探検から生還して」 講演者：岡西為人 場所：奉天尋常高等小学校講堂に於いて 日時：1月12日午後2時から 後援：満蒙文化協会奉天支部、満日社奉天支社</p>
	<p>「独逸ヅ社佛国支社特作品」 映画：「歎きのピエロ」全十巻及び喜劇物 場所：市内若狭町 主催：芸術映画観賞会 後援：満日社</p>
2月	<p>「全旅順卓球大会」 期日：2月14日午前九時より 主催：満日社旅順支社 後援：旅順華信洋行</p>
3月	<p>「小銃射撃大会」</p>
	<p>「市政弾劾大演説会」 会場：若狭町大連劇場 日時：3月23日午後6時 主催：大連市各区聯合会 後援：遼東新聞社、大連新聞社、泰東日報社、満日社</p>
4月	<p>「問題の名映画公開」</p>
7月	<p>「第三回小銃射撃大会 大連市民射撃会」</p>

1927年2月	「大正天皇御大葬儀 御映画の謹写公開」 期日：2月12日から旅大及沿線各地に 主催：満日社
	「ダグラスの海賊（全11巻天然色彩）」 日時：2月20日午後7時からヤマトホテルに鑑賞 会、2月21日から 西広場演芸館において上映 会費：鑑賞会：3円 普通上映：階上：一般1円50銭、学生80銭 階下：一般1円20銭、学生50銭 主催：満日社
3月	「春季囲碁大会」 期日：3月13日（第2日曜）正午より 会場：三河町大連棋院内にて 会費：会員2円、ほか3円 入賞：1等より10等まで 主催：大連棋院 後援：満日社  「奉天、撫順観光、湯崗子温泉入浴回遊団募集」 日時：1927年4月15日出発 主催：満鮮旅行案内社 後援：満日社

出典：『満日』により筆者作成。

付録 1-4 大連新聞社が主催した事業活動の概況（1920年-1927年）

開催時間	名称
1920年7月	「大連競馬大会」 期日：1920年7月23日、24日、25日 場所：大連市外老虎灘街道鹽田電車停留所前 会費：白券1枚5円に福券3枚添付、青券1枚3円に福券1枚添付 主催：大連新聞社 後援：大連乗馬会
10月	「北支大飢餓 慈善芝居興行」 日時：1920年10月25日 午後5時半開始 場所：大連市敷島町歌舞伎座 入場料：特等2円、1等1円50銭（但し本社にて発売の切符に限る） 主催：大連新聞社
1921年2月	「南満洲芸妓 人気投票」 期日：1921年2月1日-2月28日 投票用紙：2月1日より大連新聞紙朝刊3面に刷込み 区域：大連、長春間各地及び奉天、安東間の安奉前線、その他旅順、營口、撫順、吉林、長春、哈爾濱間の各地 主催：大連新聞社
3月	「大連の町名を懸賞で募集」 主催：大連新聞社
	「大連見学団」（第1回） 日時：児童（男女共尋常4年以上のこと） 1921年3月26日 午前9時半開始、 婦人（16歳以上のこと） 1921年3月28日 午前9時半開始 人数：児童、婦人各150名 会費：無料 場所：大連埠頭 講師：満鉄埠頭事務所長 梅野實 満鉄埠頭事務所統計係主任 久保田顕一 団長：大連新聞副社長 木村好太郎

4月	<p>「大連見学団」(第2回) 日時:1921年4月17日 場所:旅順(白玉山=黄金山無線電信所、重砲兵大隊=模珠礁 砲台等) 講師:旅順陸軍重砲大隊長 陸軍砲兵中佐 佐松尾哲三 黄金山海軍無線電信所諸氏 旅順駅長 久保田金平 其他数氏 団費:1人50銭 資格:尋常4学年以上男女小学児童 主催:大連新聞社</p>
5月	<p>「久留島武彦 お話し会」 久留島武彦先生の来満を幸ひとして左記の通り児童諸君の為に三新聞社主催でお話し会を開催いたします。      日時:1921年5月13日、午前10時より(女子) 同、午後1時より(男子) 会場:大連第三尋常小学校 主催:遼東新報社、満日社、大連新聞社</p> <p>「大連見学団 三山島家族会」 日時:1921年5月22日 講師:水上署主任■部 山崎清太郎 満鉄埠頭事務所 久保田賢一 資格:特になし 定員:400人 会費:1人20銭 主催:大連新聞社</p>
9月	<p>「第1回撫順音楽演奏会」 日時:1921年9月23日午後7時半開演 場所:撫順小学校大講堂 主催:アポロ倶楽部 後援:大連新聞社 撫順支局</p>



10月	<p>「大連子供大会」 日時：1921年10月30日正午開会 会場：大連実科高等女学校講堂 番組：東宮殿下御渡欧活動写真其他数種 おはなし、音楽（大連音楽団諸氏） 会費：一切無料 主催：大連新聞社</p>
11月	<p>「レコード音楽会-ドストエフスキー誕生百年記念」 日時：1921年11月16日午後6時半開始 会場：旅順新市街博物館 曲目：外国名曲数種 会費：入場無料 解説：大連新聞記者 中溝新一 主催：大連新聞社旅順支局</p>
	<p>「子供のための活動写真大会」 日時：1921年11月22日午後6時開会 会場：大連実科高等女学校 会費：一切無料 説明：田中紫峰 演奏：在連音楽家有志 主催：大連新聞社</p>
12月	<p>「子供活動写真大会」 日時：1921年12月18日午後1時開会 会場：電気遊園内電気館 内容：実写、喜劇、正劇 おはなし 大連新聞記者 中溝新一 会費：1人5銭 資格：子供なら誰でも差支えありません 主催：電気館 後援：大連新聞社</p>

	<p>「西伯利殉難者追悼講演会」（「北満殉難者追悼講演会」） 日時：1921年12月25日午後1時開始 会場：大連実科高等女学校講堂 講師：陸軍工兵中佐 島永太郎 満鉄運輸部次長 大蔵公望 満鉄社員（遭難者）岩崎小鹿 主催：大連新聞社</p>
1922年1月	<p>「民選議員に当選する十八名は誰」 用紙：はがき1枚に18名記載の事 締切：1922年1月31日最終便まで 宛所：大連新聞投票係 景品：米国製上等ラクダ毛布、金側懐中時計 主催：大連新聞社</p>
2月	<p>「冬の若草山へ！ 大連見学団 観測所見学」 日時：1922年2月5日午前9時開始 会場：若草山本派本願寺関東別院 講師：関東庁観測所長 水内清治 若草山本願寺賛事 八尋慈薫 資格：尋常4学年以上の男女児童 会費：一切無料 人員：約200名 主催：大連新聞社</p>

	<p>「市政問題大演説会」 日時：1922年2月5日正午より午後4時まで  場所：大連敷島町歌舞伎座 出演弁士並に演題 開会の辞  寶性確成 熱なき市会 長谷川良之 市民の一人  として 田原秀穂 未定 石  本鎖太郎 第三者として市会に対する希望 井藤栄 真の自治  花岡酒造智 未定 小野木孝治 未定  大内成美 市民心理 高塚源一 群衆の時代  高橋聿郎 民選議員に対する有権者の態度 久保田賢一 市政の前途  久保通猷 市制は市民の照映なり 相生由太郎 未定  立川雲平 閉会の辞 栗木栄太郎 主催 大連  新聞社</p>
	<p>「全満連合かるた大会」 日時：1922年2月5日正午開始 場所：沙  河口桜亭 会費：1円 主催：明星会、大連新聞沙河口支局 後援：大  連新聞社</p>
3月	<p>「伊勢参宮団」 参宮団旅程大要 出発期日：1922年3月1日 出発  駅：奉天 往復日数：約25日間 巡路地を安奉線経由、朝鮮を経て関  釜連絡船にて下関上陸 大阪→京都→奈良→二見→山田→名古屋→日  光→東京 往復経費：合計145円 主催：大連新聞奉天支局 後援：  奉天信託株式会社</p>

	<p>「満洲素人浄瑠璃人気投票」 期間：1922年3月1日-3月31日 用紙：本紙第2面欄に刷込みあり 区域：南北満洲全部 入賞：1等より15等まで15名 注意：義太夫芸妓は投票より除外 主催：大連新聞社</p>
	<p>「牛荘居留民会 行政委員紙上投票」 投票期日：1922年3月1日から同20日まで 主催：大連新聞社</p>
	<p>「営口居留民会 行政委員紙上投票」 主催：大連新聞営口支局</p>
	<p>「澄宮殿下御作童謡練習会」 日時：第1回 3月5日、第2回 3月12日、第3回 3月19日 いずれも午後1時開始 会場：大連市内播磨町大連幼稚園 講師：大連中学校、大連市立高等女学校 囑託 近森出来治 大連高等女学校教諭 近森ひろを 「童謡とその作り方(第2回)」 中溝新一 資格：尋常3学年以上の男女児童 会費：一切無料 主催：大連新聞社</p>
	<p>「読者慰問 撫順演芸大会」 日時：1922年3月21日午後6時開演 場所：長春公学堂 余興：福引 主催：大連新聞社撫順支局</p>
	<p>「素人写真競写会」 主催：ウツソウ会 後援：大連新聞社</p>
	<p>「飛行知識宣伝講演」 日時：1922年3月30日午後6時開始 場所：大連商業学校講堂 講演者：帝国飛行協会総務理事 陸軍中将 久能司 演題：「飛行界の趨勢」 主催：帝国飛行協会 後援：遼東新報社、満日社、大連新聞社</p>

4 月	<p>「撞球競技会」          日時：1922 年 4 月 2 日より 3 日間（毎日午前 10 時開催） 場所：大連西広場倶楽部 会費：1 円 主催：大連撞球有志 後援：大連新聞社</p>
	<p>「澄宮殿下御作童四大音楽会」 日時：1922 年 4 月 9 日午後 1 時開始          会場：大連市立高等女学校講堂 出演：男女小学児童及幼稚園児          主催：大連新聞社</p>
	<p>「性相学講演会」 日時：1922 年 4 月 28 日午後 7 時開始 場所：大連商業学校講堂 弁士：性相家 石龍師 演題：「人性と運命の具体的解釈」 会費：無料 主催：大連新聞社</p>
6 月	<p>「満洲囲碁大会」 日時：1922 年 6 月 11 日午前 9 時開始 会場：大連市磐城町扇芳亭 会費：5 円 賞品：1 等 金側時計 2 等 金側腕時計 3 等 置時計 4 等以上 25 等まで 景品贈呈 尚入賞者には記念メダル贈呈 主催 大連新聞社</p>
	<p>「夏家河子清遊会」 日時：1922 年 6 月 18 日 会費：大連の方は 1 人金 70 銭（子供半額） 旅順の方は 1 人金 90 銭（子供半額）          会員のために満鉄より臨時列車を提供（大連発午前 9 時、夏家河子発午後 5 時） 余興：福引、宝探し、演芸、運動競技など 主催：大連新聞社</p>

	「赤陽社劇研究部 第一回公演」 日時：1922年6月20日、21日、午後5時開催 会場：大連電気遊園内電気館 会費：50銭 後援：満鉄音楽会、大連新聞社
7月	「洋劇活映大会 本紙愛読者優待」 日時：1922年7月1日、2日午後6時開始 場所：大連花月館 会費：切抜券所持者 10銭、その他20銭 主催：洋劇活映大会 後援：大連新聞社
	「柳樹屯無線電信局見学」 日時：1922年7月23日 資格：尋常5、6年以上 会費：1人30銭（大人5は50銭） 主催：大連新聞社
8月	「民国大家 陳季半丁画伯作品展覧会」 日時：1922年8月12日、13日午前9時より午後6時まで 会場：敷島町 大連商業会議所楼上 後援：大連新聞社
	「電気館こどもデー」 日時：1922年8月26日、27日午後1時 場所：電気遊園内電気館 会費：1人5銭 プログラム 喜劇 デブちゃんの飛行 喜劇 日曜学校 漫画 浦島太郎 実写 東京見物 漫画 鶴と亀 喜劇 犬の子ハム お話し 大連新聞記者 中溝新一 後援：大連新聞社

	<p>「愛読者慰安活動写真大会」 日時：1922年8月28日、29日、30日  午後6時半開演 会場：電気館 入場無料 プログラム 一 挨拶  本社員 二 実写 キネト時事面報 三 喜劇 デブちゃんの飛行  四 紅涙の実力 五 漫画 浦島太郎 六 連続 唸る鉄腕 主催：  大連新聞社</p>
11月	<p>「大音楽会」 日時：1922年11月23日午後1時5分開演 出演：旅  大音楽家十数名、管弦楽部員 会場：旅順新市街博物館 会員券：1  円（学生半額） 後援：大連新聞社旅順支局</p>
1923年1月	<p>「露国避難民救済慈善演芸会」  日時：1923年1月4日午後7時、同5日午後1時半  会場：大連敷島町青年会館  出演：元露国帝室劇場附魔術師 フランツ・イザコ  会費：大人金1円、子供金50銭  主催：大連新聞社  後援賛助者代表  田中千吉民政署長、村井啓太郎大連市長、相生由太郎商議会議頭、  川村竹治満鉄社長、露国領事ワスケウイツチ</p> <p>「初相場予想 初立会（1月4日）懸賞募集」 五品株 前場当限取  引寄附値段 商株 同上 大豆 前場4月限1節寄附値段 締切：  1922年12月25日 発表：1923年1月8日 賞品：各題1名宛金メダ  ル進呈 主催：大連新聞社</p>

	<p>「旅順親睦かるた会」 日時：1923年1月21日正午開始 会場：旅順寿亭 会費：1円 主催：大連新聞旅順支局</p>
2月	<p>「南満洲かるた大会」 日時：1923年2月4日正午開始 場所：大連沙河口劇場 会費：1円 主催：大連新聞沙河口支局主催 後援：沙河口明星会</p>
	<p>「籃球模範試合」 日時：1923年2月8日午後3時開始 場所：大連弥生町女学校大コート 出場チーム：大連籃球俱樂部対大連中学校 入場無料 主催：大連新聞社</p>
	<p>「満洲連合鞍山囲碁大会」 日時：1923年2月11日 会場：鞍山北二条銀蝶 会費：1円 主催：大連新聞社鞍山支局</p>
3月	<p>「全満個人ピンポン大会」 日時：1923年3月11日開催 場所：市立高等女学校 会費：1円 主催：大連新聞社</p>
	<p>「第2回満洲囲碁大会」 日時：1923年3月25日午前9時開始 会場：大連市磐城町扇芳亭 会費：5円 主催：大連新聞社</p>



5月	<p>「大連新聞創刊三周年記念デー」 日時：1923年5月5日正午開始  場所：電気遊園 余興：各種演芸、懸賞人探し、懸賞仮装行列、活動  写真 賞品：1等30円、2等以下呈賞 入場：一般に公開し愛読者を  優待 主催：大連新聞社</p>
	<p>「撫順炭鉱見学」 日時：1923年5月20日 内容：撫順炭鉱の見学  、永安橋畔の清遊 定員：500名 会費：実費 主催：大連新聞社 後  援：満鉄奉天鉄道部</p>
6月	<p>「第2回夏家河子清遊会」 日時：1923年6月17日 会費券：大連  からは1人70銭 旅順からは1人90銭 (12歳以  下の子供は其半額) 余興：角力、屋台、運動競技、音楽其他、宝拾  ひ、 仮装人探し、福引 主催：大連新聞社</p>
	<p>「筑前琵琶宗家歓迎演奏大会」 日時：1923年6月16日、17日午後  6時開演 会場：大連劇場 主催：大連旭会 後援：大連新聞社</p>
	<p>「貔子窩馬賊討伐死傷者弔慰義金募集」 募集期間：1923年6月30  まで 主催：遼東新報社、満日社、大連新聞社</p>
7月	<p>「優勝力士懸賞」 主催：大連新聞社</p>

8月	<p>「大演奏会」 日時：1923年8月18日午後8時開演 内容：日本唯一の女流作曲家松島彝子女子作品発表 声楽樂の花形萩野綾子女子出演 場所：大連市立高等女学校 主催：満鉄音楽会 後援：大連新聞社</p>
	<p>「大洪水被害義援金募集」 発起人 遼東新報社、満洲日日新聞社、大陸日日新聞社、泰東日報社、満洲報社、関東報社、華商公議会、大連新聞社</p>
9月	<p>「新涼花火大会」 日時：1923年9月1日夜 場所：大連春日町春日池畔 主催：大連新聞社</p>
	<p>「母国震災義金品募集」 発起人 関東庁、大連市役所、旅順華商公議会、遼東新報社、泰東日報社、満洲報社、南満洲鉄道株式会社、旅順市役所、大連商業会議所、小崗子華商公議会、満洲日日新聞社、関東報社、大連新聞社</p>
	<p>「大震災地視察講演」 日時：1923年9月20日午後4時半開始 会場：大連市立高等女学校 主催：大連新聞社</p>
10月	<p>「慈善少女歌劇大会」 日時：1923年10月19日、20日、23日午後6時半開演 内容：童謡舞踊、お伽歌劇 会場：歌舞伎座 会費：子供1人20銭、大人1人50銭 主催：大連新聞社</p>

	<p>「飯島黙宣師 通俗仏教講演会」 日時：1923 年 10 月 29 日、30 日 午後 7 時開会 会場：播磨町大連幼稚園 演題 29 日 「生理的三世因果」 30 日 「仏教徒の理想」 会費：本紙刷込み優待券持参の向きは 1 人 10 銭 主催：大連仏教徒有志 後援：大連新聞社</p>
11 月	<p>「第 2 回サツマ温泉ピンポン大会」 日時：1923 年 11 月 11 日午前 8 時開始 会場：サツマ温泉 会費：1 チーム 5 円 主催：サツマ温泉 後援：大連新聞社</p> <p>「少女歌劇旅順公演」 日時：1923 年 11 月 10 日、11 日 会場：旅順旧市街八島座 会費：大人 50 銭、子供 20 銭 主催：大連新聞社旅順支局</p> <p>「露国実状講演会」 日時：1923 年 11 月 16 日午後 4 時 15 分 会場：満蒙文化協会 講師：満鉄訪露団長、長春地方事務所長 井上信翁 主催：大連新聞社</p> <p>「読者慰安活動写真大会」 期間：1923 年 11 月 28 日より 場所：満鉄沿線各地 主催：満蒙教化活動写真協会 後援：大連新聞社</p>
12	<p>「安藤滋洋画展覧会」 日時及び場所 1923 年 12 月 22 日、23 日 旅順新市街博物館 1923 年 12 月 24 日、25 日 旅順旧市街語学校 発起人：津田元徳、西山茂、東畑英夫、荒井陸男 後援：大連新聞社 旅順支局</p>

1924年1月	<p>「大連少女歌劇」 日時：1924年1月18日、19日午後6時開会 会場：歌舞伎座 内容：大連童謡と歌劇協会少女連出演 後援：大連新聞社</p>
	<p>「御慶事奉祝 童謡と歌劇特別公開」 日時：1924年1月25日、26日午後6時開会 会場：歌舞伎座 会費：無料 主催：大連新聞社</p>
2月	<p>「第2回少女歌劇大会」 日時：1924年2月2日午後6時、同2月3日午後1時開始 場所：旅順市八島座 入場料：1円、70銭、50銭（軍人、学生、子供30銭） 主催：童謡と歌劇協会 後援：大連新聞社</p>
	<p>「旅順親陸かるた大会」 日時：1924年2月10日正午 場所：旅順青葉 会費：1円 主催：大連新聞旅順支局 後援：大阪屋号書店、文英堂書店</p>
	<p>「恒例全満かるた大会」 日時：1924年2月24日正午開会 会場：沙河口劇場付属茶屋 会費：1円 主催：大連新聞沙河口支局 後援：沙河口明星会</p>
3月	<p>「東宮殿下御成婚奉祝記念 古希翁媪表彰演芸会」 日時：1924年3月20日午後6時 場所：大連劇場 主催：大連新聞社</p>

4月	「大連から旅順まで 第二艦隊便乗見学団」 日時：1924年4月10日午前8時大連埠頭出発 資格：15歳以上の健康者 会費：1人70銭 学生：会費金30銭 主催：満日社、大連新聞社、大連海務協会
	「第二艦隊旅大 航行活動写真公開」 映写日時：1924年4月14日午後6時半開始 映写場所：大連敷島町広場 入場無料 主催：大連新聞社
	「諸芸名人人気投票」 種目：長唄、常磐津、浄瑠璃、箏曲、琵琶、尺八、舞踊など 投票期間：1924年4月20日開始、同5月25日終了 主催：大連新聞社
5月	「全満自転車競走大会」 日時：1924年5月18日午前9時開始 場所：塩田東端新設グラウンド 主催：大連新聞社老虎灘支局
	「少女歌劇大会」 日時：1924年5月30日より3日間 会場：歌舞伎座 会費：特等金1円、普通金70円、中等学生金35銭、小学生金30銭 主催：大連童謡と歌劇協会 後援：大連新聞社
6月	「第3回夏家河子清遊会」 日時：1924年6月22日 余興：運動競技、宝探し、変装人探し、舞踊、其他面白い趣向あり 会費：大連の分 大人金70銭、子供40銭 旅順の分 大人金90銭、子供50銭 主催：大連新聞社
	「諸芸演奏大会」 日時：1924年6月28日、29日 会場：大連劇場 主催：大連新聞社

8月	<p>「大連新聞社第1回通俗講演会」 日時：1924年8月3日午後7時開 会 場所：大連劇場 演題及講演者 「民衆運動の力」 大連新聞社 主筆 寶性確成 「赤裸々の現代欧米社会相」 弁護士 相川米太郎 「現内閣出現の表裏と其の前途」 卓堂 立川雲平 主催：大連新 聞社</p>
	<p>「懸賞論文募集 課題 満蒙文化開発策」 審査委員：石田武亥、岩永浩、服部精四郎、堀諫、大蔵公望 小川順之助、乙竹茂郎、片山義勝、田中喜介、高柳保太 郎、 上谷庫平、船津辰一郎、古澤丈作、相生由太郎、寶性確成 賞金：1等500円、2等200円、3等50円、4等30円、5等20円 主催：大連新聞社</p>
9月	<p>「熊岳城果実デー」 日時：1924年9月14日 内容：各農園参観、 農事試験場参観、果物安価提供 主催：熊岳城果樹同業者 後援：大 連新聞社</p>
	<p>「大連市会議員 確定立候補者投票」 投票期間：1924年9月21日- 10月28日 主催：大連新聞社</p>
10月	<p>「時局問題演説会」 日時：1924年10月10日午後7時開始 講演者 ：代議士、東京市会議員 安藤正純 演題：「時局の危機に直面して 」 入場無料 場所：大連劇場 主催：東本願寺、大連新聞社</p>
	<p>「快樂芸妓歌劇温習会」 日時：1924年10月11日、12日午後7時 開演 場所：沙河口劇場 会費：1円、子供半額 後援：大連新聞沙河 口支局、大連新聞聖徳街支局</p>

12月	「文芸清談会」 日時：1924年12月7日午後1時開始 会場：老虎灘街道薩摩温泉 会費：50銭 主催：大連新聞社学芸部
1925年1月	「初春の催し 大連撞球競技大会」 期間：1925年1月6日-10日 会場：三河町喜雪倶楽部 主催：千五百点 堀信 後援：大連新聞社
	「第4回旅順親睦かるた大会」 日時：1925年1月18日午後1時開始 会場：旅順瓢亭 会費：1円 参加者：旅順在住者限り 主催：大連新聞社旅順支局 後援：文英堂、大阪屋号書店
	「読者慰安観劇会」 日時：1925年1月11日-14日 会場：大連劇場 主催：大連新聞社
2月	「全満かるた大会」 日時：1925年2月1日午後1時開始 会場：サツマ温泉会場大広間（婦人組の参加も大歓迎） 主催：大連新聞社老虎灘支局
	「堀選手歓迎撞球競技大会」 日時：1925年2月7日-9日 会場：旅順敦賀町 大正倶楽部 会費：1円 主催：大連新聞社旅順支局
	「大連消防組二十周年 演芸大会開催」 会期：1925年2月14日より6日間 会場▽歌舞伎座と大連劇場 出演：時事劇団と演芸会 会費：1円50銭 主催：大連消防組 後援：満日社、遼東新報社、大連新聞社、市内有志一同

	<p>「紀元節祝賀活動写真大会」 日時：1925 年 2 月 11 日、昼間は正午開始、夜間は午後 6 時開始 会場：歌舞伎座 主催：大連新聞社</p>
	<p>「第 2 回活動写真大会」 日時：1925 年 2 月 15 日、昼夜 2 回 会場：沙河口劇場に於て 入場無料 主催：大連新聞社</p>
3 月	<p>「全満洲かるた大会」 日時：1925 年 3 月 1 日午前 11 時開始 会場：沙河口おきた 2 階広間 会費：1 円 主催：大連新聞沙河口支局</p>
	<p>「日曜慰安活動写真大会」 日時：1925 年 3 月 22 日、午前 12 時より八島座、 午後 6 時より月見倶楽部 入場無料 主催： 大連新聞旅順支局</p>
4 月	<p>「大連新聞新築披露演芸会」 日時：1925 年 4 月 12 日より各地で開会 開演場所：營口、開原、公主嶺、長春、奉天、安東、本溪湖、撫順、 湯崗子、旅順 開会内容 一、活動写真 二、演芸出演 主催：大連新聞社、同各地支社支局</p>
5 月	<p>「少女劇珍好会公開演芸」 日時：1925 年 5 月 23 日、24 日午後 6 時 開演 場所：老虎灘サツマ温泉楼上 主催：大連新聞老虎灘支局</p>



6月	<p>「第1回馬術講習会」 日時：1925年6月1日より開始 会員募集  一、購読会員30名の予定 一、男女を問わず健康者に限る 一、  講習期間 2ヶ月間 一、指導者 大連憲兵分隊長以下全員及び他  に嘱託2名 一、会費 金5円 主催：大連新聞社 後援：大連憲  兵分隊</p>
	<p>「関東州内剣道有段者団体 優勝カップ争覇戦」 日時：1925年6月  27日午後2時開始、28日午前9時開始 場所：大連満鉄新道場 審判  員：高野範士、小関範士外各教師 主催：大連新聞社</p>
	<p>「クレオン画展覧会」 内容：サンデー大連一周年記念として市内各  小学校の1年生から 6年生までの成績品を展覧 日時：  1925年6月26日、27日、28日 会場：大連新聞社講堂 主催：大連  新聞社 後援：大連奨学会</p>
11月	<p>「営大連合囲碁大会」 日時：1925年11月15日 場所：営口松月大  広間 会費：1円50銭 賞品：1等金時計、以下数等まで 主催：営  口経済日報社、営口大連新聞支局、営口奉天新聞支局</p>
	<p>「北欧の超映画と問題の時代劇」 日時：1925年11月19日より上映  「サムソンとデリラ」全12巻の長尺 「自雷也」全7巻  「巖窟女王」全4巻 会場：浪速館 後援：満鉄社会課、大連新聞社</p>

12月	<p>「川柳忘年会」 日時：1925年12月18日午後6時 会場：松山台ラジウム温泉 会費：1人50銭 主催：大連新聞社</p>
	<p>「軍隊及警官慰問 慰問袋及び慰藉金募集」 発起者 大連市役所、遼東新報社、満日社、大連新聞社</p>
1926年1月	<p>「第1回大連西部新春卓球大会」 日時：1926年1月10日午前9時開始 会場：沙河口大正尋常小学校 会費：30銭 主催：大連新聞社大連西部支局</p>
	<p>「瓦房店以北大石橋以南各地第1回春季囲碁大会」 日時：1926年1月31日午前9時開始 会場：熊岳城温泉ホテル大広間 会費：2円 主催：熊岳城囲碁会 後援：大連新聞熊岳城支局</p>
2月	<p>「第7回全満かるた大会」 日時：1926年2月11日午前10時開催 会場：沙河口元柵内大徳寺新築大広間 会費：80銭（小学生と婦人は金50銭） 主催：大連新聞大連西部支局 後援：沙河口明星会</p>
	<p>「第1回大連新聞紙読者優待映画公開」 日時：1926年2月21日 場所：帝国館 入場券：大連新聞紙三面に刷込みあり 主催：大連新聞社</p>
3月	<p>「市政弾劾演説会」 日時：1926年3月23日午後6時半 場所：若狭町 大連劇場 主催：大連市各区有志連合会 後援：満日社、遼東新報社、泰東日報社、大連新聞社</p>

4 月	<p>「筑前琵琶 春季演奏大会」 日時：1926 年 4 月 3 日午後 5 時開会 会場：大連劇場 主催：大連旭蓮奏会 後援：大連新聞社</p>
	<p>「第二艦隊歓迎慰安演芸会」 日時：1926 年 4 月 13 日、14 日正午開会 会場：若狹町 大連劇場 入場無料 主催：皇道普及会 後援：大連新聞社</p>
5 月	<p>「大連新聞紙創刊 7 年記念事業」 1、記念号発行：1926 年 5 月 2 日より連続発行 2、全満七年以上勤績店員表彰、記念祝賀園遊会開催 日時：1926 年 5 月 2 日午前 10 時開催 場所：大連電気遊園 余興：(1) 商店巡り徒歩競争 (2) 模擬店 (3) 芸妓舞踊 (4) 野外劇 (5) 其他 主催：大連新聞社</p> <p>「第 1 回商店訪問マラソン競走」 日時：1926 年 5 月 2 日 主催：大連新聞社</p> <p>「海城以南瓦房店以北連合麻雀大会」 開会期日：1926 年 6 月 20 日 午後 2 時開始 会場：熊岳城温泉ホテル 会費：2 円 主催：熊岳城熊雀会 後援：熊岳城大連新聞支局</p> <p>「豊田旭穰女史一行歓迎 筑前琵琶演奏大会」 日時：1926 年 6 月 26 日午後 6 時開会 会場：若狹町 大連劇場 主催：大連旭会 後援：大連新聞社</p>

7月	「大詩聖ダンテ不朽の作 神曲ダンテ地獄篇」 日時：1926年7月8日より昼夜2回 会場：浪速館 普通入場料：特等90銭、1等70銭 大連新聞紙読者割引：特等70銭、1等50銭 後援：大連新聞社
	「納涼花火大会と納涼野外活動写真」 日時：1926年7月30日、31日、8月1日 場所：星ヶ浦 主催：大連新聞社 後援：南満洲電気株式会社
8月	「梨園名流余技演芸大会」 日時：1926年8月18日午後6時開始 会場：大連劇場 主催：大連新聞社
9月	「浪界の覇者 京山若丸の出演」 日時：1926年9月7日より5日間 会場：大連劇場 後援：大連新聞社
	「開祖旭翁八周年記念 筑前琵琶演奏大会」 日時：1926年9月27日午後5時開始 会場：大連劇場 主催：旭蓮奏会 後援：大連新聞社
10月	「関東州内剣道有段者団体優勝刀争覇戦」 日時：1926年10月17日午後12時半開始 場所：大連満鉄道場 審判：高野範士、小関範士、外各教師 主催：大連新聞社
	「関東庁始政二十年記念 逋信現業員招待慰安名流演芸大会」 日時：1926年10月9日、10日 会場：大連劇場 主催：大連新聞社

	<p>「浪界の元勳 京山若丸一行」 日時：1926年10月14日-16日、毎日午後6時開演 場所：大連劇場 入場料：1円20銭 後援：大連新聞社</p>
11月	<p>「日本一流選手オートバイ競争大会」 日時：11月6日、7日、午後1時開会 場所：実業グラウンド 会費：白券1円、青券80銭、赤券50銭、軍人、学生、子供は30銭 主催：広島オートバイ倶楽部 後援：大連新聞社</p>
	<p>「陸海軍及び読者慰安活動写真」 内容：早川雪洲監督主演傑作 名映画「犠牲」上映 全8巻 音なき警報 全6巻 日時：1926年11月7日午後6時半開演、8日、9日午後6時半 会場：11月7日千歳倶楽部、11月8日、9日 八島座 主催：大連新聞旅順支局</p>
	<p>「各国新聞の激賞せる名映画 「ロストワールド」（別名「前世紀の再現」）上映」 日時：1926年11月26日より6日間 会場：寶館 主催：大連新聞社</p>
	<p>「セムバロシロホンの名家 ワルナー氏の演奏大会」 日時：1926年11月28日午後6時半 場所：千歳倶楽部 会費：50銭、学生30銭、大連新聞読者30銭 主催：大連新聞旅順支局</p>
12月	<p>「州内柔道無段者団体 優勝カップ争覇戦」 日時：1926年12月12日午後12時半開始 場所：大連市満鉄道場 審判：大木六段各教師 主催：大連新聞社</p>
	<p>「我が奇術界の第一人者 松旭斉天左一行出演」 日時：1926年12月12日より10日間 場所：歌舞伎座 主催：大連新聞社</p>

1927年1月	「バラマウンド会社招待作映画 「蜂雀」上映」 日時：1927年1月21日より1週間、昼夜2回上映 会場：浪速館 後援：大連新聞社
	「読者慰安無料公開 剣戟の精華「戦国時代」上映」 日時：1927年1月29日、30日 場所：歌舞伎座 主催：大連新聞社 後援：寶館
2月	「御大葬儀謹写の映画上映」 日時：1927年2月 場所：浪速館 後援：大連新聞社
3月	「第8回全満洲かるた大会」 日時：1927年3月18日正午開始 場所：沙河口有明亭楼上 会費：80銭 主催：大連新聞西部支局
	「関西、山陰大震災義捐金を募る」 期限：1927年3月11日-4月10日 発起人：大連新聞社
	「第1回全満筆跡展覧会」 日時：1927年3月19日、20日、午前9時-午後5時 会場：常磐小学校講堂 出品：約400点 主催：大連新聞社
4月	「読者慰安活動写真」 期間：1927年4月7日-13日、昼夜2回 会場：寶館 主催：大連新聞社
	「第1艦隊歓迎慰安演奏大会」 日時：1927年4月11日、12日、午後1時開始 会場：大連劇場 主催：皇道普及会、大連新聞社

	<p>「石村松雨演奏会」 日時：1927年4月28日、29日、午後6時半開演 会場：4月28日 千歳倶楽部、29日 八島座 会費：大人60銭、子供30銭 読者優待券持参に限り 30銭 主催：大連新聞社旅順支局</p>
5月	<p>「時局思想問題講演会」 第1回 日時：1927年5月11日午後7時半 場所：弥生町市立高等女学校 第2回 日時：1927年5月12日午後4時半 場所：満鉄社員倶楽部 講師：陸軍少将 伊豆凡夫 主催：満鉄社会課、大連市社会課、在郷軍人会大連市連合分会 後援：遼東新報社、満日社、大連新聞社</p>
6月	<p>「大絵巻物「深夜の太陽」上映」 日時：1927年6月14日より公開 場所：演芸館 後援：大連新聞社</p>
	<p>「マジックとオペラ 松旭斎天華」 日時：1927年6月24日より 場所：大連劇場 後援：大連新聞社</p>
7月	<p>「第4回州内剣道有段者団体優勝カップ争覇戦」 日時：1927年7月2日午後12時半開始 場所：満鉄大連道場 入場：無料 主催：大連新聞社</p>
	<p>「文部省推薦二大映画「北極探検」、「あふりか」公開」 期間：1927年7月9日より5日間 場所：大連劇場 主催：大連新聞社</p>

	<p>「夏季慰安市民納涼園」 期間：1927年7月10日-9月10日 場所：中央公園 主催：南満電気株式会社、大連新聞社 後援：市民納涼園</p>
	<p>「市民納涼園開設」 会期：1927年7月15日-8月末日 場所：中央公園内 主催：大連新聞社 後援：大連市役所、南満電気会社</p>
8月	<p>「大連市民水泳大会」 日時：1927年8月21日午後1時 場所：譚家屯大連運動プール 主催：大連市 後援：大連新聞社</p>
	<p>「全大学総連盟主事今村氏講演会」 日時：1927年8月24日午後7時 演題：「世界の大勢と国民の覚悟」 場所：天神町明照寺 後援：修養団満洲支部連合本部、大連新聞社</p>
	<p>「派遣陸海軍人慰問の為 ハーモニカと童謡演奏大会」 日時：1927年8月30日午後6時半 会場：昭和園 北京大学音楽部 講師 井奥敬一 大連音楽学校 講師 新村武 会費：一般50銭、軍人、学生30銭 主催：大連新聞旅順支局 後援：旅順市役所、日本赤十字社篤志看護婦人会旅順支部</p>
9月	<p>「曾我廼家五郎蝶劇団」 日時：1927年9月25日午後6時 場所：旧守備隊空地 主催：熊岳城果樹組合 同温泉ホテル 後援：大連新聞社</p>
	<p>「読者優待 映画「流転・戦争と女性」」 場所：浪速館 主催：大連新聞社</p>



10月	<p>「読者映画デー」 日時：1927年10月10日より1週間 内容：妻三郎プロダクションの「血染の十字架」（12巻） 松竹キネマの「からくり娘」（8巻） 料金：一般：特等 80 銭、1 等 60 銭 読者：特等 60 銭、1 等 40 銭 場所：帝国館 主催：大連新聞社</p>
11月	<p>「露西亜民謡合唱団 演奏舞踊大盛会」 日時：1927年10月25日 場所：旅順高等女学校講堂 主催：大連新聞社旅順支局</p> <p>「本紙読者と歌劇の夕 東京少女歌劇観劇会」 日時：1927年11月7日、8日、午後5時開演 場所：歌舞伎座 料金：一般：特等 1 円 80 銭、1 等 1 円 30 銭、2 等 80 銭 読者：各等 50 銭均一、子供半額 主催：大連新聞社</p> <p>「営口大連新聞紙読者優待 東京少女歌劇の観劇」 日時：1927年11月11日、12日 場所：営口座 主催：大連新聞営口支局</p> <p>「読者観劇会」 期間：1927年11月12日-16日、毎日午後4時開場、5時開幕 内容：第1回芸題 菊池寛作「第二の接吻（連鎖）8場 瀬戸英一作社会悲劇「帰らざりせば」2場 入場無料 主催：大連新聞社</p>

	<p>「家庭洗濯 速成実習会」 第1回 日時：1927年11月13日午前9時-午後4時 会場：市立高等女学校 会費：50銭 主催：弥生会 後援：大連新聞社 第2回 日時：1927年11月16日、17日 会場：大連市社会館 会費：1円、学生50銭 主催：大連女子工芸学校、大連市社会課 後援：大連新聞社</p>
	<p>「読者優待 映画の会」 日時：1927年11月18日、19日、20日、毎日昼夜2回 場所：帝国館 内容：時代劇「狂恋のマリヤ」 現代劇「先生と其娘」 現代喜劇「寄宿舎の南京虫」 入場無料 主催：大連新聞社</p>
	<p>「読者と歌劇の夕 沿線各地の東京少女歌劇観劇会」 料金：大連新聞紙刷込優待券持参1円均一 主催：大連新聞社</p>
	<p>「読者優待 映画の会」 期間：1927年11月21日より1週間 場所：帝国館 料金：読者半額 内容：蒲田超特作現代劇「毒唇」10巻 松竹時代劇「火喰鳥」7巻 後援：大連新聞社</p>
	<p>「読者と歌劇の夕」 期間：1927年11月24日、25日 場所：奉天演芸館 料金：読者優待 特等 金70銭、1等 金50銭、2等 金30銭 主催：大連新聞社奉天支社</p>

	<p>「大提琴家演奏大会」 内容：ピアノ＝エルデンコ夫人演奏 日時及場所：1927年11月27日午後2時より 旅順第一小学校講堂 同午後6時より 旅順高等女学校講堂 会費：一般：白券1円、青券1円50銭、赤券1円、 軍人学生70銭 大連新聞読者：割引券 主催：大連新聞社旅順支局</p>
	<p>「読者優待 現代女優界の異彩 木下八百子来連」 日時：1927年11月28日 会場：歌舞伎座 料金：一般 特等3円50銭、1等3円2等1円50銭、3等1円 大連新聞読者：特等2円50銭、1等2円 2等80銭、3等50銭 後援：大連新聞社</p>
	<p>「読者と歌劇の夕」 期間：1927年11月26日、27日、28日 場所：安東劇場 主催：大連新聞社安東支社</p>
12月	<p>「読者と「サロメの夕」」 日時：1927年12月1日午後6時半より 会場：昭和園 内容：活劇「濁流渦を捲し」6巻 喜劇 5巻 会費：一般：白券80銭、青券60銭 読者割引 主催：大連新聞社旅順支局</p>

出典：『大連新聞』より筆者作成

付録 2-1 「大連彩票」関係記事標題一覧表

日付	見出し
1907年11月8日	台湾彩票前途
1907年11月30日	営口の彩票当籤者
1907年12月15日	予想投票 頭彩は何番か
1907年12月24日	彩票抽籤は愈々本日
1907年12月26日	彩票予想投票者に告ぐ
1907年12月27日	彩票当籤者の大喜び
1908年1月2日	予想投票 第二十七次彩票 第貳彩は何番か
1908年1月10日	論説 大連彩票問題
1908年1月13日	彩票収益利用法
1908年1月28日	好運の人酒井末松氏 彩票第二彩予想投票正答者
1908年2月4日	彩票が抵当の質屋
1908年2月26日	宏済局彩票の好況
1908年3月1日	彩票購買者謹告
1908年3月24日	言論 大連彩票の前途
1908年4月1日	大連宏済彩票局 広告
1908年4月15日	台湾彩票の前途
1908年4月17日	宏済局彩票に就いて
1908年4月23日	宏済彩票局の計画事業
1908年5月4日	宏済善堂天後宮の設置
1908年5月11日	第三十二次彩票売れ切
1908年5月13日	彩票昨今の悪弊と当局
1908年6月20日	雑報 彩票の増発行
1908年6月20日	彩票の落ちた処
1908年7月17日	滑稽 彩票当違ひ物語
1908年8月18日	彩票開き 待ち設けた開彩 彩票党の大失望
1908年9月13日	謡曲 彩票魔

1908年9月19日	彩票熱漸く低下
1908年9月27日	社会電報 頭彩の <sup>マ</sup> 行衛 <sup>マ</sup> (鉄嶺)
1908年10月25日	彩票存廢問題
1908年11月18日	大連小観 彩票
1908年12月25日	彩票開きの繰り上げ
1909年1月3日	糠悦び彩票物語
1909年4月8日	彩票男の末路
1909年4月10日	彩票男の末路
1909年4月28日	彩票買占の弊
1909年5月1日	開彩日付に就き急告
1909年5月1日	彩票買占の取締 内地持行は厳禁
1909年5月2日	遼陽から彩票買占
1909年5月31日	台北の彩票検挙
1909年6月5日	彩票局の寄附 慈恵病院へ五千元
1909年6月16日	彩票悶着後聞
1909年6月18日	一万円の俄長者 三百円の酌婦に振られる
1909年6月20日	遼陽彩票悶着続聞
1909年9月13日	彩票局の不埒
1909年10月24日	清国富籤発行
1909年10月30日	頭彩珍聞 安東県
1909年11月18日	宏濟善堂とは 何
1909年11月19日	二彩当の俄大尽 同職に娼妓と落籍て嫁す
1910年2月13日	彩票の密輸出
1910年6月5日	彩票禁止交渉
1910年6月29日	彩票禁止と影響
1910年6月29日	彩票局の現状
1910年7月13日	浙江省の彩票禁止
1910年8月14日	清国彩票の運命

1910年9月28日	上海の彩票厳禁
1910年10月8日	彩票買いに渡航
1911年1月12日	大連宏済彩票局
1911年1月29日	家庭 頭彩
1911年2月20日	彩票男の末路 太三郎又三助となる
1911年4月13日	又も二彩の悶着
1911年8月28日	彩票売りの取締
1911年10月8日	営口電報 彩票売買禁止
1913年10月10日	彩票の研究
1914年12月13日	歳末の五千円
1914年12月23日	彩票後日物語
1914年12月24日	彩票の贗物 鉄嶺市中に現はる
1914年12月25日	彩票継続運動 奥地より起る
1914年12月27日	彩票の延期は絶対に不可能
1914年12月29日	贗造は日本人 贗彩票の犯人検挙
1915年1月22日	彩票の運命 三月限り断然禁止
1915年2月11日	彩票贗造判決
1915年2月19日	彩票継続運動
1915年2月19日	支那彩票流込 大連彩票廃止の影響
1915年3月4日	彩票愈本月限
1915年4月2日	第一分教場 彩票局跡へ二百名
1915年4月3日	空中楼閣消失る
1916年3月11日	大連彩票復活論

付録 3-1 野球関係記事標題一覧表

1916年5月5日	満洲野球大会 本社主催の壮挙
1916年5月22日	本社主催野球大会 新緑の西公園に於て 劈頭の組合
1916年6月2日	野球戦前記 対抗作戦の苦心
1916年6月3日	野球大会愈々明日 白熱化せる健児の意気 当日の壮観
1916年6月3日	大朝社の好意 銀製メダル寄贈
1916年6月4日	本日の野球大会 州内野球争覇戦の火蓋
1916年6月5日	飛球緑蔭に鳴る 州内野球争覇戦第一日 絶好の野球日和
1916年6月11日	本日の優勝決戦 特製銀杯何れか贏得ん
1916年6月12日	壮絶快絶決勝戦 実業遂に優勝す
1916年6月14日	野球界新機運 実業団投手問題
1919年6月8日	光栄ある優勝の月桂冠は何団に 野球大会最終日 熱球飛び鉄根鳴る晴れの試合
1919年6月8日	市内東昌洋行より倫敦ウエスト■ンスター会社の製造係る巻煙草 600 個の寄贈
1919年6月9日	壮！！猛！！快！！ 第四回関東州野球大会 第三勝戦の盛観 熱球唸り長棍鳴る 二万の観衆妙技に酔ふ
1919年6月10日	第四回関東州野球大会 満本覇を称す 八対一実業惨敗
1919年6月10日	歓呼喝采裡の優勝旗授与式 関東野球大会終了
1920年6月1日	第三勝戦争！！満本と商業 小冠者軍力戦するも 満本軍の攻撃鋭く守備又堅くして不拔 六対一遂に玉砕す 鮮かなり満本谷口の投手振り
1920年6月6日	第五回関東野球大会最終日 六日午前九時開始（審判岸、安藤両氏） 大汽対工科四勝戦（継続戦） 六日午後二時開始（審判大門、上田両氏） 優勝戦—満鉄本社軍対 関東州の覇者は果して誰
1920年6月7日	覇業は成れり此栄光 優勝盃は永遠の専有 関東の覇満鉄本社軍 大婦社善戦健闘して敗退第五回関東州野球大会終る
1920年12月12日	第一回関東州野球大会举行及び我社内部の事情

1920年12月26日	満洲少年野球大会予告 我社は来春、満洲大陸の運動シーズンに入ると同時、第六回関東州野球大会挙行に先ち第一回満洲少年野球大会を挙行します。
1921年1月9日	鈴木商店野球部 今季の活躍が見物 三井野球軍、大連汽船軍と並んで実業界チームの白眉鈴木商店大連支店野球軍
1921年1月20日	満洲野球界の一大快報 両雄握手模範試合挙行
1921年1月23日	両雄握手の快報に 歓天喜地の球界 感激の極快哉を叫ぶ
1921年1月28日	両雄の握手成る 昨夜ヤマトホテルに於て試合方法一切を議定 満洲球界の福音
1921年4月10日	愈々明日午後二時から 満洲俱樂部・大連実業団 混合野球試合 始球式 大連市長村井啓太郎氏 審判 前田俊介氏、大門勝氏
1921年4月10日	十万の好球家は唯酔はされん 満洲球界両雄の模範野球は 愈今日午後二時から西公園で挙行
1921年4月15日	従来の好守に猛打を誇つて 満洲俱樂部の新陣容 岸、網干、岩田、山本、増田等活躍
1921年4月17日	満洲俱樂部＝大連実業団 吉例混合野球試合 始球式 大連市長村井啓太郎氏 審判 前田俊介氏、大門 勝氏 十七日（日曜）午後正二時より西公園大グラウンドに於て
1921年4月25日	野球戦に拍手の西公園
1921年4月30日	第六回関東州野球大会 期日組合せ其他協定 参加チーム代表者会議 五月二日午後六時半から 我社会場会議室に於て開会
1921年5月3日	第六回関東州野球大会一勝戦組合決定 参加チーム総て十選手入場式は九日挙行
1921年5月5日	満洲球界の慶幸 名審判大伴氏来る 第六回関東州野球大会に審判の労を取る
1921年5月8日	野球大会来る



1921年5月8日	第六回関東州野球大会一勝戦は九日午後三時 西公園実業グラウンドに於て若葉対三井によつて行はる 荘厳なる選手入場式と小川民政署長の始球式 威容揚る参加十チームの陣容
1921年5月10日	期待された第六回関東州野球大会開始 選手入場式は荘厳に 小川署長の始球式は鮮やかに
1921年5月15日	第六回関東州野球大会 旅中大に捷つ 十八対六＝一勝戦終る
1921年5月16日	第六回関東州野球大会 第二勝戦の壮観 列風中に熱狂した観衆二万用度捷ち白旗軍潰ゆ
1921年5月17日	第六回関東州野球大会 工場惜くも敗る 大汽水地の冒険成功す 七対六 第二勝戦終る
1921年5月20日	第六回関東州野球大会 第三勝戦は第一第二会場で 二十二日午前九時から同時に挙行 優勝戦は第一会場
1921年5月22日	関東州の覇者は誰 愈々けふ優勝戦 第三勝戦は午前九時から 第一第二会場で同時に行ふ
1921年5月23日	第六回関東州野球大会 天下晴れの旅中軍 興亡
1921年5月24日	第六回関東州野球大会 激戦猛闘実に九合 用度惜しくも敗る 八対六 三井雪辱す
1921年5月29日	両雄模範試合 春季第一回戦は6月5日挙行 主催 満洲日日新聞社
1921年6月2日	実満模範野球試合 6月5日 西公園運動場 主催満洲日日新聞社
1921年6月4日	満実両軍模範野球 第一回試合はいよいよ 五日午後二時から挙行 両軍協定全くなる
1921年6月5日	満実模範野球試合 春季第一回戦挙行 いよいよ 本日午後二時から
1921年6月12日	勝は何れぞ 両軍共に必勝を期す 満実模範野球第二回戦 愈々けふ午後二時から
1921年6月15日	古郡運動奨励金 遼東社と我社に託された
1922年3月31日	混合紅白試合 本日三時半メンバー決定
1922年3月31日	満洲大陸野球界の歓喜 恒例実業満俱混合試合 西片副社長の始球式 上田、大門両氏の審判 愈々四月三日午後一時より西公園満鉄グラウンドに於て
1922年4月3日	満洲倶楽部大連実業団 恒例混合紅白試合 愈々本日午後一時から 西公園満鉄グラウンドに於て

1922年4月5日	実満両軍の吉例混合野球試合 半歳振りに西公園の賑ひ四対二紅軍勝つ
1922年4月15日	第七回関東州野球大会 期日組合せ其他協定 参加チーム代表者会議 二十二日午後一時から 本社階上会議室に於て
1922年4月16日	関東州野球大会 景気を唆る
1922年4月19日	第七回関東州野球大会近づく 参加チーム十三に上り 第一勝戦組合せは二十二日
1922年7月30日	全満洲の運動競技を統一し 世界的に進まうといふ大抱負で仕事に着手した全満洲競技連合 名選手を輩出せん
1923年3月21日	シーズンは来た 実満紅白野球戦 長棍の響に打ち破る 冬半歳の大陸球界
1923年4月13日	大連実業野球団後援会
1923年4月21日	第八回関東州野球大会 期日組合せ其他協定 参加チーム代表者会議は来る二十三日午後一時から 我社階上会議室で開催
1923年4月23日	関東州野球大会近づく 今年是新進チームが揃つて 早くも参加申し込み十八組に上がる
1923年4月24日	関東州野球大会の第一勝戦組合せ きのみ本社楼上に主将会議を開き決定 入場式は廿九日西公園グラウンドで举行
1923年5月1日	関東州野球大会 白日下の快技は愈々けふから実業グラウンドで 田中民政署長の始球式
1923年5月3日	■■の間に歓呼の声 白熱的接戦で 地方部劈頭の勝名乗り 関東州野球大会第一日
1923年5月9日	大連、沙河口九チーム 少年野球大会 我社主催で第三回举行
1923年5月12日	少年野球大会競技 我社会議室で取決めた事項
1923年5月12日	我社主催の野球戦 第二勝戦終了す
1923年5月26日	少年野球大会 期日切迫て各チーム共 火花を散らして猛練習
1924年2月17日	野球シーズン近し 各チーム選手揃に腐心
1924年2月22日	野球季節 満俱の新鋭
1924年3月15日	新春劈頭の野球戦 恒例実満紅白試合 四月三日の祭日をトして 西公園グラウンドで举行
1924年3月21日	実満野球試合 紅白メンバー成る 審判は上田、寺島両氏

1924年3月26日	大連野球界 吉例の年中行事 混合試合の勝敗 紅白何れが勝つか 市中の下馬評では結局打たの方が勝味
1924年3月28日	営口 野球シーズン来る 四月三日に紅白試合 他所からの挑戦状も来た
1924年4月3日	愈々今日実満混合試合 片山鮮銀理事の始球式 上田、寺島両氏の審判 争覇戦と片山カツプ
1924年4月4日	遼陽 奉天記者団と野球戦 三日の賀節に商業校庭で
1924年4月4日	今日の西公園に 満倶実業混合の紅白試合 観衆スタンドに溢れ 長棍響き、猛球鳴る
1924年4月5日	野球界の福音 我社の招聘に応じ 名野球団来る 早、慶、大毎、立教の諸豪来る可き盛夏の候 大連野球界為めに賑はん
1924年4月20日	野球大会の主将会議 二十一日本社で開催
1924年4月22日	第九回関東州野球大会 第一勝戦組合せ決定 消費組合対三菱を劈頭に何れの組み合わせも絶好のもの揃ひて 戦機は愈熟し来る
1924年4月23日	第九回関東州野球大会 出場チームの陣容整ふ 何れ劣らぬ猛者揃ひ十六軍の活躍振り果して如何?
1924年4月26日	湧くやうな人気! 近まる野球大会 本年も亦赤羽理事から カップを寄贈された
1924年4月27日	関東州野球大会は愈明日午後三時半 満鉄グラウンドで
1924年4月27日	関東州野球大会 優勝チーム予想投票懸賞募集
1924年4月27日	五月四日からの第六回野球大会(奉天野球大会) 競技方法決定す
1924年4月28日	十万ファンの血を湧かせた 晴れの競技が始まる 今日から開かれた関東州野球大会 歓呼裡に選手入場す
1924年4月29日	(奉天) 野球試合 十一対九で地方惜敗
1924年5月2日	早大野球団 満洲へ遠征 八月上旬に大連着 早大野球団は大正六年に満洲に渡ったことがある。
1924年5月3日	第九回関東州野球大会 観覧券
1924年5月3日	関東州野球大会 第一勝戦の続行 用度大勝の新記録
1924年5月5日	一勝戦の華歎声湧く 商業対育成の対戦 紫色赤色の旗交互に応援して選手緊張し観衆酔ふ
1924年5月7日	関東州野球大会第六日 工場軍大勝 八A対二で興業惨敗す

1924年5月8日	優勝予想投票
1924年5月9日	大連野球界の華 実満模範試合 第一回戦は来る六月八日 午後二時より満俱樂部運動場で
1924年5月9日	野球大会の予想投票 締切日の成績
1924年5月10日	地方対伏陵 野球戦休み
1924年5月10日	関東州野球大会 第二回戦組合決定 工場対用度戦は 本日四時から 組合せは理想的
1924年5月13日	野次の阻碍で無勝負の第二勝戦 工大軍対消費軍
1924年5月15日	(奉天) 野球大会 優勝戦 金曜対キネマ
1924年5月16日	実業、満俱の模範野球試合 来る二十五日から 今度は入場料を取る
1924年5月16日	関東州野球大会 第二勝戦は十八日 商業対電気の組合せ 其他の日取は追て発表
1924年5月22日	奉天 第四回 州外野球大会 来月下旬奉天
1924年5月25日	満俱実業模範試合 入場料で優勝カップ 名誉会員の募集開始
1924年5月26日	関東州野球大会争覇戦 五月二十五日(日曜) 午後一時から 西公園満鉄グラウンドで 商業、通信、虎龍の闘ひ
1924年5月26日	最終の関東州野球大会 通信対商業の優勝戦 この日観衆約四万人による 紫色旗軍必死の応援も甲斐なく 通信俱樂部覇権を握る
1924年5月26日	優勝旗の授与式 観衆の喝采裡に行はる
1924年5月28日	野球予想の当選者 来月二日賞品を上げます
1924年6月2日	本日の野球戦 満俱対長春 午後二時から 奉天軍来らず
1924年6月3日	アト一週日に迫つた 満実模範試合の予想 守備は殆ど伯仲=勝敗は何れ 打撃の強弱で極る
1924年6月5日	二十二日から三日間 (奉天) 州外野球大会 満鉄グラウンドで挙行 本年は新参加軍もある
1924年6月7日	いよいよ明日の日曜 満実の模範試合 双方必勝を期して練習中
1924年6月9日	待たれた実満戦は本日午後二時から 新来選手の活躍が見物 片山博士の始球式 審判山本(球) 井上(塁) 両氏
1924年6月9日	雨中の大接戦 満実模範試合 片山博士の始球式で開かれ 四対二で満俱先づ勝つ

1924年6月11日	(奉天) 実業対満俱 雨中の第二回試合 ドロンゲームにて幕
1924年6月15日	十五日の日曜日 実満第二回戦 実業グラウンドで挙行
1924年6月16日	満実模範試合 第二回戦は愈々今日 実業軍必死の復讐戦 正二時から開始
1924年6月17日	実業軍の猛撃も甲斐なく 満俱軍優勝す 列風中に双方必死の戦
1925年4月2日	シーズン劈頭の満実混合紅白試合 両軍のメンバー決定す 四月三日実業グラウンド
1925年4月10日	全市を白熱化する 関東州野球大会迫る 出場タイムは十有六 州内の覇は誰ぞ?
1925年4月15日	大会の日愈迫り けふは主将会議 関東州野球大会打合わせ
1925年4月17日	関東州野球大会 一勝戦の組合せ けふの審判委員会議で決定す
1925年4月18日	関東州野球大会の各軍の陣容決定す 昨日本社に於ける主将会議に於いて
1925年4月20日	十周年を記念する 晴れの試合始まる 一勝戦の勝は何れに? 関東州野球大会
1925年4月21日	天空高く飛ぶ熱球に群集齎しく鳴を静む 十周年を記念して華々しく挙行された 一昨日の関東州野球大会
1925年4月22日	満洲倶楽部野球団 極東大会出場に決定 二十日電報にて推薦状が到着し 選手何れも非常に緊張し来る
1925年4月22日	関東州野球大会記事 埠頭対用度戦はドロンゲームとす 雨の為め試合を延期し 第二日は二十二日再開
1925年4月24日	全日本代表たる満俱の猛練習 選手の意気大に揚る
1925年4月25日	関東州野球大会第一勝戦 逋信遂に敗る 大汽六 A 逋信二 第一勝戦終了
1925年4月26日	七 A 対三で 工専凱歌を揚ぐ 三菱軍の奮闘甲斐なし 関東州野球大会二勝戦
1925年4月27日	関東州野球大会第二勝戦 三対一で 若葉大汽に捷つ
1925年4月29日	関東州野球大会第二勝戦 老巧興業軍敗れ 若冠商業勝つ 岸の本塁打は特に光る
1925年4月30日	関東州野球大会準優勝戦 近来稀な緊張戦で八対零工業大勝す 商業軍勝利の神に見放さる

1925年5月1日	「安東・奉天 実業団野球試合」 期日：1925年5月3日 場所：安東駅前グラウンドに於いて開始 主催：満洲日日新聞安東支局、奉天支局 後援：安東運動協会
1925年5月1日	関東州野球大会準優勝戦 若葉の奮戦功なく 六 A 対三消費勝つ 両軍善戦振り賞揚さる
1925年5月2日	最後を飾る優勝戦 栄冠は遂に消費軍に 八 A 対七で工專惜敗す 外野柵外まで観衆で埋まる
1925年5月2日	州内の覇者に 優勝旗授与 野球大会盛況裡に終了
1926年1月1日	満洲の野球 本年度の実満戦こそ 数十万のファンが興味の中心（上）中澤不二雄
1926年1月2日	満洲の野球 本年度の実満戦こそ 数十万のファンが興味の中心（下）中澤不二雄
1926年3月10日	景気の良い 本年の野球界 続々強チームの来連 大毎軍の新陣容
1926年3月25日	満俱＝実業 混合紅白試合 四月三日に挙行 一般の投票によりチームを編成す 愛読者諸君の投票を俟つ 新例を開いた本社の主催
1926年3月28日	本年野球劈頭戦
1926年3月31日	満俱実業 混合紅白野球戦 紅白両軍チーム編成投票募集
1926年4月1日	好球家の血を湧かす 満実両軍の混合試合 本年のシーズンは稀に見る外来チームの大活躍を見ん
1926年4月2日	待ちに待たれた 紅白両軍のメンバー 昨日審査の上決定す たゞ投票者中当選者の無いのが遺憾
1926年4月3日	行け！西公園へ！！観よ紅白選手の妙技を 一日千秋の思を以て待ちに待たれた 紅白混合試合は数時間の後に迫れり
1926年4月3日	今日は野球日和
1926年4月4日	本日午後一時から 西公園実業グラウンドにて 実満混合野球戦
1926年4月4日	戛然たる長棍の響！次で起る拍手喚声！！ 白軍氣勢を揚げ徹頭徹尾行軍を圧迫し 遂に七対二のスコアを以て大勝を博す 盛況を極めた混合野球試合
1926年4月4日	本社が選手を招宴 西園亭に

1926年4月7日	第十一回の州内野球大会 来る十八日より挙行 我社主催の下に
1926年4月9日	優勝旗は何れの手؟؟フアンの興味をそゝる 第十一回関東州野球大会 愈々来る十八日より挙行に決す
1926年4月10日	関東州野球大会何れが勝つか 出場チームの陣容如何 (一)
1926年4月11日	関東州野球大会何れが勝つか 出場チームの陣容如何 (二)
1926年4月14日	関東州野球大会何れが勝つか 出場チームの陣容如何 (三)
1926年4月14日	満日無料休憩所 終日満員の盛況
1926年4月15日	庭球戦で満鉄と大接戦し 野球戦で記者団を居つて 氣勢を揚げた艦隊軍
1926年4月15日	日一日と真剣となる 州内野球大会へ出場
1926年4月16日	関東州野球大会何れが勝つか 出場チームの陣容如何
1926年4月17日	州内野球大会は愈々明日に迫る
1926年4月18日	関東州野球大会何れが勝つか 出場チームの陣容如何
1926年4月18日	待たれた日! 戛然鐵棍の叫び 関東州野球大会 実業球場で其第一日
1926年4月19日	愈々戦の幕を開いた 州内野球大会第一日 壯観を極めた入場式に次ぎ 杉野市長の始球式に始まり
1926年4月19日	劈頭戦に於て 商業軍惜敗す
1926年4月19日	工大善戦せるも 戦遂に利あらず
1926年4月20日	関東州野球大会 (第二日) 消費軍大捷す 二十二対二の大スコアで 鉄道軍敗退
1926年4月21日	関東州野球大会 若葉会大捷す 廿二対七の大スコア一で 惜しくも電気軍惨敗
1926年4月22日	関東州野球大会 大汽軍克く勝ち 消費軍惜敗す 八対四のスコアを以て コールドゲームとなり七回迄の成績を以て勝敗を決す
1926年4月23日	関東州野球大会 埠頭軍善戦せるも 遂に惨敗す
1926年4月25日	関東州野球大会 意気揚々と 工專凱歌を揚ぐ 流石の鉄軍意気振はず 九対三を以て敗退す
1926年4月27日	関東州野球大会準優勝戦 手に汗を握らせた 一大接戦! 十 A 対九のスコア一を残して 大汽辛うじて勝を制し 工專惜敗し血涙を呑む
1926年4月28日	関東州野球大会優勝戦 若葉軍を一蹴し 大汽軍優勝す 優勝旗及片山優勝球は 坂本主将の手に授与さる

1926年4月29日	第十一回の関東州野球大会 戦績概評
1926年5月22日	満俱雪辱するか 両軍の密な陣容 わが社主催の実満争覇戦 第一回戦 来月六日に迫る
1926年5月29日	本社主催に係る 満実模範試合近づく 第一回は六月六日第二回は同十 三日 決勝戦は同二十日と決定
1927年3月3日	野球界の話をどつさり積んで 中島実業団選手帰る 内地球界の近状
1928年4月3日	実業満俱紅白野球戦 4月3日
1928年4月5日	関東州野球大会を目差し 各チームが猛練習 開戦の日も目睫の間にせ まり 人気大いに沸く

出典：『満日』により筆者作成。



付録4-1 第1回-第6回「在満児童母国見学団」の見学期間・趣旨

年度	見学期間	趣旨
1920年 (第1回)	3月20日 - 4月3日	我満洲日日新聞は植民地教育の発展向上に関し満鉄の満蒙教育研究会と趣旨を同ふし各般の教育施設に就て努力を拂わんとす而して満洲に於ける学生生徒にして母国の事物に接触せざるもの少からずこれ等は其訓育に缺くる所無しとせざれば物質精神両方面に亘りて母国の事情を理解する必要あるを認め我満洲第一回の施設として左の方法に依り在満生徒を内地に送り修学観光の快挙を敢行せんとす。
1921年 (第2回)	3月26日 - 4月13日	帝国の満洲経営は既に十又五年を歴、各般の施設又漸く完璧に近く移住邦人の数今や二十余万を算して大陸発展の基礎是に於てか定まるの観がある。邦家の為め慶祝の至りであるが、然も此等家庭に於ける児童にしてその十分の八は満洲の生れであるに拘らず未だ母国の風光に接せず、僅か家庭の話頭及び学校教科書又は雑誌等によつてその片影を捕捉するに過ぎざる境遇にある。植民地教育の向上発展に関して満鉄の満蒙教育研究会と趣旨を同じふし、常に各般の教育施設に就て努力を拂ひつゝある我満洲日々新聞社は、その大陸経営の後継者たる神髓を訓育せんには未だ頭腦の素白なる間に於て百聞は一見に如かざる印象を深刻ならしめ、併して帝国が世界に冠絶せる国家たる所以を解せしむるの必要ありとし昨年三月在満邦人学童中の優秀者五十名を選抜して第一回母国修学観光団を組織物質精神両面に亘りて多大の成果を収めたのであるが、更に本年はその第二回の快挙を行ふことに決定した。是れ実に我満洲が操觚以外聊か国家社会の為に貢献せんとする微裏に外ならない。
1922年 (第3回)	3月14日 - 4月5日	我満洲日日新聞社が社会教育に尽力する一端として在満小学児童の母国見学団を組織し母国における商工業の発達及び各種の文化的施設その他名所旧蹟等を情操的に活動的に又智育方面から仔細に見学させ非常な好成绩を収めてゐることは夙に社会一般に之を認めて居る処であるがその第三回の壮挙はいよいよ春三月の好季をトして行ふことに決定した。
1923年 (第4回)	3月15日 - 4月4日	我満洲日日新聞社が社会教育に尽瘁するの一端として毎年举行する在満小学児童母国見学団は母国商工業の発達をはじめ各種の文化的施設を見、名所旧蹟を歴訪して情操的、活動的に或ひは智育方面に仔細に見学させ多大の好成绩を挙つゝあることは夙に一般社会人士が之を認めてゐる処である、而して本年は実にその第四回を举行すべく陽春三月十五日大連発約三週間に亘つて意義ある旅行を実行することにした。

<p>1924年 (第5回)</p>	<p>3月13日 - 4月2日</p>	<p>我大陸経営上多大の犠牲を拂ふて始めて満洲で養育された邦人の子弟を我社の主催で母国に送り故山の風物に接せしめたのは大正九年の春であつた。個人的に父兄に伴はれてなつかしい父母の国を見舞つた人はあらうが団体的に而も短時日の間に全般に亘つた視察見学を試みた例は恐らく我社の企て以外にはなかつた、在満子弟の多くは外国に生まれて而も母国の地理、歴史は勿論精神的にも国家皇室祖先の尊厳を聞かされる国民教育の上にも實際上に於いては何等の実感さへもたないで絵はがき位の教授を受けたと同様の怨みがある。我社の希望は全満の児童をして許せる限り母国の山川に親しめたいが僅かに年一回百人前後の見学すら容易の事ではない、それには関東庁なり満鉄は勿論大連市からも多大の援助があつて始めて之を実行し得た、けれども我社が始めてこの壮挙を計画し実行してから既に四回に及び数限りなき我社の社会施設中に於いても一等地を抜いた年中行事の一となつて我社の在満邦人に対する好意と将又母国の為に不断の尽瘁努力の現はれとして各方面から多大の感謝を拂はれて居る昨年は不詳な年で二つも三つも国の凶事が重なつたに引かへ本年は春早々から皇室の御慶事があり泣いた後で笑ふやうに目出度い新春である所から震災後の京浜を視察するといふよりか満洲を代表した小国民が母国の不幸に同情して温かい慰問の辞を捧げ又一つには東宮殿下の御成婚に対し敬意を奉表する事になれば吾々植民地の面目上にも光があると共にドンなに母国上下の満足を得るであらうか、茲に我社は愈桜花爛漫たる弥生の三月半を以て第五回母国見学団を組織する事になつた。</p>
<p>1925年 (第6回)</p>	<p>3月13日 - 4月4日</p>	<p>我満洲日日新聞社が社会教育に尽力する一端として在満小学児童の母国見学団を組織し母国に於ける商工業の発達及び各種の文化的施設その他名所旧跡等を社会的に学究的にまた情操、智育の方面よりも仔細に見学させ児童教育の啓発に非常な成績を収めてゐる事は凡そ社会一般之れを認めてゐる処であるが今年もまた春三月の好季をトし第六回目の見学団を送る事に決定して我社は又しても此壮挙を報道するの光榮を有する。 抑々建国二千五百有余年その歴史ある母国の実情を知る事は満洲児童の教育上極めて重大な事柄であるが満洲児童はその光輝ある母国の実情を知らないのが多い。教育上何れだけの損失か、蓋し我等の想像を許さぬ事であるが我社はこの問題を解決し児童将来の啓発に資すべく例年の如く今年も関東庁及び満鉄学務課当局其他各方面の援助を得て第六回目の母国見学団を組織することとなり。</p>

出典：1920年2月6日、1921年2月19日、1922年1月26日、1923年1月27日、1924年1月31日、1925年2月17日付『満日』の社告により筆者整理。下線筆者、以下同じ。

付録 4-2 第 1 回-第 6 回「在満児童母国見学団」出発当日の送辞要旨（第 1 回-6 回）

年度	関係者	内容要旨
第 1 回 1920 年	満日社副社長 西片朝三	<p>（前略）今日より平生教員諸君から教へられた色々の内地の事情を眼で見、足で踏むこととなります。（中略）実は我日本国の人には亜米利加へ行つても濠洲へ行つても皆排斥されて居ます。然し何れかに発展せなければ、年々五六十万づゝるの人口は到底彼の内地の如き小さき島には這入りきれない。依て我日本国では此満洲が最も必要な所である。万一此満洲を失ふときは丁度金魚が水を失ふやうな状態になるのである。然らば、此大切な満洲を誰が維持して行くのであるか。誰が段々発展せしめて行くのであるか。それは満洲に生まれ、又は満洲に成長せらるゝ皆さんの腕によらねばならぬところであつて、其責任は皆さんの肩に掛つて居るのである。従つて皆さんは内地に参りましたならば、我国は如何に人間が多くて、窮屈の目をして居るか、又それが為め如何に皆さんの責任が重いか、を見て来られたいのである。然る後皆さんが国家に対する堅実なる覚悟をされたいのである。是が皆さんが此度内地見物を為さる処の目的とされたいのである。内地に参りまして色々悪いことがありますから、内地のことだからとて其真似をせないやうに心掛けて貰ひたい。（中略）終りに、臨み共感諸君衛生機関諸事及び我社の記者に希望したいことは此愛らしき子供は只今話したる如き、国家に対して重大の責任を持つて居るものであると同時に、其両親同胞及び本社は今日より指を折り数へて達者で帰るやうに持つて居るものであるから、ドウぞ少しでも怪我等の無きやうに、少しでも病氣等をせないやうに、御注意を願ひたいのである。諸君の御苦勞を謝すると共に特に御詫びする次第である。</p>
第 3 回 1922 年	満日社取締役支 配人 柴田一郎	<p>皆さんは今日楽しい母国見学の行を起すのであります、私は皆さんのその門出に一言お餞けをいたします。満洲から選抜されて行く皆さんの行動はとりも直さず満洲全体の小学生の行動であるのであります、母国七千万の人々は実に多大の感興をもつて皆さんの一挙一動に注意することでありませう、皆さんはよく先生のお教えを守り満洲小学生の模範として規律あり節制ある見学をなさねばなりません、皆さんは母国の善き処を見、悪い方面を見、その善きを取り悪きを捨て、そして日本の将来といふことを考へねばなりません、皆さんのお父さんやお母さんや或ひはお姉さん等が大切な皆さんを手離して長い旅行を許されたといふことを考へなければなりません、一時間でも三十分間でも手離し度くない可愛い皆さんを慈愛の手から離して旅行を許されたといふことは皆さんが此の旅行により智恵を増し将来立派な人にしたいからであります、皆さんはこの考へを以て楽しいそして有益な旅行をせねばなりません、又保護者や学校当事者におかせられてもどうぞその大切な子供を旅行中我社の子と許されて見学の実を挙げさせ給はれんとを此処に皆さんの門出に方り一言お餞け致した次第であります。</p>

<p>第 4 回 1923 年</p>	<p>満日社印刷人・ 見学団団長 石橋文三郎</p>	<p>みなさん、私達見学団はこれから母国へ向ふのであります。私はお父さんやお母さんの大切なみなさんをお預かりして旅行中のお世話をするので。みなさんは規則正しく家庭や学校で修得したものを充分に守り母国の善き処を見、悪いと思ふ処はこれを捨て、さうして満蒙の将来といふことを考へなければなりません、母国の人々はみなさんの行動を多大の注意を以て迎えるのですから附添ひの先生方のお教えをよく守り前三回に亘る成績よりより克き成功を収めねばなりません</p>
	<p>満日社前取締役 三本武重</p>	<p>唯今石橋団長からお話いたしましたやうに皆さんはこれから母国へ向けて見学行を起すのであります。旅行中はより健康に気をつけ一人の病者をも出さず、たとへ狭くとも深い観察を働かさねばなりません見学団の成功といふことについて満洲は勿論母国に於ては更に一段の注意を以て期待してゐるのですから満洲を代表して行くみなさんは決して此の期待に背く様の事があつてはならないのです。みなさんが母国の長所短所を見学し沢山のお土産を持つて帰つて来らるゝ時みなさんの元気な顔を迎えて満洲の人々はどんなに喜ぶでありませう附添先生方の教訓を固く守らねばなりません</p>
<p>第 6 回 1925 年</p>	<p>満日社記者・見 学団団長 高塚 源一</p>	<p>本社が此の見学団を為し満蒙の事情を内地に宣伝し、母国の状況を幼き児童に知らしむる所以を述べ、回を重ねるに従つて其の成績が良好になつて居る、殊に本年は衛生設備に於いて完備してゐるので、父兄の方々は少しも心配する処はない</p>

表注：1920年3月21日、1922年3月15日、1923年3月16日、1925年3月14日付『満日』により筆者作成。（第2回、第5回目の送辞に関する内容が『満日』紙面で確認できなかったため、省略することとした。）

付録 5-1 海軍関係記事標題一覧表

日付	タイトル
1912年2月6日	大連の海軍デー 市中は海軍帽を以て埋まる
1912年2月7日	軍艦を観ざる記
1914年1月27日	練習艦隊来る
1914年1月29日	練習艦隊
1914年2月4日	海軍問題と議会
1920年8月24日	軍備制限と海軍（東京電報二十三日発） 八八艦隊を支持せん
1916年1月19日	艦隊来連日程
1916年1月22日	練習艦隊入港
1916年1月22日	練習艦隊入港 各代表訪問
1920年3月26日	海軍大飛行
1920年6月5日	空にも海にも！！斯くして 日伊の親善を誓ふ 大連湾内青波静かに 我社記者団の伊艦訪問 目眩ぐるしい艦内の装置
1921年2月11日	満日評壇 米陸軍制限
1921年2月14日	日本海論
1921年3月11日	海員慰安の為に 集会所を作る 大連海務協会が経費十万円を投じて
1921年5月26日	満洲日日新聞社主催 旅大間沿岸航行 駆逐艦見学壮挙 海軍当局の好意により 六月十二日に行ふ
1921年5月27日	第16回海軍記念日
1921年6月9日	旅大沿岸 駆逐艦便乗見学 アト三日に迫る 便乗者の心得ておく事 大連碇泊中は拝観許可 帰航は小学生便乗
1921年6月12日	閉塞隊追憶と駆逐隊の迎送 海軍省の好意と本社の企画
1921年6月12日	旅大官民百余名 駆逐艦便乗 艦上現地講話 演習訓練
1921年6月12日	露艦隊を袋の中に追ひ詰めた 旅順港口閉塞の壮挙 第三回に亘る一大事業の遂行 壮烈鬼神を泣かした 我決死隊の敵前作業を懐ふ
1921年6月12日	旅大官民百余名 駆逐艦便乗 艦上現地講話 演習訓練
1921年6月13日	初夏微風の碧海に 駆逐艦四隻の戦闘演習 宛然海戦當時を髣髴 本社主催第二回駆逐艦便乗

1921年6月14日	壮絶！！快絶！！小学生駆逐艦便乗 火箭の放射や発火演習 智を磨き歓を盡して無事解散
1921年7月30日	我国の軍備は最少限度だ 縮小されて尠るか
1921年8月1日	満日評論 軍縮論進捗
1921年8月2日	第二艦隊の旅順入港は愈々は二十日に決定 旅順市と要港部と聯合して一大歓迎会を開催すべく準備中 煙火数百発を打揚げて我社の歓迎
1921年8月5日	第二艦隊歓迎 実行委員会
1921年8月6日	旅大官民学生を第二艦隊に乗せて 艦隊運動の壮烈を見せ 海事思想を叩き込む計画 大連海務協会から海軍側へ
1921年8月8日	早川社長の南船北馬 来航第二艦隊歓迎の為め大石橋から引返す 今夜十時、北へ向け出発
1921年8月10日	海軍側の希望で 女学生をも乗せる 来航第二艦隊便乗見学 旅大官民五百名学生一千名
1921年8月11日	第一、第二両艦隊 東宮殿下を支那海に奉迎し佐伯湾で戦闘演習 第二艦隊は大連から
1921年8月12日	海運界は不振の極
1921年8月12日	鉄甲堅艦十六隻 堂々来航する壮観 愈々二十四日大連入港に決した鈴木中将麾下の第二艦隊
1921年8月12日	第二艦隊便乗見学に旅順からも参加 要港部からランチを提供
1921年8月13日	大連市の第二艦隊来航歓迎
1921年8月16日	第二艦隊の歓迎は出来る丈け盛んに 軍艦便乗の人員割当も定る
1921年8月17日	沿線各学童艦隊見学 満鉄学務課幹旋
1921年8月17日	朦朧海を圧して来るの日は近い 歓迎準備も定って旅順官民鶴首してその日を俟つ 大連回航は二十四日
1921年8月18日	艦隊来と歓迎花火 火龍天に躍る美観は二十一日夜本社旅順支局主催で二百発の打揚と仕掛物
1921年8月18日	第二艦隊の旅順入港は二十一日 午前六時変更した
1921年8月18日	第二艦隊歓迎煙火大会
1921年8月19日	海務協会の艦隊便乗許可
1921年8月19日	第二艦隊大連入港は二十五日に変更

1921年8月22日	満日評論 艦隊の来旅
1921年8月22日	渤海の蒼波を圧して雄姿堂々第二艦隊
1921年8月23日	第二艦隊歓迎の煙花大会の盛観
1921年8月23日	第二艦隊の軍楽隊 公園で演奏
1921年8月23日	歓迎第二艦隊入港 広告
1921年8月23日	大連湾頭を圧する十六の鉄甲堅艦 第二艦隊の大連回航はいよいよ明後日午前中
1921年8月23日	一般の熱望を容れて 金剛、霧島両艦の拝観を差許さる 注意すべきか ずかず
1921年8月23日	旅順の海 旅順の山 昭々たる探海灯に武夫の夢を弔ふた その夜の第二艦隊
1921年8月23日	小国民七百艦隊見学 背面砲台見学の水兵一千余名
1921年8月23日	官民合同の第二艦隊 歓迎会
1921年8月23日	艦隊便乗客の為め 列車の増結
1921年8月24日	軍艦見学は明日 艦隊運動や戦闘演習 飛行機まで飛ばして 参加者に注文のくさぐさ
1921年8月24日	沿線小国民の拝観 二十五日朝来連
1921年8月24日	旅順戦跡を見学した艦隊兵員の感想 何れも感涙に咽ぶ
1921年8月25日	第二艦隊はけふ旅順から大連に回航 鉄甲堅艦十六隻 港頭を圧するは午後一時頃 艦載飛行機の大連訪問飛行
1921年8月25日	軍艦旗 秋風にはためき 鉄艦十六隻堂々 海波を圧してけふ旅順から大連へ回航 二千の見学者を乗せて
1921年8月25日	響音大空に快く 鵬翼大連の上空を三度び圧して 大成功の訪問飛行
1921年8月25日	明日は大連市民の為め 海軍軍楽隊の演奏 電気遊園とホテル屋上庭園で
1922年7月28日	補助艦艇の自発的制限 東京 局外道人
1922年7月29日	軍縮の為に駐満部隊の編成を変せず
1923年5月26日	明日の海軍記念日について
1923年8月19日	市の歓迎準備成る 満鉄民政署、商議所 各方面の代表が市役所で協議

1923年8月19日	海軍条約の効力が発生したので 軍艦の廃棄に着手 六箇月以内に第一期作業終了
1921年8月26日	軍艦の巡航は母国と海外在住者との連絡となる 旅大市民の歓迎を感謝す
1921年8月26日	軍艦談 雨森霧島砲術長
1921年8月26日	感激と愉悦と和して海軍万歳の三唱 大連市万歳の三唱 海の賓客三百を招いて 清興を盡した昨夜のホテル屋上の艦隊歓迎会
1921年8月26日	支那人も大歓迎 軍艦拝観 大賑はひ
1921年8月26日	白の水兵で埋った その日の大連全市 賑ひの筆頭は浪速町に逢阪町閃々たる探海灯に美化された夜の大連
1921年8月26日	軍艦拝観!!!埠頭へ - 雪崩れを打つ幾万 市中は白の水兵で埋まり 電車は文字その儘の鈴なり
1921年8月27日	満洲評論 送第二艦隊
1921年8月27日	青島港頭を圧する 艦艦二十二隻 枳内提督麾下の第一艦隊
1924年4月4日	第二艦隊きのふ入港 我社は特に海軍飛行機に託して歓迎文を散布す
1924年4月5日	第二艦隊の縦覧
1924年4月6日	奉天撫順で海軍々楽隊の演奏 我社主催
1924年4月6日	真に海軍を理解す可く 旅大間の軍艦便乗 大連新聞社海務協会と我社の合同主催で計画されたる 此の絶好の機会を逸する勿れ
1924年4月6日	軍艦総覧心得
1924年4月6日	軍艦便乗の日に行はれる 第二艦隊の実戦演習
1924年4月6日	第二艦隊便乗見学団
1924年4月6日	海軍軍楽隊大演奏会
1924年4月6日	撫順で海軍々楽演奏 狂喜して大歓迎
1924年4月7日	第二艦隊の来連を歓迎して 天上より地上に送れる喜び 我社記者飛行機上から 大連全市に歓迎文を散布 飛行機より放てる鳩の通信
1924年4月7日	大連婦人会が第二艦隊を慰問する 寄贈品は鉢植えの眺め床しい春の花
1924年4月7日	暮色迫る 高空に使用して 若宮機に同乗せる 我社池内記者の記録
1924年4月7日	便乗者注意



1924年4月7日	旅順少年団軍艦に便乗
1924年4月7日	旅大の軍艦便乗数 大連で二千人 旅順一千人
1924年4月7日	第二艦隊 歓迎野球
1924年4月8日	暮色迫る 高空に使用して 若宮機に同乗せる 我社池内記者の記録
1924年4月8日	若宮艦乗組 飛行員の市中見物 我が社員の案内自動車一周
1924年4月7日	奉天 三十余名の第二艦隊軍楽隊 八日来奉して大演奏会
1924年4月7日	艦隊将校見物に来る
1924年4月8日	撫順青年団艦隊見学 本社後援で
1924年4月9日	第二艦隊の便乗団忽ち満員 白熱化した海軍見学
1924年4月9日	旅順に於ける第二艦隊歓迎 招宴=音楽=運動 準備は整った
1924年4月9日	奉天の海軍演奏 八日午後四時から
1924年4月9日	我社の主催せる 撫順の演奏会 二千の小国民を集めて 海軍々楽の成功
1924年4月9日	第二艦隊対全旅順 庭球大会
1924年4月9日	旅大の男女学生一千名 艦隊便乗に参加 団員の注意事項は夕刊に掲載
1924年4月9日	海軍軍楽隊の撫順演奏大会 聴衆山の如く 非常な盛会
1924年4月10日	旅順で開催する 海軍管弦音楽大会 十一、十二両日に亘つて三回開催
1924年4月10日	第二艦隊 便乗見学は愈々明日 別記の注意は是非読まれるやう
1924年4月10日	奉天の海軍演奏会 非常の盛会
1924年4月10日	海軍と全旅順 庭球試合の選手 太陽倶楽部コート
1924年4月10日	艦隊便乗見学団員へ 見落としてはなりません！忘れてはなりません！遅れてはなりません！
1924年4月10日	大連湾頭波静かに 第二艦隊のアトホーム
1924年4月10日	艦隊幹部歓迎 田中民政署長が
1924年4月10日	我が便乗見学団を乗せて 第二艦隊今朝退連す 見学団員は必ず七時迄に埠頭へ集る事
1924年4月10日	華人官民打ち連れて 我が艦隊を歓迎見学 加藤長官日華親善を熱叫す

1924年4月11日	威容堂々海洋を壓して第二艦隊旅順に向ふ 此の軍国の花にけふの花曇り 海上波やゝ高かりしも 便乗団無事乗艦
1924年4月11日	旅順の第二艦隊縦覧 十一十二の両日間 午前九時から四時迄
1924年4月11日	旅順便乗団出発 工大中学少年団等
1924年4月11日	第二艦隊旅順に入る 加藤司令官無線にて 便乗者の熱心を感謝す 便乗せる張小帥の感激
1924年4月11日	若宮の飛行機に送られて 団員の上陸は無事終る 斯くて見学団は成功裡に解散した
1924年4月11日	旅順に入れる艦隊 便乗団三千名の上陸 艦隊を迎へて喜ぶ市民
1924年4月11日	海霧深くして■艦見えず
1924年4月11日	永久に忘れ得ぬ光栄だと 張学良少将欣然として語る
1924年4月12日	旅順の艦隊縦覧 三日間全市 各方面の見学
1924年4月12日	旅順に於ける張小帥 旅順官場に歓迎さる
1924年4月12日	上陸した海軍の入て 旅順は時ならぬ賑はひ 市民心盡しの歓迎
1924年4月13日	艦隊を迎へた 旅順の賑はひ 艦隊の見学と 各種の運動競技
1924年4月13日	旅順の艦隊歓迎 官民合同で 偕行者社に
1924年4月13日	艦隊軍善戦して破る
1924年4月13日	我が社主催の雉彦氏の新講談会 昨夜市立高女講堂で開催
1924年4月13日	艦隊軍善戦して破る 我が社主催の艦隊歓迎庭球大会 全旅順全大連軍に挑戦の議起る
1924年4月24日	海軍飛行隊の京博宣伝飛行は今日から
1924年5月19日	飛行大演習見学会
1924年5月20日	飛行機講演会
1924年5月20日	飛行機見学の申込 各方面から殺到す 観覧席前で実物説明
1924年5月21日	飛行機見学の人々のために＝左記事項を御注意
1924年5月22日	熱心に説明を聴く見学団 威力の大なるに驚く さまざまな妙技に観衆悉く酔ふ 今日周水の演習飛行

1924年5月22日	飛行機講演 関東庁
1924年5月22日	飛行機講演 実地見学の予備知識を与ふる 聴衆五百余名
1924年5月24日	風雨を冒して 壮快な飛行演習 雨に溢れた見学団
1924年5月26日	飛行演習見学
1924年8月2日	三四の両日に亘りて 高松宮殿下市中を御見学 平民の乗る電車を用いるさぜられ 同僚の候補生等と御行動を共に 練習艦隊大連滞在の日程
1924年8月2日	練習艦隊便乗見学団
1925年3月11日	第一第二両艦隊 旅大訪問決定 四月五日旅順に入り 同月九日大連へ廻航
1925年3月21日	海務協会が軍艦便乗の計画に司令官許可
1925年3月26日	旅順市の艦隊歓迎の協議会 万事手落の無いやうに準備
1925年3月29日	聯合艦隊便乗見学開催 陸奥日向山城扶桑霧島に五千名分乗 来る四月九日旅順港より大連港へ廻航
1925年3月30日	五千名が巨艦に分乗し模擬戦見学の壮挙 来れ！四月九日に
1925年4月1日	聯合艦隊便乗見学団 便乗申込四月三日迄
1925年4月2日	聯合艦隊歓迎方法決定
1925年4月3日	来航近き聯合艦隊の組織 其の艦艇主要職員名
1925年4月3日	旅順市の艦隊歓迎 順序総て決定
1925年4月5日	市民の便乗申込は二千名を突破けふ正午から抽籤 結果は明日通知する
1925年4月7日	予定の如く昨日聯合艦隊旅順港へ
1925年4月7日	艦隊来る 万歳を絶叫し 海岸に群れつどうた 数千の旅順市民
1925年4月7日	軍艦観覧の心得
1925年4月7日	各艦名と乗組員
1925年4月7日	岡田長官と白川司令官等の交歓
1925年4月8日	艦隊入港中は郵便局が時間延長
1925年4月8日	全満選手と艦隊連合軍の柔道試合
1925年4月8日	軍艦便乗見学団船車連絡上の注意 よく読んでください
1925年4月8日	艦隊来につき 市民諸君へ小山憲兵隊長
1925年4月8日	奉天の張少帥が我が軍艦便乗の希望 併し今回は中止せん

1925年4月9日	海に！陸に！旅順の大賑ひ 美しく飾られた街々 軍艦観覧の人の渦巻
1925年4月9日	旅順便乗者集合場所とランチ割当
1925年4月9日	市場青年団の艦隊歓迎 本紙六千部贈与
1925年4月9日	艦隊歓迎園遊会 旅順市の
1925年4月10日	旅順 聯合艦隊の将校 百六十名の見学 十日に来撫の筈
1925年4月10日	二十年間の聯隊歴史を顧み 柳少佐が感慨談
1925年4月10日	軍艦便乗を送つて 月明りの夜を停車場へ
1925年4月10日	旅順市民を招じて 陸奥艦上の盛宴 主客歓を盡し薄暮徹宴
1925年4月10日	学生の唱歌に興ぜられて 御機嫌麗はしき宮様 艦内の御散策も有難く
1925年4月10日	霧島艦上の歓声 艦内作業で小学生が喜ぶ
1925年4月10日	山城艦に乗った誇り 宮様のお側に学生は大喜び
1925年4月11日	聯合艦隊乗組将校講演会（講演将校及演題決定）
1925年4月11日	爆音勇ましい高速艇 艦隊見学にひしめく群衆 海に……、陸に……、大連港の壮観
1925年4月11日	艦隊を縫ふ 観覧者の汽艇 百数十隻のサンバンが目のまわる忙しさ
1925年4月11日	午前中に六千人 支那人が多い 係員転手古舞ひ
1925年4月11日	今夜埠頭屋上で映写 文化協会の宣伝映画
1925年4月11日	若宮の三機感謝飛行 十一日早朝から大連上空へ
1925年4月11日	午前七時半から 半舷上陸始まる 一時間で全部終了
1925年4月11日	どこも こゝも 大賑ひ！大賑ひ 愉快さうに、嬉し気に 水兵さんが歩く
1925年4月11日	舳海岸の大衆！悉く熱議の市民 歓喜の色は彼等の顔に現はれ 永き春の日をたゞ歓迎に尽す
1925年4月11日	露西亜町浜町海岸 此処にも亦人山を築く
1925年4月11日	艦隊一望の寺兒溝 弁当持参の日支人千余名
1925年4月11日	旅順の見学団 無事帰着 二度に分れて
1925年4月11日	軍艦拝観 昨日から 学生及び一般市民の為め

1925年4月11日	潜水艇の偉力になるほどと驚き 艦内の親切な説明に恐縮して大喜び
1925年4月11日	艦隊の来訪で旅順に落ちた十五万円 漸く息をついた市の商人
1925年4月11日	海事思想普及の講演は 愈々本日と明日の午後正七時から
1925年4月12日	艦隊歓迎の競技会 遼東新報主催で賑ふ
1925年4月12日	今夜の海事思想普及講演会
1925年4月13日	埠頭に集まって怨めし気な群集 折角の日曜日に風が出て軍艦縦覧中止
1925年4月14日	艦隊見物に大連港へ 押しかけた者ザツト十万 遠く奉天くんだりからもゾロゾロと 入艦者だけで三万余人
1925年4月14日	聯合艦隊は明朝九時抜錨 第一艦隊は仁川に 第二艦隊青島へ
1925年4月14日	艦隊の来航は我々の心細さを一掃した と杉野市長の挨拶 大連市民の艦隊歓迎会
1925年4月14日	風浪高く水兵さん達 艦に帰へれず 関東倉庫海務協会に宿泊 面会人は艦内に夜明し
1925年4月14日	聴衆場外に溢れた 軍楽隊の演奏会 第二回西公園コートにて
1925年4月15日	聯合艦隊を送り 新駐劄軍を迎ふるに際し 大連市民諸君に囑す 小山大連憲兵分隊長
1925年4月15日	京城 第一艦隊入港 歓迎準備整ふ
1925年12月26日	軍隊、警官慰問 慰問袋及慰藉金募集
1925年12月27日	軍隊、警官慰問金品寄贈芳名
1926年1月6日	軍隊と警察から 慰問品の謝状
1926年1月16日	軍隊警官慰問金品寄贈芳名
1926年1月17日	軍隊警官慰問金品寄贈芳名
1926年2月14日	今年もまた艦隊便乗を請願する 第二艦隊の旅大訪問を控へて 海務協会で打合決定
1926年3月10日	四月上旬旅大訪問の第二艦隊の便乗許可さる 同時に講演会も許可された 本社と海務協会の主催
1926年3月25日	第二艦隊 四月九日旅順着
1926年3月27日	旅順市の艦隊歓迎準備 場所は公会堂

1926年3月31日	第二艦隊便乗見学団 主催 大連海務協会 満洲日日新聞社
1926年4月1日	愈々決定した 軍艦便乗者数と会費 便乗者は抽籤で定め 会費は学生四十銭市民は八十銭
1926年4月1日	旅順市の艦隊歓迎及び拝観 いよいよ決定した
1926年4月3日	艦隊便乗の日が近づく 申込はどうかお早く 学生の方は関東庁と満鉄の学務課へ 旅大の準備は整いました
1926年4月5日	第二艦隊便乗見学団のために 煤煙幕其他の演習以外に一発一万円を要する 実弾射撃も見せて貰ふ筈 便乗者は我海軍が吾々在外同胞に寄する特別の厚意を深く感謝されたい
1926年4月6日	青島 第二艦隊歓迎方法協議決定 遊園会その他に熱誠を籠めて迎へる
1926年4月7日	軍艦便乗申込は明七日限り
1926年4月7日	青島 第二艦隊堂々春波を蹴つて来る 支那官憲と答訪交驩
1926年4月7日	軍艦便乗見学の壮快と豪快とを思ひ 希望者殺到の盛況也 八日夜本社に於て抽籤を行ふべし
1926年4月7日	艦隊観覧者 心得箇条 旅順市役所から
1926年4月9日	第二艦隊便乗者決定す 八日抽籤の結果二千人中より七百名を採用す
1926年4月10日	第二艦隊入港 午後三時に
1926年4月10日	第二艦隊幹部 大連市歓迎宴
1926年4月10日	第二艦隊軍楽隊の旅順演奏会
1926年4月10日	海事大講演会
1926年4月10日	社説 第二艦隊を迎ふ
1926年4月10日	軍艦便乗者心得 是非とも一読を望む
1926年4月10日	旅順に於ける海軍大講演会 本日午後一時第一中で一般の来聴を希望する
1926年4月10日	艦隊二十五隻 威容海を圧して来る 一隊は芝罘より一隊は威海衛より途中遭遇戦を行ひつゝ旅順に入る 旅順官民出で迎ふ
1926年4月10日	軍艦便乗には充分の便宜を與へたいと思ふ.....と谷口司令長官語る
1926年4月10日	艦隊乗組員 慰安筑前琵琶演奏 並に能狂言の大会 十三、四両日大連劇場で
1926年4月11日	海国の若いおぢさん 今朝揃つて納骨祠参拝 旅順入港の第二艦隊で市中は湧き返る賑ひ

1926年4月11日	旅順の軍艦拝観 大いに賑ふ
1926年4月11日	旅順でも艦隊側と運動競技を
1926年4月11日	十一日朝八時から 艦隊飛機三台 旅順市中を低空飛行
1926年4月11日	海軍軍楽隊 旅順演奏日変更 艦隊側の都合で一回だけ 十一日夕六時半八島屋
1926年4月11日	憲兵隊総出で海軍兵員の保護にあたる
1926年4月11日	愈十二日に迫つあ 待ち焦れたる 艦隊便乗の日 陸に海に万端の準備は成つた 参加者は「注意書」に注意せよ
1926年4月11日	二時間に亘る 浮田少佐の熱辯 千数百の聴衆をして 肅として謹聴せしむ
1926年4月11日	海より陸へ陸より艦へ 戦跡の訪問と軍艦の見学 果ては歓迎会や音楽会で旅順の 春の一夜はいとも賑かに更けた
1926年4月11日	盛大を極めた 旅順の歓迎会 主客四百名の大宴会 旅順芸者の総出で大賑ひ
1926年4月12日	海を圧して来る 堂々たる浮城の英姿！！ 今日午後二時港外に現はる 迎へる市民！挙つて迎へる！
1926年4月12日	海軍の勇士の為に プラチナ食堂解放 軍人諸君の利用を持つ 本社の無料休憩所
1926年4月12日	旅順官民百余名を旗艦霧島に招待 艦内を隈なく案内の後 アツトホームに入つた
1926年4月12日	満鉄幹部 軍艦に便乗
1926年4月13日	旅順から大連へけふ艦隊便乗の壮挙 三千名の旅大市民並に学生団が巨艦に分乗して＝紺碧拭ふが如き海上に＝勇ましい戦闘練習を見学しつゝ
1926年4月13日	まだ明けやらぬ駅頭に大連側の市民と学生 動きもとれぬ人の波 二回の臨時列車で旅順へ
1926年4月13日	旅順側の七百十六名 三隻のライターで霧島と長鯨へ便乗
1926年4月13日	放れた小島のやうに 女学生団の喜び 商業学堂一行を最後に大連側の便乗終る 見送りの官民蝟集し 万歳声裡に旅順出発
1926年4月13日	飛行機と駆逐艦 「霧島」を襲撃す 目にもとまらぬ潜水艇の活動 便乗団手に汗を握る 大成功裡に大連港へ

1926年4月13日	五十鈴を先頭に海波を蹴り 第二艦隊午後一時大連に回航
1926年4月13日	便乗者上陸 二時半終了す
1926年4月13日	海事講演会
1926年4月13日	艦隊へ贈物 署長と市が
1926年4月13日	三機の低空飛行 艦隊入港に先立ち
1926年4月13日	本社の接待所 吉野町プラチナ食堂
1926年4月13日	川内見学注意
1926年4月13日	各艦とも 半舷上陸
1926年4月13日	趣好を凝らす 聯隊軍旗祭
1926年4月13日	海国民の誇り！！ 黄海の航行に便乗した人々の感想
1926年4月13日	第二艦隊歓迎各種催し 軍楽隊は市民の為に演奏会開催
1926年4月14日	春霞み波おだやか 海を圧する鯨艦へ！ひた押しにおし寄せる 拝観者で埠頭は大賑ひ
1926年4月14日	森口参謀演壇に海事講演会 今晚七時から 満鉄社員倶楽部で
1926年4月14日	十六日抜錨後の第二艦隊行動
1926年4月14日	第二艦隊 碇泊中日程
1926年4月14日	第二艦隊 軍楽放送 今夜七時半から
1926年4月14日	第二艦隊と入れ違ひに 練習艦十六日入港
1926年4月14日	籠から放たれた 小鳥の如うな水兵さん 市中到る処で歓迎され思ふ存分一日の行楽を恣にして さて 帰りは沢山の土産物を
1926年4月14日	ラヂオ放送 忠勇なる我艦隊を歓迎せよ 高柳陸軍中将
1926年4月14日	老若男女の群が 春光を浴びて 軍艦へ！軍艦へ！ 見学者の数は昨年に比し減少したが 夫れでも 第一日は二千七百余名
1926年4月14日	満鉄倶楽部に於ける海事思想講演会
1926年4月14日	妙なる音律にさそはれて 中央公園の賑ひ 市民の為に公開されたる海軍軍楽隊の演奏
1926年4月14日	海軍側との庭球試合 今日午後四時から
1926年4月14日	艦隊チームと記者団の試合



1926年4月15日	賑ひは絶えぬ 軍艦見学の群 早朝からひしひしと支那人も多数に交つて
1926年4月15日	練習艦一行の日程 御坐乗の両殿下乗組員と御行動を共に
1926年4月15日	第二艦隊と大連郵便局
1926年4月15日	大連市民と艦隊との交驩 名も泰華楼の楼上で 多数の日支紅裙連の斡旋に 打解け合ふた艦隊歓迎会
1926年4月16日	大成功を収めて 艦隊見学終る 昨日はその最終日とあつて 格別の参観者であつた
1926年4月16日	吾が親しみの第二艦隊今朝仁川へ鹿島立つ さらば愛する海の勇士よ君の為め国の為め健在なれ!
1926年4月16日	谷口司令長官 大連市民に酬ゆ 旗艦霧島に二百余名を招き アツトホームを開く
1926年4月18日	艦隊歓迎の本社休憩所
1926年4月19日	訪旅すべき 練習艦隊と旅順の歓迎
1926年4月20日	練習艦消息一束
1926年4月20日	練習艦隊 将校連見学
1926年4月21日	杯を挙げて 練習艦隊を迎ふ
1926年4月22日	満艦飾を施した 八雲艦上の賑ひ 旅大官民二百余名が水兵の妙技に感歎す
1926年4月23日	練習艦司令官無線謝電
1926年4月23日	練習艦隊旅順入港
1926年4月25日	二十四日夜練習艦隊旅順を離れる
1926年5月3日	我が海軍の新建艦主義
1927年2月13日	満日評論 第二次軍縮の提議
1928年4月9日	第二艦隊乗組員歓迎会
1928年4月9日	艦隊歓迎の相撲大会 1928年4月15日 中央公園 大連角力倶楽部主催
1928年4月11日	旅順の海事講演盛会を極む 富田海軍中佐の熱弁に 1千の聴衆感動 海事思想の鼓吹と国家観念の振興に資するため
1928年4月13日	軍楽隊の演奏会 一千六百の聴衆陶醉す 満鉄協和会館未曾有の盛況

1928年4月13日	実践其儘の戦闘に驚嘆した学生団 艦隊設備の充実に二度ビックリ 「比叡」便乗の記
1928年4月13日	海事講演会
1928年4月13日	艦隊乗組員 慰安映画会 「噫無情」 敷島町基督教青年会
1928年4月14日	第二艦隊員の大歓迎会
1928年4月14日	海軍の大演奏会 二日目も満員の盛況 定員千二百名を容れる会館も忽ちふさがり三百個の補助椅子も瞬く裡に満員となり聴衆は廊下から場外にまで溢れ一千七百名を算した
1928年4月14日	大連放送局が海軍デー 十五日にやる
1928年4月14日	海の勇者を迎へて 大連市官民合同の歓迎会 五十余名の美形に会場を彩り ゆふべ社員倶楽部の大食堂で
1929年3月2日	連合艦隊の旅大拝観日取り 航空母艦と潜水艦以外の軍艦は拝観される
1929年4月2日	昨夕高松宮殿下 芝罘に御上陸遊す 森岡領事の御案内で御見学 第二艦隊芝罘入港
1929年4月3日	新に編成の航空戦隊も入港 碇泊中は盛んに飛行
1929年4月3日	旅順の官民代表は軍艦榛名を訪問 宮殿下の御機嫌を奉伺する 夜は関東庁の招宴
1929年4月3日	威風渤海腕頭を押し けふ第二艦隊旅順へ 旗艦榛名には高松宮御乗組 浮城二四隻の壮観
1929年4月3日	わが第二艦隊の艦艫 舳艫相啣み旅順に入港 きのふ旗艦榛名を初め廿四隻 その威風渤海を圧す
1929年4月4日	海事思想普及に昼間は活写公開 夜七時から旅順第一小学校で 海軍々楽隊の演奏会
1929年4月6日	艦隊便乗者の心得 必ず便乗承認証を忘れぬやうに
1929年4月6日	榛名艦上の午餐会
1929年4月7日	連合艦隊は愈々 今日大連を訪ふ
1929年4月8日	両艦隊の旗艦を訪れて 官民代表歓迎の意を表す
1929年4月8日	第九分隊士として 高松宮殿下御精励 大連港外御着と同時に 官民伺候して御機嫌を奉伺
1929年4月8日	新味を加へ発達した 我が空軍と水軍 いろいろお世話になる と谷口連合艦隊司令長官語る

1929年4月8日	壮烈な演習を見学し 旅順から大連に回航 歓喜と光栄に溢れる三千名艦隊便乗見学団
1929年4月8日	薄寒い朝靄を衝き 第一、二班に分れて出発 けさの大連駅頭の賑やかしさ
1929年4月8日	榛名と比叡の両艦に分乗 勇ましく旅順を抜錨
1929年4月8日	世界に誇る海軍の精鋭 榛名比叡に便乗して 第二艦隊の演習を見学しつゝ 旅順から大連へ
1929年4月8日	麗かな艦隊日和に水兵さん達の上陸 朝来市中は到るところ大賑ひ 埠頭は観覧者の群
1929年4月9日	艦隊観覧はけふから四日間 艦内観覧規定を厳守し 一般支那人は拒絶
1929年4月9日	第一艦隊 第二艦隊 対抗相撲競技挙行
1929年4月9日	軍艦観覧は雨で出足にぶる 正午までに約二千名
1929年4月10日	水兵さん歓迎 満日休憩所
1929年4月10日	春雨に煙る 戦跡を騎乗見学 第一艦隊の乗組員がけふ二班にわかれて
1929年4月10日	海事思想講演 来航中の第一艦隊及第二艦隊では在大連の小国民に海事思想を普及する意味で各小中学校にて講演をすることゝなつた。
1929年4月10日	聴衆恍惚として 『夢の国』『詩の国』に彷ふ 番外演奏迄して盛況を極めた 昨夜の軍楽隊演奏会
1929年4月10日	海軍講演会 来る十二日夜協和会館で豊田山城艦長講演
1929年4月11日	軍楽隊演奏会 前日に劣らぬ大盛況
1929年4月11日	第一、二艦隊の戦士があす白熱的肉弾戦 午前九時から中央公園で挙行 艦隊対抗相撲競技
1929年4月12日	海軍講演会
1929年4月12日	高松宮 満鉄少壮社員を召し 満洲事情を御聴取 きのふ御乗組みの「榛名」に
1929年4月12日	大連官民合同の連合艦隊歓迎会 ゆふべ盛大に催さる
1929年4月12日	朝来の烈風に怯え 人足の少い軍艦観覧者 艦隊はあす出港
1930年4月1日	海軍思想普及講演
1930年4月2日	我第一艦隊来!!に歓迎準備を急ぐ 十九隻の精鋭愈よ明朝九時入港 素晴らしい大連の催物

1930年4月3日	艦隊乗組員へ特価奉仕
1930年4月3日	威風堂々春波を蹴つて けふ我第一艦隊来る 山本中将麾下の艦艇十二隻湧き返へる大連市
1930年4月4日	陸の煙火に応ふる 莊重なる軍艦マーチ 第三戦隊「由良」を先頭にして 巨艦続々投錨の壮観
1930年4月4日	海の勇士 見物に繰出 市中に賑ふ
1930年4月5日	拝観者や水兵さんで ゴツタ返すけふの埠頭 午前中の拝観実一千七百余名
1930年4月5日	勇壯極まる潜航演習に 便乗者驚異の眼を瞠る 絶好の天候に恵まれ愉快だった 旅順から大連への潜艦便乗
1930年4月6日	埠頭は人の波 拝観者続々押しかけ 麗かな春空に海軍機の乱舞
1930年4月6日	航空母艦野登呂 先発仁川へ いよいよあす正午を記して第一艦隊大連を抜錨
1930年4月8日	張学良氏愛弟陸奥拝観
1930年4月8日	六日の軍艦拝観者四千五百名を突破 世界有数の巨艦「陸奥」に送られ、其偉力に何れも驚歎
1930年4月8日	艦隊便乗見学団 旅順見物後無事帰連
1930年4月8日	名残を惜み 第一艦隊抜錨す けふ一路に仁川に向つて

出典：『満日』により筆者作成。

付録 6-1 「かるた大会」関係記事標題一覧表

1908年1月10日	かるた大競技会
1908年1月10日	明後日の歌留多競技会
1908年1月10日	1908年1月12日日曜 正午12時より 美濃町 千勝館に歌留多競技会を催すべく
1908年1月12日	歌留多競技会へ寄付
1908年1月12日	今日の歌留多会
1908年1月14日	一昨日の歌留多競技会
1908年1月16日	本社主催歌留多選手
1908年2月5日	第二回かるた大競技会
1908年2月9日	本日の歌留多競技会
1908年2月11日	第二回歌留多大競技会
1908年2月27日	大石橋歌留多大会
1908年11月15日	歌留多界片信
1908年12月12日	営口の歌留多大会
1909年1月6日	特別広告 歌かるた大競技会
1909年1月12日	歌留多大会
1909年1月13日	歌かるた大会
1909年1月13日	歌留多の由来
1909年1月15日	歌留多大会 営口支局
1909年1月22日	営口の歌留多会 祇園閣上の激戦 女流戦士の活動
1909年1月27日	遼陽歌留多大会
1909年1月28日	営口 第2回歌留多大会
1909年1月30日	営口の歌留多会
1909年2月5日	営口のかるた会
1909年2月9日	第四回かるた大会
1909年2月10日	紀元節のかるた会 会場は千勝館、女流の来会
1909年2月11日	かるた会の前景気 会場は変更せらるべし
1909年2月14日	第四回かるた大会

1909年2月17日	旅順かるた会
1909年3月14日	大石橋の歌留多会
1909年3月27日	南満歌留多大会
1909年4月10日	奉天の歌留多会
1910年1月12日	営口かるた大会
1911年1月13日	歌かるた大会
1911年1月17日	十五日の歌留多大会 集るの百有余名
1911年1月17日	営口かるた大会
1912年2月24日	南満歌留多大会
1915年2月1日	旅順歌留多大会
1915年2月8日	撫順歌留多会
1915年2月24日	満鮮歌留多大会 優勝旗は新義州
1916年1月1日	満鉄歌留多大会
1917年1月8日	満鉄歌留多会 選手盛に技を練る
1917年2月8日	旅順歌留多会
1920年2月7日	愈々明日八日！千勝館にて 満洲歌留多大会
1920年2月8日	指頭花火を散らす 今日の歌留多大会 月桂冠を得るものは誰 参加会員実に百二十名
1920年2月8日	歌留多大会寄贈品
1920年2月9日	第三回全満洲歌留多競技大会
1920年2月10日	盛況を極めた歌留多大会
1920年2月18日	旅順歌留多大会
1920年2月24日	盛況を極めた旅順 歌留多会 優勝旗は新市街軍占有
1920年12月27日	我社支局主催旅順歌留多大会
1921年1月9日	参加チーム及び審判者諸氏
1921年1月16日	第四回満洲歌留多大会
1921年1月16日	旅順 歌留多
1921年1月30日	全満の名手が 覇を争ふ壮烈 なるべき本日の第四回歌留多大会

1921年1月31日	我れこそ、全満洲歌留多界の覇者 たらむ、意気昂り耳熱し 瞳を輝かず斯界の名手連 実に百五十余名 第四回歌留多大会の盛況
1921年1月31日	誰か克く握る 歌留多の覇権 紅白紺青緑の鉢巻 必ず勝つと気焰高し
1922年1月15日	腕に覚えの人は来れ 第四回満洲歌留多大会 一月二十二日大連福昌倶楽部楼上で 指頭火花を散らす争覇戦は 剩す処僅かに旬日
1922年1月19日	全満歌留多大会 申込みは二十一日限り 大会を前に猛練習凄じ
1922年1月24日	歓春の閃き、福昌倶楽部楼上に散る指頭火 全満の猛者連を集めて 第四回満洲歌留多大会
1922年2月10日	旅順親睦歌留多大会
1922年2月10日	旅順歌留多会 明十一日正午から 本社旅順支局主催
1922年2月12日	指頭火花を散して 旅順の歌留多戦 我社旅順支局の催ふ
1922年2月15日	営口の歌留多大会 指頭火花を散らす大接戦 本社記念メダルは遂に大連軍へ
1923年1月13日	歌留多大会 申込み受付け 本日から二十日正午まで 特に婦人の参加を歓迎
1923年1月17日	奉天 第六回全満洲歌留多大会を催す
1923年1月21日	第五回満洲歌留多大会
1923年1月21日	歌留多大会・ピンポン大会寄贈品芳名
1923年1月22日	遠征軍大に振ひ覇権は安東へ 婦人選手権は鞍山へ 盛況を極めたきのふの 我社主催第五回満洲かるた大会
1923年2月2日	鞍山 歌留多大会
1923年3月8日	満日社哈爾賓支局主催 第一回哈爾賓歌留多大会 1923年3月4日
1924年1月9日	初春の吉例 全満かるた大会 その第六回を来る 二十日福昌倶楽部で
1924年1月11日	我社かるた大会 打合会にて一般方略決定 婦人の参加者多し
1924年1月15日	来る二十日の日曜に歌留多大会を開催 沿線各地より参加者多し
1924年1月18日	第六回満洲歌留多大会
1924年1月18日	全満歌留多大会 申込は十九日正午まで 何人が月桂冠を得るか 隠れたる雄者の鼻意気
1924年1月19日	かるた会愈高潮各組の合同作戦やら 一騎打の猛者続々申込み
1924年1月19日	歌留多大会寄贈品

1924年1月20日	歌留多大会寄贈品
1924年1月22日	我社主催の全満かるた会 今日を晴れの勝負 指頭に乱れ散る古歌の花 覇権は大連のいなづま会に
1924年1月24日	盛なりし 歌留多会
1925年2月6日	第七回全満歌留多大会
1925年2月8日	準備の都合で 全満歌留多会=延期 十五日の日曜に挙行
1925年2月14日	開会期迫る 全満歌留多大会 各派権選手の猛烈な練習振り
1925年2月15日	愈々明日第七回全満洲歌留多大会
1925年2月15日	優勝者は誰れ！今日！全満歌留多会 会場山県通福昌倶楽部
1925年2月17日	第七回全満歌留多大会 札が飛ぶ！手が飛ぶ！各選手の腕の冴え 運の 神は何処に？ 大盛況裡に終了す
1925年12月27日	歌留多の選び方
1926年2月4日	第七回長春歌留多大会
1926年3月13日	物凄き激戦に優勝の争奪 雄叫び場を壓する 一大盛観を極めた 全哈 歌留多大会
1928年2月7日	旅順かるた大会

出典：『満日』により筆者作成。



## 参考文献

### 公文書

外務省外交資料館

防衛省防衛研究所

アジア歴史資料センター (JACAR)

国立公文書館

水沢私立後藤新平記念館編『後藤新平文書』水沢市立後藤新平記念館、1908年。(マイクロ版は雄松堂作成発売)

『資料 臨時教育会議』(第5集)文部省、1979年。

### 新聞、雑誌

『朝日新聞』記事データベース聞蔵II

『海友』(大連海務協会)

『官報』(国立国会図書館デジタルコレクション)

『サンデー』(太平洋通信社)

『週刊新聞太平洋』(雄松堂出版フィルム)

『新声』(ゆまに書房出版復刻版)

『太陽』(日本近代文学館編集、CD-ROM版)

『台湾日日新報』(ゆまに書房出版マイクロフィルム)

『大連新聞』(韓国教会史文献研究院出版影印版)

『東京朝日新聞』

『朝鮮』(皓星社出版復刻版)

『毎日新聞』オンライン記事データベース毎策

『満洲日日新聞』(丸善出版マイクロフィルム)

『満蒙』(不二出版復刻版)

『読売新聞』オンライン記事データベースヨミダス歴史館

『万朝報』(日本図書センター出版復刻版)

### 著書

朝日新聞百年史編集委員会『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』朝日新聞社、1991年。

阿部真之助『老記者の思い出話』比良書房、1950年。

有山輝雄『海外観光旅行の誕生』吉川弘文館、2002年。

同上『甲子園野球と日本人—メディアのつくったイベント』吉川弘文館、1997年。

池田清『日本の海軍 下 躍進篇』学研M文庫、2002年。

石田龍蔵『世相百態 明治秘話』日本書院、1927年。

伊藤武一郎『満洲十年史』満洲日日新聞社、1916年。

伊藤正徳『新聞生活二十年』中央公論社、1933年。

伊東祐毅『世界年鑑(明治37)』博文館、1904年。

井上謙三郎『大連市史』大連市役所、1936年(地久館復刻、1989年)。

江越弘子『幕末の外交官 森山栄之助』弦書房、2008年。

大来修治『記念誌：大連開業二十年連合祝賀会』遼東新報社、1924年。

岡田俊雄『大阪商船株式会社80年史』大阪商船株式会社、1966年。

奥武則『大衆新聞と国民国家—人気投票・慈善・スキャンダル』平凡社、2000年。  
小沢賢吉『小沢太兵衛伝記』小沢太兵衛顕彰会伝記編纂部、1942年。  
外務省『日本外交文書 ワシントン会議』(上)、1977年。  
外務省通商局『人口問題ヲ基調トシテ滿蒙拓殖策ノ研究』1929年。  
郭鉄庄・関捷『日本植民統治大連四十年史』(下)社会科学文献出版社、2008年。  
河西秀哉『皇居の近現代史—開かれた皇室像の誕生』吉川弘文、2015年。  
関東局『関東局施政三十年史』大連関東局、1936年。  
関東都督府都督官房文書課『関東都督府施政誌』関東都督府官房文書課、1919年。  
関東都督府都督官房文書課『関東都督府統計書』(第3明治41年)、1909年。  
貴志俊彦・松重充浩・松村史紀『二十世紀滿洲歴史事典』吉川弘文館、2012年。  
清岡卓行『清岡卓行大連小説全集』(下)日本文芸社、1992年。  
競技かるた百年史編纂委員会『競技かるた百年史』社団法人全日本かるた協会、2008年。  
紅葉山人『金色夜叉』(春陽堂、1898年)精選名著復刻全集 近代文学館、日本近代文学館、1972年。  
小風秀雅『帝国主義下の日本海運—国際競争と対外自立』山川出版社、1995年。  
黒龍会編『東亜先覚志士記伝 下巻』黒龍会、1936年。  
(財)全日本軟式野球連盟50年史編集委員会『財団法人全日本軟式野球連盟50年史』(財)全日本軟式野球連盟、1995年。  
財団法人海軍歴史保存会『日本海軍史 第3巻 通史 第4編』第一法規出版、1995年。  
篠崎嘉郎『大連』大連出版社、1920年。  
嶋田道彌『滿洲教育史』文教社、1935年。  
白幡洋三郎『旅行ノススメ—昭和が生んだ庶民の「新文化」』中央公論社、1996年。  
末木儀太郎『滿洲日報論』日支問題研究会、1932年。  
鈴木隆史『日本帝国主義と滿洲：1900-1945』(上)塙書房、1992年。  
關野直次『守屋善兵衛追悼録』守屋善兵衛追悼録編纂事務所、1935年。  
対支功勞者伝記編纂会『対支回顧録 下巻』、同伝記編纂会、1936年。  
大日本帝国議会誌刊行会『大日本帝国議会誌』第11巻、1929年。  
『大連海務協会二十年史』大連海務協会、1930年。  
田島龍夫『野球使用』愛知県立第一中学校校友会、1905年。  
竹中憲一『人名事典「滿洲」に渡った一万人』皓星社、2012年。  
竹村民郎『笑樂の系譜—都市と余暇文化』同文館、1996年。  
塚瀬進『滿洲の日本人』吉川弘文館、2004年。  
津金澤聡廣・有山輝雄『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社、1998年。  
津金澤聡廣『近代日本のメディア・イベント』同文館、1996年。  
同上『戦後日本のメディア・イベント(1945-1960年)』世界思想社、2002年。  
鶴見祐輔『後藤新平(第2巻)植民行政家時代』勁草書房、1965年。  
東京帝国大学『東京帝国大学一覽』(明治32-33年)秀英舎、1899年。  
長尾半平『荊堂・伊藤幸次郎』財団法人四詠荘、1932年。  
成田龍一『シリーズ 日本近現代史4 大正デモクラシー』岩波書店、2007年。  
西川長夫・松宮秀治『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』新曜社、1998年。  
西日本新聞社『西日本新聞社史』同社、1951年。  
日本電報通信社『新聞総覧』(明治43年版-大正5年版)大空社復刻、1991年。  
日本電報通信社『新聞総覧』(大正6年版-大正10年版)大空社復刻、1992年。  
日本電報通信社『新聞総覧』(大正11年版-大正14年版)大空社復刻、1993年。

日本電報通信社『新聞総覧』（大正15年版-昭和4年版）大空社復刻、1993年。  
野村實『日本海軍の歴史』吉川弘文館、2002年。  
秦源治『わが国球界をリードした大連野球界』20世紀大連会議、2009年。  
樋口秀実『日本海軍から見た日中関係史研究』芙蓉書房、2002年。  
藤木高三『富籤の話』今日の問題社、1940年。  
編著者不明『関東州教育史』第2輯、1937年。  
星野錫翁感謝会『星野錫翁伝』、星野錫翁感謝会、昭和10年。  
松阪市編纂委員会編著『松阪市史』（第11巻 史料編 近世1 政治）蒼人社、1982年。  
満洲国教育史研究会『「満洲・満洲国」教育資料集成 第16巻 教育通史II』、エムティ出版、1993年。  
三井兵治『朋友』新進堂、1922年。  
南満洲鉄道株式会社『南満洲鉄道株式会社十年史』原書房復刻、1974年。  
『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』原書房、1974年復刻、下巻。  
『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』南満洲鉄道株式会社、1928年。  
宮武外骨・西田長寿『明治新聞雑誌関係者略伝』みすず書房、1985年。  
三好信浩『佐賀偉人伝10・納富介次郎』、佐賀県立佐賀城本丸歴史館、2013年。  
柳沢遊『日本人の植民地経験 大連日本人商工業者の歴史』青木書店、1999年。  
山内佐太郎『国民教育之精神』弘道館、1915年。  
山室信一『キメラ—満洲国の肖像』中公新書、1993年。  
同上『複合戦争と総力戦の断層 日本にとっての第1次世界大戦』、人文書院、2011年。  
由井濱権平『謝恩誌：満洲タイムス廃刊記念』満洲タイムス社、1941年。  
李相哲『満洲における日本人経営新聞の歴史』凱風社、2000年。

#### 論文など

麻田貞雄「ワシントン海軍軍縮の政治過程—ふたりの加藤をめぐって」『同志社法学』49巻3号、1998年。  
阿部安成「大陸に興奮する修学旅行—山口高等商業学校がゆく『満韓支』『鮮満支』」『旅遊中国21』（29）風媒社、2008年。  
荒瀬豊「日本軍国主義とマス・メディア」『思想』399号、1957年。  
有山輝雄「全国優勝野球大会の形成と新聞—メディアがつくった野球」津金澤聰廣ほか『近代日本のメディア・イベント』同文館、1996年。  
磯田一雄「在満日本人教育におけるアイデンティティー論—「満洲郷土論」の意味を中心に」『東アジア研究』（45）大阪経済法科大学アジア研究所、2006年。  
井川充雄「満洲事変後の『名古屋新聞』のイベント」津金澤聰廣・有山輝雄『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社、1998年。  
猪子一到「第二回球界の覇者となるまで」『協和』1933年4月15号、満鉄社員会、（復刻版）龍溪書舎、1983年。  
入江克己「日本近代における植民地体育政策の研究(第1報)—満洲における体育政策の成立過程」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』35(2)、鳥取大学、1993年。  
栄元「租借地都市大連における『満洲日日新聞』の役割に関する一考察—「大連彩票」の内容分析から」『総研大文化科学研究』第11号、総合研究大学院大学 文化科学研究科、2015年。

栄元「『満洲日日新聞』の創刊と初代社長森山守次」『Intelligence』第15号、20世紀メディア研究所、2015年。

江口圭一「満洲事変と大新聞」『思想』583号、1973年。

OPQ「満洲野球界の回顧」『満蒙』第5巻、第47冊(6月号)、1924年。

大森直樹「＜満洲国＞教育と日本人」『地方史研究』43(6)地方史研究協議会、1993年。

木下竹次「新満洲に於ける日本人の教育」『学習研究』11(5)奈良女子大学、1932年。

大来修治「遼東新報の二十年」『五十人の新聞人』、電通、1955年。

長志珠絵「『満洲』ツーリズムと学校・帝国空間・戦場—女子高等師範学校の『大陸旅行』記録を中心に」駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』昭和堂、2007年。

掛川トミ子「マス・メディアの統制と対米論調」細谷千博・斉藤真・今井清一・蟻山道雄編『日米関係史(4)』、東京大学、1972年。

加地直紀「尾崎行雄の軍備縮小論」『平成法政研究』6(1)平成国際大学法政学会、2001年。

クラレンス・B・ディヴィス「中国における鉄道帝国主義(1895-1939)」クラレンス・B・ディヴィス、ケネス・E・ウィルバーン・Jr.『鉄道17万マイルの興亡—鉄道からみた帝国主義』日本経済評論社、1996年。

小泉京美「＜満洲＞における故郷喪失—秋原勝二＜夜の話＞」『日本文学文化』(10)、東洋大学日本文学文化学会事務局、2010年。

高媛「租借地メディア『大連新聞』と「満洲八景」」『ジャーナル・オブ・グローバル・メディア・スタディーズ』(4)、2009年。

同上「戦勝が生み出した観光—日露戦争翌年における満洲修学旅行」『ジャーナル・オブ・グローバル・メディア・スタディーズ』(7)駒沢大学グローバル・メディア・スタディーズ学部、2010年。

同上「戦地から観光地へ—日露戦争前後の＜満洲＞旅行」『中国21』(29)風媒社、2008年。

佐藤正晴「日本の植民地の台湾メディア—1930年代初頭の『台湾日日新報』を中心に」『明治学院論叢』(第689号)2003年。

姜克實「尾崎行雄と軍備縮小同志会—ワシントン会議前後の軍備制限論」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』(38)岡山大学大学院社会文化科学研究科、2014年。

千住一「委任統治期南洋群島における内地観光団(1928-1930年)」『奈良県立大学研究季報』24(1)奈良県立大学、2013年。

同上「軍政期南洋群島における統治政策の初期展開と第2回内地観光団」『日本植民地研究』(17)日本植民地研究会、2005年。

同上「軍政期日本統治下南洋群島における内地観光団」『立教観光学研究紀要』(10)立教大学院観光学研究科、2008年。

同上「南洋群島における内地観光団をめぐる＜内的心情＞」『日本植民地研究』(25)日本植民地研究会、2013年。

曾山毅「日本統治期台湾における修学旅行の展開—『台湾日日新報』を中心に」『観光学評論』(1-2)観光学術学会、2013年。

高嶋航「菊と星と五輪—1920年代における日本陸海軍のスポーツ熱」『京都大学文学部研究紀要』(52)、2013年。

竹中憲一「満洲における日本人教育」同『＜満洲＞における教育の基礎的研究』(第4巻)柏書房、2000年。

十川信介「解題」『近代文学研究資料叢書(5) 坪内逍遙・内田魯庵編 二葉亭四迷』所収、日本近代文学館、1975年。

土田宏成「ワシントン会議と世論—海軍軍縮反対運動とその影響」『日本歴史』757(6月号)吉川弘文館、2001年。

土屋礼子「大正期の夕刊紙『東京毎夕新聞』にみる新聞の大衆化」吉見俊哉ほか『大衆文化とメディア』ミネルヴァ書房、2010年。

津久井勤「競技かるたにおける心技体」『21世紀連合シンポジウム—科学技術と人間—論文集』(2)、アイオニクス、2003年。

中嶋晋平「戦間期における地方紙の軍縮論—ワシントン会議前後の『京都日出新聞』の報道を事例に」『都市文化研究』(12)大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター、2010年。

永井良和「大衆文化のなかの〈満洲〉」津金澤聡廣・有山輝雄『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社、1998年。

西原茂樹「1910年前後におけるメディア・イベントとしての日米野球試合——東京・大阪の新聞社による主催試合を中心に」『スポーツ史研究』(19)、2006年。

野村章、磯田一雄「〈満洲〉在住日本人子弟の教育と教科書」『成城文芸』(126)成城大学、1989年。

平間洋一「連合艦隊盛衰記」『世界の艦船』(733号)海人社、2010年。

平山昇「“日鮮満”を結んだ鉄路と航路—関釜連絡船・朝鮮鉄道・満鉄」『歴史と地理 日本史の研究』(592)山川出版社、2006年。

弘谷多喜夫・広川淑子「日本統治下の台湾・朝鮮における植民地教育政策の比較史的研究」『北海道大学教育学部紀要』(22)北海道大学教育学部、1973年。

関傑「論清末彩票」『近代史研究』中国社会科学院近代史研究所、2000年。

實性確成「小沢さんと私」、小沢賢吉『小沢太兵衛伝記』小沢太兵衛顕彰会伝記編纂部、1942年。

村井省三「日本のかるたの歴史」下中邦彦『歌留多』平凡社、1984年。

安富歩「満鉄の資金調達と資金投入—〈満洲国〉期を中心に」『人文学報』第76号、京都大学人文科学研究所、1995年。

安成二郎は「森山吐虹氏のこと」『政界往来』第22巻第2号、政界往来社、1956年。

吉海直人「百人一首かるたの近代化—競技かるたの成立と変遷」『ユリイカ』44巻16号、2012年。

李良姫「植民地朝鮮における朝鮮総督府の観光政策」『北東アジア研究』(13)島根県立大学北東アジア地域研究センター、2007年。

緑眼児「歌がるた観」『遊楽雑誌』(15号)the amusement、1906年。

劉建輝「近代植民地と文化—遼東半島の場合」千田稔・宇野隆夫『東アジアと<<半島空間>>—山東半島と遼東半島』思文閣、2003年。

同上「制度としての旅・脱制度としての表象：旅行記述がいかにかに「文学」として成立しうるのか」『アジア遊学』(182)勉誠出版、2015年。

## 初出一覧

本論文は、書き下ろしの章を除いて、その一部が以下の既公表の論文を加筆・改稿したものである。その一覧は下記の通りである。

序章・第1章（第1節を除く）・第3章・第6章・終章

書き下ろし

第1章第1節

「『満洲日日新聞』の創刊と初代社長森山守次」『Intelligence』第15号、20世紀メディア研究所、2015年3月。

第2章

「租借地都市大連における『満洲日日新聞』の役割に関する一考察 - 「大連彩票」の内容分析から」『総研大文化科学研究』第11号、2015年3月。

第4章

「植民地日本語新聞の事業活動—大連・満洲日日新聞社による「在満児童母国見学団」をめぐって」『総研大文化科学研究』第12号、2016年3月。

第5章

「植民地日本語新聞の事業活動—大連・満洲日日新聞社による艦隊便乗見学をめぐって」（2015年12月19日、国際日本文化研究センター共同研究会「植民地帝国日本における知と権力」2015年度第4回研究会）発表原稿に基づき加筆修正を施した。

1.3 先行研究について.....	94
第2節『満日』紙に見られる「見学団」.....	96
2.1 社告に見る「見学団」の実施趣旨：植民地経営の人材育成.....	97
2.2 「見学団」に対する期待—教育関係者からのメッセージ.....	98
2.3 出発前の準備.....	101
2.4 出発当日の光景.....	106
2.5 母国見学の実態.....	107
第3節 感想文からみた見学成果：日本人としてのアイデンティティ 及び満洲宣伝.....	112
小結.....	115
第5章 海軍宣伝の一助としての「艦隊便乗見学」（1921年-1932年）.....	118
第1節 ワシントン軍縮会議前後における言説空間.....	120
1.1 日本国内新聞界の立場—『朝日新聞』の場合.....	120
1.2 植民地日本語新聞の立場—『満日』と『大連新聞』の場合.....	125
第2節 満日社による「軍艦便乗」の始まり.....	126
第3節 海務協会と満日社の提携事業：「艦隊便乗見学」.....	129
3.1 大連海務協会について.....	129
3.2 第1回「便乗見学」に至るまでの経緯.....	129
3.3 「艦隊便乗見学」の概況.....	134
3.4 「便乗見学」の余興.....	137
第4節 感想文からみた「便乗見学」成果.....	138
4.1 大連少年団からの感想文.....	139
4.2 女子学生からの感想文.....	143
4.3 「便乗見学」の中止.....	144
小結.....	145
第6章 初春の吉例としての「歌かるた競技大会」.....	147
第1節 歌かるたの歴史について.....	147
第2節 満日社が主催した「かるた大会」の始まり.....	148
第3節 1920年代満洲かるた界の全盛期.....	157
小結.....	162
終章.....	164
1 本論文の内容と意義.....	164
2 租借地大連における『満日』の多面的機能.....	165
2.1 満洲経営の一つの手段としての『満日』.....	165
2.2 大衆新聞としての『満日』.....	166
2.3 在満日本人共同体を創出する装置としての『満日』.....	168
3 今後の課題.....	169

## 付録

付録 1-1 株式会社満日社の経営動向表（1913年-1927年） .....	170
付録 1-2 満日社年表（1907年-1927年） .....	199
付録 1-3 満日社が主催した事業活動の概況（1907年-1927年） .....	205
付録 1-4 大連新聞社が主催した事業活動の概況（1920年-1927年） .....	212
付録 2-1 「大連彩票」関係記事標題一覧表.....	241
付録 3-1 野球関係記事標題一覧表.....	244
付録 4-1 第1回-第6回「在満児童母国見学団」の見学期間・趣旨 .....	254
付録 4-2 第1回-第6回「在満児童母国見学団」出発当日の送辞要旨 .....	256
付録 5-1 海軍関係記事標題一覧表.....	258
付録 6-1 「かるた大会」関係記事標題一覧表.....	274
参考文献.....	278
初出一覧.....	283